

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第16集

野馬土手 (原町区西町地区)

原町西町遺跡

縄文時代集落跡と近世牧跡の調査

平成22年3月

福島県相双建設事務所
福島県南相馬市教育委員会
財団法人いわき市教育文化事業団

野馬土手 (原町区西町地区)

原町西町遺跡

序

文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私達に多くの情報を与えてくれます。

近年、南相馬市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方で、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では、埋蔵文化財の保護のため、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの情報を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に関しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡についての保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成 20・21 年度に、笹部川河川改修事業に伴い失われてしまう原町西町遺跡・野馬土手について実施した発掘調査の成果報告書です。今後、この報告書を埋蔵文化財の保護、地域史研究のために活用していただければ、幸いに存じます。

終わりに、相双建設事務所をはじめ、調査にご理解・ご協力いただきました方々に、心から感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

南相馬市教育委員会
教育長 青木紀男

例 言

- 1 本書は、笹部川河川改修事業に伴う野馬土手（原町区西町地区）・原町西町遺跡埋蔵文化財調査報告である。
- 2 発掘調査は、南相馬市教育委員会が福島県相双建設事務所の委託を受けて、南相馬市教育委員会および財団法人いわき市教育文化事業団が実施したものである。
- 3 本報告の内容は、平成20・21年度に現地において本発掘調査が実施された野馬土手（原町区西町地区）・原町西町遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。
- 4 南相馬市教育委員会における担当職員は以下の通りである。
現地調査：川田 強・荒 淑人・佐川 久 整理調査・報告書作成：川田 強
- 5 財団法人いわき市教育文化事業団における担当職員は、以下の通りである。
現地調査：平成20年度 江川 逸生・高島 好一・木幡 成雄・末永 成清・吉田 生哉
整理調査：江川 逸生 報告書作成：江川 逸生
- 6 現地での発掘調査においては、任意に設定した基準杭を基準にした遺構実測支援ソフト（株式会社CUBI C）を使用して平面図を記録した。
- 7 整理調査・報告書作成作業は、南相馬市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団の整理作業員が行った。
- 8 平成20年度調査の遺構図のうち断面図および微細図は江川逸生の指示のもと、有限会社アプトに委託してコンピュータトレースを実施したものである。
- 9 遺構図版は各現地調査担当職員が撮影した。遺物図版は平成20年度調査を江川が、平成21年度調査を川田が撮影した。
- 10 平成20年度発掘調査（第1編）についての執筆は財団法人いわき市教育文化事業団職員が行った。
- 11 本書の平成20年度発掘調査（第1編）についての執筆は財団法人いわき市教育文化事業団職員が行った。その執筆分担は以下のとおりである。また、その構成・編集は財団法人いわき市教育文化事業団が行った。
江川逸生 第1編第1章第2節・第3節・第4節（1・2）・第5節～第7節／第2章第2節・第3節・第4節
1・2・第5節～第9節・第11節／第3章第1節（第I群土器・第II群土器・第IX群土器）／第5章
木幡成雄 第1編第3章第1節（第III群土器～第VIII群土器）
末永成清 第1編第1章第4節（3）／第1編第2章第10節
吉田生哉 第1編第2章第1節／第4章
- 12 序章ならびに第2編は川田強（南相馬市教育委員会）が執筆・構成・編集を行った。
- 13 自然科学分析は以下の機関に委託した。その分析結果については、付編に掲載した。
放射性炭素年代測定（AMS測定）・樹種同定：株式会社加速器研究所
- 14 平成20年度調査の石材同定は関内幸介氏（いわき地学同好会）に依頼した。
- 15 発掘調査によって得られたすべての考古資料および記録類は、南相馬市教育委員会（〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番 TEL0244-24-5284）が保管している。
- 16 発掘調査期間中及び報告書作成にあたってご指導、ご協力をいただいた方々のご芳名を記して深く感謝の意を表したい（敬称略）。

松本 友之 馬目 順一 森 幸彦 吉田 秀享 二上 裕嗣

凡 例

- 1 本書に収録した遺跡コード番号（報告書抄録）は『福島県遺跡地図浜通り地方』（福島県教育委員会1996）によるものである。
- 2 遺構図に示した方位は、座標北を示す。
- 3 本文中および遺構図中で使用する遺構の略号は、住：竪穴住居跡、坑：土坑、炉：炉跡、焼：焼土跡、埋：埋設土器、P：ピット、溝：溝跡、竪：竪穴遺構とした。
- 4 遺構図の縮尺は、竪穴住居跡を40分の1・20分の1、土坑を40分の1、炉跡・焼土跡・埋設土器を20分の1、ピットを50分の1・40分の1、溝跡・沢跡を200分の1・50分の1・40分の1、野馬土手・土手を200分の1・250分の1・400分の1、50分の1、竪穴遺構を200分の1・50分の1とした。
- 5 遺構図のうち、朱またはスミの網点は火熱により赤変した範囲を表す。
- 6 遺構図のうち、平面図のアルファベットは断面図の位置を示し、断面に示した数値は東京湾の平均海面を基準とする海拔標高を示す。
- 7 土壌の色調は農林水産省技術管理事務局監修の新版「標準土色帖」（1993年）を参考にした。
- 8 出土地点を記録した遺物には、1から始まる登録番号を付して取り上げた。本文中の出土遺物一覧にある「p」を冠した番号がこれにあたる。
- 9 本書に掲載した遺物番号は、現地における発掘調査時の登録番号とは別に挿図番号として頁毎に1から始まる番号を付した。また遺物図版には挿図番号を付した。
- 10 本書に掲載した遺物は、発掘調査によって得られた資料のすべてではないが、紙数の許す限り細片まで実測図、拓影図を作成し、これを収録することに努めた。
- 11 遺物実測図（拓影図を含む）は、縮尺3分の1を基本としたが、完形となる縄文土器には4分の1としたものもある。また石器・石製品および銭貨は3分の2、土製品は2分の1としたが、石器（磨石）には2分の1としたものがある。
- 12 縄文土器、弥生土器の拓影図は、断面図を中央に配し、その左側に外面、右側に内面、上に口唇部を配した。
- 13 遺物実測図のうち、胎土に繊維を含む縄文土器については、「▲」で表示した。
- 14 遺物観察表の銭貨における計測値は、文字を正位において縦（外径a）、横（外径b）を計測したものである。
- 15 引用・参考文献については、執筆者の敬称を省略して各編の文末に記載した。

目 次

序	i
例言・凡例	iii
目 次	v
挿 図 目 次	vi
図 版 目 次	vii
表 目 次	x

序 章	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第3節 歴史的環境	2

第1編 平成20年度調査 ー第2次調査ー

第1章 調査の概要	9
第1節 調査要項	9
第2節 調査経過	9
第3節 調査区の設定	10
第4節 調査の概要	12
1 調査の概要	12
2 A区の調査	14
3 B区の調査	17
第5節 調査の方法	19
第6節 層序観察	20
第7節 資料整理	21
第2章 遺構各説	25
第1節 竪穴住居跡	25
第2節 土 坑	30
第3節 炉 跡	45
第4節 焼土跡	47

第5節 埋設土器	50
第6節 ピット群	52
第7節 溝 跡	54
第8節 沢 跡	56
第9節 野馬土手	56
第10節 竪穴遺構・土手	61
第11節 遺物包含層	64
第3章 遺物各説	69
第1節 縄文土器	69
第2節 弥生土器	130
第3節 石器・石製品類	131
第4節 土製品類	138
第5節 陶磁器・銭貨	140
引用・参考文献	141
第4章 考 察	143
第5章 ま と め	149

第2編 平成21年度調査 —第3次調査—

第1章 調査の概要	155	第2節 埋設土器	162
第1節 調査要項	155	第3節 ピット群	162
第2節 調査経過	155	第4節 溝跡	162
第3節 調査区の設定	156	第5節 遺物包含層	166
第4節 調査の概要	156	第3章 遺物各説	167
第5節 調査の方法	156	第1節 遺構内出土縄文土器	167
第6節 層序観察	158	第2節 遺構外出土縄文土器	167
第7節 資料整理	158	第3節 石器・石製品類	174
第2章 遺構各説	159	第4章 まとめ	175
第1節 土坑	159		
写真図版	177		
付編1 原町西町遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	213		
付編2 原町西町遺跡出土炭化物の種類	216		
報告書抄録	219		
奥付	220		

挿 図 目 次

第1図 南相馬市位置図	1	第20図 第16～19・21号土坑	39
第2図 南相馬市原町区周辺の地質	3	第21図 第22～24号土坑	41
第3図 周辺の遺跡	4	第22図 第25～29・31号土坑	43
第4図 野馬土手・原町西町遺跡の調査全体図	5	第23図 第30号土坑	45
第5図 野馬土手・原町西町遺跡の調査範囲図	11	第24図 第1～3号炉跡	46
(平成20年度)		第25図 第1～6号焼土跡	48
第6図 調査区域図	12	第26図 第7・8号焼土跡	49
第7図 平成20年度 遺構全体図 (Ⅱ・Ⅲ期)	13	第27図 第1・4・5号埋設土器	51
第8図 平成20年度 遺構全体図 (Ⅰ期)	14	第28図 ピット	53
第9図 平成20年度 遺構全体図 (A区①Ⅰ期)	15	第29図 第1号溝跡	55
第10図 平成20年度 遺構全体図 (A区②Ⅰ期)	16	第30図 沢跡1	56
第11図 基本土層柱状模式図	21	第31図 野馬土手 (土手2)	57
第12図 第1号竪穴住居跡	26	第32図 野馬土手 (A区②土手3)	59
第13図 第2号竪穴住居跡 (1)	28	第33図 野馬土手 (B区土手3)	60
第14図 第2号竪穴住居跡 (2)	29	第34図 第1・3号竪穴遺構・土手1	62
第15図 第1・2号土坑	31	第35図 第2・4号竪穴遺構	65
第16図 第3～5号土坑	33	第36図 遺物包含層 (A区①Ⅰ・Ⅱ期)	68
第17図 第6～8号土坑	34	第37図 縄文土器 (1)	70
第18図 第9～11号土坑	36	第38図 縄文土器 (2)	71
第19図 第12～15・20号土坑	37	第39図 縄文土器 (3)	72

第40図	縄文土器 (4)	73	第69図	縄文土器 (33)	114
第41図	縄文土器 (5)	74	第70図	縄文土器 (34)	115
第42図	縄文土器 (6)	75	第71図	弥生土器	130
第43図	縄文土器 (7)	76	第72図	石器・石製品 (1)	131
第44図	縄文土器 (8)	77	第73図	石器・石製品 (2)	132
第45図	縄文土器 (9)	78	第74図	石器・石製品 (3)	133
第46図	縄文土器 (10)	79	第75図	石器・石製品 (4)	134
第47図	縄文土器 (11)	81	第76図	石器・石製品 (5)	135
第48図	縄文土器 (12)	83	第77図	石器・石製品 (6)	136
第49図	縄文土器 (13)	85	第78図	土製品	139
第50図	縄文土器 (14)	87	第79図	陶磁器・銭貨	141
第51図	縄文土器 (15)	87	第80図	原町西町遺跡出土複式炉の住居跡内の 位置と柱穴	145
第52図	縄文土器 (16)	91	第81図	原町西町遺跡第2号竪穴住居跡の複式炉	145
第53図	縄文土器 (17)	93	第82図	複式炉の相対称性と目安石のA・Bタイ プ	145
第54図	縄文土器 (18)	94	第83図	平成21年度 遺構全体図	157
第55図	縄文土器 (19)	96	第84図	第1～3号土坑	160
第56図	縄文土器 (20)	97	第85図	第4号土坑	161
第57図	縄文土器 (21)	99	第86図	D区	163
第58図	縄文土器 (22)	100	第87図	C区 (1)	164
第59図	縄文土器 (23)	103	第88図	C区 (2)	165
第60図	縄文土器 (24)	105	第89図	第1号溝跡	166
第61図	縄文土器 (25)	106	第90図	縄文土器 (35)	168
第62図	縄文土器 (26)	107	第91図	縄文土器 (36)	169
第63図	縄文土器 (27)	108	第92図	縄文土器 (37)	170
第64図	縄文土器 (28)	109	第93図	縄文土器 (38)	171
第65図	縄文土器 (29)	110	第94図	石器・石製品 (7)	174
第66図	縄文土器 (30)	111			
第67図	縄文土器 (31)	112			
第68図	縄文土器 (32)	113			

図 版 目 次

図版 1	177	図版 3	179
写真 1	A区①完掘状況	写真 1	B区10号トレンチ完掘状況
写真 2	A区①調査前現況	写真 2	B区11号トレンチ完掘状況
		写真 3	B区12号トレンチ完掘状況
図版 2	178	写真 4	B区13号トレンチ完掘状況
写真 1	A区②完掘状況	写真 5	B区14号トレンチ完掘状況
写真 2	A区②調査前現況	写真 6	B区15号トレンチ完掘状況
		写真 7	B区16号トレンチ完掘状況
		写真 8	B区攪乱坑検出状況

図版 4	180	図版 9	185
写真 1	第 1 号竪穴住居跡完掘状況	写真 1	第 24 号土坑完掘状況
写真 2	第 1 号竪穴住居跡土層堆積状況	写真 2	第 25 号土坑完掘状況
写真 3	第 1 号竪穴住居跡土層堆積状況	写真 3	第 26 号土坑完掘状況
写真 4	第 1 号竪穴住居跡検出状況	写真 4	第 27 号土坑完掘状況
写真 5	第 1 号竪穴住居跡遺物出土状態	写真 5	第 28 号土坑完掘状況
		写真 6	第 28 号土坑完掘状況
図版 5	181	写真 7	第 29 号土坑完掘状況
写真 1	第 2 号竪穴住居跡完掘状況	写真 8	第 30 号土坑調査状況
写真 2	第 2 号竪穴住居跡炉跡		
写真 3	第 2 号竪穴住居跡炉跡土層堆積状況	図版 10	186
写真 4	第 2 号竪穴住居跡土層堆積状況	写真 1	第 1 号焼土跡検出状況
写真 5	第 2 号竪穴住居跡調査状況	写真 2	第 2 号焼土跡土層堆積状況
		写真 3	第 3 号焼土跡検出状況
図版 6	182	写真 4	第 3 号焼土跡土層堆積状況
写真 1	第 1 号土坑完掘状況	写真 5	第 5 号焼土跡検出状況
写真 2	第 2 号土坑完掘状況	写真 6	第 6 号焼土跡検出状況
写真 3	第 2 号土坑土層堆積状況	写真 7	第 7 号焼土跡土層堆積状況
写真 4	第 3 号土坑完掘状況	写真 8	第 8 号焼土跡土層堆積状況
写真 5	第 4 号土坑完掘状況		
写真 6	第 4 号土坑検出状況	図版 11	187
写真 7	第 5 号土坑完掘状況	写真 1	第 1 号炉跡完掘状況
写真 8	第 6 号土坑調査状況	写真 2	第 2 号炉跡完掘状況
		写真 3	第 3 号炉跡完掘状況
図版 7	183	写真 4	第 1 号埋設土器土層堆積状況
写真 1	第 7 号土坑完掘状況	写真 5	第 2 号埋設土器土層堆積状況
写真 2	第 8 号土坑完掘状況	写真 6	第 3 号埋設土器土層堆積状況
写真 3	第 9 号土坑完掘状況	写真 7	第 4 号埋設土器土層堆積状況
写真 4	第 10 号土坑完掘状況	写真 8	第 5 号埋設土器土層堆積状況
写真 5	第 11 号土坑完掘状況		
写真 6	第 12・20 号土坑完掘状況	図版 12	188
写真 7	第 13 号土坑完掘状況	写真 1	第 1 号溝跡完掘状況
写真 8	第 14 号土坑完掘状況	写真 2	第 1 号溝跡・遺物包含層検出状況
		写真 3	第 1 号溝跡・遺物包含層検出状況
図版 8	184	写真 4	第 1 号溝跡土層堆積状況
写真 1	第 15 号土坑完掘状況	写真 5	第 1 号溝跡土層堆積状況
写真 2	第 16 号土坑完掘状況		
写真 3	第 17 号土坑完掘状況	図版 13	189
写真 4	第 18 号土坑完掘状況	写真 1	土手 2 完掘状況
写真 5	第 19 号土坑完掘状況	写真 2	土手 2 (1 号トレンチ) 土層堆積状況
写真 6	第 21 号土坑完掘状況	写真 3	土手 2 (2 号トレンチ) 土層堆積状況
写真 7	第 22 号土坑完掘状況	写真 4	土手 2 調査前現況
写真 8	第 23 号土坑完掘状況	写真 5	土手 2 調査前現況

図版14	190	図版21	197
写真1	土手3 (A区②) 完掘状況	縄文土器 (後期後葉)	
写真2	土手3 (B区) 完掘状況		
図版15	191	図版22	198
写真1	土手3 (A区②) 調査前現況	縄文土器 (後期)	
写真2	土手3 (B区) 調査前現況		
写真3	土手3 (4号トレンチ) 土層堆積状況	図版23	199
写真4	土手3 (5号トレンチ) 土層堆積状況	写真1	縄文土器 (後期後葉)
写真5	土手3 (6号トレンチ) 土層堆積状況	写真2	縄文土器 (後期後葉)
写真6	土手3 (7号トレンチ) 土層堆積状況		
写真7	土手3 (8号トレンチ) 土層堆積状況	図版24	200
写真8	土手3 (9号トレンチ) 土層堆積状況	写真1	縄文土器 (晩期前葉大洞B式期他)
		写真2	縄文土器 (晩期前葉大洞BC式期他)
図版16	192	図版25	201
写真1	土手3 (B区) 完掘状況	写真1	縄文土器 (晩期中葉大洞C ₁ 式期)
写真2	土手3 (10号トレンチ) 土層堆積状況	写真2	縄文土器 (晩期中葉大洞C ₂ 式期)
写真3	土手3 (11号トレンチ) 土層堆積状況		
写真4	土手3 (12号トレンチ) 土層堆積状況	図版26	202
写真5	土手3 (13号トレンチ) 土層堆積状況	写真1	縄文土器 (晩期中葉大洞A式期)
		写真2	縄文土器 (晩期中葉大洞C ₂ 式期)
図版17	193	図版27	203
写真1	第1号竪穴遺構・土手1 完掘状況	写真1	縄文土器 (晩期後葉大洞A式期)
写真2	土手1 (ベルト1) 土層堆積状況	写真2	縄文土器 (晩期後葉大洞A'式期)
写真3	土手1 (ベルト2) 土層堆積状況		
写真4	第2号竪穴遺構完掘状況	図版28	204
写真5	第3号竪穴遺構完掘状況	縄文土器 (晩期)	
図版18	194	図版29	205
写真1	縄文土器 (早期)	縄文土器 (晩期)	
写真2	縄文土器 (早・前期)		
図版19	195	図版30	206
写真1	縄文土器 (中期)	写真1	縄文土器 (後・晩期)
写真2	縄文土器 (後期前葉)	写真2	石器・石製品類
図版20	196	図版31	207
縄文土器 (後期後葉 深鉢形土器)		写真1	石器・石製品類 (石斧)
		写真2	石器・石製品類 (石棒)
		図版32	208
		写真1	磨石・敲石
		写真2	土製品

図版33	209	図版35	211
写真1	C区南完掘状況	写真1	第1号土坑完掘状況
写真2	E区完掘状況	写真2	第4号土坑完掘状況
写真3	F区完掘状況	写真3	第2号土坑土層堆積状況
写真4	G区完掘状況	写真4	第2号土坑完掘状況
		写真5	第3号土坑土層堆積状況
図版34	210	写真6	第3号土坑完掘状況
写真1	D区完掘状況	写真7	第1号埋設土器検出状況
写真2	D区西完掘状況	写真8	第1号溝跡完掘状況
写真3	D区東完掘状況		
写真4	C区北 南壁土層堆積状況	図版36	212
写真5	C区南 北壁土層堆積状況 (1)	写真1	縄文土器 (平成21年度調査)
写真6	C区南 北壁土層堆積状況 (2)	写真2	石器・石製品類 (平成21年度調査)
写真7	C区南 北壁土層堆積状況 (3)		
写真8	C区南 南壁土層堆積状況		

目 次

第1表	出土遺物数量一覧 (1)	22	第18表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (8)	123
第2表	出土遺物数量一覧 (2)	23	第19表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (9)	124
第3表	野馬土手・原町西町遺跡 竪穴住居一覧	30	第20表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (10)	125
第4表	野馬土手・原町西町遺跡 土坑一覧	44	第21表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (11)	126
第5表	野馬土手・原町西町遺跡 炉跡一覧	46	第22表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (12)	127
第6表	野馬土手・原町西町遺跡 焼土跡一覧	49	第23表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (13)	128
第7表	野馬土手・原町西町遺跡 ピット一覧	54	第24表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (14)	129
第8表	野馬土手・原町西町遺跡 竪穴遺構一覧	64	第25表	出土遺物 (弥生土器) 一覧 (1)	130
第9表	遺物包含層出土遺物数量一覧 (1)	66	第26表	出土遺物 (石器・石製品) 一覧	137
第10表	遺物包含層出土遺物数量一覧 (2)	67	第27表	出土遺物 (土製品) 一覧	140
第11表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (1)	116	第28表	出土遺物 (陶磁器) 一覧	141
第12表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (2)	117	第29表	出土遺物 (銭貨) 一覧	141
第13表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (3)	118	第30表	原町西町遺跡 (第3次調査) 土坑一覧	161
第14表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (4)	119			
第15表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (5)	120	第31表	原町西町遺跡 ピット一覧	163
第16表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (6)	121	第32表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (15)	172
第17表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (7)	122	第33表	出土遺物 (縄文土器) 一覧 (16)	173
			第34表	出土遺物 (石器・石製品) 一覧	174

序 章

第1節 調査に至る経緯

平成19年8月、笹部川河川改修事業に伴う南相馬市原町区西町3丁目地内における埋蔵文化財の有無の照会が相双建設事務所から南相馬市教育委員会に提出された。同年9月、南相馬市教育委員会では現地確認の上、開発区域内には埋蔵文化財包蔵地として近世の「野馬土手」が所在しており、コの字状にめぐる土手も認められることから、野馬土手関連施設が所在する可能性があり、開発に先立ち、試掘調査が必要であると回答した。また、野馬土手は良好な



第1図 南相馬市位置図

保存状態であり、開発計画の変更ができない場合は本発掘調査が必要とあわせて回答した。これに基づき、同月、相双建設事務所から試掘調査依頼が南相馬市教育委員会に提出され、同年10月に南相馬市教育委員会が試掘調査を実施した（平成19年度調査〈第1次調査〉）。

試掘調査の結果、開発区域の北東側で縄文時代後～晩期の遺構・遺物包含層が確認されたほか、軍事関連施設と考えられる遺構が確認された。このことにより、現地確認された野馬土手のほか、縄文時代ならびに近代の遺跡であることが確認され、同月、相双建設事務所に要保存対象区を回答するとともに、平成20年1月、新規の埋蔵文化財包蔵地として「原町西町遺跡」を登録した。

この試掘調査の結果を受け、相双建設事務所・南相馬市教育委員会の両者協議を行い、開発計画の変更が困難であるとのことから、平成20年度から本発掘調査を実施することとした。調査は開発計画に伴い、要保存対象区域のうち、現雑種地部分を平成20年度に、現道路部分を平成21年度に実施することとした。

平成20年4月、相双建設事務所から、文化財保護法第94条に基づく発掘届ならびに南相馬市教育委員会へ発掘調査依頼が提出され、同年7月から南相馬市教育委員会が発掘調査を実施した。平成20年度発掘調査は南相馬市教育委員会の職員が調査担当となり、現地調査作業を財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施した（平成20年度調査〈第2次調査〉）。

平成21年4月には、開発区域のうち要保存対象区域の中で、調査未了である現道路部分について、相双建設事務所から文化財保護法第94条に基づく発掘届ならびに発掘調査依頼が提出され、同年7月から、南相馬市教育委員会が本発掘調査を実施した（平成21年度調査〈第3次調査〉）。

本発掘調査の経過については第1編、第2編で後述する。

第2節 地理的環境

福島県南相馬市は福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。行政境としては、北は相馬市、南は双葉郡浪江町、西は相馬郡飯舘村と接する。平成18年1月に小高町・鹿島町・原町市の1市2町が合併して誕生した南相馬市は、旧市町をそれぞれ小高区・鹿島区・原町区として区分している。本書で報告する「原町西町遺跡・野馬土手」はこのうち原町区に所在する。

市内の地形は双葉断層（岩沼－久之浜構造線）により明瞭に区分され、西部域に南北方向に連なる阿武隈山地が縦走し、そこから太平洋に向かって派生する丘陵ならび海成・河成の段丘、沖積平野で構成される。阿武隈山地にかかる西側の丘陵・段丘の標高は100～150mを測るが、海岸部に近い市内中心付近では標高50～60m前後、海岸部では20～30mとなる。

丘陵地の地質は主に第三紀の凝灰岩を基盤とし、段丘は樹枝状に広がる丘陵地の縁辺に形成されている。段丘は大きく高位・中位・低位に区分され、その上位にいわゆるローム層が堆積している。

原町西町遺跡は、原町区の中央に大きく広がる中位段丘の縁辺に位置し、新田川の支流、大木戸川の南岸に位置する。この中位段丘は東西8km・南北5kmにわたっており、この段丘の縁辺部をめぐるよう「野馬土手」が形成されている。この段丘を中心とした野馬土手に囲まれた範囲が、いわゆる近世の牧であり、「野馬原（野馬追原・牛越原）」と称されている。

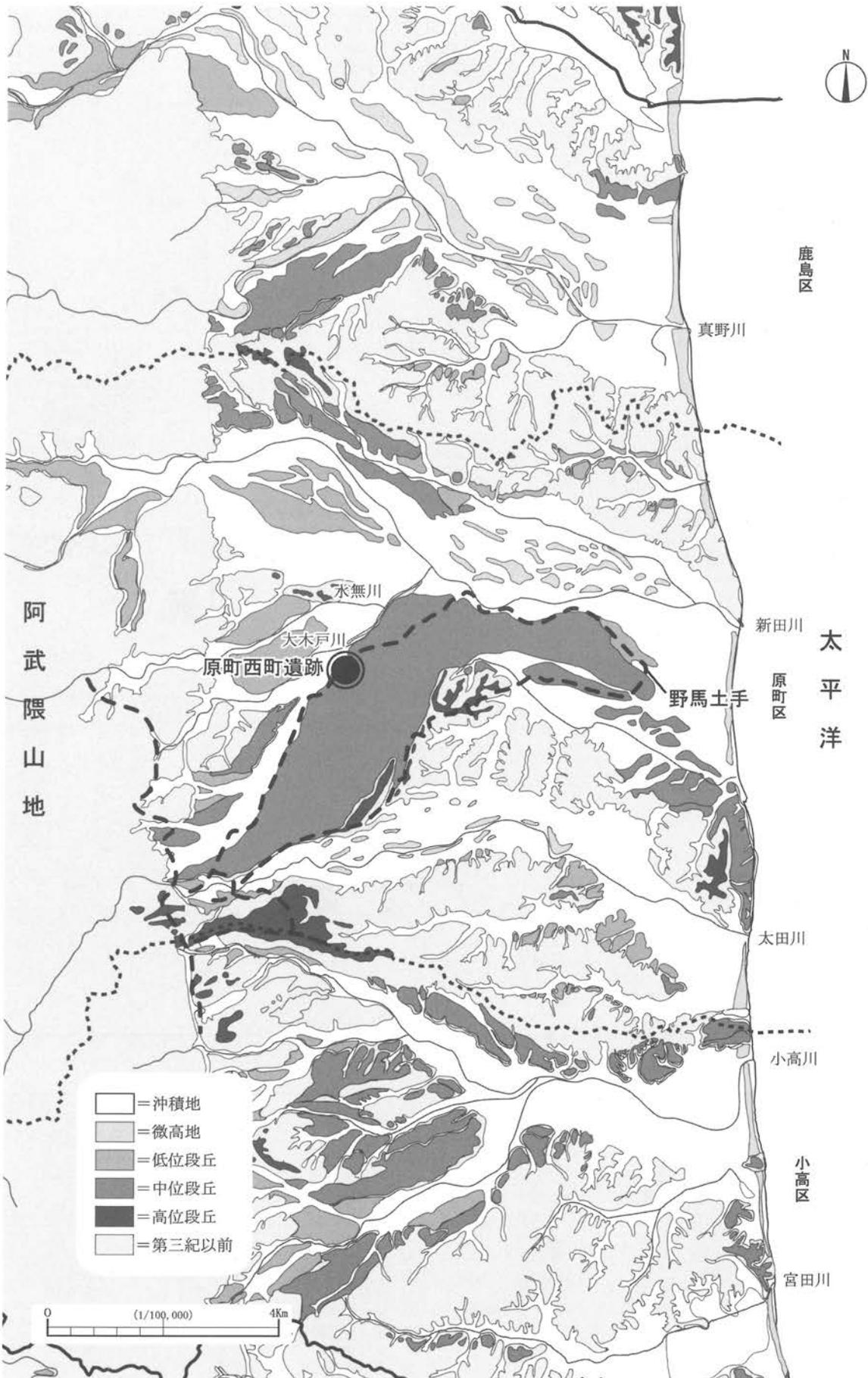
第3節 歴史的環境

本書で報告する原町西町遺跡周辺では近年常磐自動車道に伴う発掘調査が進められ、新たに多くの遺跡が確認された。主に段丘の縁辺部を中心とし、旧石器時代から近代までの遺跡がある。

原町区内の旧石器時代の遺跡としては陣ヶ崎A遺跡(29)など9遺跡が知られているが、本格的な発掘調査は実施されていない。

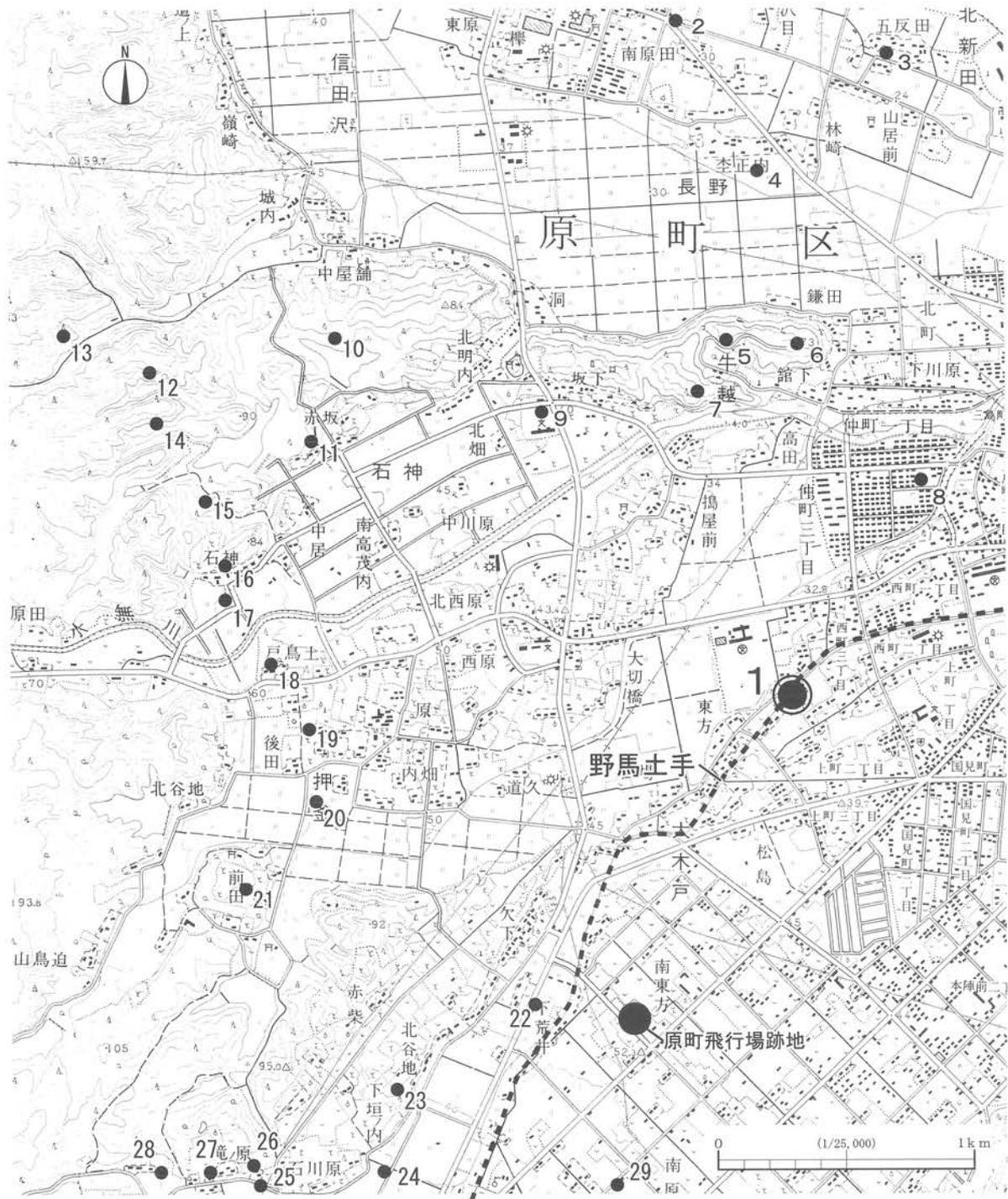
縄文時代の遺跡では、原町西町遺跡周辺の新田川中・上流域でも多くの遺跡が確認されている。滝ノ原遺跡(26)では早期中葉から後期までの遺物がみられ、早期末葉から前期初頭ならびに中期後半の竪穴住居も確認されている。常磐自動車道建設に伴っては赤柴遺跡(23)で早期後半ならびに後期後半の集落、荒井遺跡(24)で後期の集落、石神遺跡(16)では縄文早期後半～前期後半の集落の発掘調査が実施されている。特に赤柴遺跡では縄文時代後期を中心とした住居跡が段丘縁辺部を中心に重複して確認されている。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、新田川下流域では著名な桜井古墳群・高見町古墳群・桜井A～D遺跡などが所在するが、中・上流域では現在のところ確認数は少ない。奈良・平安時代になると、新田川中・上流域でも長野南原遺跡(4)や石神遺跡など集落が明瞭となってくる。なお、新田川下流域では行方郡家とされる泉官衙遺跡(泉廃寺跡)(註1)や大規模製鉄遺跡である金沢製鉄遺跡群が所在している。



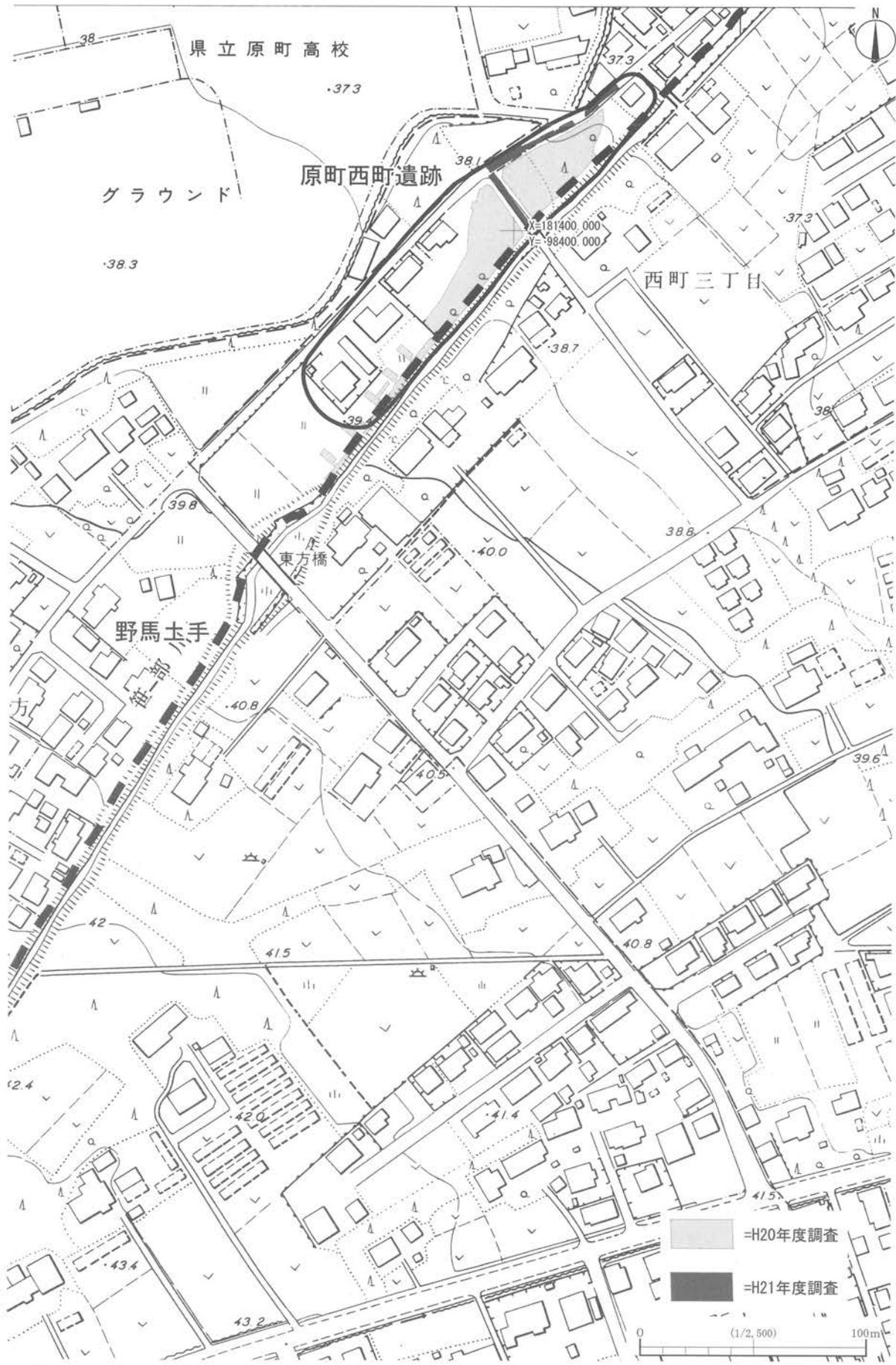
第2図 南相馬市原町区周辺の地質

第3節 歴史的環境



No.	遺跡名	時代	種別
1	原町西町遺跡	縄文・弥生 ・近世・近代	集落跡・ 軍事関連施設
2	北原田A遺跡	奈良・平安	散布地
3	北新田本町遺跡	縄文・古墳・近世	散布地
4	長野南原遺跡	奈良・平安	集落跡
5	城下横穴墓群	古墳	横穴墓
6	牛越城跡	中世・近世	城館跡
7	左衛門館跡	中世	城館跡
8	東町場遺跡	弥生	散布地
9	北畑遺跡	奈良・平安	散布地
10	赤坂B遺跡	奈良・平安	散布地・製鉄
11	赤坂遺跡	奈良・平安	散布地
12	中山B遺跡	近世	製鉄
13	内城沢B遺跡	奈良・平安	散布地
14	中山A遺跡	近世	製鉄
15	中山C遺跡	平安	製鉄
16	石神遺跡	縄文・平安	集落跡
17	石神B遺跡	縄文	散布地
18	戸島土遺跡	平安	集落跡
19	押釜原遺跡	近世	窯跡
20	内畑遺跡	縄文	散布地
21	前田遺跡	縄文	散布地
22	下荒井遺跡	縄文	散布地
23	赤柴遺跡	縄文・平安	集落・
24	荒井遺跡	縄文	集落跡
25	滝ノ原瓦窯跡	平安	窯跡
26	滝ノ原遺跡	縄文	散布地
27	地切遺跡	縄文	散布地
28	川原田遺跡	縄文	散布地
29	陣ヶ崎A遺跡	旧石器	散布地

第3図 周辺の遺跡



第4図 野馬土手・原町西町遺跡の調査全体図

中世には牛越城跡(6)があり、文安2年(1445)年、牛越城に居館していた牛越定綱は相馬氏と対立したとの記録がある。また、相馬氏は慶長2年(1597)年、小高城から牛越城に移ったが、関ヶ原の戦いの後の慶長8(1603)年、再び小高城に戻っている。相馬氏が牛越城に居館していたのはわずか6年に留まる。このほか、牛越館跡の南に位置する左衛門館跡(7)があり、中世塚があったとされる戸鳥土遺跡(18)からは北宋銭、石神遺跡からも中世陶器が出土している。

近世の遺構は、本書でも報告する野馬土手が代表的である。現在の原町区の中心部に位置する段丘を中心に、東西約10km×南北約2.6kmの範囲を囲むように築かれている。

野馬土手は、国指定重要無形民俗文化財である「相馬野馬追」に関連した遺構である。「相馬野馬追」は、平将門が下総国葛飾郡小金原に馬を離し、野馬を敵と見なして追い回し、軍事訓練を行っていたことがはじまりと伝えられているが、慶長2(1597)年に、相馬義胤が牛越城下で野馬追を行ったとの記録が、当地方の確実なものとされる。

藩政時代、野馬追は軍事訓練と相馬氏の妙見信仰の祭事を兼ねた行事として行われた。中村藩は「野馬原」を中心に野馬を妙見神馬として保護していた。このため、保護された野馬は増加し、野馬原内の民家や農耕地を荒らすようになり、中村藩主相馬忠胤は、寛文6年(1666)から野馬の民家や農耕地への侵入、逃散を防止するために「野馬原」一円に環状の土手を築いた。これが原町区一円に残る野馬土手である。野馬土手内には、溜池や水路を設け、野馬の飲み水の便利を図ることがなされていたと伝えられている。

明治5(1872)年、明治新政府は「野馬原」の馬はすべて狩り尽くすこととし、官営の「野馬原」の牧は廃止されることとなった。この「野馬原」は明治以後、「雲雀ヶ原」と呼称されるようになり、昭和11(1936)年、軍用の雲雀ヶ原臨時飛行場が開場し、昭和15年(1940)には陸軍熊谷飛行学校原町分校が開設され、全国各地から陸軍の訓練生が集まることとなった。この飛行場は本報告地点の約1.5km南西にあったものであり、本報告にあたる原町西町遺跡のほか、近接する赤柴遺跡の発掘調査において、この原町飛行場に伴う軍事関連遺構が確認されている。

註1) 泉官衙遺跡は、これまで泉廃寺跡と称してきた遺跡である。平成22年2月22日付けの国史跡指定にあたって、泉官衙遺跡との名称で指定された。

引用参考文献

- 猪狩みち子他 2007 『大塚遺跡・野馬土手』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第5集 南相馬市教育委員会
林紘太郎2008 『野馬土手 近世牧跡の調査』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第9集 南相馬市教育委員会
原町市 2003 『原町市史 第4巻 資料編Ⅱ 「古代・中世」』
南相馬市 2008 『原町市史 第11巻 特別編Ⅳ 「旧町村史」』
安田稔ほか 2008 「広谷地遺跡・石神遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告52』 福島県教育委員会

第 1 編

平成 2 0 年度調査

- 第 2 次 調 査 -

第1章 調査の概要

第1節 調査要項

遺跡名称	野馬土手（のまどて）・原町西町遺跡（はらまちにしまちいせき）					
所在地	福島県南相馬市原町区西町三丁目地内					
遺跡現況	宅地・水田					
遺跡性格	縄文時代集落跡、遺物包含層、野馬土手、近代軍事施設					
調査原因	笹部川河川改修工事					
調査期間	平成20年8月4日～平成20年12月2日					
調査対象面積	約4,000 m ²					
調査委託者	福島県南相馬市長 渡辺一成					
調査主体者	福島県南相馬市教育委員会 教育長 青木紀男					
調査実施者	財団法人いわき市教育文化事業団 理事長 高津達男					
担当調査員	川田 強（福島県南相馬市教育委員会） 江川逸生 高島好一 木幡成雄 末永成清 吉田生哉（財団法人いわき市教育文化事業団）					
調査補助員	狭川麻子					
整理補助員	牛渡由起子 松本経子 渡部定子					
調査作業員	菅野孝子	鞠子ナツイ	長谷川浩平	長谷川昇一	高橋浩	
	稲川捷良	柚原令子	志賀一	岩崎美和子	鈴木令子	
	鈴木時江	江井新英	高倉征一	柴田淳子	柴田眞四男	
	菅原義郎	田中優	渡部徳子	佐藤昌家	門馬和弘	
	小元光明	門馬恵子	八島昇枝	上田秀雄		

第2節 調査経過

平成20年（2008年）

8月4日（月）～8月8日（金） 4日に器材搬入、安全柵を設置する。5日にA区①の土手1・2より人力による表土掘削を開始する。

8月11日（月）～8月15日（金） 土手2の表土掘削（人力）を継続する。並行して土手1の測量作業を開始する。

8月18日（月）～8月22日（金） A区①土手1・2完掘状況、第1号竪穴遺構検出状況の写真撮影を実施。A区①土手1西側の重機による表土掘削、第1号竪穴遺構の覆土掘削及び人力による遺構検出作業を開始するが、豪雨による湧水によって1号覆土掘削を断念する。

第2節 調査経過

8月25日(月)～8月29日(金) A区①土手1西側の表土掘削及び遺構検出作業を継続する。

9月1日(月)～9月5日(金) A区①遺構検出作業を継続し、重機による1堅覆土掘削作業と並行して1堅内部精査を再開する。

9月8日(月)～9月12日(金) A区①の土坑・土手2の精査及びA区②の土手3表土掘削(人力)を実施する。

9月16日(火)～9月19日(金) A区①の土坑精査を継続する。並行して抜根のための準備作業を開始する。A区②表土掘削(重機)、遺構検出作業を開始する。

9月22日(月)～9月26日(金) A区①の土坑精査を継続する。重機により土手1・2除去及び抜根作業を実施する。A区②遺構検出作業を実施する。

9月29日(月)～10月3日(金) A区①土手1・2下層(遺物包含層)の精査を開始する。「土手1下層1～5区」を設定する。並行してA区②遺構検出作業を実施する。

10月6日(月)～10月10日(金) A区①の遺物包含層の精査を継続する。A区②の遺構検出作業と並行して検出状況図を作成する。

10月14日(火)～10月17日(金) A区①の遺物包含層の精査を継続する。調査区東端より沢跡を検出し内部精査を開始する。A区②の検出状況図作成を実施する。

10月20日(月)～10月24日(金) 22日、A区①の遺物包含層に「a～c区」を設定、並行して沢跡精査を継続する。第1号溝跡を検出し、内部精査を開始する。A区②の土坑精査を開始する。B区に安全柵を設置する。

10月27日(月)～10月31日(金) A区①の遺物包含層の精査及び遺構検出作業を実施する。第1～3号焼土跡の精査を開始する。A区②の完掘状況写真撮影を実施し調査を完了する。B区土手3の表土掘削を実施し、並行して10～14号トレンチを設定する。

11月4日(火)～11月8日(土) A区①の遺構精査、B区土手3測量作業を実施後、重機により10～14号トレンチを掘削する。8日、現地説明会を開催する。

11月10日(月)～11月14日(金) A区①の遺構精査・記録作業、A区②の補足調査、B区トレンチ精査を実施する。

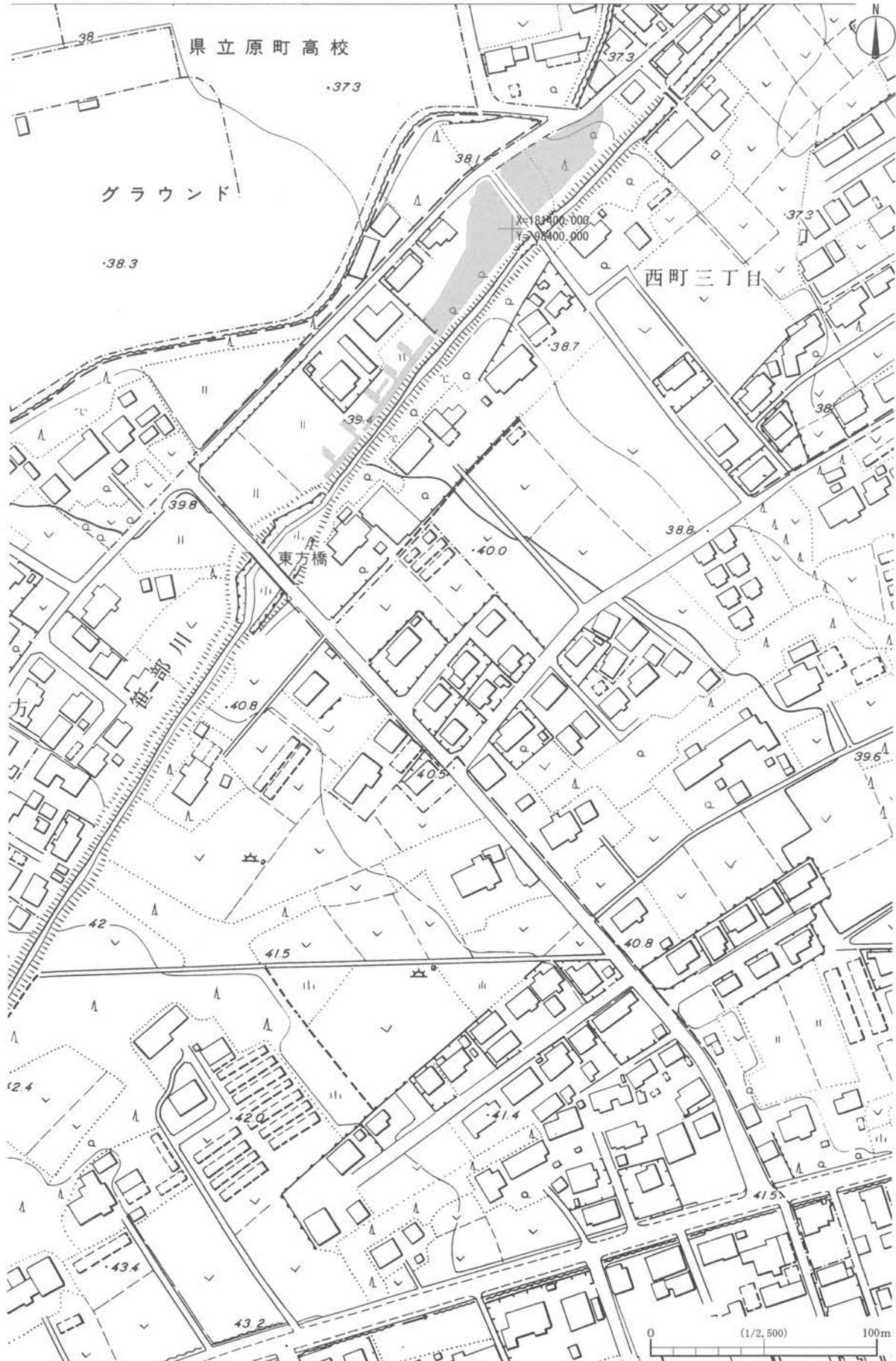
11月17日(月)～11月21日(金) A区①の遺構精査・記録作業、A区②の補足調査、B区トレンチ記録作業を実施。

11月25日(火)～11月28日(金) A区②より埋め戻し作業を開始する。

12月2日(火) 埋め戻し作業終了後、現地を引渡す。

第3節 調査区の設定

笹部川改修事業関連発掘調査事業にかかる野馬土手(原町区西町地区)・原町西町遺跡の本発掘調査区域は、南相馬市原町区西町三丁目地内に所在する。調査対象範囲は笹部川と市道西町・大木戸押釜線との間に位置する宅地及び水田にあたり、市道等の生活道路を除いた約4,000㎡に



第5図 野馬土手・原町西町遺跡の調査範囲図 (平成20年度)



第6図 調査区域図（平成20年度）

設定された。これは平成19年10月10日～10月15日に実施された試掘調査の成果をもとに、遺構が検出され、遺物が出土したトレンチ（試掘トレンチ1～3・6）を勘案して要保存範囲として設定されたものである。

平成20年度の本発掘調査範囲は笹部川に沿って長大であり、箇所によっては地形・地目も異なるため、調査時期や調査方法も異なる。したがって調査対象範囲を、北側の宅地部分と南側の水田部分に2分割し、宅地部分を「A区」、南側の水田部分を「B区」と呼称した。さらにA区は現況の生活道路を境に調査区を2分割したことにより「A区①」、「A区②」を設定した。

第4節 調査の概要

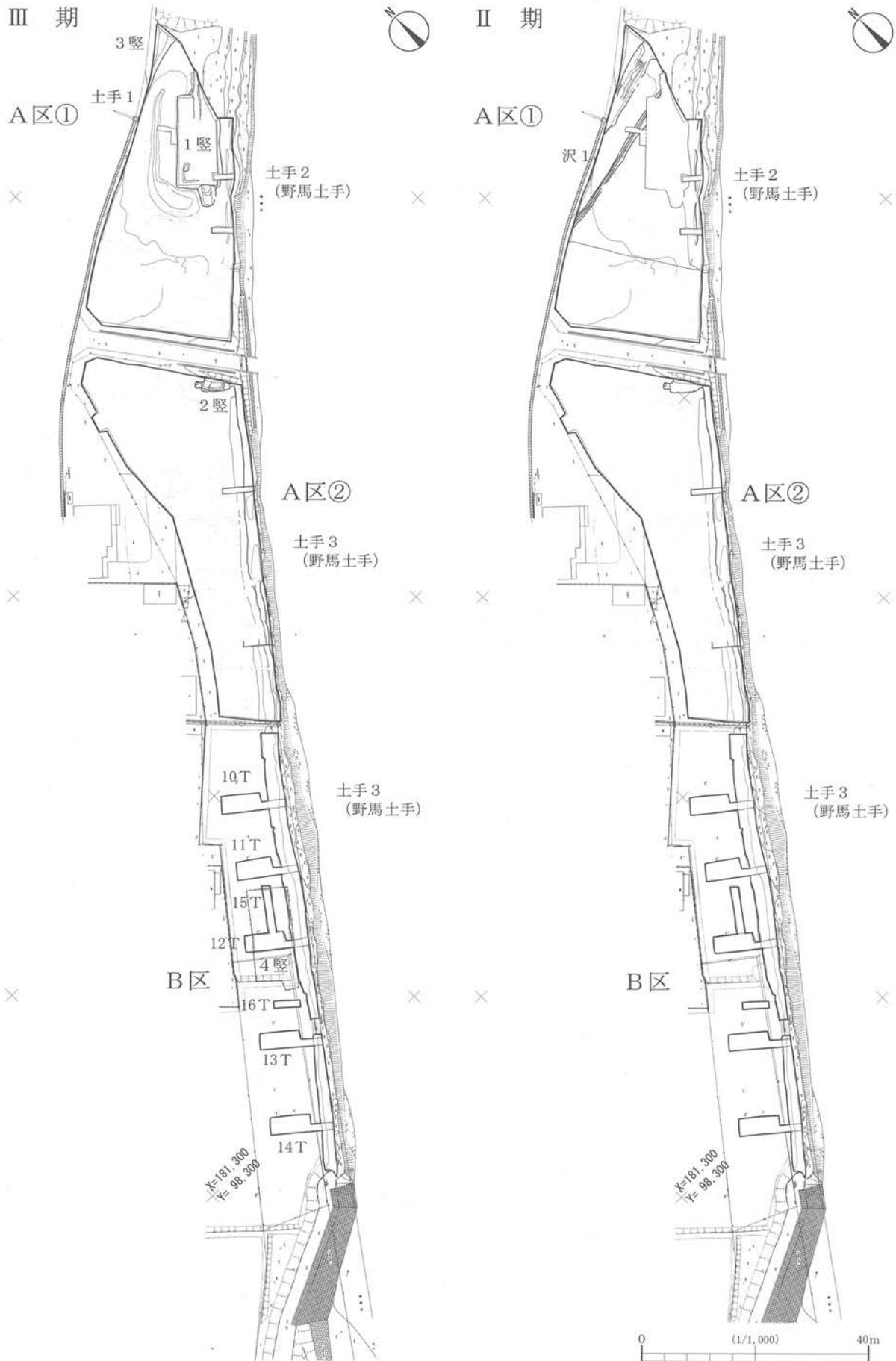
1. 調査の概要

笹部川改修事業予定地内には、寛文6年（1666）に奥州中村藩によって構築された近世牧に関連する遺構である野馬土手のほかに、「L」字状の土手が遺存していた。

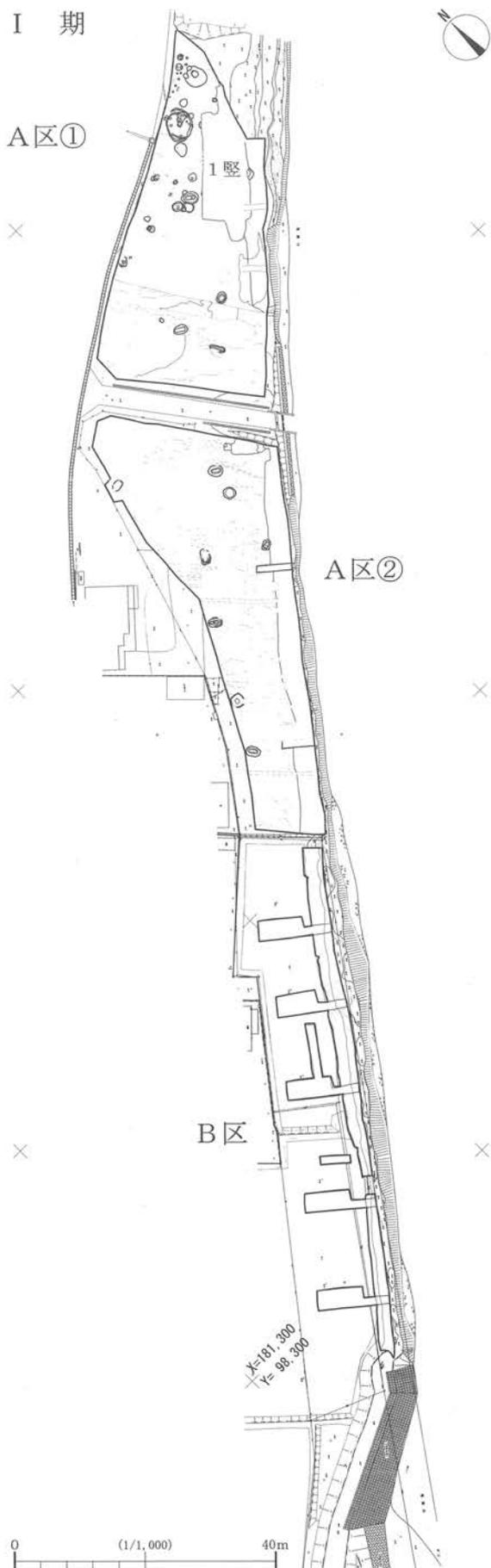
平成19年度の試掘調査では、この「L」字状土手の性格を判断するために設定されたトレンチから近代の竪穴状遺構や縄文時代後期～晩期と推定される竪穴住居跡が検出され、さらに道路をはさんだ西側からは近代の地下式遺構と推測される遺構1基、ピット4個が検出された。

この試掘調査の成果をうけて、条件整備が整った平成20年8月から約4箇月間に亘り、A区は全面発掘調査、B区はトレンチ法によって本発掘調査が実施された。

これによりA区①からは竪穴住居跡2棟（1・2住）、土坑23基（1～4・12～29・31坑）、炉跡3箇所（1～3炉）、焼土跡8箇



第7図 平成20年度 遺構全体図 (II・III期)



第8図 平成20年度 遺構全体図 (I期)

所 (1~8 焼)、埋設土器5基 (1~5 埋)、ピット10個 (ピット1~10)、溝跡1条 (1 溝)、沢跡1箇所 (沢1)、野馬土手を含む土手2条 (土手1・2)、竪穴遺構2基 (1・3 竪)、遺物包含層1箇所が検出され、A区②からは土坑8基 (5~11・30坑)、竪穴遺構1基 (2 竪)、B区まで延長する野馬土手 (土手3) が検出された。

水田部分を調査区とするB区は、稲の収穫が終了した10月下旬に、7本のトレンチを設定して調査が実施された。

遺物は縄文土器、弥生土器、陶磁器、石器・石製品類、土製品、銭貨が出土している。

縄文土器は縄文時代早期から晩期までの資料が出土しているが、A区①の遺物包含層から出土した後期後葉及び晩期中葉の土器が主体となる。当地方のいわゆる「瘤付土器」に伴って、関東地方の安行式に比定される資料も散見される。

弥生土器は表土及びL1層から小破片が出土しているのみであり、陶磁器も表土から近・現代に使用された生活雑器のみである。

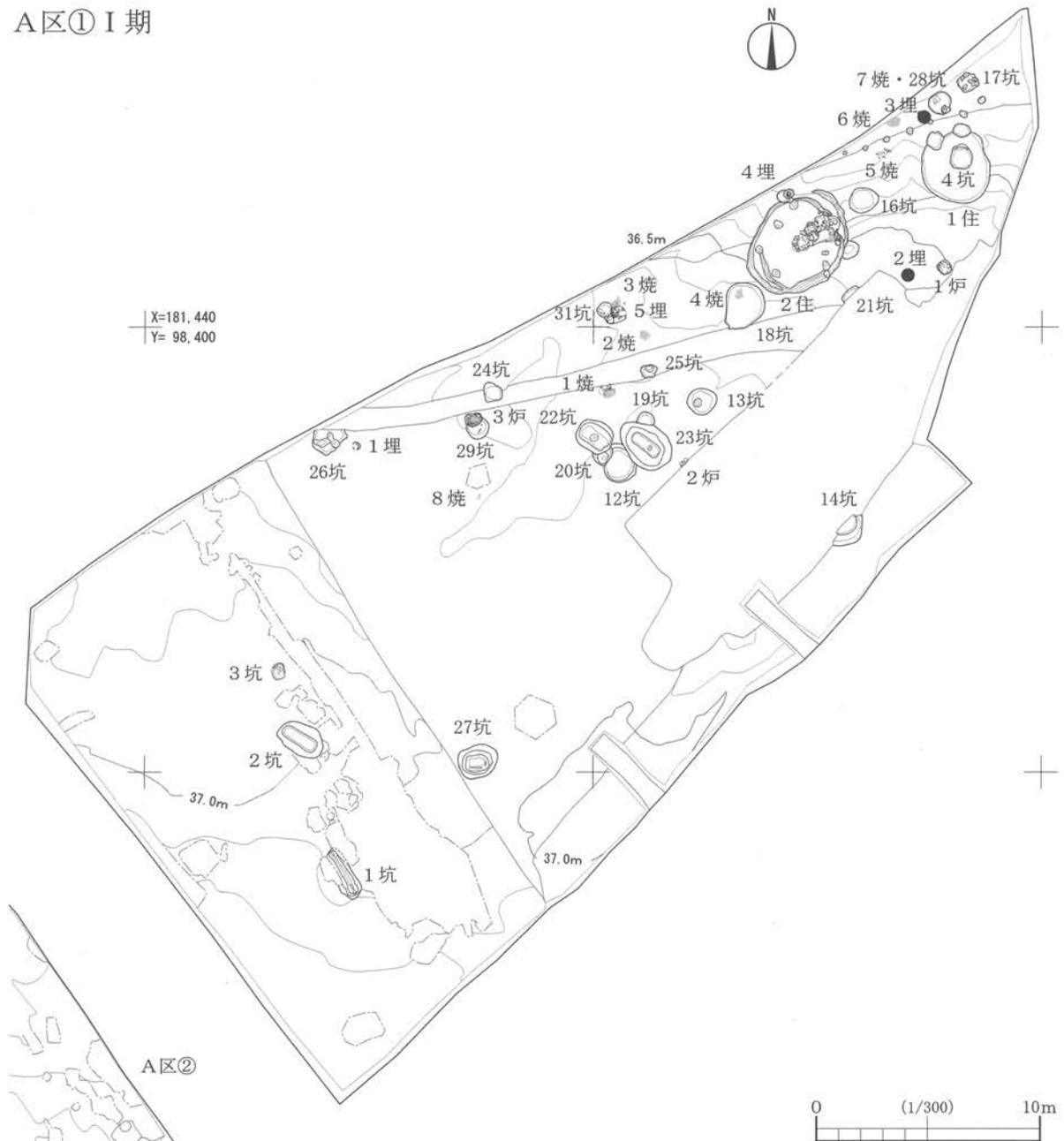
石器・石製品類は遺物包含層から石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石棒、剥片などが出土し、土製品は、遺物包含層より土錘・土版・耳環状土製品が出土している。石器・石製品類及び土製品は、いずれも縄文または弥生時代に比定される資料である。

銭貨は、表土からの「10銭錫貨」、A区②の攪乱より「寛永通宝」が出土している。

2. A区の調査

A区①の西側からA区②にかけては、以前は宅地または水田として利用されており、植栽痕や給・排水管敷設による近・現代の攪乱や削平が顕著に認められた。

A区①I期



第9図 平成20年度 遺構全体図 (A区①I期)

A区①から2棟検出された竪穴住居跡は、いずれも北西方向に傾斜する沢状地形の縁辺から検出された。第1号竪穴住居跡の平面形態はやや楕円形状となる。第2号竪穴住居跡は造り替えられたと推測され、鶏卵状の楕円形を呈する。床面から検出された炉跡は石組部と前庭部からなる複式炉の形態をとる。

31基検出された土坑は平面形態が円形状、楕円形状、不整形のものがある。楕円形状のものはA区①から4基(1・2・22・23坑)、A区②からは5基(5・7・8・10・30坑)検出されている。等高線に直交するようにほぼ20m間隔で検出されている土坑は落とし穴と推測される。

円形状のものは検出面から底面までの深度が浅いが縄文時代の貯蔵穴と推測される。A区①からは2基(12・18坑)、A区②からは3基(6・9・11坑)検出されている。そのほかの土坑

第4節 調査の概要

A区② I期



第10図 平成20年度 遺構全体図 (A区② I期)

には、底面が火熱により赤変しているものもあり、性格や機能した時期が不明なものが多い。

3基検出された炉跡は、遺物包含層L5層上面からの検出である。いずれも石囲炉であり、炉内底面は火熱により赤変する。第1号炉跡は方形、第3号炉跡は円形を呈する。2炉は近代の第1号竪穴遺構によりほとんどが削平されており平面形態は不明である。

焼土跡は8基検出された。遺物包含層L3・4層からの検出である。周辺に礫が散布しているものもあり破壊された石囲炉の可能性もある。ほとんどの焼土跡は火熱による赤変が顕著ではなく、掘り方も伴わない。

埋設土器は5基検出された。いずれもL3・4層からの出土であるが、掘り方は伴わない。土器が正位に埋設されたもの（1～4埋）、逆位に埋設されたもの（5埋）がある。このうち第4号埋設土器から出土した土器は、ほぼ完形となり、縄文時代後期（安行I式期）に比定される。

溝跡はL3層上面から1条検出された。断面形状が「V」字状を呈し、ほぼ東西方向に直線的に流路をとる。調査区域外で近世の野馬土手と交錯すると推測されることから野馬土手が構築される近世以前に機能していた溝跡であろう。

現況で確認された土手は3箇所である。このうち「L」字状を呈する土手1は近代の原町飛行場に関連し、1竪に伴う土手と推測される。

土手2・3は奥州中村藩の牧に関連するいわゆる「野馬土手」である。今回の調査区域内では、笹部川に沿って現存する約230mが発掘調査の対象となった。トレンチによる土層観察によれば、旧表土と推測される黒褐色土によって構築されていることが確認された。

A区①から検出された第1号竪穴遺構とA区②から検出された第2号竪穴遺構は平成19年度の試掘調査により発見された「竪穴状遺構」と「地下式遺構」である。2竪は調査区域外に延びるため規模は不明であるが、1竪は長方形を呈し、規模は長軸約16m、短軸約8m、深さ1mを測る。この1竪掘削時の排土は土手1の構築に使用されたと推測される。この竪穴遺構の性格については、周辺からの聞き取り調査においても、兵舎・防空壕・火薬庫とされ一定しないが、いずれにしても原町飛行場に関連する軍事施設であり、機能した時期も近代に比定される。さらにB地区12・15号トレンチから野馬土手（土手3）に沿って検出された第4号竪穴遺構も同様の性格を有すると推測される。

平成19年度に実施された試掘調査によるLⅡ層及び遺構の検出面であるLⅢ層が縄文時代後～晩期の遺物を濃密に含む遺物包含層である。これらの遺物包含層は近代の土手1及び近世の土手2（野馬土手）構築以前の旧表土層であり、A区①のほぼ東半分は層厚約60cmと厚く堆積する。

3. B区の調査

B区は平成20年度の野馬土手（原町区西町地区）・原町西町遺跡の調査対象範囲の西半部、A区②の南西に位置する。北東－南西方向に細長い略長方形を呈し、延長約90m、幅約13～16mを測る。調査前現況での土地利用状況は水田であり、地形はほぼ平坦であるがB区内ほぼ中央

部の畦畔において約0.5mの段差が認められる。この畦畔を境に東側の標高は約38.2m、西側の標高は約38.7mを測る。

B区の調査は、野馬土手の築造構造の解明とA区で検出された落とし穴列の延長を確認することを目的とし、トレンチ対応とした。トレンチの設定位置は、当初計画では北東-南西方向に細長いB区を北西-南東方向に横断する形とした。トレンチの形状は長方形を基本とし、南東角に野馬土手を切断する形の突出部を設けた。B区の東端から西方へ10号~14号トレンチまでの5本を設定し、遺構の検出状況により15号・16号トレンチを追加設定した。設定したトレンチの総面積は137.5㎡を測る。調査の結果、12号・15号トレンチにおいて第4号竪穴遺構が検出された。以下、トレンチ毎に概説する。

10号トレンチ B区の北東端近くに設定した。規模は11.0m×3.0m、深さ0.2~0.3m、調査面積25.0㎡を測り、長軸方向N53°Wを示す。水田部分では、厚さ約0.2mを測る現代の水田耕作土の下に、厚さ0.05m以下の水田床土が認められ、その下は地山の黄褐色土層となる。

野馬土手部分では、旧表土上に高さ約0.7mを測るほぼ水平の盛土が施され、その上を表土が斜位に被覆している構造が認められた。遺物は石斧1点を出土した。

11号トレンチ B区の北東端寄り、10号トレンチの南西側に設定した。規模は11.5m×3.0m、深さ0.2~0.3m、調査面積24.5㎡を測り、長軸方向N54°Wを示す。水田部分では、厚さ約0.2mを測る現代の水田耕作土の下に、厚さ約0.1mの水田床土が認められ、その下は地山の黄褐色土層となる。

野馬土手部分では、旧表土上に高さ約0.8mを測るほぼ水平の盛土が施され、その上を表土が斜位に被覆している構造が認められた。また、土手表土の上部北側には、第4号竪穴遺構掘削時の排土と推定される地山の黄褐色土層の堆積が認められた。遺物は出土しなかった。

12号トレンチ B区のほぼ中央部に設定した。規模は11.0m×3.0m、深さ0.9~1.1m、調査面積25.0㎡を測り、長軸方向N52°Wを示す。水田部分では、厚さ約0.2mを測る現代の水田耕作土の下に、厚さ0.1~0.3mの下層土との混在層が認められ、その下は地山の黄褐色土層となる。トレンチの北西端部分を除き、長さ7.4m×深さ0.7~0.8mを測る竪穴遺構の堆積土が認められた。

野馬土手部分では、旧表土上に高さ約0.6mを測るほぼ水平の盛土が施される構造が認められた。遺物は出土しなかった。

13号トレンチ B区の南西端寄り、14号トレンチの北東側に設定した。規模は11.0m×3.0m、深さ0.3~0.5m、調査面積25.0㎡を測り、長軸方向N49°Wを示す。水田部では、厚さ約0.2mを測る現代の水田耕作土の下に、水田造成時の客土と推定される厚さ約0.1mの盛土、その下に厚さ約0.2mを測る旧表土、さらにその下が地山の黄褐色土層となる。

野馬土手部分では、旧表土上に高さ約0.2mを測るほぼ水平の盛土が施され、その上を表土が斜位に被覆している構造が認められた。遺物は出土しなかった。

14号トレンチ B区の北西端寄りに設定した。規模は11.0m×3.0m、深さ0.2~0.3m、調査面積25.0㎡を測り、長軸方向N51°Wを示す。水田部分では、厚さ約0.3mを測る現代の水田

耕作土の下に、水田造成時の客土と推定される厚さ約0.1mの盛土、その下が地山の黄褐色土層となる。地山層検出面には、水田造成時の整地作業に使用されたと推定される、重機のキャタピラ痕が一面に残存していた。

野馬土手部分では、旧表土上に高さ約0.4mを測るほぼ水平の盛土が施され、その上を表土が斜位に被覆している構造が認められた。遺物は出土しなかった。

15号トレンチ B区のほぼ中央、12号トレンチで検出された竪穴遺構の規模を確認する目的で、12号トレンチの北東側にT字状に直交して設定した。規模は8.0m×1.0m、深さ0.8～1.0m、調査面積8.0㎡を測り、長軸方向N35°Eを示す。厚さ約0.2mを測る現代の水田耕作土の下は、地山の黄褐色土層となる。トレンチの北東端部分を除き、長さ7.4m×深さ0.6～0.8mを測る竪穴遺構の覆土が認められた。遺物は出土しなかった。

16号トレンチ B区のやや北西端寄り、12号トレンチで検出された竪穴遺構の規模を確認する目的で、12・13号トレンチ間に設定した。規模は5.0m×1.0m、深さ0.7～0.8m、調査面積5.0㎡を測り、長軸方向N48°Wを示す。水田部分では、厚さ約0.2mを測る現代の水田耕作土の下に、水田造成時の客土と推定される厚さ約0.1～0.3mの盛土、その下に厚さ約0.2mを測る旧表土、さらにその下層が地山の黄褐色土層となる。遺物は出土しなかった。

第5節 調査の方法

平成20年度の野馬土手・原町西町遺跡の本発掘調査は、調査時期や調査方法の相違から調査区を「A区」・「B区」の2箇所に分割して実施することとした。A区については生活道路を境に「A区①」・「A区②」とさらに2分割することとした。また廃土置き場については、調査完了後に埋め戻しを実施するため、河川改修事業予定地内を利用することとした。

発掘調査工程は、試掘調査の結果により遺構・遺物の密度が比較的濃いと想定されたA区①から実施し、その後の調査の進捗や条件整備を整えた上でA区②を調査することとした。B区については遺構・遺物の密度が希薄であると想定されたためトレンチ法による調査で対応することとし、調査時期は水田稲作が終了する10月下旬に設定された。

A区からB区に至る野馬土手の発掘調査については、現況の野馬土手が笹部川の堤防として機能しており、発掘調査によりすべてを除去することは不可能と判断された。したがって野馬土手頂部より半分のみを調査することとした。

本発掘調査は、調査区内にある立木を伐採した後に、現況地形を把握し、遺跡の立地及び現況地形を正確に記録するための現況地形図（縮尺100分の1）を作成することから開始された。

表土及び無遺物層を掘削する表土掘削作業は、近代軍事関連遺構である「L」字状土手や近世の野馬土手については、積土の状況を把握しながら慎重に調査を進めるため人力によって実施した。それ以外の部分については重機（0.40m³・0.25m³）と排土移動のためのダンプトラック（4.0t・2.0t）を利用した。

遺構検出、遺構掘削作業及びA区①で検出された遺物包含層の掘削作業は、人力により層序

を観察・確認しながら、上層から層位ごとに精査した。出土遺物については、遺構の分布状況や遺物の出土状況を把握するために「土手1西・北・東側」、「土手1下層1～5区」または「土手1下層a～c区」等の区画を調査の進捗に応じて設定し、その区画単位と層序で取り上げることに努めた。また検出されたすべての遺構の内部精査については、遺構内遺物の出土状況を確認し、遺構の性格や機能した時期を判断しながら、人力により移植ベラ、手鎌などを使用して実施した。

図面作成作業は、遺構検出状況図及び遺構完掘状況図作成作業の作業効率向上を図るためトータルステーション(SOKKIA製 SET600S)を利用したデジタル実測ソフト(株式会社CUBIC製「遺構くんCubic」)を使用し、国土座標に基づき実施した。図面作成作業において器械点及び視準点として利用した国土座標値の一つは、X=181,449.244、Y=98,419.481(日本測地系)である。遺構の土層断面図や遺物出土状況図及び石組炉等の詳細図作成は、簡易遣り方測量により実施した。

遺構及び遺物の写真撮影は、遺構の状況や遺物の出土状態を記録するため、35mmカラーリバーサルフィルムおよび35mmモノクロフィルム、4.5×5判モノクロフィルムを用い、デジタルカメラを補助的に使用して適宜写真撮影を実施した。

第6節 層序観察

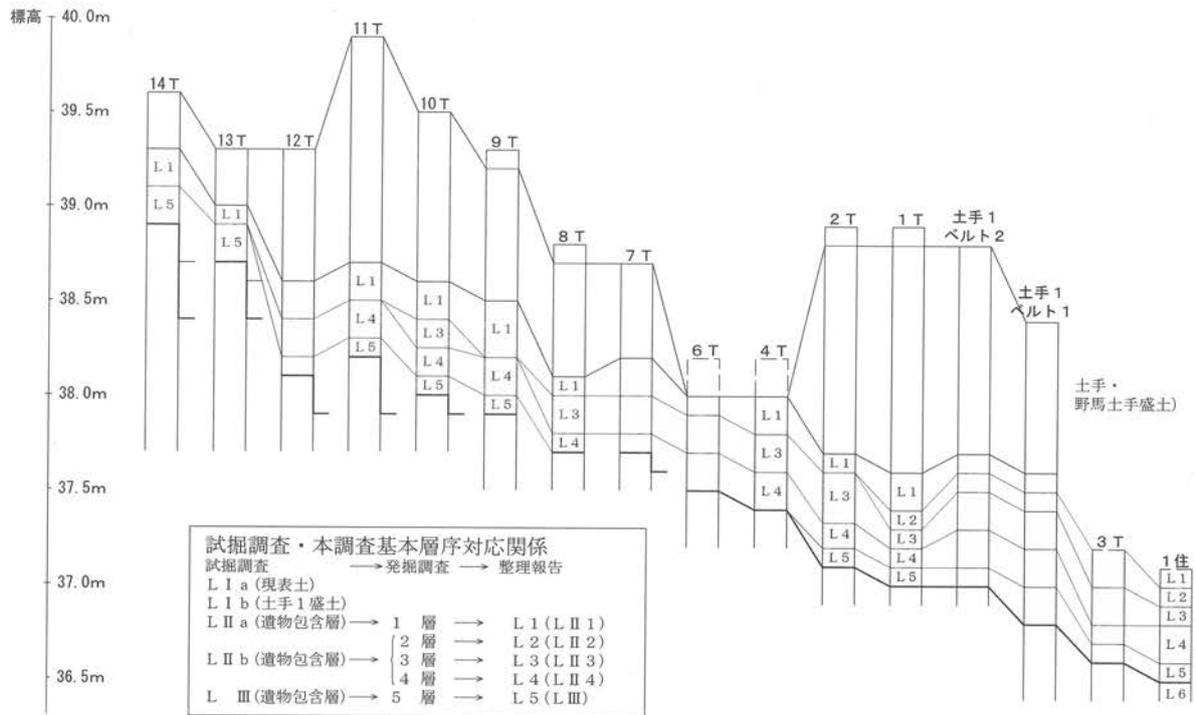
調査区域内の現況地形では、調査区内では西側に位置し、水田が営まれているB区が標高約39m、東側のA区では標高約38mでほぼ平坦となる地形と把握された。しかし表土掘削後の遺構検出面での地形は、B区においては標高約38m、A区①においては標高約37mを測り、緩やかに西から東へ、さらに南から北へ標高を減じる。

またA区①の調査区域東端には、沢状地形が形成されるようである。さらにA区①の西側からA区②にかけては、以前は水田として利用されていたと推測されるが、最近までは盛土を施された上で宅地として利用されており、植栽痕や給・排水管敷設による近・現代の攪乱や削平が顕著に認められた。

平成19年度の試掘調査「1号トレンチの土層観察」によれば、現表土(試掘LⅠ層)下には旧表土層と推測された層厚約60cmの黒褐色土層(試掘LⅡa層)、層厚約10～20cmの黒褐色土層(試掘LⅡb層)及び層厚約10cmの褐色土層(試掘LⅢ層)が堆積し、このLⅢ層上面が遺構検出面であり、その下層の黄褐色土層が地山であることが確認された。

平成20年度の本発掘調査では、試掘調査で現表土下に確認された遺物包含層である黒褐色土層及び褐色土層が、A区①では野馬土手(土手2)積土下に、また遺物の密度は希薄ではあるが、A区②及びB区の野馬土手(土手3)の積土下にも遺存していることが確認された。

したがってA区①の遺物包含層の精査において土手1及び土手2に設定したセクションベルト等の土層観察により、試掘調査の基本土層(試掘LⅡa・b層)をさらに細分して遺物包含層の基本層序(LⅡ1～LⅡ4・L5層)として利用することとした。



第11図 基本土層柱状模式図

野馬土手・原町西町遺跡遺物包含層土層注記 本文中において、遺物包含層の層序名については、試掘調査時の層序名と細分した層序名を併用した。細分した層序名については、以下の略称を使用することとする。

L 1 黒色土層 (Hue10YR1.7/1) L II 1層 (試掘L II a層)。土手1～3構築以前の旧表土層。粘性あり、しまりなし。

L 2 黒色土層 (Hue10YR2/1) L II 2層 (試掘L II b層)。粘性あり、しまりなし。

L 3 黒褐色土層 (Hue10YR3/1) L II 3層 (試掘L II b層)。粘性あり、しまりなし。

L 4 暗褐色土層 (Hue10YR3/3) または黒褐色土層 (Hue10YR2/3) L II 4層 (試掘L II b層)。粘性あり、しまりなし。

L 5 褐色土層 (Hue10YR4/4) L III層 (試掘L III層)。遺構検出面。粘性あり、しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを多量に含む。

L 6 黄褐色土層 (Hue10YR5/6) 地山。粘性あり、しまりあり。

第7節 資料整理

平成20年度に実施された野馬土手・原町西町遺跡の本発掘調査による成果は、竪穴住居跡2棟、土坑31基、炉跡3箇所、焼土跡8箇所、埋設土器5基、ピット10個、溝跡1条、土手3基、竪穴遺構4基、縄文時代の遺物を多量に含む遺物包含層1箇所、縄文土器、弥生土器、陶磁器、石器・石製品、土製品、銭貨の出土遺物がある。遺物数量はA区①で検出された遺物包含層からの縄文時代後～晩期に属する遺物を主体として28,261点を数える。

第7節 資料整理

第1表 出土遺物数量一覧(1)

(破片数)

出土地点	縄文土器						弥生土器	陶磁器	石器・石製品	礫	土製品	銭貨	合計
	早期	前期	中期	後期	晩期	粗製等							
第1号竪穴住居跡			1	21	16	518			22	57			635
第2号竪穴住居跡	1	5	3			6							15
第2号竪穴住居跡炉跡						20							20
第1号土坑						1							1
第2号土坑		8				17		5					30
第4号土坑				7	12	484		1	7				511
第6号土坑						2							2
第11号土坑						1							1
第12号土坑	1	1		6	3	37		2	27				77
第13号土坑				1	2	7		1	1				12
第14号土坑				1		33		1	1				36
第15号土坑				2	2	32							36
第16号土坑					3	105		2	4	1			115
第17号土坑				1	1	8							10
第18号土坑	1		1	4	4	45		2	8				65
第19号土坑				1		3			1				5
第22号土坑		5		2	2	1		3					13
第23号土坑						3							3
第24号土坑									1				1
第26号土坑						2							2
第27号土坑		3											3
第28号土坑						23		4	3				30
第29号土坑				2	2	5							9
第31号土坑						1							1
第1号炉跡	1					6			1				8
第3号炉跡						3							3
第1号焼土跡		1		3	1	31		1	1				38
第3号焼土跡		1		4	1	170		3	11				190
第5号焼土跡				2	1	42							45
第6号焼土跡				4		10							14
第7号焼土跡				10	1	75		1					87
第1号埋設土器				96						2			98
第2号埋設土器				1		4							5
第3号埋設土器				1	3	35				4			43
第4号埋設土器				3		18				2			23
第5号埋設土器				1	1	33		1					36
ピット1				16	24	66				3	1		110
ピット2						14							14
第1号溝跡			2	16		341		1	11	11			382
沢跡1			6	50	171	6,587	18		22	130	6		6,990
土手1	ベルト盛土	3		4		6		1		2			16
	ベルト盛土下					7				3			10
土手2	盛土					16		8					24
	1T盛土					8				3			11
第1号竪穴遺構			1	1	1	35		3	2				43
第3号竪穴遺構				12	16	342		4	6				380
小計	7	24	14	272	267	9,203	18	10	89	291	8		10,203

A
区
①

第2表 出土遺物数量一覧(2)

出土地点		縄文土器						弥生土器	陶磁器	石器・石製品	礫	土製品	銭貨	合計
		早期	前期	中期	後期	晩期	粗製等							
遺物包含層		39	75	77	501	424	15,369		9					16,494
A区 ①	攪乱		1				15			2	1			19
	土手1西側													
	土手1東側				2	2	141			3	2			150
	調査区				3		12				1			16
	表土		1	3	3	3	173			1	6			190
	土手1西側				3	1			16					20
	土手1東側					1	42				1			44
	土手1西口								2				1	3
	土手1北側						26		1					27
	土手2				1	2	35							38
	土手2西区				2				30					32
	土手2中区					1	19							20
	土手2東区			1	2		57				6			66
	調査区				1	3	48				2			54
	1T	土手2	1			1	13							15
	2T	土手2					1							1
	3T	土手1		1	1	5	4	102				5		118
	4T	土手3						19						19
	10T	土手3									1			1
		調査区						10						10
	排土	1	1	1	9	16	615			5	5		653	
A区 ②	検出面		6	1			6		1	1	1		16	
	攪乱		1				1			1			4	
B区	表土						19		1				20	
	調査区						5		23				28	
合計(破片数)		48	110	98	805	724	25,931	18	93	103	321	8	2	28,261
比率(%)		0.17	0.39	0.35	2.85	2.56	91.76	0.06	0.33	0.36	1.14	0.03	0.01	100.01

本発掘調査において記録した土層断面図や詳細図等の図面記録(縮尺10分の1・20分の1)は42枚を数え、平面図のデジタルデータ一式を含めて92点となる。

遺構等を記録した写真(35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、4×5判モノクロフィルム)は、デジタルカメラを使用して撮影した画像データを含め2,444枚を数える。

出土品の整理のうち、基礎的な作業である遺物の洗浄・乾燥、選別、注記(ネーミング)及び図面記録類補修等の調査記録類の整理や遺構全体図等の製図作業の一部も平成20年度の現地での発掘調査と並行して、南相馬市教育委員会の指導のもと、財団法人いわき市教育文化事業団の発掘調査担当調査員の指示により実施した。これらの作業には狭川麻子、松本経子、渡部定子、牛渡由紀子があたった。

本格的な整理・報告書作成作業は、「埋蔵文化財(野馬土手・原町西町遺跡)整理調査業務」として財団法人いわき市教育文化事業団が南相馬市から委託され、平成21年7月から平成22年2月までの期間により江川逸生の指示により実施された。

記録類の整理のうち、遺構基礎データの整理作業には、松本紀子・宮崎勝代・吉田貴子があ

たり、遺構の規模計測やデータの入力作業にあたった。

出土品の整理のうち接合・復元作業には松本・宮崎・吉田・小泉恵美・高原侑子があたった。

報告書作成のうち出土品の実測・製図（トレース）作業には松本・宮崎・吉野光江・川名ちひろ・酒井あゆみ・生田目実根子・渡部久美子、採拓作業には川名・酒井・生田目・渡部・五十嵐光枝・小野川美智子・木村千代子・高木文子・長瀬久恵・古川美岐・道内博子があたった。

出土品の版下作成（版組）作業には、江川及び現地での発掘調査に携わった木幡成雄の指示のもと松本・宮崎・吉野・川名・酒井・生田目・渡部があたった。また遺構の製図作業は有限会社アプトに委託し、コンピュータトレース及び編集作業を実施した。

報告書に掲載する出土品の写真撮影は6×7判モノクロフィルム及び35mmモノクロフィルムを使用して江川が撮影した。

また、土坑および焼土跡内から採取した炭化物については、株式会社加速器分析研究所に放射性炭素（¹⁴C）年代測定（AMS法）及び樹種同定を実施した。

調査成果検討（分析・考察）及び文章作成作業には、発掘調査の担当職員である江川・木幡・末永成清・吉田生哉が分担して実施した。最終的な割付（編集・構成）作業は江川が行った。

第2章 遺構各説

平成20年度における野馬土手（原町区西町地区）・原町西町遺跡の本発掘調査は、平成20年8月4日から開始し、平成20年12月2日までの約4箇月間実施された。この発掘調査により竪穴住居跡2棟、土坑31基、炉跡3箇所、焼土跡8箇所、埋設土器4基、ピット10個（ピット1～10）、溝跡1条、沢跡1箇所、野馬土手を含む土手3条、竪穴遺構4基、遺物包含層1箇所が検出され、本章ではこれらの遺構・遺物について詳述する。

第1節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2棟検出された。いずれもA区①調査区の北側付近、北西方向に傾斜する沢状地形の縁辺から検出された。第1号竪穴住居跡の平面形態はやや楕円形状となる。第2号竪穴住居跡は造り替えられたと推測され、鶏卵状の楕円形を呈する。2住床面から検出された炉跡は石組部と前庭部からなる複式炉の形態をとる。

第1号竪穴住居跡（第12図）

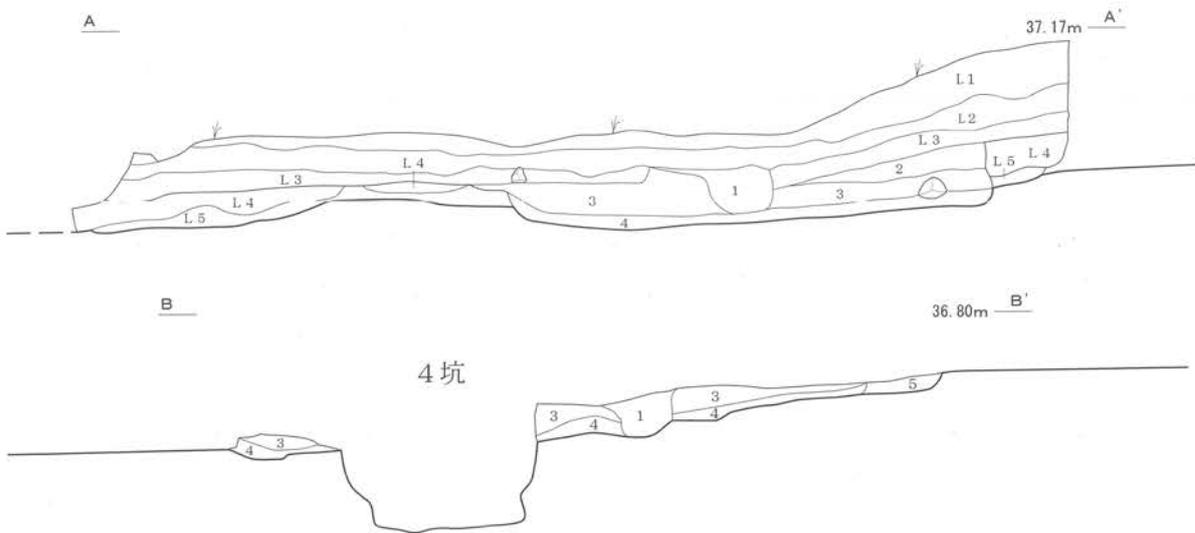
遺構 第1号竪穴住居跡は、調査範囲のA区①の北端から検出された。5mほど西側に第2号竪穴住居跡がある。平面形態はやや楕円形を呈し、長軸3.32m、短軸3.08mを測る。床面は平坦で、住居跡としての踏みしまりのためかやや硬化面が認められる。床面標高は、中央部で36.12mである。床面から柱穴・周溝・炉跡・土坑など本竪穴住居跡に伴う遺構は確認されなかった。第14号土坑やピット1・ピット2は、確認面や遺構内覆土の比較・観察からも本住居跡には伴わない遺構と判断される。壁高は東壁で7cm、西壁で6cm、南壁で8cm、北壁で3cmを測るが、土層断面（A-A'）による壁高の観察では、南側では35cm、東側では20cmを測ることができる。壁の立ち上がりは、南側や東側では垂直気味となるが西・北側は緩やかな立ち上がりとなる。

本住居跡の確認面は、基本層序のL4層上面であり、L4層・5層および地山土層を掘込んで検出されている。堆積土は、2層から4層までの3層に区画できる。いずれの層も、粒状の炭化物が多量に混入しているのが特徴である。

遺物 縄文土器518点や石器・礫79点など合わせて597点出土している。覆土あるいは上面からの出土で、住居跡に伴うものはない。縄文土器には第40図2・3、第46図16・20・22、第47図4、第49図6・22、第50図3、第53図5、第54図19、第57図6・10、第64図1、第70図14・17がある。第40図3は、底部に穿孔のある土器で埋設土器の可能性がある。出土土器の時期は縄文時代後期中葉から縄文時代晩期後葉にかけてのものである。石器は、住居跡上面から石鏃2点（第72図3・5）や石包丁1点（第73図3）、敲石1点（第74図2）が出土している。石鏃はいずれも赤チャート製で有茎鏃である。石鏃・石斧とも弥生時代に見られる石器である。

第1節 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡



第1号竪穴住居跡土層注記 (A-A'、B-B')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 4 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 5 暗オリーブ褐色土 (Hue2.5Y3/3) 粘性、しまりあり。地山の黄褐色土ブロックを含む。



第12図 第1号竪穴住居跡

本住居跡の時期は、住居跡上面から弥生時代の石器が出土しているが、弥生土器は1点も出土しておらず本竪穴住居跡を切っている第14号土坑が、縄文時代晩期に比定されることから、とりあえず覆土内出土土器の主体となる後期後葉の時期に比定しておく。

第2号竪穴住居跡（第13図・第14図）

遺構 第2号竪穴住居跡は、調査範囲のA区①の北側から検出された。5mほど東側に第1号竪穴住居跡がある。本住居跡は、周溝の検出状況から新・旧2時期に分けられる。周溝の組み合わせは、一番北東寄りに見られる周溝1と3番目に見られる周溝3が結節して旧住居跡の平面形態を形成し、周溝2と周溝4が新住居跡の平面形態を形作ると考えられる。改築による拡張や縮小も想定されるが、ここでは、精査の状況や周溝の残り具合等から、増・縮改築（建て替え）ではなく、位置をずらして新たに建てたものと考えておきたい。いわゆる床面に段差を有して検出される「重複」である。この場合の平面形態は、どちらも同じような鶏卵形というかやや下膨らみの楕円形を呈する。規模は旧竪穴住居跡では長軸4.80m、短軸3.90m、新住居跡では長軸4.60m、短軸4.00mとほぼ同じ数値を示す。同様形態で同様規模の竪穴住居跡が、全体的に主軸方向を基線に1mほど南東側にずれた状態で検出されていることとなる。

以下、最終段階の住居跡である新住居跡を中心に観察を加えることとする。

住居跡の床面はほぼ平坦で、住居跡としての踏みしまりによる硬化面が認められる。床面標高は、中央部で36.627mである。壁高は東壁で3cm、西壁で9cm、南壁で9cm、北壁で2cmを測る。全体的に確認面である地山面からの掘り込みは浅く、沢部側となる北側では僅かに凹むのみで片流れ気味となる。壁の立ち上がりは、南側や東・西側では垂直気味となるが北側では不明である。

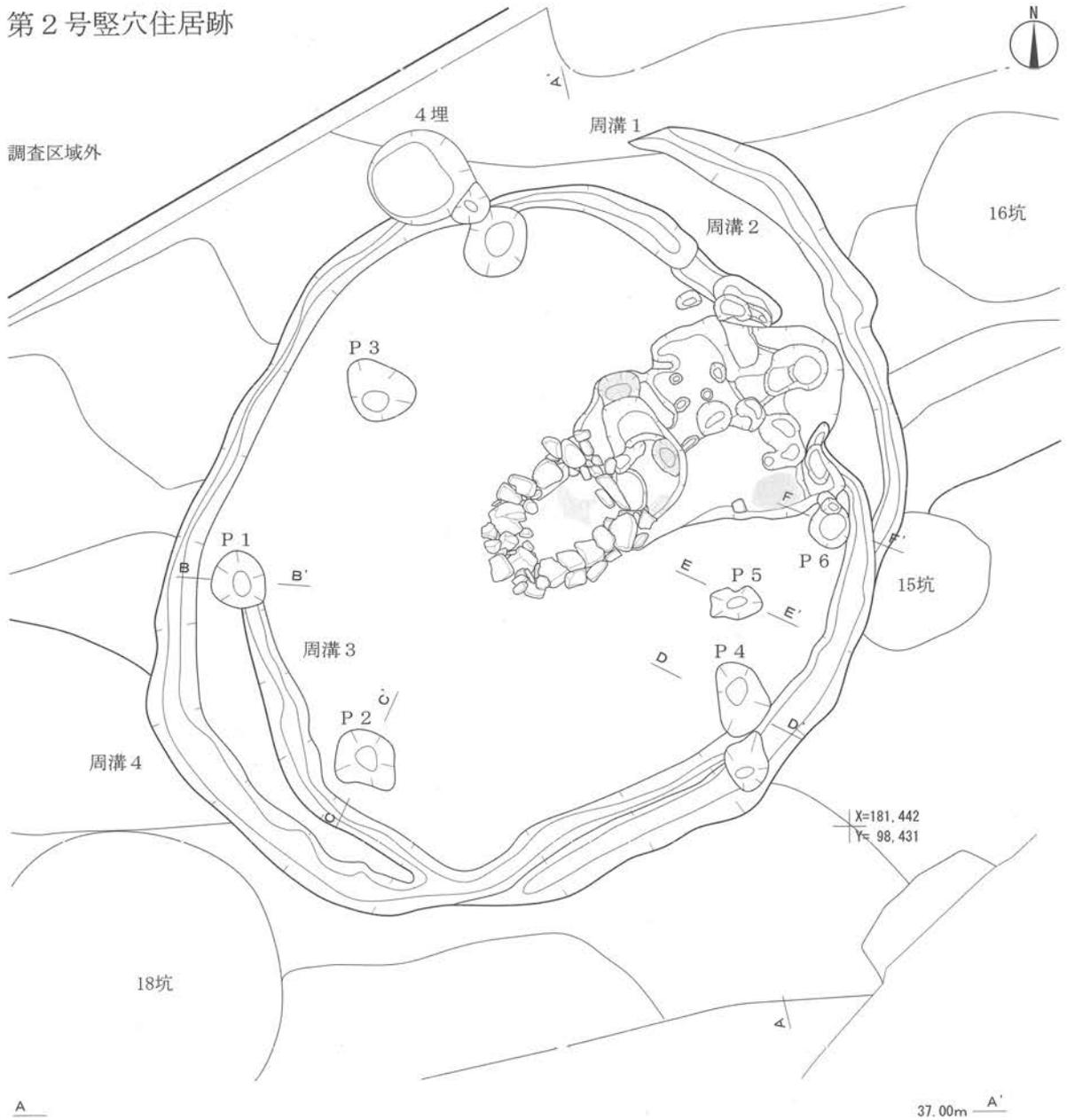
住居跡の確認面は、地山面であり地山土層を掘込んで確認されている。住居跡内の堆積土は、炉跡内の堆積土を含めて11層に区画できる。いずれの層にも地山である褐色土粒やブロックを混入している。また、炉内の堆積土には粒状の炭化物や焼土を混入している。柱穴は、床面に7つ検出されており、本竪穴住居跡に伴うと思われる柱穴はP1～P4・P6・P7である。不定円形で直径20cmから30cm内外を測る。

炉跡は複式炉が1基確認されている。石組部と前庭部からなる。炉跡は、竪穴住居跡の主軸線に沿って布設されている。また、検出された複式炉は、一定の規格性をもって構築されていることが観察される。特に、石組部の石組みは、目安となる石（第14図石囲いの石1）を基準として左右対称に配石し（石9と石32・33、11・13と39・40、16と42など）、かつ、配石の高さについても丁張りして高さを捕り（8の頂部-17の頂部）、直線的に配石施工していることが窺える。複式炉構築における配石の対称性と、配石高の直線性の意図が端的に表れている極めて良好な資料であるといえる。

遺物 縄文土器が26点出土しており、このうち炉跡からの出土は20点である。出土土器の時期は、斜縄文や無文の土器の小片であり縄文時代中期～後期の土器片と考えられる。

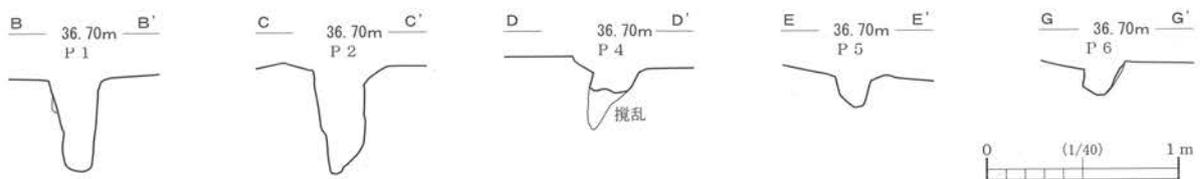
本住居跡の時期は、土器型式の明確に分かる土器はないが、覆土内から出土している土器や複式炉の形態等から、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

第2号竪穴住居跡



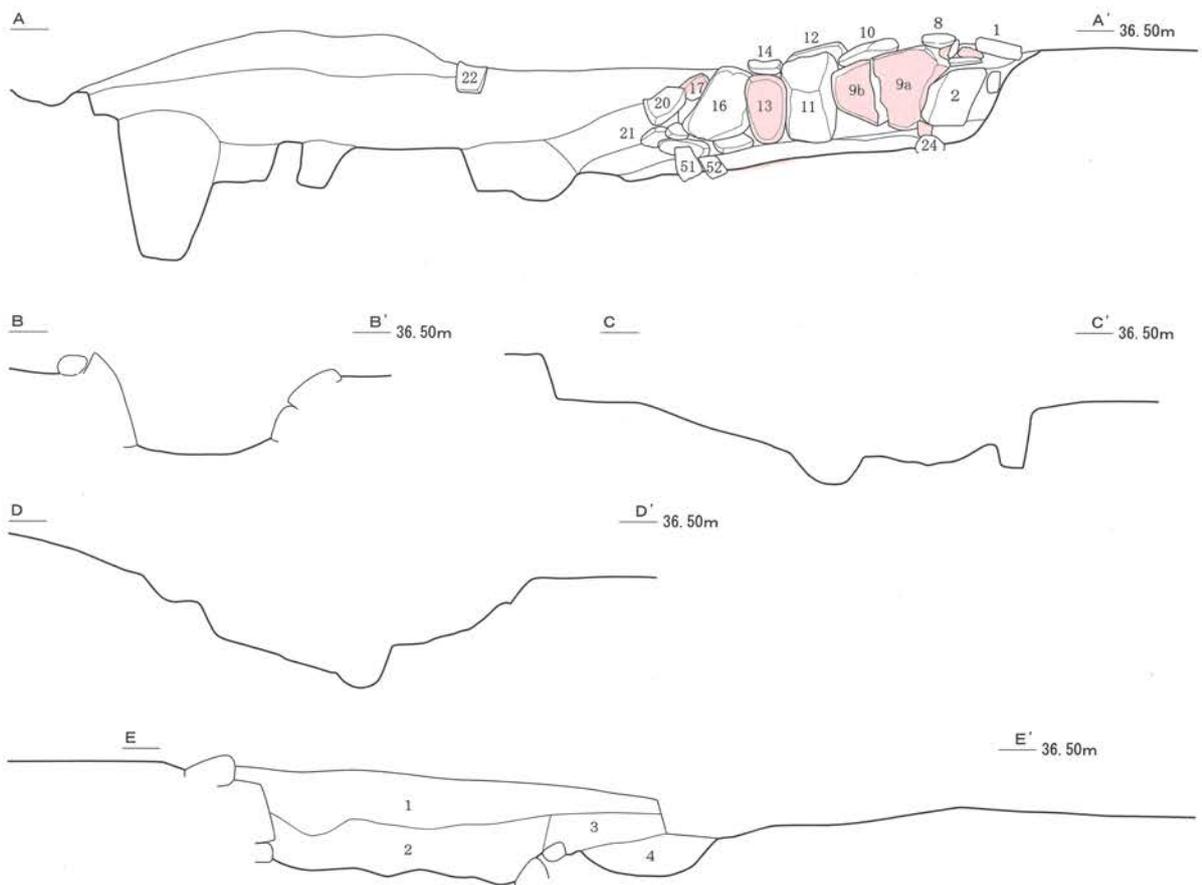
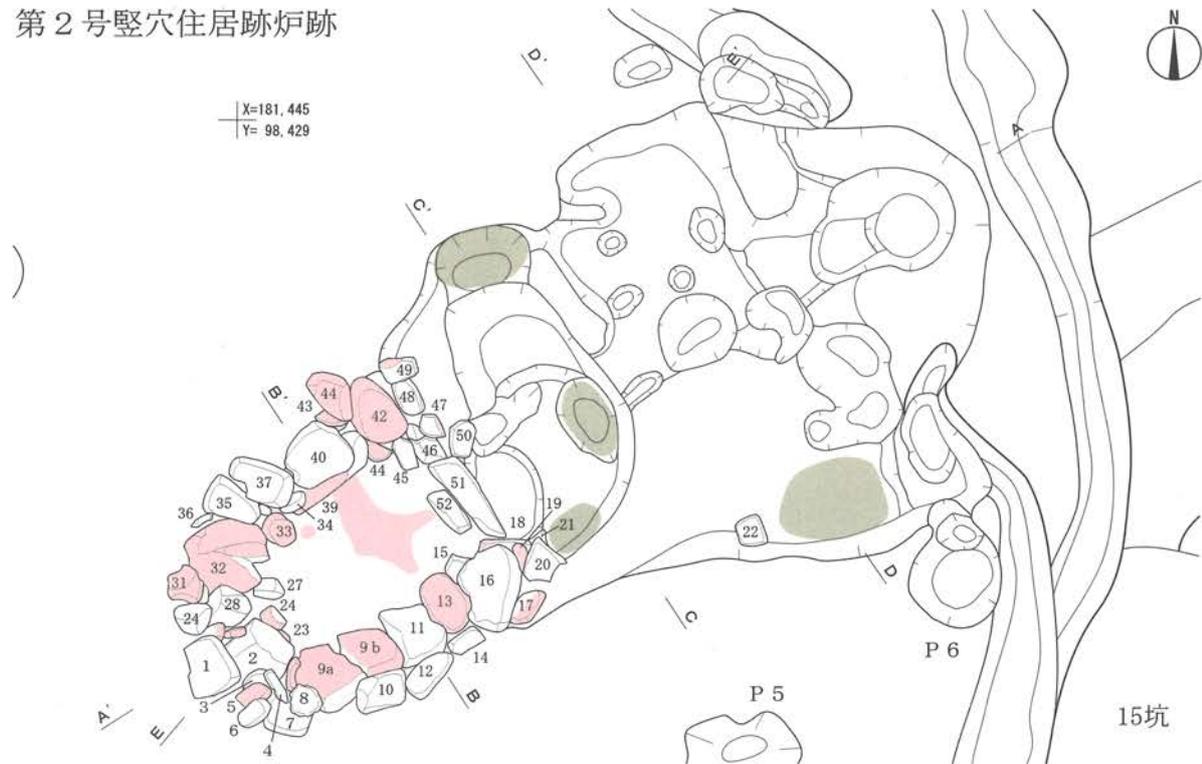
第2号竪穴住居跡土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 2住覆土。粘性あり、しまりなし。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 2住覆土。粘性あり、しまりなし。粒状褐色土ブロックを多量に含む。
- 3 褐色土 (Hue10YR4/4) 2住覆土。粘性あり、しまりなし。粒状褐色土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 2住覆土。粘性あり、しまりなし。褐色土ブロックを多量に含む。
- 5 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 2住覆土。壁の崩落層。粘性あり、しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを含む。
- 6 褐色土 (Hue10YR4/4) 2住床面直上層。粘性あり、しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを含む。
- 7 褐色土 (Hue10YR4/4) 2住掘り方覆土。粘性あり、しまりなし。黒褐色土ブロックを含む。
- 8 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 炉跡覆土。粘性あり、しまりなし。
- 9 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 炉跡覆土。粘性あり、しまりなし。炭化物混入。
- 10 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 炉跡覆土。粘性あり、しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを含む。
- 11 褐色土 (Hue10YR4/4) 炉跡覆土。粘性あり、しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを含む。



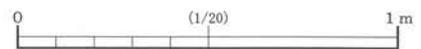
第13図 第2号竪穴住居跡 (1)

第2号竖穴住居跡炉跡



第2号竖穴住居跡土層注記 (E-E')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 地山の黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物・焼土混入。



第14図 第2号竖穴住居跡 (2)

第3表 野馬土手・原町西町遺跡 竪穴住居跡一覧

単位：m

遺構	検出地点	平面形態	長軸	短軸	底面標高	壁 高 (cm)				長軸方向	重複関係	備 考
						東壁	西壁	南壁	北壁			
1住	A区① L 4 上面	楕円形	3.32	3.08	36.146	7	6	8	3	N20° W	4坑	
2住	A区① L 5 上面	楕円形	新4.60 旧4.80	新4.00 旧3.90	36.627	3	9	9	2	N58° E	15坑・4埋	

第2節 土 坑

土坑は31基が検出された。A区①より23基、A区②より8基である。A区①から検出された土坑は、遺物包含層であるL 2～5層の精査中に検出されたものが多い。平面形態には円形状、楕円形状、不整形のものがある。楕円形状のものうち、長軸方向が等高線にほぼ直交し、間隔も約20mで検出されている土坑は落とし穴と推測される。

円形状のものは、A区①からは2基（12・18坑）、A区②からは3基（6・9・11坑）検出されている。検出面から底面までの深度が浅いが縄文時代の貯蔵穴と推測される。そのほかの土坑は、底面が火熱により赤変しているものもあるが、性格や機能した時期が不明なものである。

第1号土坑（第15図）

A区①の第2号土坑の南側から検出された。本土坑が検出されたA区①調査区西側は、調査以前には宅地として利用されており、植栽痕や給・排水管敷設による近・現代の攪乱や削平が顕著に認められた。そのため本土坑の検出は地山の黄褐色土層上面からである。

平面形態は楕円形を呈する。底面は狭く溝状となり、底面中央から南北両端部に傾斜する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、検出面付近では、崩落または後世の攪乱によりやや外傾する。自然堆積の状況を示す覆土は23層からなる。壁の崩落によると推測される地山の黄褐色土ブロックを含む。遺物は覆土中より縄文土器1点が出土している。

本土坑はその形態等から縄文時代に機能した落とし穴と推測される。

第2号土坑（第15図）

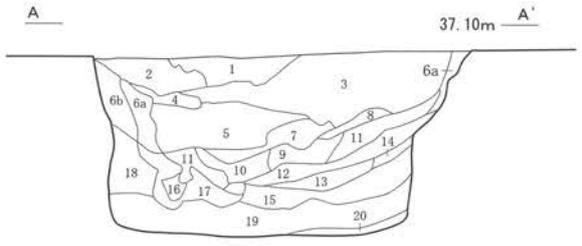
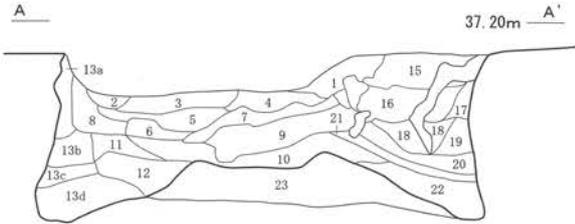
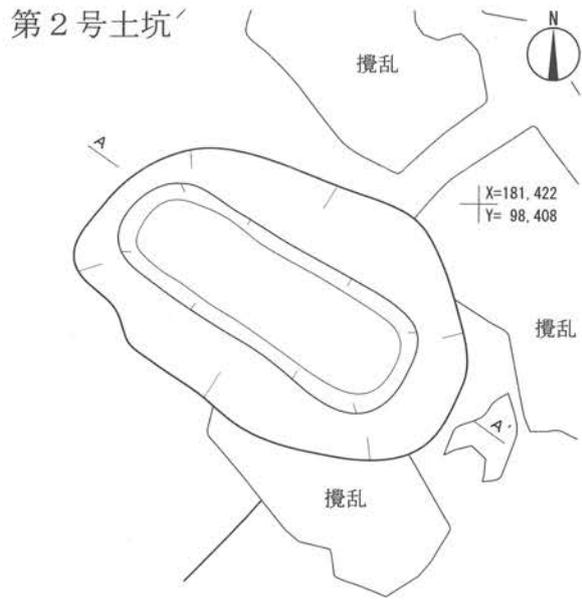
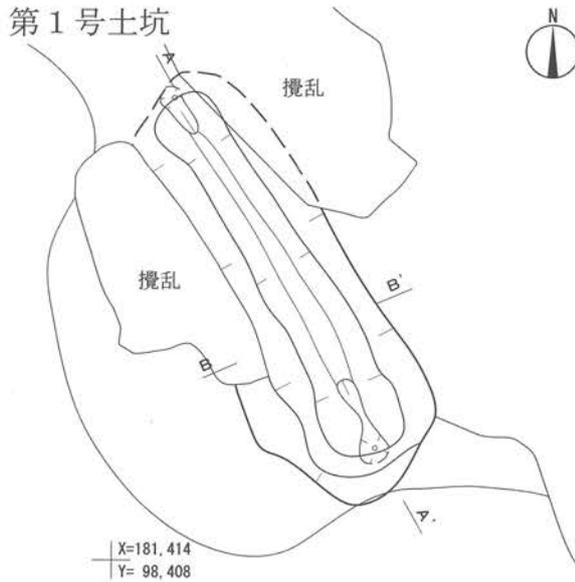
A区①から検出された。第1号土坑の北側、第3号土坑の南側に位置する。本土坑の検出も地山の黄褐色土層からの検出である。

平面形態は楕円形状を呈する。底面は平坦で、長方形を呈する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中～上位で外傾する。覆土は20層からなり、壁の崩落によると推測される地山の黄褐色土ブロック及び粒状の炭化物を含むことから自然堆積の状況を示すと判断される。遺物は覆土中より縄文時代前期に比定される縄文土器など25点が出土している（第38図7・8）。

本土坑はその形態等から縄文時代に機能した落とし穴と推測される。

第3号土坑（第16図）

A区①から検出された。第2号土坑の北側に位置する。本土坑の検出も地山の黄褐色土層からの検出である。後世の攪乱により平面形態の詳細は不明であるがほぼ円形状を呈すると推測される。底面は凹凸があり、火熱により赤変する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土

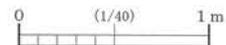


第1号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 黄褐色土、粒状白色砂ブロックをわずかに含む。粒状炭化物混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/3) 黄褐色土ブロックを20%含む。粒状炭化物混入。
- 3 黄褐色土 (Hue10YR3/2) 黄褐色土ブロックを30%含む。粒状炭化物混入。
- 4 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性、しまりあり。黄褐色、黒褐色土ブロックを30%含む。粒状炭化物混入。
- 5 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを20%含む。粒状炭化物混入。
- 6 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを20%、黒褐色土ブロックをわずかに含む。
- 7 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性あり、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多く、黒褐色土ブロックをわずかに含む。
- 8 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 9 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性あり、しまり弱い。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。黒褐色土ブロックをわずかに含む。
- 10 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまり弱い。暗褐色土ブロックを含む。
- 11 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 12 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 13a 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 13b 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 13c 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 13d 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性あり、しまり弱い。黒褐色土ブロックを10%含む。
- 14 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性あり、しまりなし。壁の崩落層。
- 15 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 黒褐色、黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。
- 16 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 黒褐色、黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。
- 17 褐色土 (Hue10YR4/4) 粘性、しまりあり。地山の黄褐色土ブロックを多量に、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 18 褐色土 (Hue10YR4/4) 粘性あり、しまり弱い。地山の黄褐色土ブロックを含む。黒褐色土ブロックをわずかに含む。
- 19 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性あり、しまり弱い。壁の崩落層。
- 20 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性あり、しまり弱い。壁の崩落層。
- 21 褐色土 (Hue10YR4/4) 粘性あり、しまり弱い。地山の黄褐色土ブロックを含む。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 22 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまり弱い。暗褐色土ブロックを含む。
- 23 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性、しまりあり。地山。

第2号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粒状黄褐色土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粒状褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 3 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 黄褐色、黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性、しまり弱い。粒状黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 6 a 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性あり、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物混入。
- 6 b 黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性強い、しまり弱い。黄褐色、黒褐色土ブロックを含む。
- 7 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性あり、しまり弱い。黒色、黄褐色土ブロックを含む。
- 8 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 9 黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性あり、しまり弱い。黒褐色土ブロックを含む。
- 10 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性あり、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 11 褐色土 (Hue10YR4/4) 壁の崩落層。粘性強い、しまり弱い。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 12 黄褐色土 (Hue10YR5/4) 壁の崩落層。粘性強い、しまり弱い。黄褐色土ブロックを含む。
- 13 黄褐色土 (Hue10YR5/4) 壁の崩落層。粘性強い、しまり弱い。黄褐色土ブロックを含む。
- 14 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまり弱い。黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 15 黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性あり、しまりなし。黄褐色土ブロックを含む。
- 16 黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性強い、しまり弱い。黄褐色土ブロックを含む。
- 17 黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性強い、しまり弱い。黄褐色土ブロックを含む。
- 18 黄褐色土 (Hue10YR5/8) 壁の崩落層。粘性強い、しまりなし。
- 19 黄褐色土 (Hue10YR5/8) 壁の崩落層。粘性強い、しまりなし。
- 20 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性強く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを多量に、粒状黒褐色土を少量含む。粒状炭化物混入。



第15図 第1・2号土坑

は5層（第1～5層）からなり、地山の黄褐色土ブロック及び粒状の炭化物を含む。

遺物の出土はなく、機能した時期や性格は不明である。

第4号土坑（第16図）

A区①から検出された。第1号竪穴住居跡と新旧関係にあるが、本土坑が新しい。検出面では火熱により赤変した1住覆土上面に礫および縄文土器（第41図3）が散在した状態で検出されている。平面形態はほぼ円形を呈し、底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は9層からなり、壁の崩落による黄褐色土ブロックの混入が少ないことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

また検出面及び覆土中からは、縄文時代晩期に比定される縄文土器8点、縄文・条痕文・櫛描文が施文された土器及び無文土器などの粗製土器が、破片数で484点出土している。

本土坑は、出土遺物及び新旧関係にある第1号竪穴住居跡の時期から、縄文時代晩期中葉に機能していたと推測される。また検出面で礫が散布した状態で検出された状況が、第3号炉跡と第29号土坑の関係と近似するといえよう。したがって本土坑は石組炉にともなう掘り方と推測される。なお覆土中から出土した炭化種実はクリの子葉に最も近似する。

第5号土坑（第16図）

A区②から検出され、第6号土坑の北側に位置する。本土坑が検出されたA区②は、以前には宅地として利用されており、植栽痕や給・排水管敷設による近・現代の攪乱や削平が顕著に認められたため、本土坑の検出も地山の黄褐色土層からの検出である。

平面形態はほぼ楕円形を呈する。底面は平坦で、長方形を呈する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位からは崩落により外傾する。覆土は10層からなる。壁の崩落と推測される地山の黄褐色土ブロック及び粒状の炭化物を含むことから自然堆積と判断される。

本土坑から出土した遺物はないが、その形態から縄文時代に機能した落とし穴と推測される。

第6号土坑（第17図）

A区②から検出され、第5号土坑の南側に位置する。本土坑の検出も地山の黄褐色土層からの検出である。平面形態はほぼ円形状を呈する。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は7層からなり、ほぼ水平に堆積することから、人為的に埋め戻された可能性がある。

本土坑からは胴部外面に斜縄文が施された縄文土器が2点出土しているが、本土坑の機能した時期や性格は不明である。

第7号土坑（第17図）

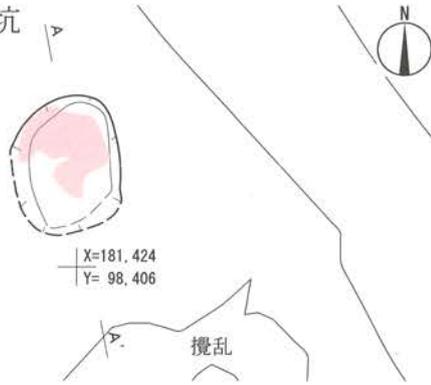
A区②から検出された。第8号土坑北東側に位置する。本土坑周辺は近・現代の攪乱が顕著であり、平面形態や覆土等の詳細は不明であるが、ほぼ楕円形を呈すると推測される。

本土坑からの遺物の出土はなく、本土坑の機能した時期や性格は不明である。しかし第8号土坑との位置関係から縄文時代に比定される落とし穴の可能性が高い。

第8号土坑（第17図）

A区②から検出された。第9号土坑の北東側、第7号土坑の南西側に位置する。地山の黄褐

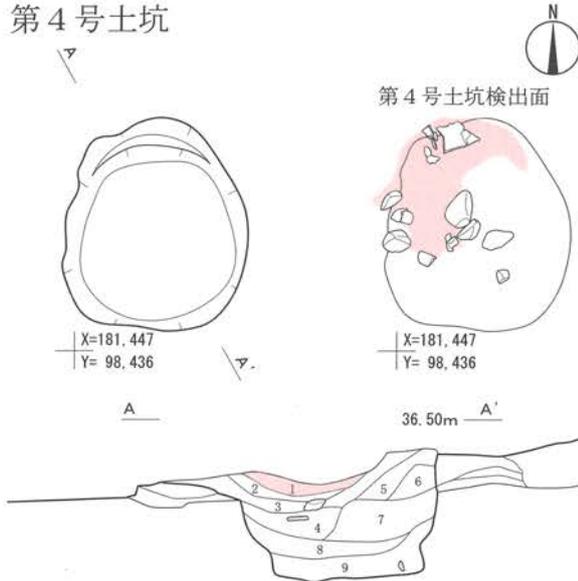
第3号土坑



第3号土坑土層注記 (A-A')

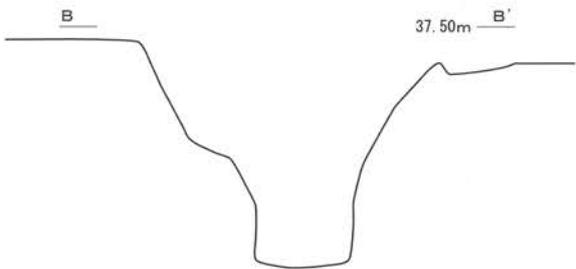
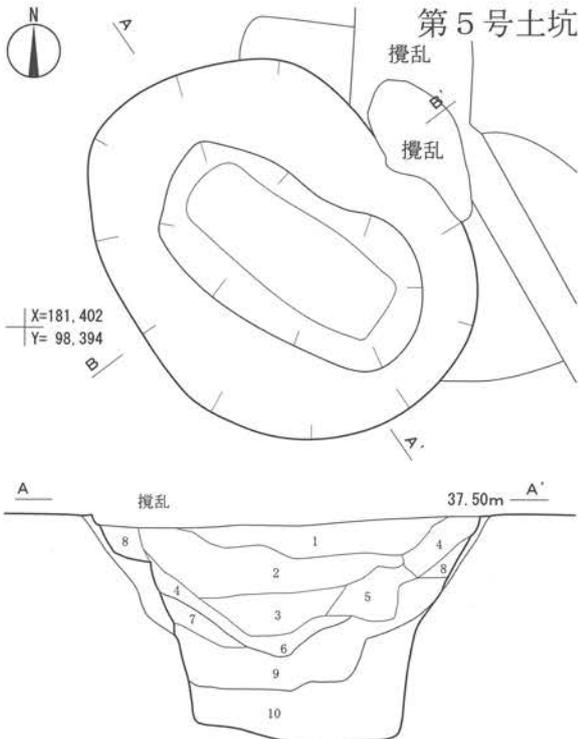
- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性弱く、しまりあり。黒褐色土ブロックを少量含む。粒状焼土を少量、粒状炭化物をわずかに混入する。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性あり、しまり弱い。粒状焼土を多量に混入する。
- 3 褐色土 (Hue10YR4/4) 粘性あり、しまり弱い。地山の黄褐色土ブロックを含む。
- 4 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性あり、しまり弱い。地山の黄褐色土ブロックを含む。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 5 褐色土 (Hue10YR4/4) 粘性、しまりあり。地山の黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物を混入する。

第4号土坑



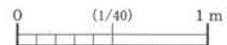
第4号土坑土層注記 (A-A')

- 1 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3) 酸化面。粘性弱く、しまりあり。黒色土ブロックを多量に含む。粒状焼土を多量に混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 3 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物混入。
- 6 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 7 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 粘性、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物混入。
- 8 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 9 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物・焼土混入。



第5号土坑土層注記 (A-A')

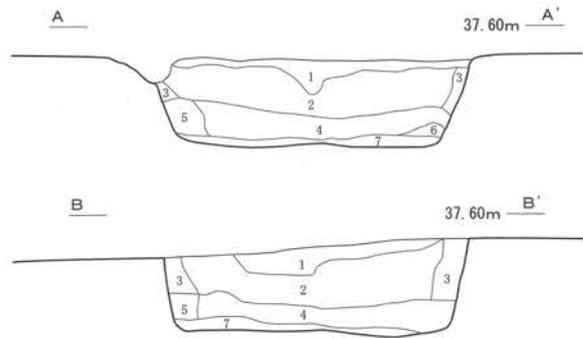
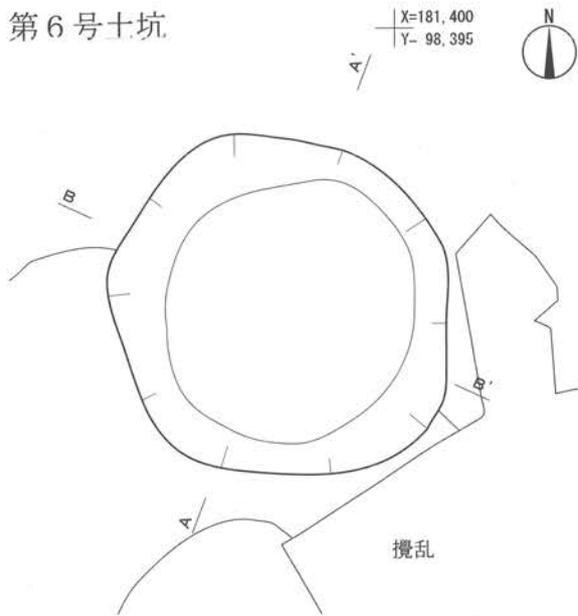
- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/2) しまりあり。褐色土ブロックを含む。黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりあり。褐色、黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 4 褐色土 (Hue10YR4/6) しまりあり。黄褐色、黒褐色土ブロックを含む。
- 5 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりあり。黄褐色、黒褐色土ブロックを含む。
- 6 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/8) 粘性強い、しまり弱い。黒褐色土ブロックをわずかに含む。
- 7 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性強い、しまり弱い。黄褐色土ブロックを含む。
- 8 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性強く、しまりあり。黒褐色土ブロックをわずかに含む。
- 9 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性強く、しまりあり。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 10 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性強く、しまりあり。



第16図 第3～5号土坑

第2節 土坑

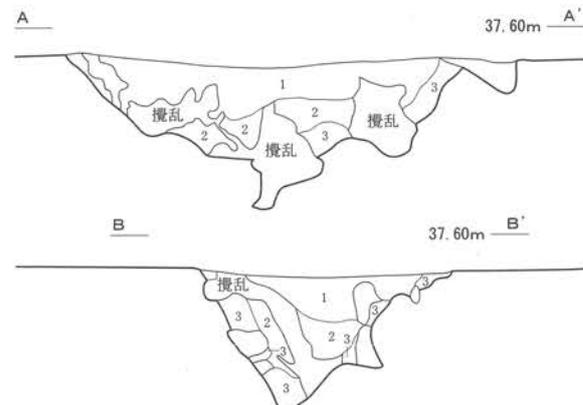
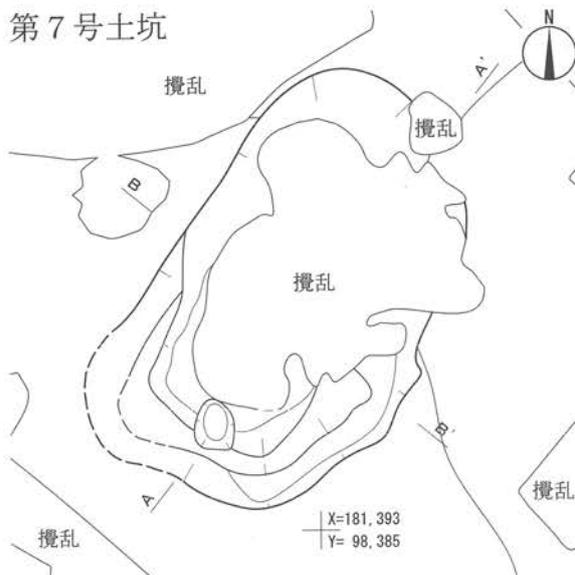
第6号土坑



第6号土坑土層注記 (A-A', B-B')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。褐色土ブロックを含む。
- 2 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりなし。暗褐色、褐色土ブロックを含む。
- 3 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまりあり。暗褐色土ブロックをわずかに含む。
- 4 褐色土 (Hue10YR4/6) しまりあり。暗褐色、黄褐色土ブロックを含む。
- 5 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまりあり。暗褐色土ブロックを含む。
- 6 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。暗褐色土ブロックを多く含む。
- 7 褐色土 (Hue10YR4/6) しまりなし。暗褐色、黄褐色、黒褐色土ブロックを含む。

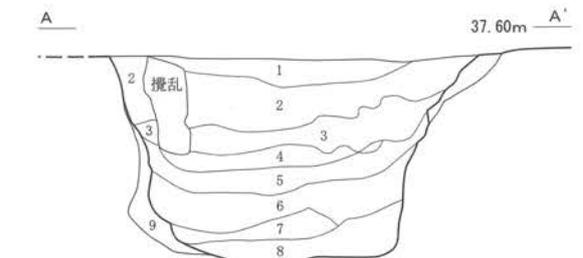
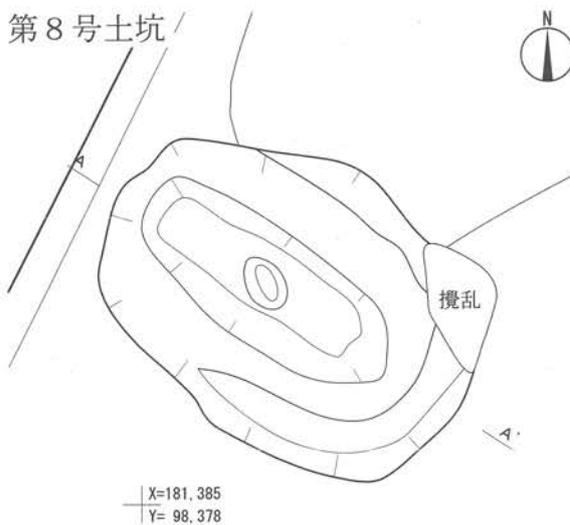
第7号土坑



第7号土坑土層注記 (A-A', B-B')

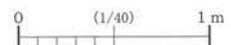
- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。褐色土ブロックを含む。粒状黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物を多く混入。
- 3 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) 粘性、しまりあり。黒褐色、黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。

第8号土坑



第8号土坑土層注記 (A-A')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 黒褐色、褐色土ブロック、粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 黄褐色土ブロックを多く含む。粒状炭化物混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 褐色土ブロックを含む。粒状黄褐色土ブロックを多く含む。粒状炭化物混入。
- 4 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 黄褐色土ブロックを多く含む。
- 5 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 褐色土ブロックを多く含む。
- 6 褐色土 (Hue10YR4/4) 黄褐色土ブロックを少量含む。
- 7 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 褐色土ブロックを多く含む。
- 8 褐色土 (Hue10YR4/4) 黄褐色土ブロックを少量含む。
- 9 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 地山。



第17図 第6～8号土坑

色土層上面からの検出である。

平面形態はほぼ楕円形状を呈する。長方形を呈する平坦な底面からは小ピット1個が確認された。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位より上は崩落により外傾する。覆土は8層からなり、壁の崩落によると推測される地山の黄褐色土ブロックを多く含むことから自然堆積と判断される。

本土坑からの出土遺物はないが、その形態等から縄文時代に機能した落とし穴と推測される。

第9号土坑 (第18図)

A区②から検出された不整形な円形状を呈する浅い土坑である。地山の黄褐色土層上面から検出され、第8号土坑の南西、第10号土坑の北東に位置する。覆土は5層からなるが、後世の削平により底面のみが遺存しているものと判断される。

本土坑からの出土遺物はないため、性格や機能した時期は不明である。

第10号土坑 (第18図)

A区②から検出された。第9号土坑の南西に位置する。本土坑の検出も地山の黄褐色土層からの検出である。

平面形態はほぼ楕円形状を呈する。底面は平坦で、長方形を呈する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位から上は外傾して立ち上がる。覆土は15層からなるが、壁の崩落と推測される地山の黄褐色土ブロックを多く含むことから自然堆積の状況を示していると判断される。

本土坑からの出土遺物はないが、その形態等から縄文時代の落とし穴と推測される。

第11号土坑 (第18図)

A区②から検出された。地山の黄褐色土層上面から検出された。覆土は浅く2層からなる。本土坑からの出土遺物はないため、性格や機能した時期は不明である。

第12号土坑 (第19図)

A区①のほぼ中央付近から検出された円形状を呈する浅い土坑である。遺物包含層L3層もしくはL4層上面からの検出である。第20号・第23号土坑と新旧関係にあるが、いずれの土坑よりも本土坑が新しい。底面は平坦で、覆土は浅く8層からなる。壁は緩く外傾しながら立ち上がる。本土坑からは縄文時代早・前期及び晩期に比定される縄文土器片も出土したが、後期の土器片が比較的多く出土した(第40図1、第42図1・2・4、第49図27、第70図21)。

本土坑の機能した時期は縄文時代後期後葉と推測されるが、性格は不明である。

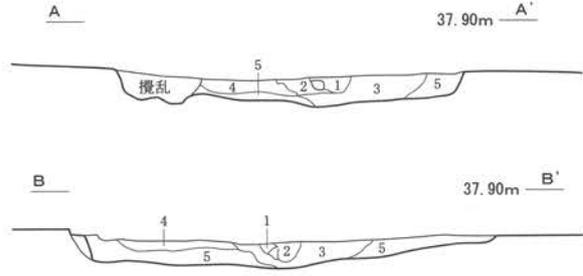
第13号土坑 (第19図)

A区①のほぼ中央付近から単独で検出された円形状を呈する浅い土坑である。遺物包含層L3層上面からの検出である。平坦な底面からは直径40cm、深さ30cmのピットが検出された。覆土は浅く3層からなる。壁は緩く外傾しながら立ち上がる。覆土中からは縄文時代後期及び晩期に比定される縄文土器片(第52図27)が出土したが、性格や機能した時期は不明である。

第14号土坑 (第19図)

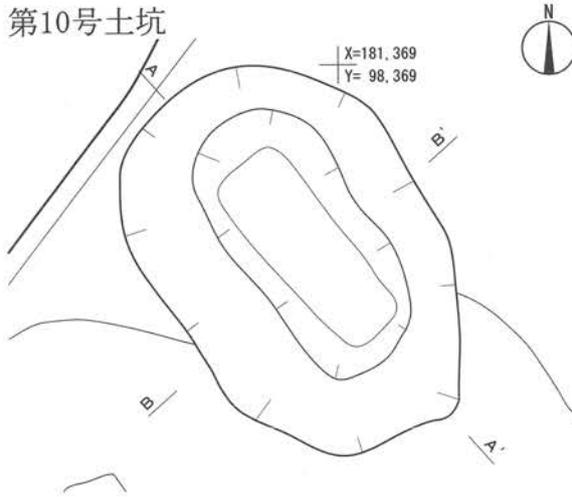
A区①の野馬土手である土手2積土下層の遺物包含層L3層上面から検出である。近代の第

第2節 土坑



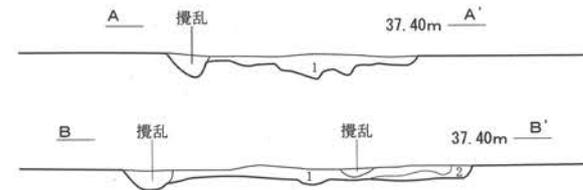
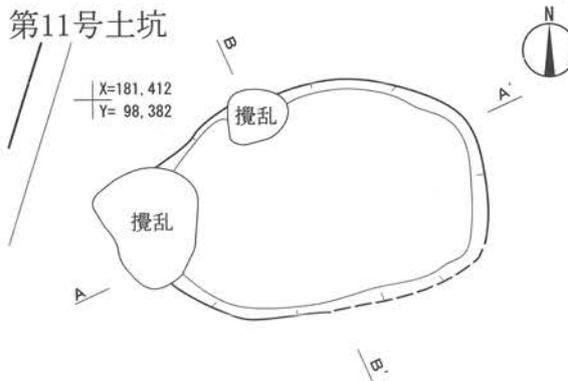
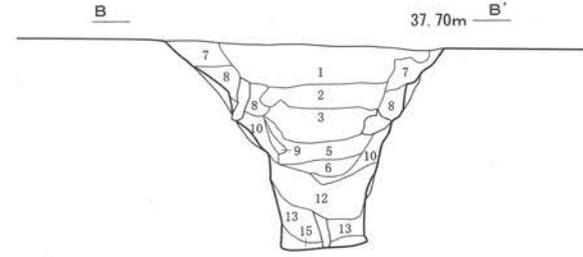
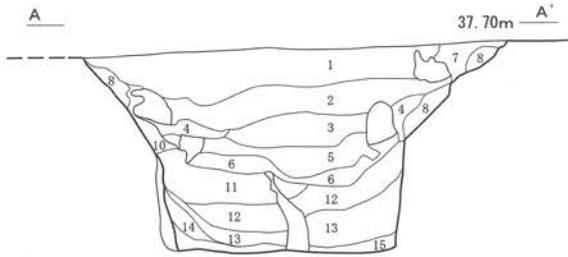
第9号土坑土層注記 (A-A', B-B')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。砂岩礫ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。
- 3 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりなし。暗褐色土、灰黄褐色粘土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 (Hue10YR4/3) しまりなし。黒褐色土ブロックを含む。
- 5 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまりなし。暗褐色土ブロックを含む。



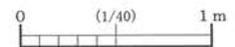
第10号土坑土層注記 (A-A', B-B')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。黒褐色土ブロックを含む。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR3/1) しまりあり。褐色土ブロック、炭化物混入。
- 4 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。黒褐色土ブロック、粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 6 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) 黄褐色土ブロックを多く含む。
- 7 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 8 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性弱く、しまりあり。黒褐色、黄褐色土ブロックを含む。
- 9 褐色土 (Hue10YR4/4) 粘性、しまりあり。
- 10 褐色土 (Hue10YR4/6) 粘性、しまりあり。
- 11 褐色土 (Hue10YR4/4) しまり弱い。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 12 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまり弱い。粒状炭化物混入。
- 13 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまり弱い。下位に粒状炭化物を多く混入。
- 14 褐色土 (Hue10YR4/4) しまり弱い。黄褐色土ブロックを含む。
- 15 黄褐色土 (Hue10YR5/3) しまりあり。粒状炭化物混入。



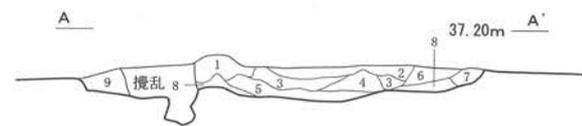
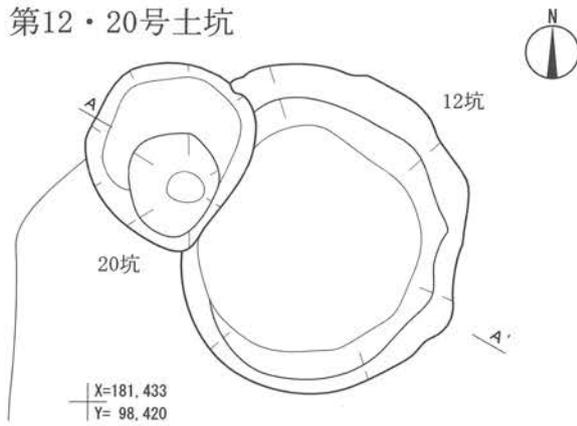
第11号土坑土層注記 (A-A', B-B')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/4) しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを含む。
- 2 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりなし。黒褐色土ブロックを含む。



第18図 第9～11号土坑

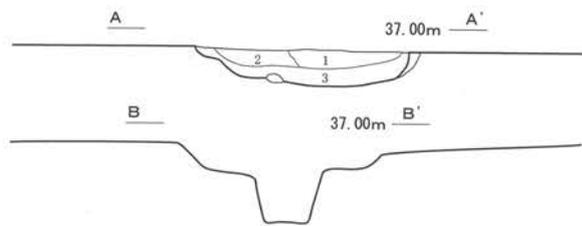
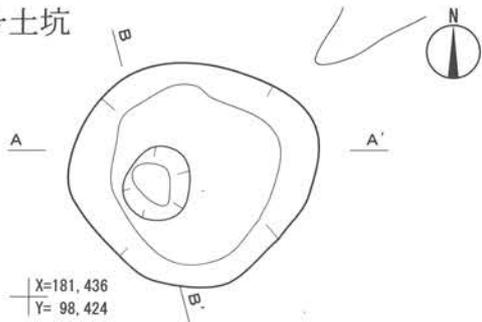
第12・20号土坑



第12・20号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 12坑覆土。しまりなし。褐色土ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 12坑覆土。しまりなし。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 12坑覆土。しまりなし。褐色土ブロックを含む。
- 4 黒色土 (Hue10YR2/1) 12坑覆土。しまりなし。
- 5 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 12坑覆土。しまりなし。褐色、黒褐色土ブロックを含む。
- 6 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 12坑覆土。粘性、しまりあり。
- 7 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 12坑覆土。粘性、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。
- 8 褐色土 (Hue10YR4/4) 12坑覆土。粘性、しまりあり。地山の黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 9 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 20坑覆土。粘性、しまりなし。

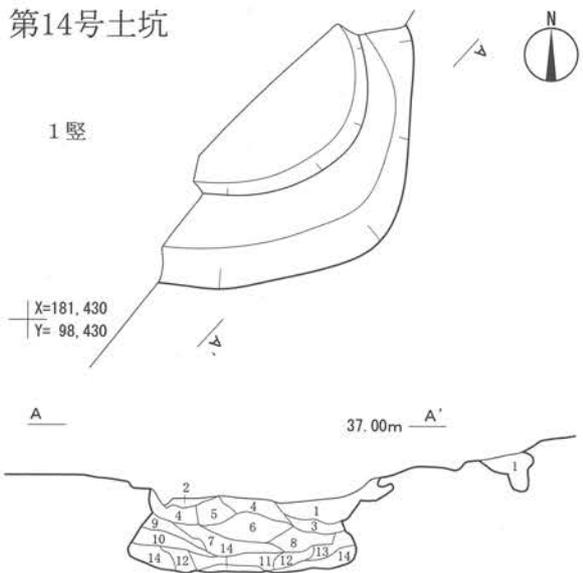
第13号土坑



第13号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりなし。炭化物混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。粒状褐色土ブロックをわずかに含む。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性あり、しまりなし。褐色土ブロックを多く含む。

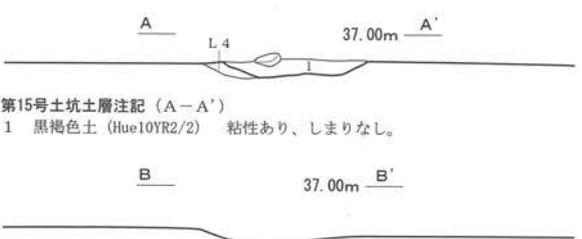
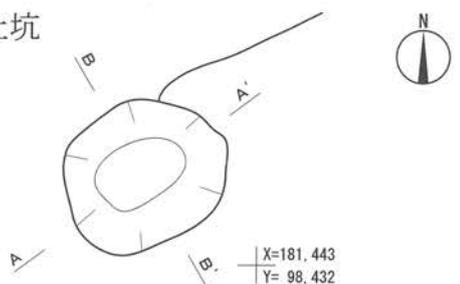
第14号土坑



第14号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。黒褐色、地山の明黄褐色土ブロックを多く含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性、しまり弱い。地山の粒状明黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 3 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。地山の明黄褐色土ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 4 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。地山の明黄褐色土ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 地山の粒状明黄褐色土ブロックを含む。
- 6 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 地山の明黄褐色、明灰黄褐色土ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 7 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。地山の明黄褐色土ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 8 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。黒褐色土、地山の明黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 9 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。黒褐色、地山の明黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 10 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。地山の明黄褐色土ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 11 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。地山の明黄褐色土ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 12 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘性、しまり弱い。地山の明黄褐色土ブロック、黒褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
- 13 明黄褐色土 (Hue2.5Y7/6) しまり弱い。黒褐色土ブロックを多く含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 14 明黄褐色土 (Hue2.5Y7/6) 粘性あり、しまり弱い。褐色土ブロックを少量含む。

第15号土坑



第15号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性あり、しまりなし。



第19図 第12~15・20号土坑

第2節 土坑

1号竪穴遺構により北半分が削平されており、詳細は不明であるが平面形態は円形状を呈し、断面形は「フラスコ状」を呈すると推測される。覆土は14層からなる。本土坑からは縄文時代後期に比定される縄文土器及び外面に斜縄文、櫛描文が施された粗製土器、無文土器等が出土している。本土坑は形態や出土遺物から縄文時代の貯蔵穴と推測される。

第15号土坑 (第19図)

A区①調査区北側の遺物包含層L4層上面から検出された円形状を呈する浅い土坑である。第2号竪穴住居跡と新旧関係にあり、本土坑が新しい。底面は平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上がる。

本土坑の覆土からは縄文時代晩期中葉に比定される浅鉢形土器(第56図6)等が出土しているが、機能した時期や性格は不明である。

第16号土坑 (第20図)

A区①の遺物包含層L4層上面から単独で検出された。第1号・第2号竪穴住居跡間に位置する。平面形態は円形を呈する。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

遺物は検出面から、口縁部が無文になり胴部に斜縄文が施された縄文土器(第59図1)が、内部に粘土塊(第78図2)を収納した状態で出土した。そのほか覆土中からは外面に条痕文、櫛描文、斜縄文、網状撚糸文、縦位撚糸文が施された粗製土器等が出土している。

本土坑の機能した時期は縄文時代晩期が想定されるが、性格は不明であるといわざるを得ない。

第17号土坑 (第20図)

A区①北端の沢状地形となる沢1の底面より検出された規模の小さな浅い土坑である。平面形態はやや不整形な方形状を呈する。

底面には小ピット状の凹凸がある。3層からなる浅い覆土中より縄文時代後・晩期に比定される縄文土器等が出土しているが、本土坑の機能した時期や性格は不明であり、本土坑と第3号竪穴遺構及び沢1との新旧関係についても不明であるといわざるを得ない。

第18号土坑 (第20図)

A区①の遺物包含層L3層上面より検出された。第2号竪穴住居跡の南西に位置する。第4号焼土跡・第1号溝跡と新旧関係にあるが、いずれも本土坑より新しい。第4号焼土跡は本土坑の覆土検出面より検出されている。

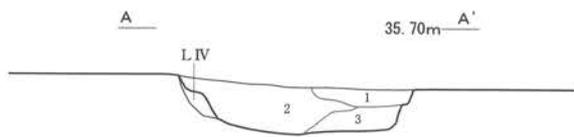
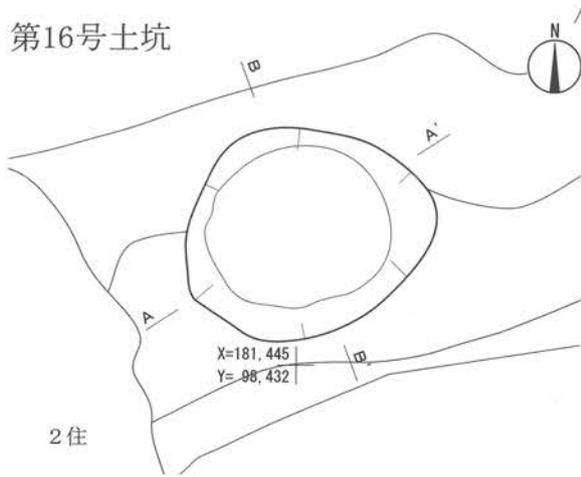
底面は平坦で、覆土は浅く4層(第2層～第5層)からなる。壁は緩く外傾しながら立ち上がる。

本土坑の覆土からは縄文土器(第70図7・15)等が出土しているが、機能した時期や性格は不明であるといわざるを得ない。

第19号土坑 (第20図)

A区①調査区のほぼ中央付近の遺物包含層L4層上面から検出された。第23号土坑と新旧関係にあるが本土坑が新しい。平面形態は円形状を呈する。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。覆土中には小礫を含み、網目状撚糸文が施された深鉢形土器(第66図2)等が出土

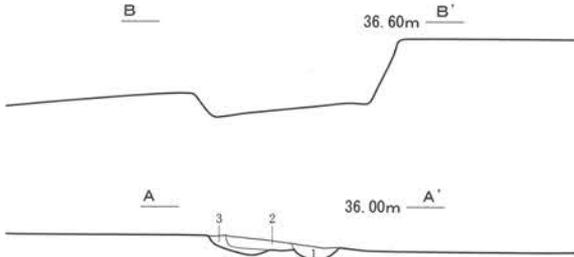
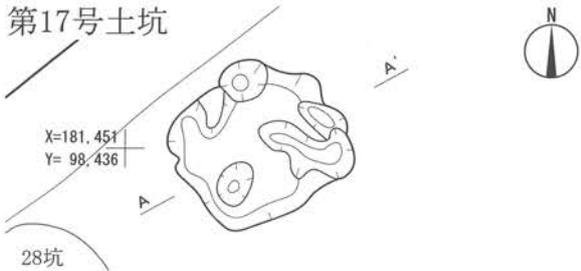
第16号土坑



第16号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 地山の粒状黄褐色土を含む。炭化物・焼土混入。
- 3 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) 黄褐色土ブロックを多く含む。粒状炭化物混入。

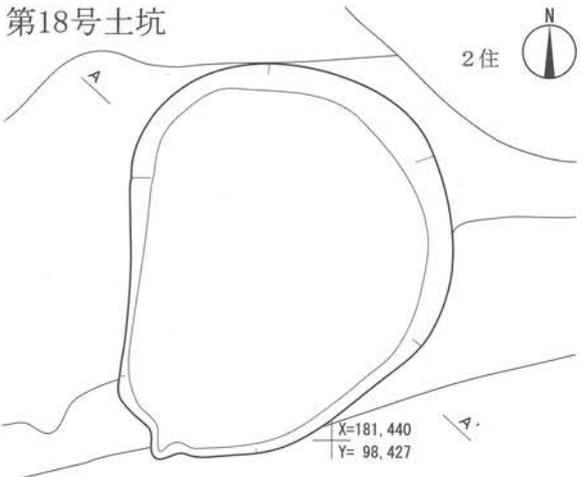
第17号土坑



第17号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 粘性あり、しまり弱い。地山の粒状にぶい黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性あり、しまり弱い。地山のにぶい黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土をやや多く混入。
- 3 暗オリーブ褐色 (Hue2.5Y3/3) 粘性あり、しまり弱い。地山の粒状にぶい黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土混入。

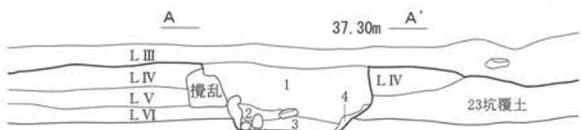
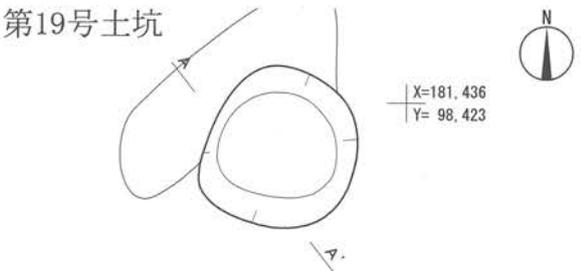
第18号土坑



第18号土坑土層注記 (A-A')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 4焼。粘性、しまりあり。粒状焼土混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 18坑覆土。粘性あり、しまりなし。粒状褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 18坑覆土。粘性あり、しまりなし。粒状褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 18坑覆土。粘性あり、しまりなし。粒状炭化物をわずかに混入。
- 5 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 18坑覆土。粘性あり、しまりなし。粒状褐色土ブロックを多く含む。
- 6 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 基本土層L3。粘性あり、しまりなし。
- 7 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 基本土層L4。地山の漸移層。
- 8 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 基本土層L5。粘性あり、しまりなし。地山の黄褐色土に黒褐色土ブロックを含む。
- 9 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 地山。

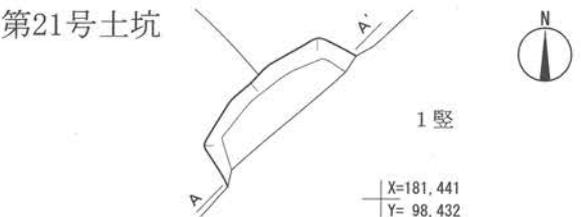
第19号土坑



第19号土坑土層注記 (A-A')

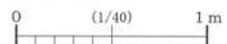
- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粒状褐色土ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性あり、しまりなし。
- 3 黒色土 (Hue10YR2/1) 地山の黄褐色土ブロックを多く含む。
- 4 黄褐色土 (Hue10YR5/3) 黒褐色土ブロックを含む。

第21号土坑



第21号土坑土層注記 (A-A')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性あり、しまりなし。
- 2 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性あり、しまりなし。



第20図 第16~19・21号土坑

した。

本土坑の機能した時期は縄文時代晩期に位置付けられるが、性格は不明である。

第20号土坑 (第19図)

A区①調査区のほぼ中央付近から検出された円形状を呈する浅い土坑である。遺物包含層L4層上面からの検出である。第12号・第22号土坑と新旧関係にあるが、第12号土坑より古く、第22号土坑より新しい。平面形態は円形を呈し、底面は平坦で、壁は緩く外傾する。

本土坑からの出土遺物はないが、検出状況から機能した時期は縄文時代中・後期頃と推定される。性格は不明である。

第21号土坑 (第20図)

A区①調査区の遺物包含層L4層上面から検出された。第1号竪穴遺構と新旧関係にある。近代に機能した1竪により南側の大部分が削平されているため、規模や平面形態等の詳細は不明であるが、底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。

本土坑からの出土遺物はなく、本土坑の性格や機能した時期は不明である。

第22号土坑 (第21図)

A区①調査区のほぼ中央から検出された。第12号・第20号土坑と新旧関係にあり、いずれよりも古い。遺物包含層L5層上面からの検出である。

平面形態はほぼ隅丸長方形形状を呈する。平坦で、やや不整形な長方形を呈する底面からは長径37cm、短径31cm、深さ22cmのピットが確認された。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。粒状の褐色土ブロックを多く含む覆土は13層からなり、自然堆積の状況を示す。遺物は覆土中より第39図9を含む縄文時代前・後・晩期に比定される縄文土器等13点が出土している。

本土坑はその形態等から縄文時代に機能した落とし穴と推測される。

第23号土坑 (第21図)

A区①調査区のほぼ中央付近から検出された。第19号・第12号土坑と新旧関係にあり、いずれよりも古い。本土坑は遺物包含層L5層上面からの検出である。

平面形態はほぼ楕円形状を呈する。底面は平坦で、長方形形状を呈する。底面からは長径23cm、短径19cm、深さ11cmの底面ピットが検出された。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位から上は外傾して立ち上がる。覆土は16層からなり、壁の崩落によると推測される地山の黄褐色土ブロックを多く含むことから自然堆積の状況を示していると判断される。

本土坑の覆土からは第51図20を含む縄文土器が3点出土している。

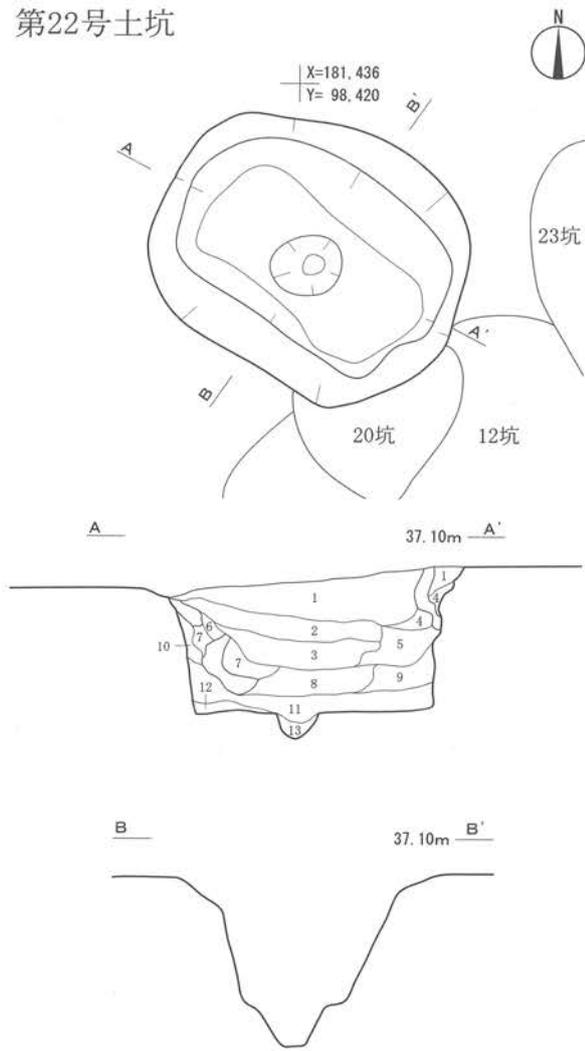
本土坑はその形態等から縄文時代の落とし穴と推測されるが、覆土(第10層)から出土した炭化材の年代測定結果は 2220 ± 30 yrBPであった。

第24号土坑 (第21図)

A区①調査区の遺物包含層L5層上面から検出された。第1号溝跡と新旧関係にある。1溝や攪乱により中央の大部分が削平されているため、規模や平面形態等の詳細は不明である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

本土坑からの出土遺物はなく、性格や機能した時期は不明である。

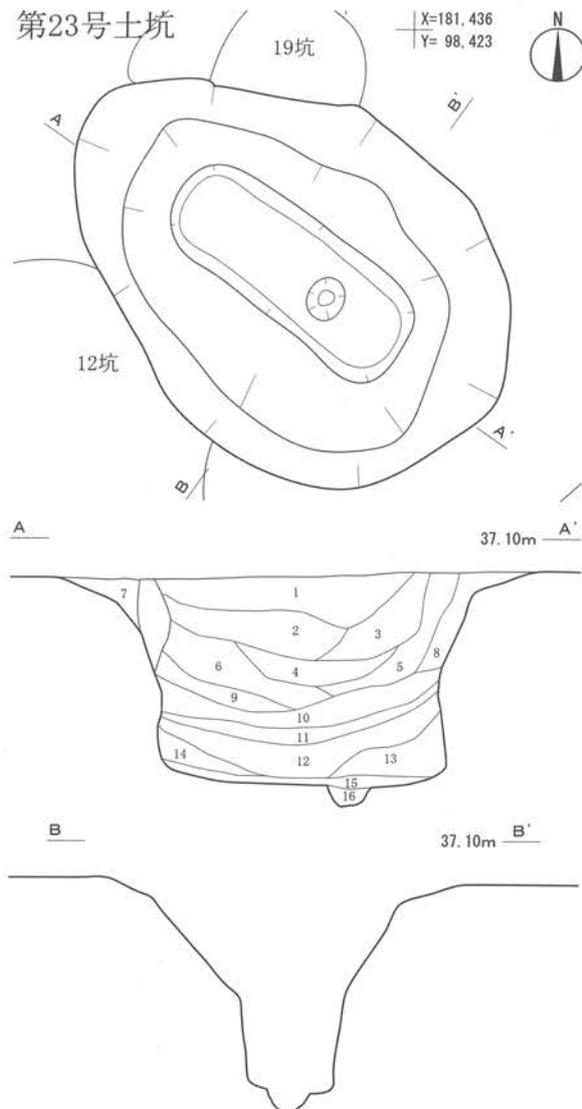
第22号土坑



第22号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。粒状褐色土ブロックを多く含む。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりなし。褐色土ブロックを含む。
- 4 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりなし。
- 5 にぶい黄褐色土 (Hue10Y4/3) しまりなし。粒状褐色土ブロックを多く含む。
- 6 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) しまりなし。粒状褐色土ブロックを含む。
- 7 黒褐色土 (Hue10YR3/2) しまりなし。粒状褐色土ブロックを含む。
- 8 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。粒状褐色土ブロックを多量に含む。
- 9 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。褐色土ブロックを多量に多く含む。
- 10 にぶい黄褐色土 (Hue10Y4/3) 粘性、しまりあり。褐色、黄褐色土ブロックを多く含む。
- 11 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性、しまりあり。褐色、黄褐色土ブロックを含む。
- 12 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまりあり。
- 13 灰黄褐色土 (Hue10Y4/2) 底面ビット覆土。粘性、しまりあり。

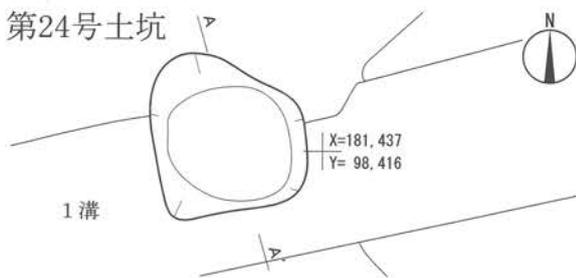
第23号土坑



第23号土坑土層注記 (A-A')

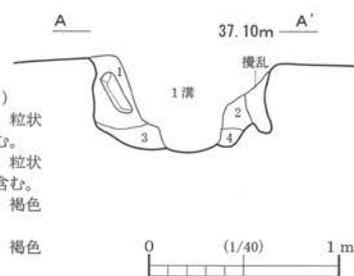
- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 褐色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粒状黄褐色土ブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 黒褐色、地山の黄褐色土ブロックを含む。
- 4 黒色土 (Hue7.5YR2/1) 黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土混入。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 褐色、黄褐色土ブロックを含む。
- 6 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 7 褐色土 (Hue10YR4/4) 粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土混入。
- 8 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 壁の崩落層。しまり弱い。
- 9 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 地山の黄褐色土ブロックを多く含む。褐色土ブロックを含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 10 灰黄褐色土 (Hue10Y4/2) 黒褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土混入。
- 11 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 壁の崩落層。
- 12 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 壁の崩落層。下位に炭化物を多く混入。
- 13 明黄褐色土 (Hue10YR6/8) 褐色土ブロックを縞状に含む。
- 14 明黄褐色土 (Hue10YR6/8) しまり弱い。
- 15 にぶい黄褐色土 (Hue10Y4/3) 粒状黄褐色土ブロックを含む。
- 16 にぶい黄褐色土 (Hue10Y4/3) 褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。

第24号土坑



第24号土坑土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粒状褐色土ブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粒状褐色土ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 褐色土ブロック多量に含む。
- 4 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 褐色土ブロックを多く含む。



第21図 第22~24号土坑

第25号土坑(第22図)

A区①調査区の遺物包含層L5層上面から検出された。第1号溝跡と新旧関係にあるが、1溝が新しい。平面形態は、不整形ではあるが方形状を呈する。底面からは浅いピット状の落ち込みが検出された。

本土坑からの出土遺物はなく、性格や機能した時期は不明であるが、平面形態や底面の状況から倒木等による抜根跡の可能性はある。

第26号土坑(第22図)

A区①調査区の遺物包含層L5層上面から検出された。第1号溝跡と新旧関係にあるが、1溝が新しい。平面形態は、不整形ではあるが円形状を呈する。底面からは浅いピット状の落ち込みが検出された。

本土坑の覆土中から縄文土器が2点出土しているが、性格や機能した時期は不明である。底面の状況から倒木等の抜根跡の可能性はある。

第27号土坑(第22図)

A区①調査区から単独で検出された。本土坑は遺物包含層L5層上面からの検出である。

平面形態はほぼ楕円形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は底面からやや外傾しながら立ち上がる。13層からなる覆土は、壁の崩落によると推測される粒状の黄褐色土ブロックを多く含み、自然堆積の状況を示す。

本土坑の覆土からは縄文時代前期に比定される縄文土器(第38図6)が3点出土している。規模及び形態から縄文時代の落とし穴と推測される。

第28号土坑(第22図)

A区①調査区の沢状地形(沢跡1)の底面から検出された。平面形態はほぼ円形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は底面からやや外傾しながら立ち上がる。5層からなる覆土は、粘性が強い粘質土であり、底面直上からは礫がまとまって検出された。土層観察からは自然堆積とも判断されるが、ほぼ垂直に堆積する第3層・第4層からは何らかの埋設物の存在が推測されるが、詳細は不明である。

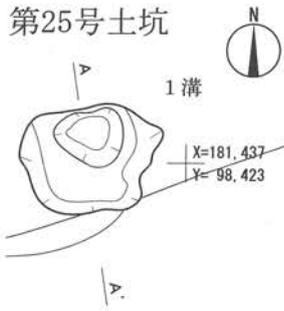
本土坑の覆土中及び底面からは縄文土器片17点等が出土している。本土坑の検出面からは第7号焼土跡が検出されており、7焼の掘り方とも推測される。7焼の掘り方と推測されれば縄文時代に機能した炉跡の可能性はある。

第29号土坑(第22図)

A区①調査区から検出された。遺物包含層L5層上面からの検出である。平面形態はほぼ円形状を呈する。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。5層からなる覆土のうち、第2層は火熱により著しく赤変している。覆土中からは縄文時代後・晩期に比定される土器を含む縄文土器片9点が出土している。このうち2点を図示した(第60図3・第62図6)。

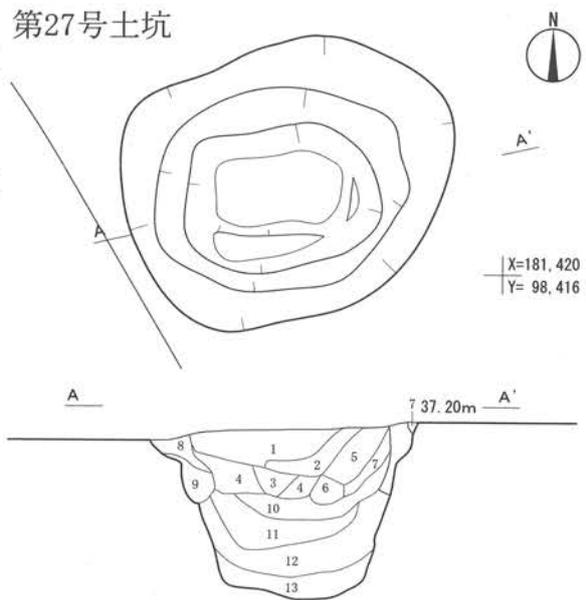
本土坑の検出面からは第3号炉跡が検出されている。また、覆土(第2層)も火熱により赤変していることから、本土坑は3炉の掘り方とも推測される。本土坑の機能した時期は縄文時代晩期と推測される。

第25号土坑



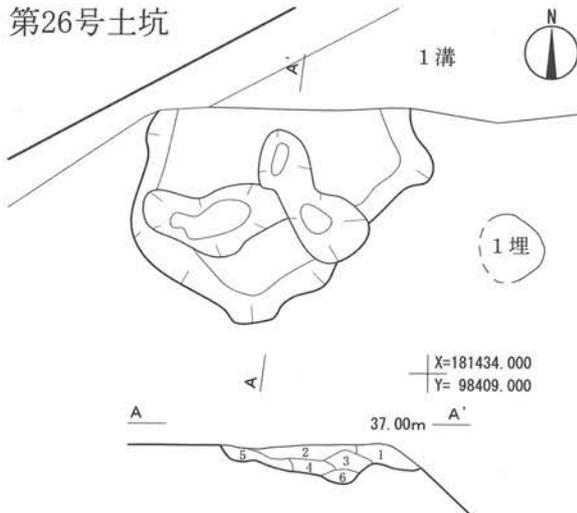
- 第25号土坑土層注記 (A-A')
- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。
 - 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。褐色土ブロックを含む。
 - 3 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりなし。黒褐色土ブロックを含む。
 - 4 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。
 - 5 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまりなし。黒褐色土ブロックを含む。

第27号土坑



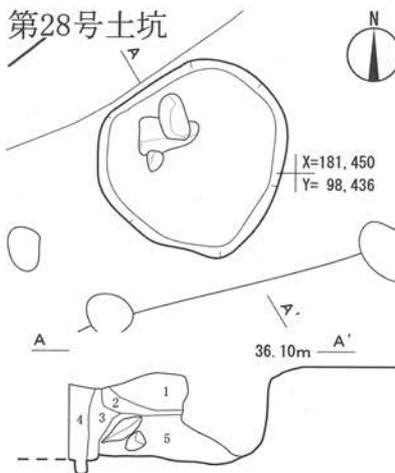
- 第27号土坑土層注記 (A-A')
- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。黄褐色土ブロックをわずかに含む。
 - 2 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。黒褐色土ブロックを含む。
 - 3 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを多く含む。
 - 4 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。暗褐色、黄褐色土ブロックを含む。
 - 5 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりあり。地山の粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土混入。
 - 6 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。黒色土ブロックを含む。黄褐色土ブロックをわずかに含む。粒状炭化物・焼土をわずかに混入。
 - 7 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。褐色土ブロックを含む。
 - 8 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) 粘性弱く、しまりあり。
 - 9 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) 粘性弱く、しまりあり。
 - 10 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 黄褐色土ブロックを多量に含む。
 - 11 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 壁の崩落層。しまり弱い。黒褐色土ブロックを含む。下位に炭化物堆積。
 - 12 明黄褐色土 (Hue10YR6/6) 壁の崩落層。しまり弱い。黒褐色土ブロックをわずかに含む。
 - 13 明黄褐色土 (Hue10YR6/6) しまり弱い。黒褐色土ブロックを含む。

第26号土坑



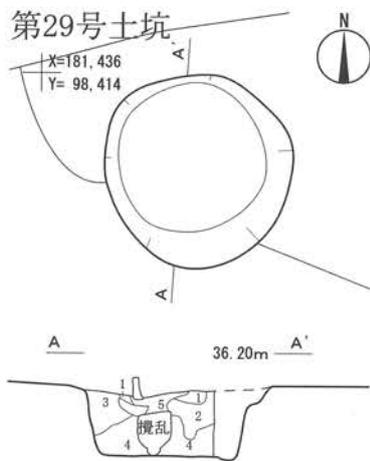
- 第26号土坑土層注記 (A-A')
- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。褐色土ブロックを含む。
 - 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりなし。粒状褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
 - 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりなし。黒色土ブロックを含む。炭化物混入。
 - 4 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。黄褐色土ブロックを多く含む。炭化物混入。
 - 5 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。黄褐色土ブロックを多く含む。炭化物混入。

第28号土坑



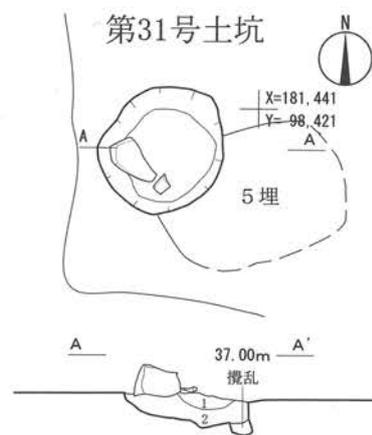
- 第28号土坑土層注記 (A-A')
- 1 浅黄褐色土 (Hue10YR8/4) しまり強い。
 - 2 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) 縮状堆積。
 - 3 にぶい黄褐色土 (Hue10YR7/4) 浅黄褐色粘土、にぶい黄褐色土ブロックを20%含む。
 - 4 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) 浅黄褐色粘土ブロックを斑に10%含む。
 - 5 淡黄褐色土 (Hue2.5YR8/3) しまり強い。粒状炭化物20%混入。

第29号土坑

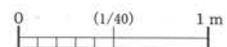


- 第29号土坑土層注記 (A-A')
- 1 にぶい橙色土 (Hue5YR6/4) しまりあり。粒状シルトブロックを1%含む。
 - 2 橙色土 (Hue5YR6/6) 焼土。しまり強い。
 - 3 褐灰色土 (Hue5YR4/1) しまりあり。粒状シルトブロックを2%含む。炭化物混入。
 - 4 黒褐色土 (Hue5YR2/1) 淡黄褐色土ブロックを斑に3%含む。粒状炭化物わずかに混入。
 - 5 灰褐色土 (Hue5YR5/2) しまりあり。粒状シルトブロックを5%含む。炭化物・焼土混入。

第31号土坑



- 第31号土坑土層注記 (A-A')
- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) しまりなし。粒状炭化物をわずかに混入。
 - 2 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) しまりなし。粒状黄褐色土ブロックを40%含む。



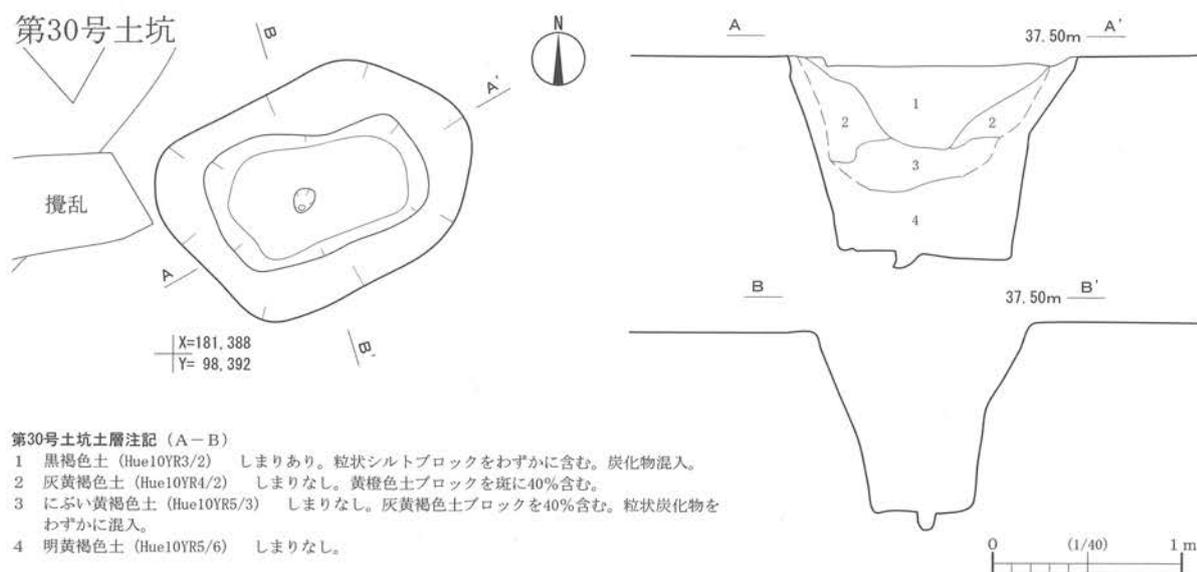
第22図 第25～29・31号土坑

第2節 土坑

第4表 野馬土手・原町西町遺跡 土坑一覧

単位：m

遺構	検出地点	平面形態	長軸	短軸	底面標高	壁 高 (cm)				長軸方向	重複関係	備考
						東壁	西壁	南壁	北壁			
1坑	A区①	楕円形	2.48	0.94	36.276	68	72	95	89	N29° W	攪乱	
2坑	A区①	楕円形	2.14	1.42	35.978	97	99	93	91	N57° W		
3坑	A区①	円形	0.73	0.56	36.808	-	-	16	8	N6° W	攪乱	底面に焼土
4坑	A区① L4上面	円形	1.17	1.01	35.662	40	42	42	36	N3° W	1住	
5坑	A区②	楕円形	2.28	2.06	36.031	107	118	116	112	N55° W		
6坑	A区②	円形	1.90	1.82	36.734	37	45	35	49	N75° W		
7坑	A区②	楕円形	2.28	1.50	-	10	48	41	24	N33° E	攪乱	
8坑	A区②	楕円形	2.56	2.14	36.206	106	102	109	103	N51° W		底面ピット
9坑	A区②	円形	2.12	2.04	37.295	2	9	8	10	N14° E		
10坑	A区②	楕円形	2.28	1.52	36.427	106	108	109	101	N37° W		
11坑	A区②	円形か	1.68	1.26	37.088	5	-	3	4	N85° E		
12坑	A区① L4上面	円形	1.76	1.46	38.786	11	11	6	8	N8° W	20坑	
13坑	A区① L3上面	円形	1.34	1.20	36.764	17	18	13	14	N71° E		
14坑	A区① L3上面	円形か	<1.86>	<1.04>	36.480	-	-	23	-	N55° W	1竪	
15坑	A区① L4上面	円形	1.34	1.20	36.697	5	5	3	7	N61° E		
16坑	A区① L4上面	円形	1.34	1.16	36.151	76	24	34	14	N70° E		
17坑	A区① 沢1底面	不整形	0.92	0.86	35.895	5	6	4	8	N55° E	沢1	
18坑	A区① L3上面	円形か	2.26	1.86	36.500	12	16	5	3	N30° E	4焼	
19坑	A区① L4上面	円形か	0.80	0.54	36.691	17	18	-	19	N10° E	23坑	
20坑	A区① L4上面	円形か	0.84	0.78	36.510	2	12	31	5	N38° E	12・22坑	
21坑	A区① L4上面	方形か	1.00	0.32	36.494	-	-	-	10	N46° W	1竪	
22坑	A区① L5上面	隅丸 長方形	1.70	1.42	36.093	70	62	66	69	N54° W	20坑	
23坑	A区① L5上面	楕円形	2.64	1.86	36.870	110	100	107	110	N53° W	12・19坑	
24坑	A区① L5上面	円形	0.87	0.79	36.411	20	36	25	55	N12° W	1溝	
25坑	A区① L5上面	不整形	0.78	0.60	36.513	13	8	9	4	N9° W	1溝	
26坑	A区① L5上面	不整形	1.56	1.28	36.647	8	12	3	-	N52° E	1溝	
27坑	A区① L5上面	楕円形	1.79	1.44	36.101	92	102	-	-	N70° E		
28坑	A区① 沢1底面	円形	1.02	0.99	35.509	-	-	50	-	N34° W	7焼	7焼掘り方か
29坑	A区① L5上面	円形	1.04	1.02	36.444	34	38	45	30	N34° E	3炉	3炉掘り方か
30坑	A区②	隅丸 長方形	2.06	1.20	36.124	103	97	99	96	N71° E	土手3	
31坑	A区①	円形	0.80	0.78	36.519	16	16	14	18	N6° W	3焼・5埋	



第23図 第30号土坑

第30号土坑 (第23図)

A区②調査区から検出された。第6号土坑の南側、第7号土坑の南東側に位置する。本土坑の検出も地山の黄褐色土層からの検出である。

平面形態はほぼ隅丸長形状を呈する。平坦で、ほぼ長形状を呈する底面からは、長径13cm、短径10cm、深さ9cmの小ピットが検出された。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位で外傾する。

本土坑からの出土遺物はないが、形態や規模から縄文時代に機能した落とし穴と推測される。

第31号土坑 (第22図)

A区①調査区の遺物包含層L6層上面からの検出である。第3号焼土跡、第5号埋設土器と新旧関係にあり、3焼・5埋が完掘した後に検出された。検出面では角礫が設置された状態で検出されている。平面形態はほぼ円形状を呈し、底面は平坦である。

本土坑からの出土遺物はないが、縄文時代晩期以前に比定される。機能した時期や性格は不明である。

第3節 炉 跡

炉跡は3基検出された。いずれもA区①L3層上面からの検出で、石組をともない、炉内底面は火熱により著しく赤変する。1炉は方形、ほぼ円筒形の掘り方を伴う3炉は円形状を呈する。2炉は近代の1竪によりほとんどが削平されており平面形態は不明である。いずれも縄文時代に機能していたと推測される。

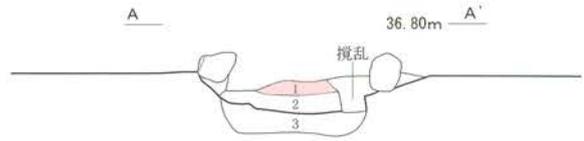
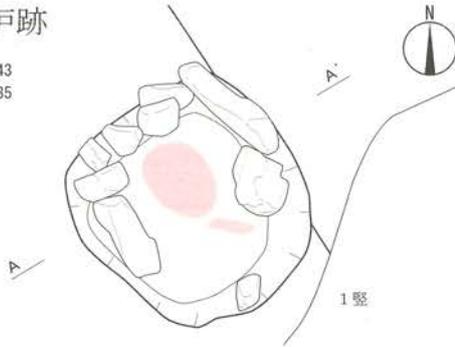
第1号炉跡 (第24図)

A区①調査区東側の遺物包含層L5層上面からの検出である。平坦な底面の一部に火熱によ

第3節 炉跡

第1号炉跡

X=181,443
Y= 98,435

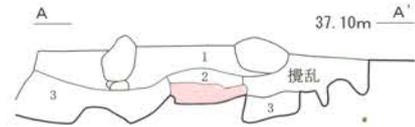
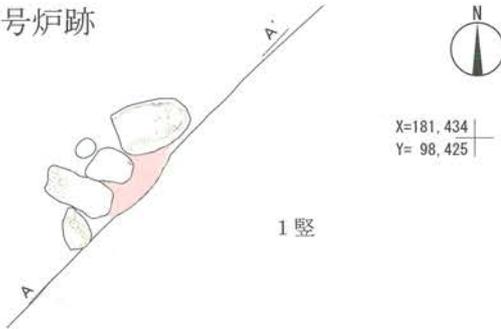


第1号炉跡土層注記 (A-A')

- 1 焼成痕。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土混入。
- 3 黒色土 (Hue10YR2/1) 基本層序LV層。粘性あり、しまりなし。

第2号炉跡

X=181,434
Y= 98,425

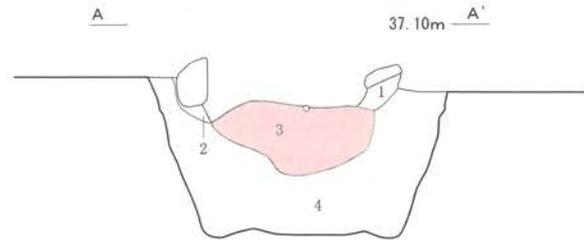
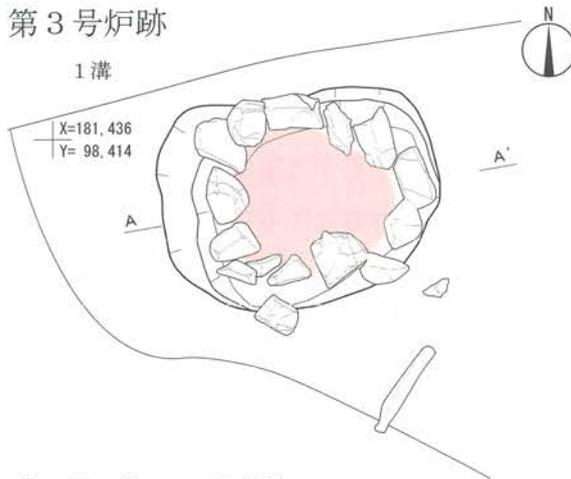


第2号炉跡土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。褐色土ブロックを含む。粒状炭化物を多量に混入。焼土混入。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性弱く、しまりあり。粒状焼土を多量に混入。粒状炭化物混入。
- 3 暗オリーブ褐色土 (Hue2.5Y3/3) 粘性、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物を多量に混入。攪乱か。

第3号炉跡

X=181,436
Y= 98,414



第3号炉跡土層注記 (A-A')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックをわずかに含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。



第24図 第1～3号炉跡

第5表 野馬土手・原町西町遺跡 炉跡一覧

単位: m

遺構	検出地点	平面形態	長軸	短軸	底面標高	掘り方規模			長軸方向	重複関係	備考
						長軸	短軸	深さ			
1炉	A区① L5上面	方形か	0.53	0.46	36.491	0.62	0.58	0.11	N31° W		
2炉	A区① L5上面	円形か	0.49	<0.21>	36.937	—	—	—	N40° W	1 竪	
3炉	A区① L5上面	楕円形	0.61	0.53	36.658	—	—	—	N83° E	29坑	

り円形に赤変した範囲が確認された。掘り方は方形の平面形態を呈する。南側の石組は散逸しているが、石組が残存する北側では、やや扁平な礫を掘り方東西壁に沿って埋置し、その間を比較的小さな礫で囲って壁を構築している。

炉内覆土及び周辺からは底部尖底の無文土器 (第37図42) や櫛歯文が施された縄文土器が出土している。本炉跡の性格は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

第2号炉跡 (第24図)

A区①の調査区ほぼ中央から検出された。遺物包含層L5層上面からの検出である。近代の第1号竪穴遺構により大部分が削平されているが、残存する石組から石囲炉と判断される。全体の形態や規模及び掘り方の平面形態は不明であるが、掘り方上部に礫を設置して壁が構築される。残存する底面は火熱により赤変している。本炉跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

第3号炉跡 (第24図)

A区①の遺物包含層L5層上面から検出された。第1号溝跡の南側、第8号焼土跡の北側に位置する石囲炉である。ほぼ完全に遺存する石組は、ほぼ比較的小さな礫で構築されており、平坦な底面は火熱により全面が赤変する。重複関係にある円形を呈する第29号土坑が本炉跡の掘り方と推測され、その覆土は火熱による赤変が顕著である。

炉内覆土からは無文土器や斜縄文が施された縄文土器が出土している。本炉跡の機能した時期は第29号土坑との関係から縄文時代晩期と推測される。

第4節 焼 土 跡

A区①より8基の焼土跡が検出された。ほとんどの焼土跡は、火熱による赤変が顕著ではなく、掘り方も伴わない。また周辺からは竪穴やピットなどが検出されなかったことから、竪穴住居に伴う焼土とは判断できない。

第1号焼土跡 (第25図)

A区①の遺物包含層L4層上面から検出された。第2号焼土跡の南側、第3号炉跡の東側に位置する。第1号溝跡と新旧関係にあるが、1溝が新しい。平面形態はやや不整形な方形状を呈する。検出面では礫が散布した状況で検出されたことから石囲炉の可能性はある。本焼土跡の周辺からは縄文土器 (第37図23)、剥片や礫が出土している。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

第2号焼土跡 (第25図)

A区①の遺物包含層L3層上面から単独で検出された。第1号焼土跡の北側、第3号焼土跡の南側に位置する。平面形態は不整形な円形状を呈する。掘り方は検出されなかった。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

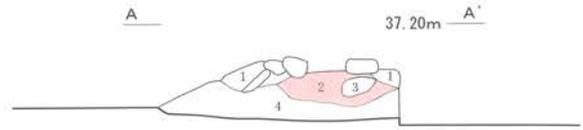
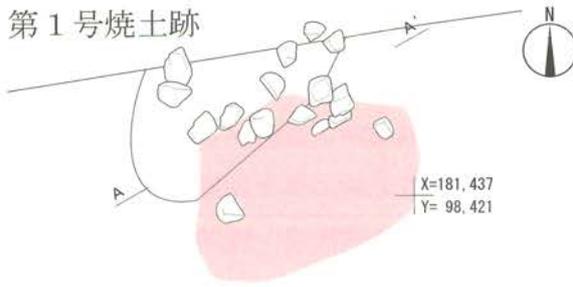
第3号焼土跡 (第25図)

A区①の遺物包含層L3層上面から単独で検出された。第2号焼土跡の北側に位置し、第5号埋設土器、第31号土坑と新旧関係にある。本焼土跡は31坑より新しいが、5埋との新旧関係は不明である。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、逆位の状態で埋設されたほぼ完形となる深鉢形の縄文土器 (第44図2・第45図等) や扁平な礫とともに検出されたが、掘り方は検出されなかった。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。なお出土した炭化材の樹種

第4節 焼土跡

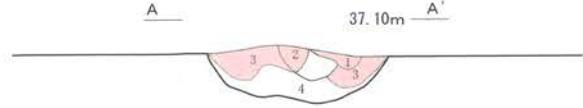
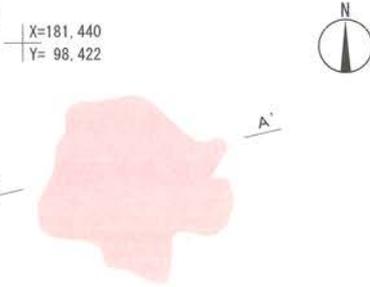
第1号焼土跡



第1号焼土跡土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue5YR2/2) 粘性あり、しまりなし。粒状焼土混入。
- 2 赤褐色土 (Hue5YR4/8) 粘性あり、しまりなし。焼土ブロック層。黒褐色土ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 攪乱。粘性あり、しまりなし。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 基本層序LIV層。

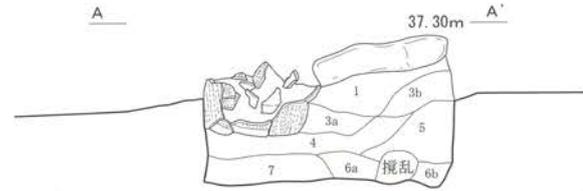
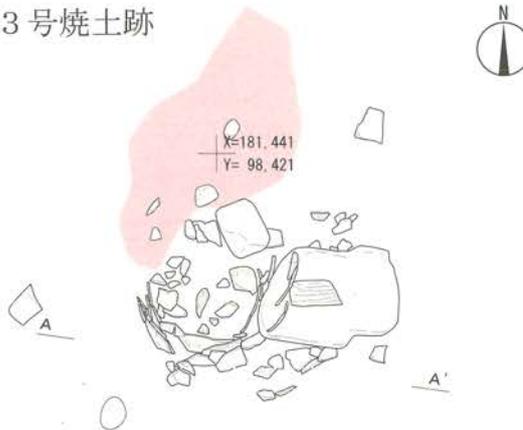
第2号焼土跡



第2号焼土跡土層注記 (A-A')

- 1 赤褐色土 (Hue5YR4/8) 粘性、しまりあり。焼土ブロック混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性あり、しまりなし。焼土ブロック混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性あり、しまりなし。粒状焼土混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性あり、しまりなし。黄褐色土ブロック層、黒褐色土ブロック層の互層。

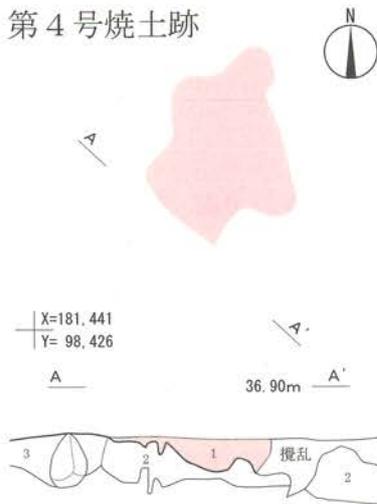
第3号焼土跡



第3号焼土跡土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2) 粒状黄褐色土ブロックをわずかに含む。
- 2 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 粘性弱く、しまりあり。
- 3a 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 3b 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 粒状黄褐色土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 5 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 粒状黄褐色土ブロックをわずかに含む。
- 6a 褐灰色土 (Hue10YR4/1) 地山の黄褐色土ブロックを含む。
- 6b 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粒状黄褐色土ブロックを含む。
- 7 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) 褐色土ブロックをわずかに含む。

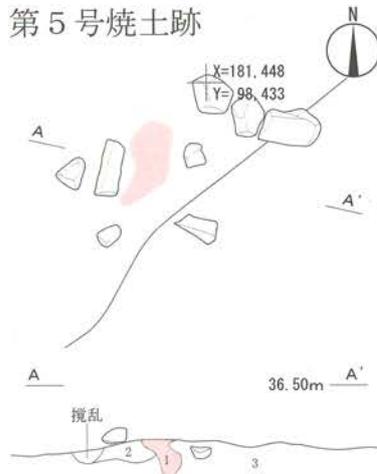
第4号焼土跡



第4号焼土跡土層注記 (A-A')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 4焼。粘性、しまりあり。粒状焼土混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 18坑覆土。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 18坑覆土。

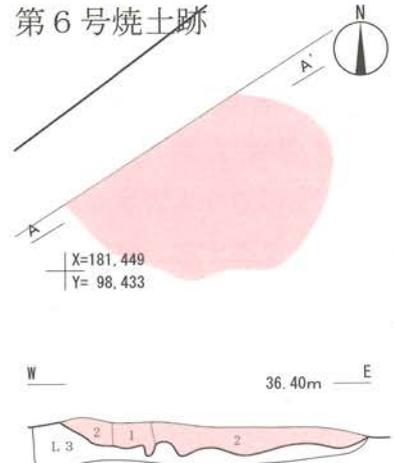
第5号焼土跡



第5号焼土跡土層注記 (A-A')

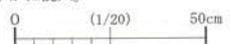
- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状焼土を多量に、粒状炭化物を少量混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状炭化物・焼土を少量混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状炭化物・焼土を少量混入。

第6号焼土跡



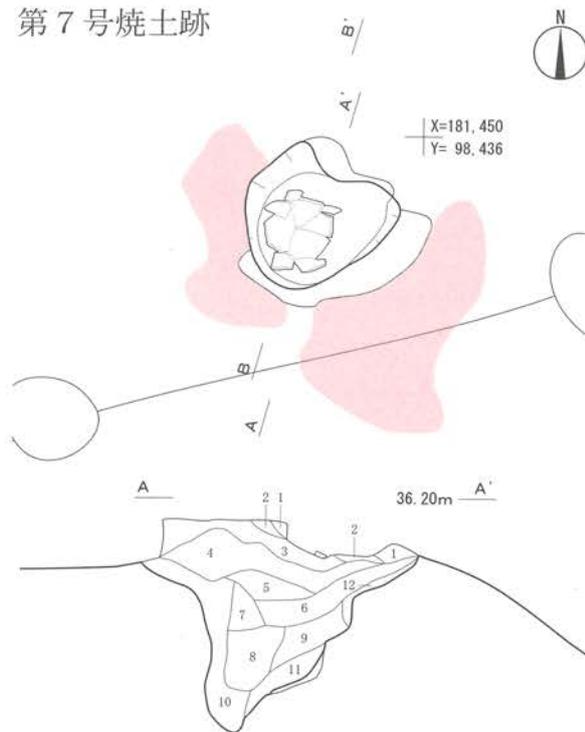
第6号焼土跡土層注記 (A-A')

- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粒状炭化物混入。焼土ブロックを多量に混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粒状炭化物混入。焼土ブロックをわずかに混入。



第25図 第1～6号焼土跡

第7号焼土跡



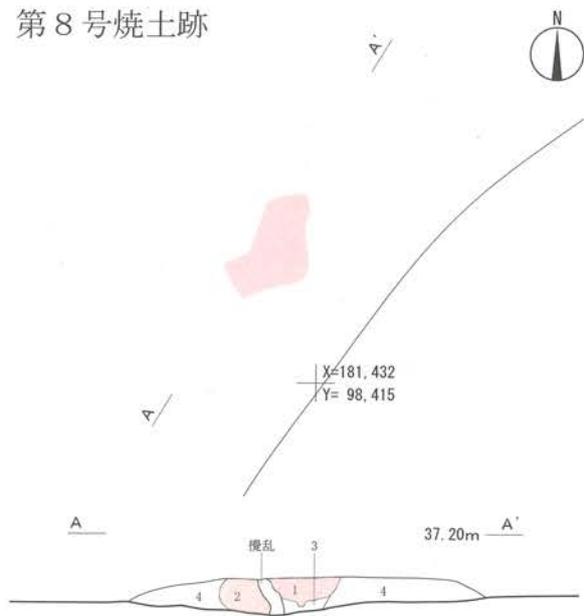
第7号焼土跡土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粒状炭化物・焼土混入。
- 2 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 粘性、しまりなし。
- 3 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2) しまりあり。焼土ブロック混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 黒褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 地山のにぶい黄橙色土ブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 (Hue10YR3/3) にぶい黄橙色土ブロックを多量に含む。焼土ブロックを多量に混入。
- 7 暗褐色土 (Hue10YR3/3) にぶい黄橙色土ブロックをわずかに含む。
- 8 黒褐色土 (Hue10YR3/2) にぶい黄橙色土ブロックを含む。
- 9 褐色土 (Hue10YR4/4) 黒褐色土ブロックをわずかに含む。
- 10 暗褐色土 (Hue10YR3/2) にぶい黄橙色土ブロックを多量に含む。
- 11 にぶい黄橙色土 (Hue10YR6/4) しまりあり。黒褐色土ブロックを含む。

第26図 第7・8号焼土跡



第8号焼土跡



第8号焼土跡土層注記 (A-A')

- 1 にぶい赤褐色土 (Hue5YR4/3) 焼土ブロック。粘性、しまりあり。
- 2 暗赤褐色土 (Hue5YR3/3) しまりなし。粒状焼土混入。
- 3 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。粒状焼土をわずかに混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 基本層序L4層。しまりなし。



第6表 野馬土手・原町西町遺跡 焼土跡一覧

単位：m

遺構	検出地点	平面形態	長軸	短軸	重複関係	備考	遺構	検出地点	平面形態	長軸	短軸	重複関係	備考
1 焼	A区① L4上面	不整形	0.68	0.51	1溝	石囲炉か	5 焼	A区① L3上面	不整形	-	-		石囲炉か
2 焼	A区① L3上面	不整形	0.54	0.54			6 焼	A区① L3上面	不整形	-	-		石囲炉か
3 焼	A区① L3上面	不整形	0.76	0.44	31坑・ 5埋		7 焼	A区① L3上面	不整形	-	-	28坑	
4 焼	A区① L3上面	不整形	0.70	0.40	18坑		8 焼	A区① L4上面	不整形	0.32	0.18		

はアカガシ亜属である。

第4号焼土跡 (第25図)

A区①の遺物包含層L3層上面を検出面とする第18号土坑の覆土から検出された。第18号土坑と新旧関係にあるが、本焼土跡が新しい。第2号竪穴住居跡の西側、第3号焼土跡・第5号埋設土器の東側、第4号埋設土器の南側に位置する。平面形態は不整形な楕円形状を呈する。掘り方は検出されなかった。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

第5号焼土跡 (第25図)

A区①の遺物包含層L3層上面から検出された。第1号竪穴住居跡の西側、第2号竪穴住居跡の東側、第6号焼土跡の南側に位置する。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、検出面では小礫が散布した状態で検出され、周辺からは縄文土器(第62図3)が出土している。掘り方は検出されなかった。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

第6号焼土跡 (第25図)

A区①の遺物包含層L3層上面から検出された。第5号焼土跡の北側、第3号埋設土器・第7号焼土跡の西側に位置する。調査区域外に延びるが、平面形態は不整形な楕円形状を呈すると推測される。本焼土跡の周辺からは縄文土器が出土しているが、掘り方は検出されなかった。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

第7号焼土跡 (第26図)

A区①の遺物包含層L3層上面から検出された。第1号竪穴住居跡の北側、第6号焼土跡・第3号埋設土器の西側に位置する。検出面からは縄文土器(第48図33・第53図14)が出土し、この土器の左右が火熱により赤変した状況で検出された。掘り方は検出されなかったが、本焼土跡と重複し、円形を呈する第28号土坑が、本焼土跡の掘り方とも推測される。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

第8号焼土跡 (第26図)

A区①の遺物包含層L4層上面が火熱によりわずかに赤変した状況で検出された。第29号土坑・第3号炉跡の南側に位置する。掘り方は検出されなかった。

本焼土跡は、縄文時代後・晩期に機能した屋外炉と推測される。

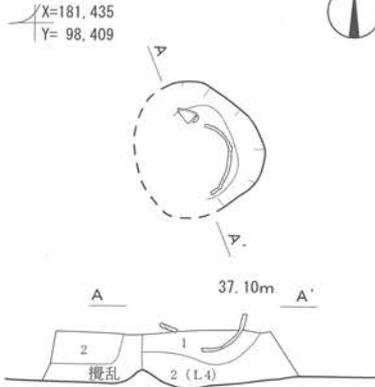
第5節 埋設土器

埋設土器はA地区①から4基検出された。いずれもLIIb層中からの出土であるが、掘り方は伴わない。土器が正位に埋設されたもの(1・2・4埋)、横位に埋設されたもの(3埋)がある。3埋は7焼及び28坑と重複する。このうち4埋から出土した土器は、ほぼ完形となり、縄文時代後期後葉に比定される。また、3焼から出土した縄文土器についても埋設された土器の可能性はある。

第1号埋設土器 (第27図)

A区①の遺物包含層L4層上面から検出された。第26号土坑の東側、第1号溝跡の南側に位置する。掘り方は確認されなかったが、正位の状態で埋置されている。埋設された土器(第43図3)は口・胴部のみが遺存する。胴部が内彎気味に立ち上がる粗製深鉢形土器で、縄文時代後期後葉に位置づけられるものであろう。胴部外面には格子状の櫛描文、ススの痕跡が認められる。内面にはナデが施される。

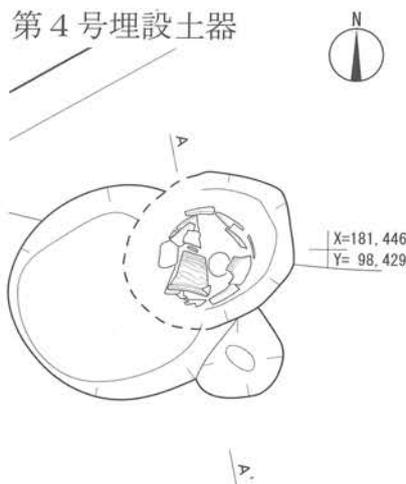
第1号埋設土器



第1号埋設土器土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粒状黄褐色土ブロックを含む。
- 2 黒色土 (Hue10YR1.7/1) 基本層序L.4層。

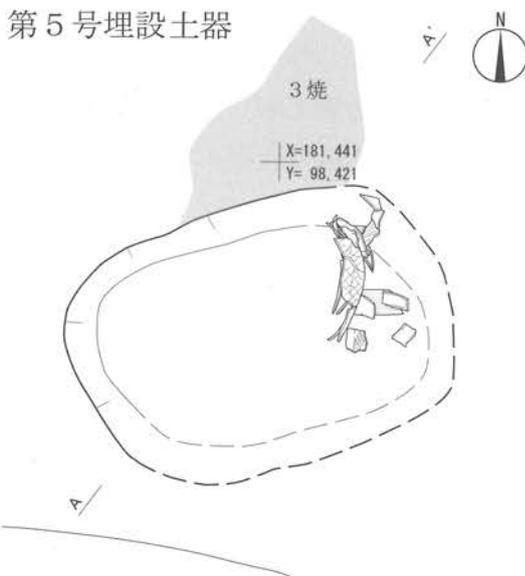
第4号埋設土器



第4号埋設土器土層注記 (A-A')

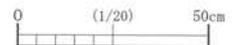
- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物混入。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまり弱い。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物混入。
- 4 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物混入。
- 5 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 粘性、しまりあり。粒状炭化物混入。壁の崩落層か。

第5号埋設土器



第5号埋設土器土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。
- 2 赤褐色土 (Hue5YR4/8) 3 焼土塊。
- 3 赤褐色土 (Hue5YR4/8) 3 焼土塊。粘性弱く、しまりなし。粒状焼土を多量に混入。



第27図 第1・4・5号埋設土器

第2号埋設土器 (第9図)

A区①の遺物包含層L.3層上面から検出された。第1号炉跡の西側、第1号溝跡の北側に位置する。掘り方は確認されなかった。

埋設された土器(第43図2)は、胴下部一底部が正位の状態で埋置され、胴上部は周辺に散布した状態で検出された。高台状の底部から胴部が内彎気味に立ち上がる粗製の深鉢形土器で、縄文時代後期後葉に位置づけられるものであろう。胴部外面には櫛歯状工具による横位の条線文が施される。内面にはススの痕跡が認められる。

第3号埋設土器 (第9図)

A区①沢跡1の内部精査段階で遺物包含層L.3層中から検出された。第1号竪穴住居跡の北側、第6号焼土跡の東側、第7号焼土跡の西側に位置する。掘り方は確認されなかった。

埋設された土器(第44図1)は、底部を欠損しており、遺物包含層L.3層に正位の状態で検出された。底部から胴部がほぼ直線的に立ち上がる半精製の深鉢形土器で、口縁部は刻みが施される。頸部から口縁部には4条の平行沈線が施され、胴部外面は斜縄文となる。縄文時代晩

期中葉に位置づけられるものであろう。

第4号埋設土器 (第27図)

A区①沢跡1の内部精査段階で遺物包含層L3層中から検出された。第2号竪穴住居跡の北側、第16号土坑の西側に位置する。掘り方は確認されなかった。

埋設された土器(第43図1)は、ほぼ完形となる。遺物包含層L3層に正位の状態で検出された。胴部に上半でゆるくくびれを有する深鉢形土器で、2個1対と1個の突起が交互に配される口縁部を有する。頸部には連続刻目文で充填された平行沈線文や入組帯状文が施される。縄文時代後期後葉に位置づけられるものであろう。

第5号埋設土器 (第27図)

A区①から検出された。第31号土坑、第3号焼土跡と新旧関係にあり、31坑より本埋設土器が新しい。また第3号焼土跡から出土した粗製深鉢形土器(第45図1)は、本跡に伴う可能性が高い。隅丸長方形の比較的大きな掘り方を有する。いずれも逆に埋設されている。

第44図2は口縁部にA突起を有し、頸部には平行沈線が巡る半精製土器。第45図2は、底部を欠損するが底部から胴部が内彎しながら立ちあがる器形となり、網目状撚糸文が施される粗製土器である。縄文時代晚期中葉に位置づけられるものであろう。

第6節 ピット群

ピットはA・B区の調査区域全体で10個検出された。すべてがA区①からの検出である(第24図)。平成19年度の試掘調査6号トレンチで検出されたピット4個(A区②)は、平成20年度の本発掘調査において覆土の状態から攪乱と判断された。

A区①から検出された10個のピットは、A区①調査区北側にあり、ピット1・2は第1号竪穴住居跡と新旧関係にある。

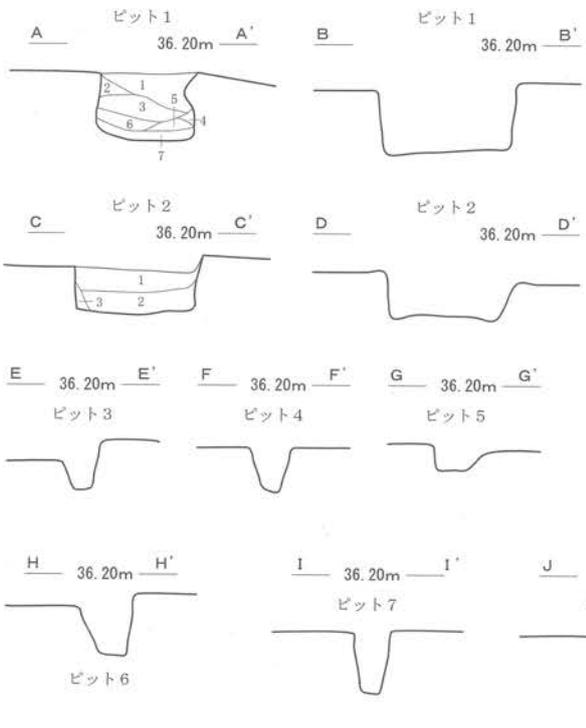
そのほかのピット3～10の8個は、第1号竪穴住居跡北側に位置する沢跡1の内部精査時に検出された。しかし、検出された位置は近代に機能していたと推測される第3号竪穴遺構に沿った位置にあたることから、3竪に伴うピットである可能性を指摘しうる。

ピット1 第1号竪穴住居跡と新旧関係にあるが1住よりは新しい遺構である。1住と同時に検出され、検出された位置からピット2とともに1住に伴うと推測された。

平面形態は、やや不整形な楕円形状を呈する。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は7層(第1層～第7層)からなるが、いずれも粒状の炭化物を多量に含む。また第5層は焼土ブロック層であり、第6層には焼土粒を多量に含む。

覆土中からは、粗製深鉢形土器、縄文時代後・晩期に比定される縄文土器とともに無文土器が数多く出土した(第46図30、第48図18・21、第49図5、第54図22～25)。ピット1は、その位置関係や覆土の状況から、ピット2や第4号土坑とともに縄文時代後・晩期の時期に、火熱を使用した何らかの生産にかかわる遺構であったと推測される。

ピット

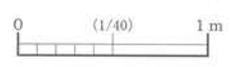


ピット1土層注記 (A-A')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状炭化物・焼土を多量に混入。粒状黄褐色土ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物を多量に混入、粒状焼土混入。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 5 焼土ブロック。
- 6 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状焼土を多量に混入。粒状炭化物混入。
- 7 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性、しまりあり。粒状炭化物混入。

ピット2土層注記 (B-B')

- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまりあり。地山の黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物を多量に混入。
- 2 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 粘性、しまりあり。地山の黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物混入。
- 3 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) 粘性、しまりあり。地山の黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物混入。



第28図 ピット

第7表 野馬土手・原町西町遺跡 ピット一覧

遺構	検出地点	平面形態	規 模 (cm)			備 考	遺構	検出地点	平面形態	規 模 (cm)			備 考
			長径	短径	深さ					長径	短径	深さ	
1	A区① L4層	楕円形	83	72	38	1住より新	6	A区① L5層	楕円形	31	28	32	
2	A区① L4層	楕円形	68	54	35	1住より新	7	A区① L5層	楕円形	23	17	23	
3	A区① L5層	楕円形	21	15	26		8	A区① L5層	円形	25	20	35	
4	A区① L5層	楕円形	24	19	23		9	A区① L5層	不整形	39	28	55	
5	A区① L5層	円形	29	24	13		10	A区① L5層	円形	34	28	22	

ピット2 第1号竪穴住居跡と新旧関係にあり、1住より新しい遺構である。ピット1と同様に1住とともに検出されたピットである。検出時には、位置関係からピット1とともに1住に伴うピットと推測された。

平面形態は、楕円形状を呈する。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は3層（第1層～第3層）からなるが、いずれも粒状の炭化物を多量に含む。

覆土中からは、胴部外面に斜縄文が施された粗製深鉢形土器とともに無文土器が出土する。このことから、ピット2は、ピット1や第4号土坑とともに縄文時代後・晩期の時期に、火熱を利用した何らかの生産にかかわる遺構であったと推測される。

ピット3～10 ピット1・2以外のピット8個の平面形態は円形を基調とすると推測される。いずれも規模は小さく、深さにも規則性がない。最も浅いピット5は13cmを測り、最も深いピット9は55cmを測る。

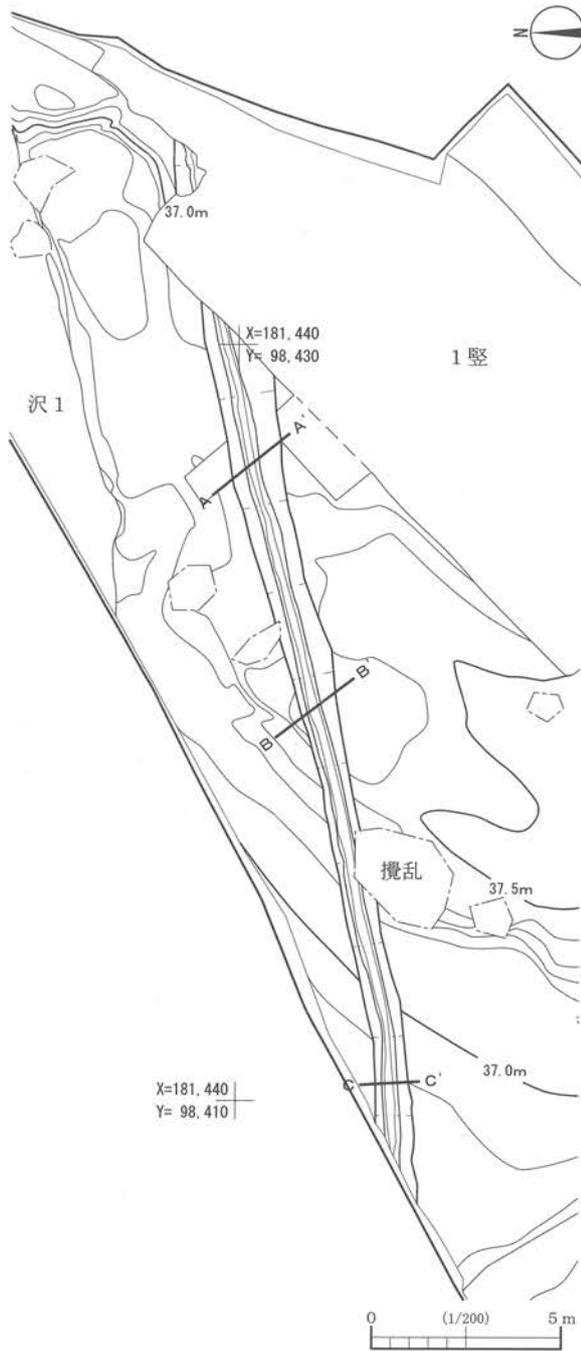
このうちピット7を除く7個のピットは、近代の遺構と推測される第3号竪穴遺構に沿って検出されたピットであり、3竪に伴う杭列等のピットと推測される。各ピット間の間隔は、ピット3-4は0.92m、ピット4-5は1.01m、ピット5-6は1.16m、ピット6-8は0.98m、ピット8-9は1.61m、ピット9-10は0.95mを測り、平均では1.10m（3.7尺）を測る。

第7節 溝 跡

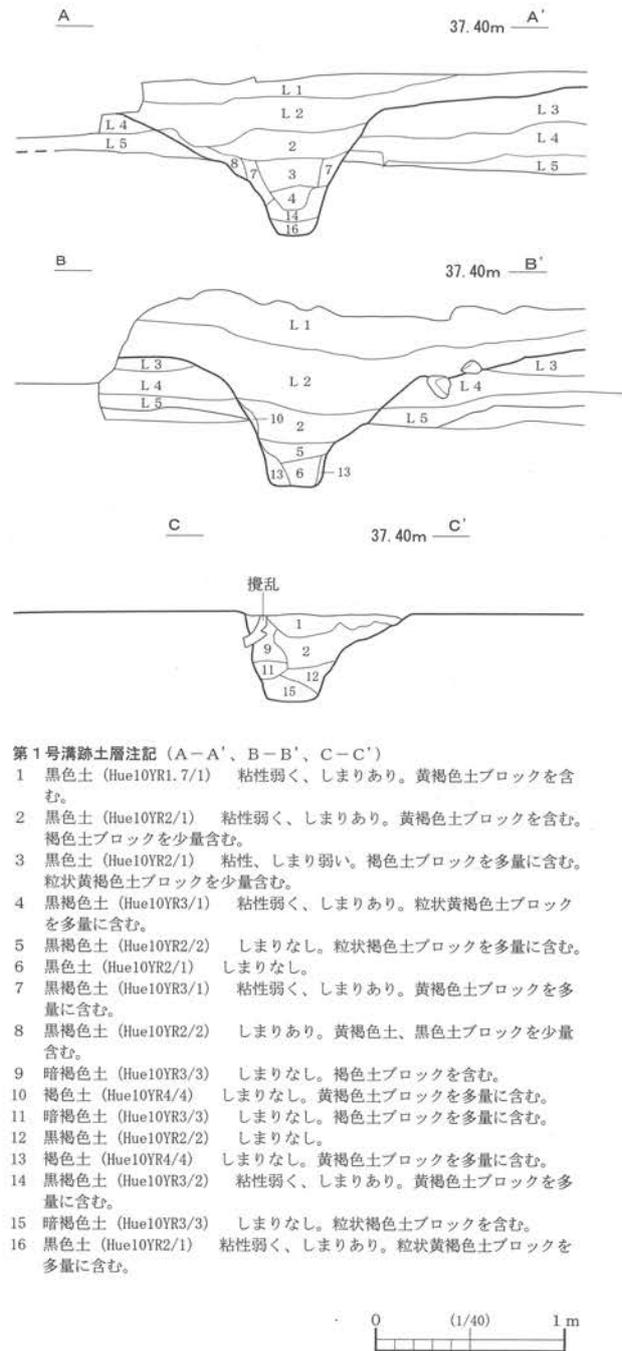
A区①から1条検出されている（第29図）。第1号溝跡は、近代の土手1積土を除去した後に検出された溝跡で、土手1に設定したベルトの土層観察によれば、遺物包含層L3層上面から掘り込まれている。

近代の遺構である土手1及び第1号竪穴遺構と重複関係にあり、いずれも1竪・土手1が新しい。調査区をほぼ東西方向に直線的に横断し、底面の標高差により東から西に流路をとると推測される。

調査区内では、1竪により削平されてはいるが、延長28.1mを測る。上幅0.77～1.54m、下幅0.1～0.28m、検出面から底面までの深さは約60～85cmを測る。平坦な底面から、壁は垂直に立ち上がり、その後は外傾して断面「V」字状を呈する。覆土の堆積状況から自然に埋没した



第29図 第1号溝跡



第1号溝跡土層注記 (A-A', B-B', C-C')

- 1 黒色土 (Hue10YR1.7/1) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。
- 2 黒色土 (Hue10YR2/1) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。褐色土ブロックを少量含む。
- 3 黒色土 (Hue10YR2/1) 粘性、しまり弱い。褐色土ブロックを多量に含む。粒状黄褐色土ブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりなし。粒状褐色土ブロックを多量に含む。
- 6 黒色土 (Hue10YR2/1) しまりなし。
- 7 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 8 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりあり。黄褐色土、黒色土ブロックを少量含む。
- 9 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。褐色土ブロックを含む。
- 10 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりなし。黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 11 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。褐色土ブロックを多量に含む。
- 12 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりなし。
- 13 褐色土 (Hue10YR4/4) しまりなし。黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 14 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性弱く、しまりあり。黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 15 暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまりなし。粒状褐色土ブロックを含む。
- 16 黒色土 (Hue10YR2/1) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。

と判断される。

本溝跡からは縄文時代中・後期に比定される縄文土器が出土した。また出土状態は不明であるが覆土中より陶器(無釉)片1点も出土している。東側の調査区外で近世の野馬土手(土手2)と交錯すると推測されることから近世以前に機能していた溝跡と推測されるが、性格や機能した時期の詳細は不明である。

第8節 沢 跡

沢跡1はA区①調査区の北端から検出された沢状の地形で、平成20年度の調査区域外に延びるため全体の規模は不明である(第30図)。この沢跡1は近代の遺構と推測される第3号堅穴遺構と重複するが、3堅はこの沢跡覆土を掘り込んで構築されている。

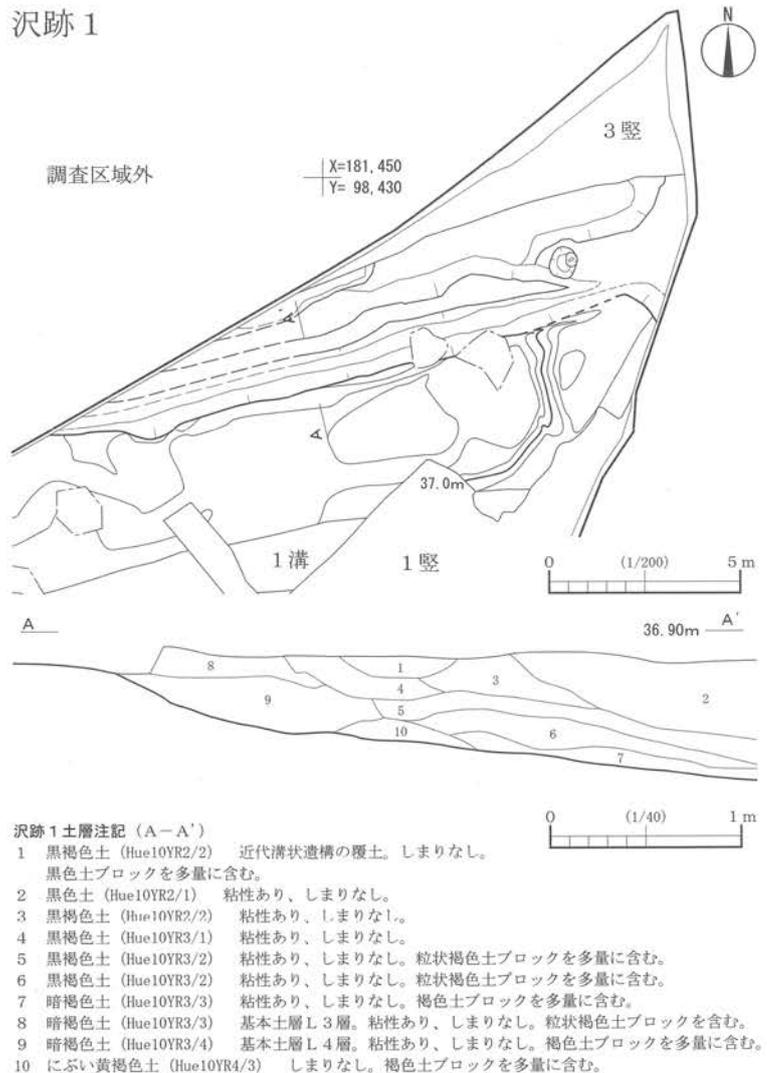
沢跡1の底面は比較的平坦で、溝状の掘り込みが2条確認された。沢跡の覆土は7層(第1層~第7層)からなるが、第1層は底面の溝跡と同様に溝状の落ち込みとなる。

第8層・第9層は黄褐色土層を地山とする旧地形である沢状地形に形成された遺物包含層L3・4層と推測される。本沢跡の覆土(第1層~第7層)からは縄文時代中・後・晩期に比定される縄文土器とともに弥生土器、石鏃等の石器・石製品、土製品が出土する。しかし陶磁器などの近代以降の遺物は確認されなかった。

北へ向かって落ち込むこの沢状の旧地形縁辺には、第1号・第2号堅穴住居跡が立地する。1・2住はこの沢状地形により削平されるようである。集落の廃絶後は沢状の旧地形斜面上にL3・4層の遺物包含層が形成されて沢状地形は埋没するが、沢跡1はこの遺物包含層を削平して形成され、埋没しながらも、継続的に利用されていたことが窺える。本沢跡の形成時期については不明といわざるを得ないが、概ね近世以前の時期と推測される。

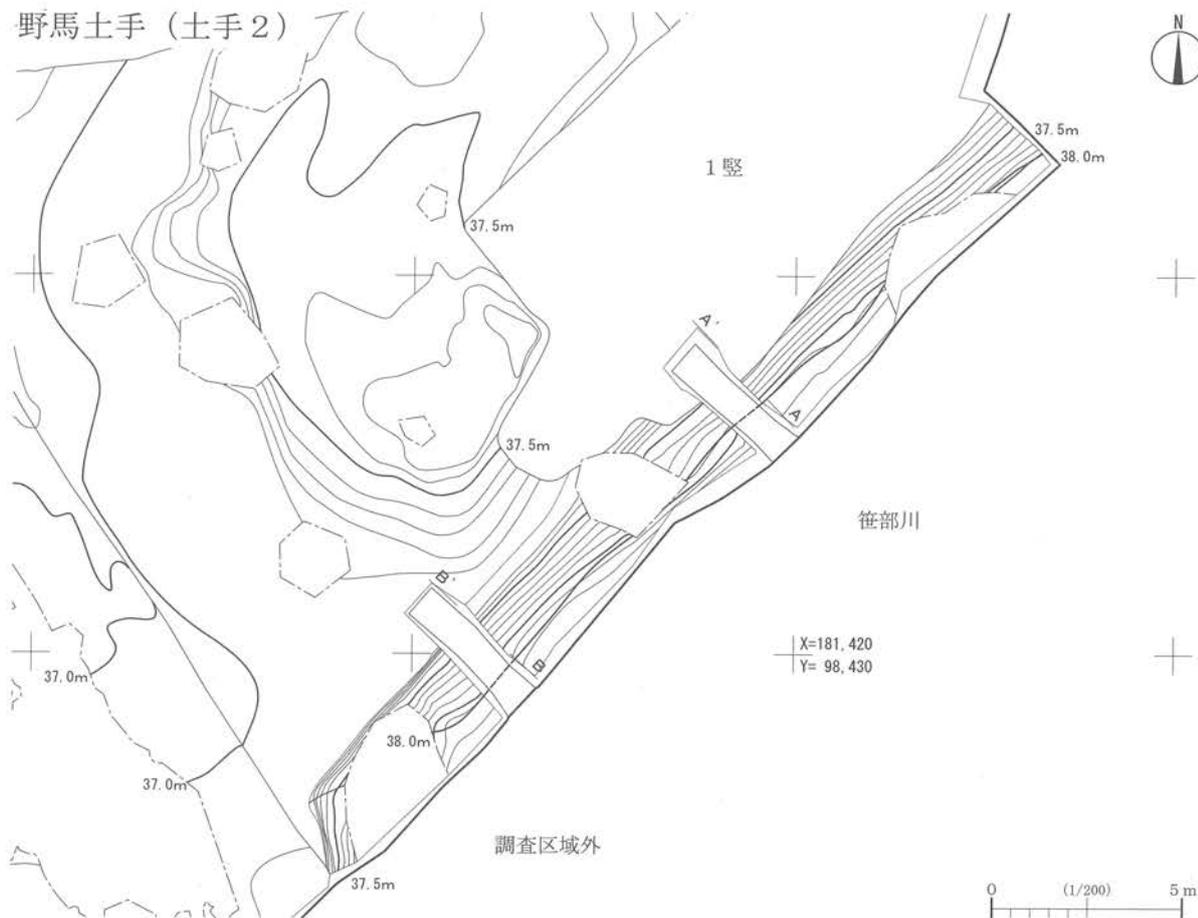
第9節 野 馬 土 手

野馬土手は、江戸時代の寛文6年(1666年)に相馬中村藩3代藩主相馬忠胤によって、野馬追のために保護されていた野馬の逃散防止、民家や農耕地への侵入を防ぐために環状に築かれたとされる土手のことである。



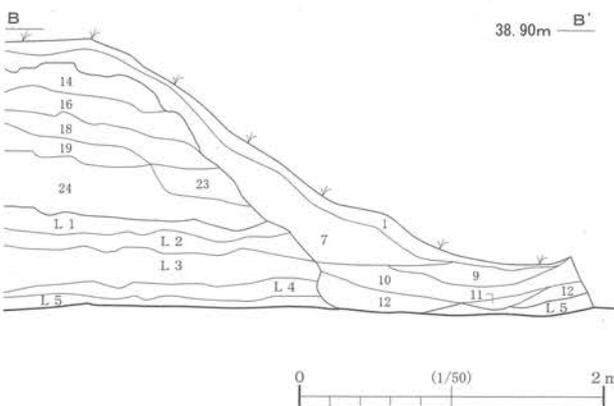
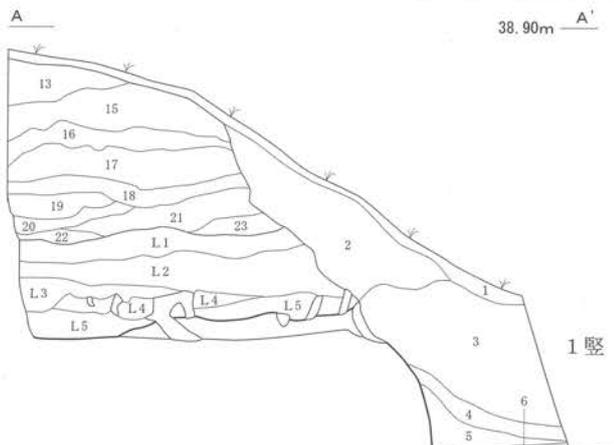
第30図 沢跡1

野馬土手 (土手2)



土手2 (1・2号トレンチ) 土層注記 (A-A', B-B')

- 1 現表土。腐食土層または碎石、山砂による盛土層。
- 2 黒色土 (Hue10YR2/1) 粘性、しまり弱い。
- 3 石炭灰による盛土 1 堅覆土。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 1 堅覆土。粘性弱く、しまりなし。粒状黄褐色土ブロックを多量に含む。炭灰をわずかに混入。
- 5 褐色土 (Hue10YR4/4) 1 堅覆土。しまり弱い。粒状黄褐色土ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 6 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 1 堅覆土。粘性強い、しまり弱い。粒状黄褐色、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 7 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性なし、しまり弱い。
- 8 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりあり。黄褐色土ブロックを含む。
- 9 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。
- 10 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。
- 11 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土を少量混入。
- 12 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 粘性弱く、しまりあり。粒状黄褐色土ブロックを含む。炭化物・焼土を少量混入。
- 13 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 野馬土手盛土層。粒状黄褐色土ブロックをわずかに含む。
- 14 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 野馬土手盛土層。粘性、しまりなし。
- 15 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 16 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 17 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 18 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 19 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 20 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。粒状炭化物・焼土混入。
- 21 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黒褐色土ブロックを少量含む。
- 22 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 23 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 24 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 野馬土手盛土層。粘性なし、しまり弱い。にがい黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。



第31図 野馬土手 (土手2)

野馬土手は、野馬追原（南相馬市原町区雲雀ヶ原周辺）を囲むように不整形な楕円形状に東西約8km、南北約3km、全周約22kmにわたり構築される。その大部分は土塁状であるが、一部石垣としたところもある。野馬土手には内外の往来のための木戸が設けられていたが、現在では、石垣で構築された土手が残る「羽山岳の木戸」跡のみが遺存している。

野馬土手の基本的な構造は、土手とその内側に平行して巡らされた堀によって構成されている。規模は上端幅が1間（6尺=1.8m）、基底幅が3間（18尺=5.4m）、高さ1間（6尺=1.8m）が基本となる。土手内側（堀側）の傾斜が強く、外側の傾斜が緩やかとなり、断面は台形状を呈する。

平成20年度に本発掘調査を行った野馬土手は、南相馬市原町区西町三丁目地区に所在し、「苧屋沢木戸」と「大木戸木戸」との間に位置する。原町区西町地区における野馬土手は笹部川を内側の堀とする構造となる。今回の調査対象範囲内には、笹部川に沿うように約230mにわたって2条遺存するが、これは本来連続していた土手が生活道路により分断されたものである。そのうちA区①に遺存する野馬土手を「土手2」、A区②からB区にいたる野馬土手を「土手3」と呼称した。本発掘調査はこれらの野馬土手の構造と遺存状況を11本のトレンチ（4～14号トレンチ）を設定して調査し、記録保存することを目的に実施された。しかし、今回の発掘調査においては、現況の野馬土手が笹部川の堤防として利用されているため、野馬土手を除去するような全面発掘は不可能であった。また笹部川の浸食により崩落が顕著であったため規模や形態の詳細について把握することは困難であった。

土 手 2（第31図）

A区①に北東-南西方向（N45° E）に約26m現存する野馬土手である。A区①調査区内は西側が近年まで宅地として利用されていたため土手2西端は削平され現存していない。

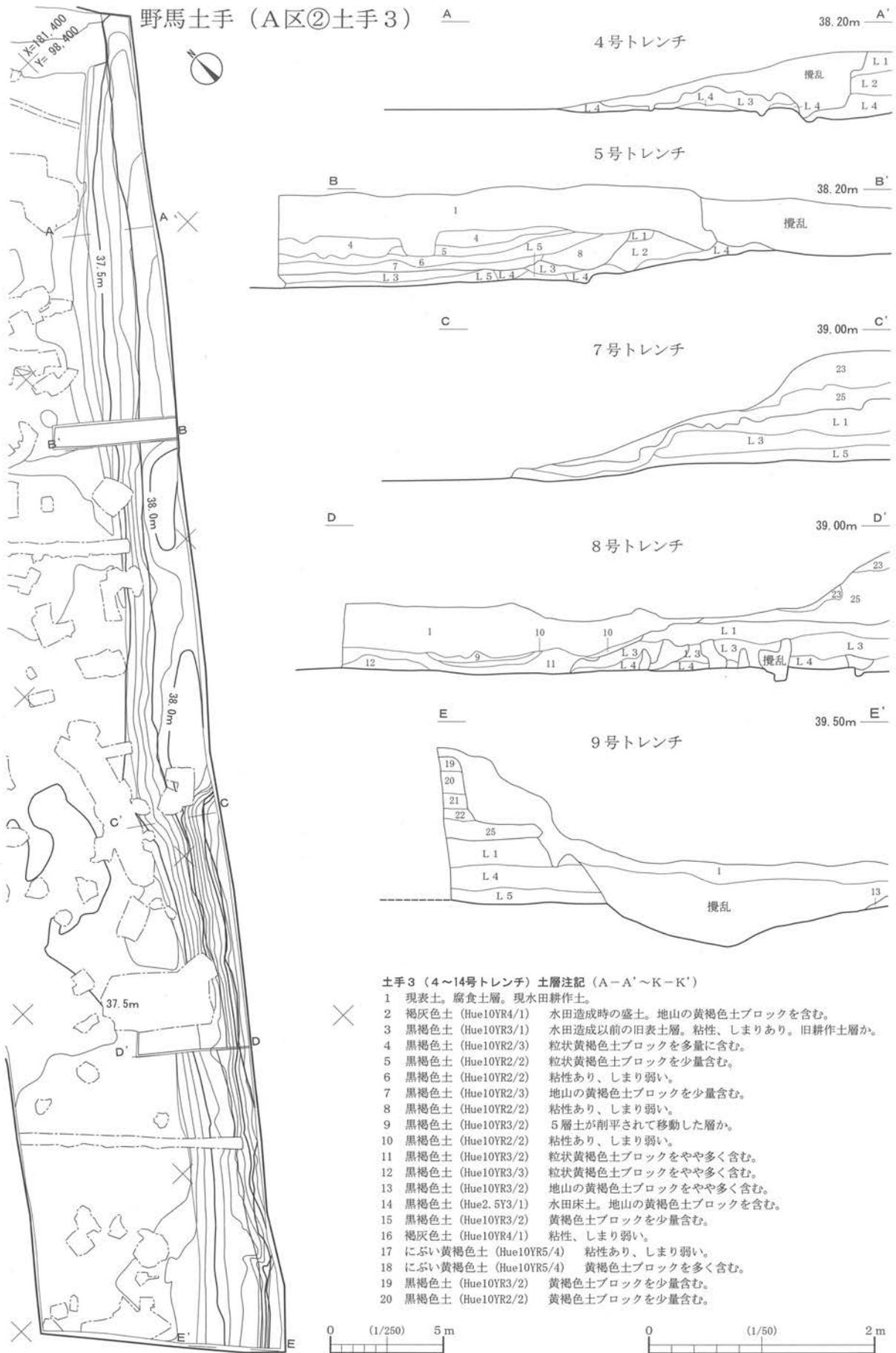
土手2北側（外側）の基底部分は近代の第1号堅穴遺構との重複により削平され、南側（内側）は笹部川によって削平されている。現況では上端幅0.7～2.1m、基底幅約4.8m、外側となる現表土からの高さは約1.5m、内側になる笹部川（内堀）河床からの高さは約3.0mを測る。

土手2に直交するように設定された1・2号トレンチの土層観察によれば、基盤は野馬土手構築以前の旧表土層（遺物包含層L1～5層）であり、地山の黄褐色土層上に約0.45～0.75m堆積し、その上に約1.1～1.2mの厚さで積土される。積土は大きくは12層（第13～24層）に分けられ、ほぼ水平に積まれている。いずれもしまりの弱い黒褐色土層を基調とするが、地山の黄褐色土ブロックを比較的多く含む層（第16・18・20・22・23層）と少ない層が互層とされることが観察される。このことから野馬土手構築以前の旧表土を利用して簡便に構築されていると推測される。外側勾配は1号トレンチにおいては1号掘削により削平され51°となるが、2号トレンチでは46°を測る。

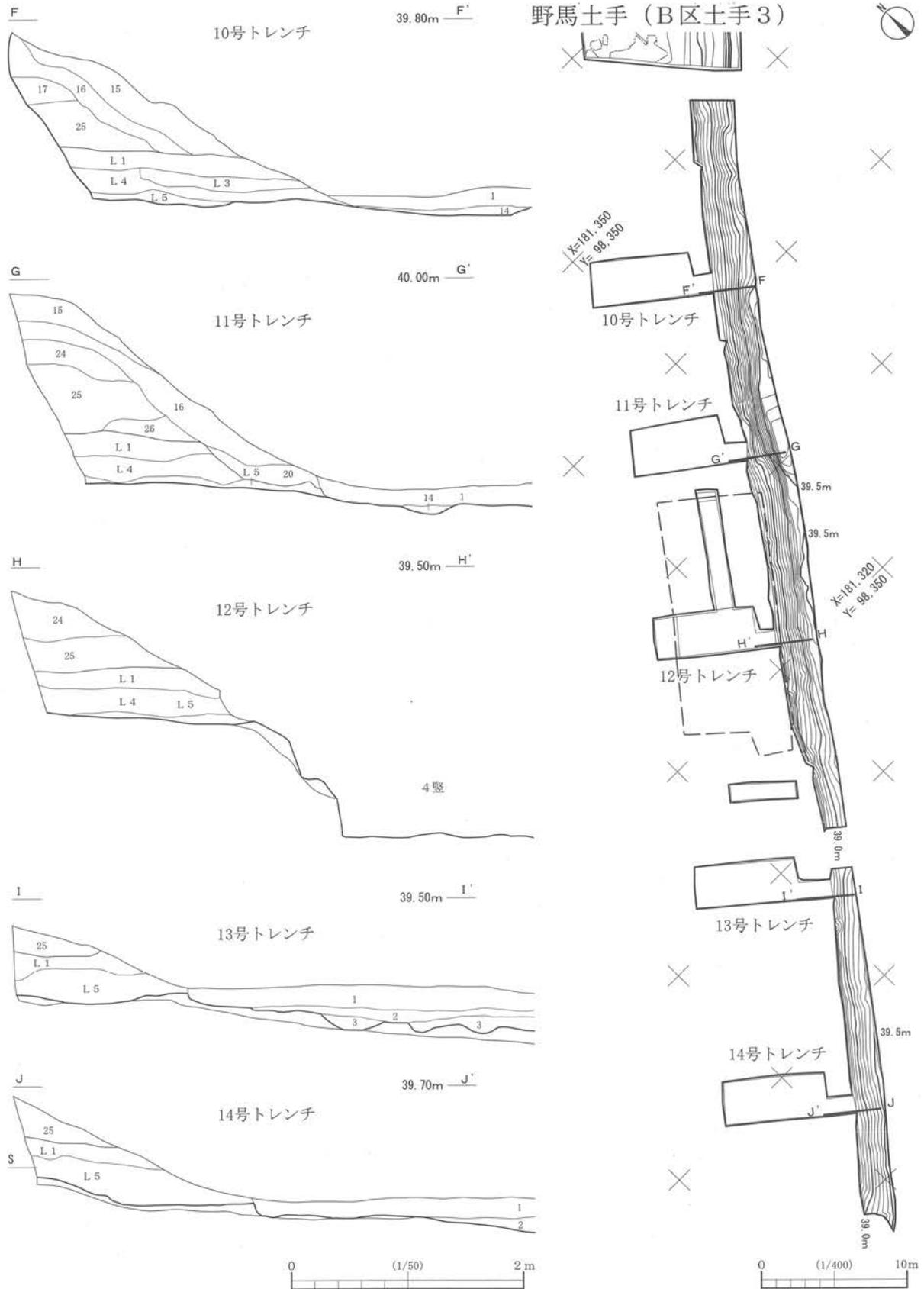
積土内からは、野馬土手の構築時期を窺わせるような遺物は出土しなかった。

土 手 3（第32・33図）

A区②からB区にかけて、北東-南西方向（N39° E）に約140mにわたって現存する野馬土手である。A区②の調査区内は近年まで宅地として利用されていたが、それ以前はB区と同様



第32図 野馬土手 (A区②土手3)



土手3 (4~14号トレンチ) 土層注記 (A-A'~K-K')

- 21 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 黄褐色土ブロック多量に含む。
- 22 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 黄褐色土ブロックを含む。
- 23 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 黄褐色土ブロックを含む。
- 24 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 粘性あり、しまり弱い。

- 25 黒褐色土 (Hue10YR3/1) にぶい黄褐色土ブロックを少量含む。粒状炭化物混入。
- 26 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 粘性弱い、しまり強い。粒状黄褐色土ブロックを少量含む。

第33図 野馬土手 (B区土手3)

に水田として利用されていたと推測される。そのためA区②に現存する土手3は削平・攪乱が顕著であり遺存状況は不良である。以下、調査区ごとに詳述する。

A区② A区②の土手3（第32図）は延長約60m、近・現代の土地利用により削平はされてはいるが、基底幅で最大約4mが調査対象となった。調査前はタケが繁茂しており、野馬土手南側（内側）は笹部川によって大きく崩落している状況が確認された。

遺存状況が比較的良好である西側の現況では、上端幅の最大幅は約1.2m、野馬土手外側の高さは、現表土から最高で約1.0m、内側の高さは笹部川（内堀）河床から約2.8mを測る。

A区②の土手3では野馬土手に直交するように4～9号トレンチが設定された。その土層観察によれば、近・現代の攪乱が地山までいたっているが、基盤となる野馬土手構築以前の旧表土層（遺物包含層L1～5層）が遺存しているのが確認された。旧表土層は地山の黄褐色土層上に水平に堆積し、層厚は最厚で約0.74mが遺存する。積土はその上に約0.75mの厚さで水平に堆積する。A区①の土手2と同様に、いずれも、しまりの弱い黒褐色土層を基調とする積土は、大きく8層（第19～26層）に分けられる。また積土内からは、野馬土手の構築時期を窺わせるような遺物は出土しなかった。

B区 B区の土手3は東方橋までの延長約90mが調査対象となった（第33図）。調査前現況はタケが繁茂しており、野馬土手南側（内側）は笹部川によって大きく崩落しているが、遺存状況は比較的良好であることが想定された。しかし東方橋のたもと付近では、護岸工事が実施されており、野馬土手はすでに破壊されていることがトレンチ調査により確認されたため、調査対象範囲の延長は約79mとされた。

B地区の現況での上端幅は最大幅で約2.8m、野馬土手外側の高さは、現表土である水田面から最高で約2.3m、内側の高さは笹部川（内堀）河床から約3.7mを測る。

B区の土手3では野馬土手に直交するように10～14号トレンチが設定された。その土層観察によれば、基盤となる野馬土手構築以前の旧表土層（遺物包含層L1～5層）が遺存しているのが確認された。旧表土層は地山の黄褐色土層上に水平に堆積し、層厚は11号トレンチで最も厚く約0.6m、最も薄い13号トレンチで0.45mが遺存する。

積土はその上に約0.2～0.8mの厚さで水平に堆積する。A区①の土手2と同様に、いずれも、しまりの弱い黒褐色土層を基調とする。また土手3の表土及び積土内からは縄文土器が出土するが、野馬土手の構築時期を窺わせるような遺物は出土しなかった。

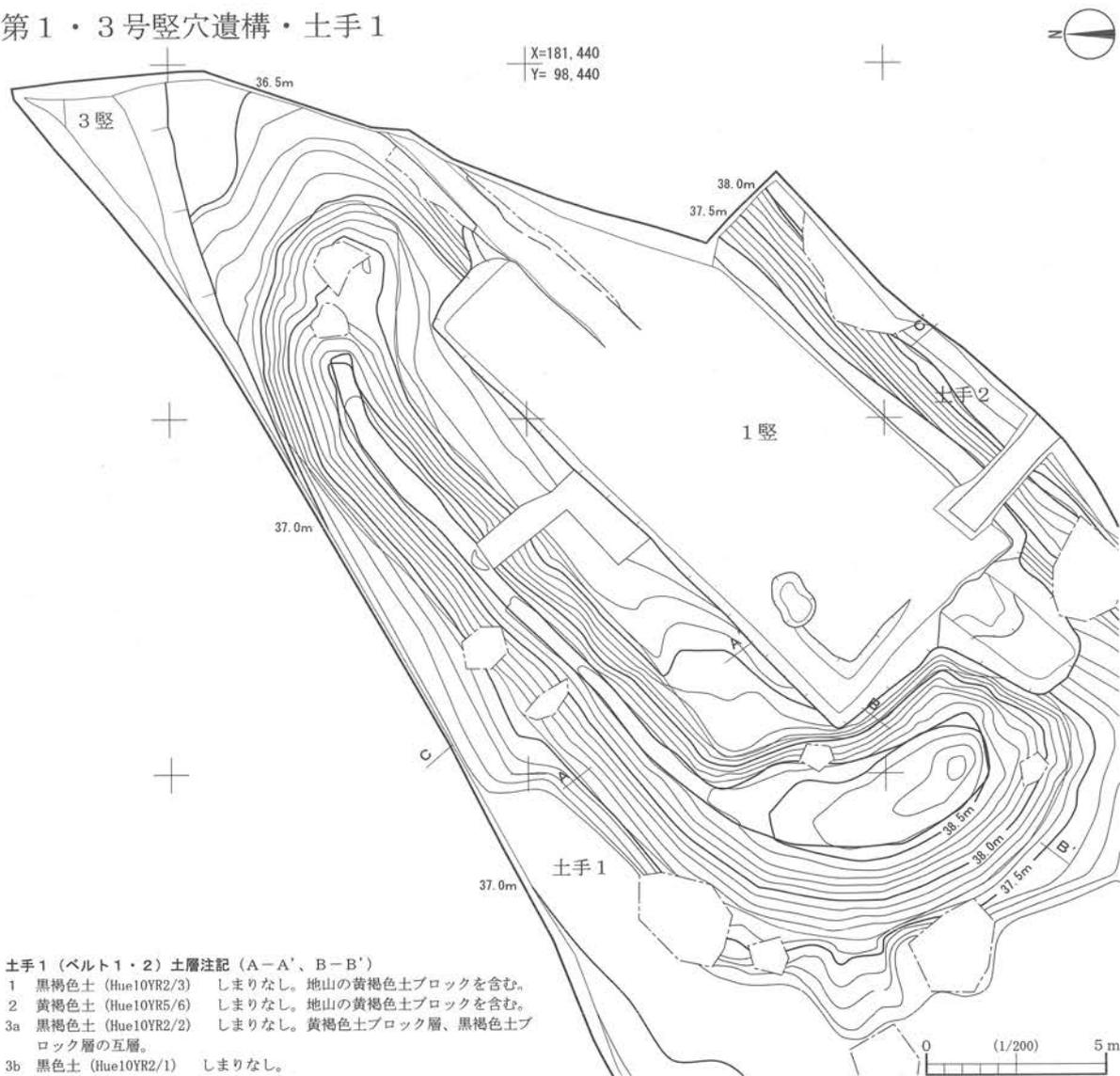
第10節 竪穴遺構・土手

竪穴遺構は4基検出された。調査区別の内訳はA区①から2基（第1号・第3号竪穴遺構）、A区②1基（第2号竪穴遺構）、B区1基（第4号竪穴遺構）である。このうち第1号竪穴遺構には土手（土手1）が付設されている。

第1号竪穴遺構・土手1（第34図）

A区①調査区の北半部で検出された。平面形は長方形を呈し、規模は16.69m×8.06m、深さ

第1・3号竪穴遺構・土手1



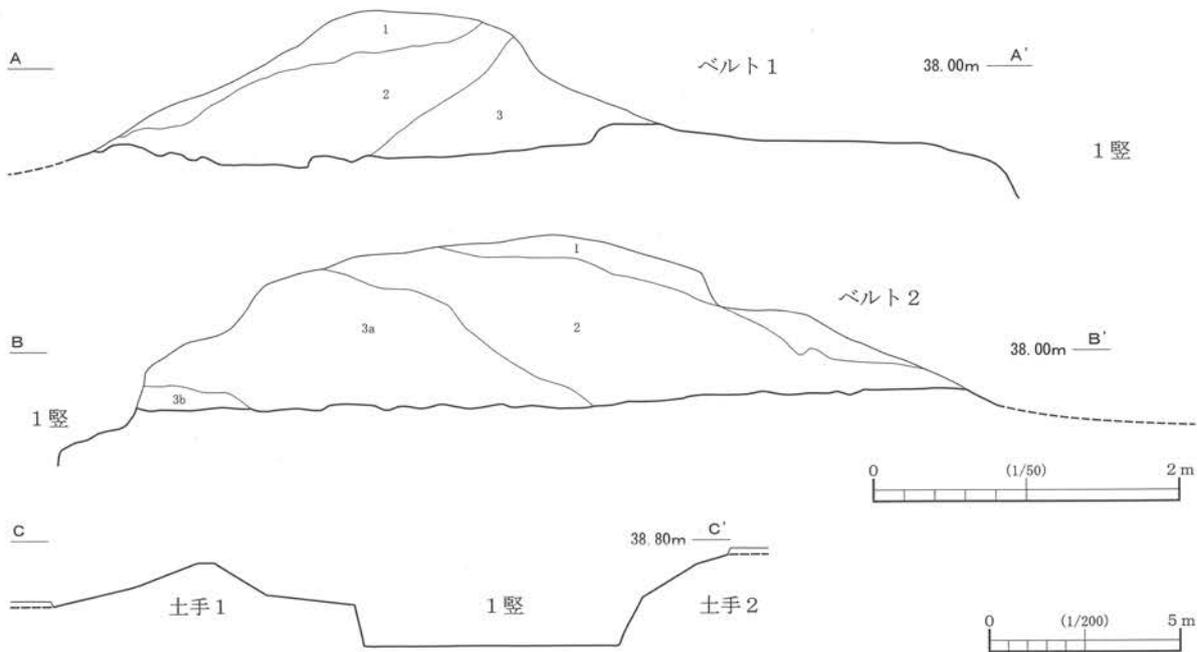
土手1 (ベルト1・2) 土層注記 (A-A', B-B')

1 黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを含む。

2 黄褐色土 (Hue10YR5/6) しまりなし。地山の黄褐色土ブロックを含む。

3a 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりなし。黄褐色土ブロック層、黒褐色土ブロック層の互層。

3b 黒色土 (Hue10YR2/1) しまりなし。



第34図 第1・3号竪穴遺構・土手1

1.08～1.52mを測り、長軸方向は近世の野馬土手である土手2に近似するN44° Eを示す。底面標高は35.996mである。

長軸の1辺を土手2に接して掘削され、残る3辺には掘削時の排土を利用した「コ」の字形の土手1が構築されている。堅穴は南西隅が突出し、土手1が土手2に接していない点より、南西側に出入口が付設されていたものと推定される。堅穴の壁面・底面は丁寧に整形され、平滑に仕上げられている。底面に建物等の基礎と推定される構造物およびその痕跡は認められなかった。

堅穴は近隣の紡績工場から排出・搬入されたと伝えられる多量の石炭灰を含む土砂で埋め戻されており、その際に土手北東辺と堅穴北東壁の一部を切り崩し、埋め戻し用の斜路を構築している。

土手の規模は、底面で幅約3.8～6.0m、高さ約1.0～1.2mを測る。土手の構築土は3層からなるが、版築状ではなく、堅穴遺構に近い部分から掘削と同時に排土を積み上げられており、しまりも弱く転圧等を行われていないものと推定される。

堅穴内及び土手の積土内からは縄文土器、石器・石製品等が出土した。

第1号堅穴遺構の所属時期については、時期を特定できる遺物に乏しいため判然としないが、野馬土手を利用して構築されている点より、近世以降に比定されよう。周辺の聞き取り調査によれば、第2次世界大戦中に防空壕として原町中学校（現・福島県立原町高等学校）の生徒によって構築されたと伝えられている。

第2号堅穴遺構（第35図）

A区②北東端で検出された。遺構の大半はA区①とA区②の間を走る生活道路部分に位置するため、正確な全体形・規模は不明である。検出時における平面形はやや不整な長方形を呈し、規模は4.20m×2.44m、深さ0.86～1.47mを測り、長軸方向N50° Wを示す。底面標高は35.671mである。

堅穴は空き缶・ガラス製品等を含む、黒褐色土と黄褐色土の混在土で埋め戻されている。遺物は出土しなかった。

第2号堅穴遺構の所属時期については、覆土に含まれる空き缶・ガラス製品等より現代と推定され、性格については攪乱の可能性が高い。

第3号堅穴遺構（第34図）

A区①北東端で検出された。遺構の大半はA区①北側を走る市道部分に位置するため、全体形・規模は不明である。

堅穴は第1号堅穴遺構と酷似した多量の石炭灰を含む土砂で埋め戻されている。遺物は縄文土器、石器・石製品類が出土した。

第3号堅穴遺構の所属時期については、覆土が第1号堅穴遺構と酷似している点より、第1号堅穴遺構同様に近代以降と推定される。性格については判然としない。

第4号堅穴遺構（第35図）

B区中央部、12号トレンチおよび15号トレンチで検出された。平面形は長方形を呈し、規模

は16.56m×7.39m、深さ0.61～1.01mを測り、長軸方向は土手3に近似するN37° Eを示す。底面標高は37.143mである。

長軸の一端を土手3（野馬土手）に接して掘削されている。竪穴は南西隅が突出し、南西側には出入口が付設されていたものと推定される。竪穴の壁面・底面はスコップ状の工具により丁寧に整形され、平滑に仕上げられている。底面には拳～人頭大の礫が一面に敷き詰められていたが、建物等の基礎と推定される構造物およびその痕跡は認められなかった。残る3辺には第1号竪穴遺構と同様に、掘削時の排土を利用した土手が構築されていたと推定され、土手3の表面に土手の痕跡と思われる地山の黄褐色土が遺存していた。

竪穴はB区周辺が水田化された際に埋め戻されたと推定され、その際に付設されていたと推測される土手も崩された可能性が高い。埋土は竪穴遺構の掘削時の排土であり、付設されていたと推測される土手の構築材である黒褐色土・黄褐色土の混在層であるが、底面近くには水田の肥料とするために投棄したと推定されるビニール及び樹脂製品を含むし尿廃棄物の堆積層が認められた。遺物は出土しなかった。

第4号竪穴遺構の所属時期については、時期を特定できる遺物に乏しいため判然としないが、第1号竪穴遺構とほぼ同様の形態・規模を有し、同じように野馬土手を利用して構築されている点より、近世以降に比定されよう。また、埋め戻された時期については、埋土にビニールや樹脂製品が含まれている点より、第2次世界大戦後と推定される。性格についても第1号竪穴遺構と同様に防空壕の可能性が高いものと思われる。

第1号竪穴遺構および第4号竪穴遺構の所属時期・性格については、前述の通り第2次世界大戦中に構築された防空壕（掩蔽壕）の可能性が高いものと思われる。その理由としては、原町飛行場の隣接地にあり連合軍による空襲が予想される点、現在残されている第2次世界大戦中に構築された掩蔽壕に規模や形態が類似している点等があげられる。類例としては、茨城県石岡市八軒台や小美玉市百里基地内にある掩蔽壕がある。ただし壕内の施設については、建物等の痕跡を示す遺構が発見されていない点や、該期の遺物が全く出土しなかった点より、判然としない。

第11節 遺物包含層

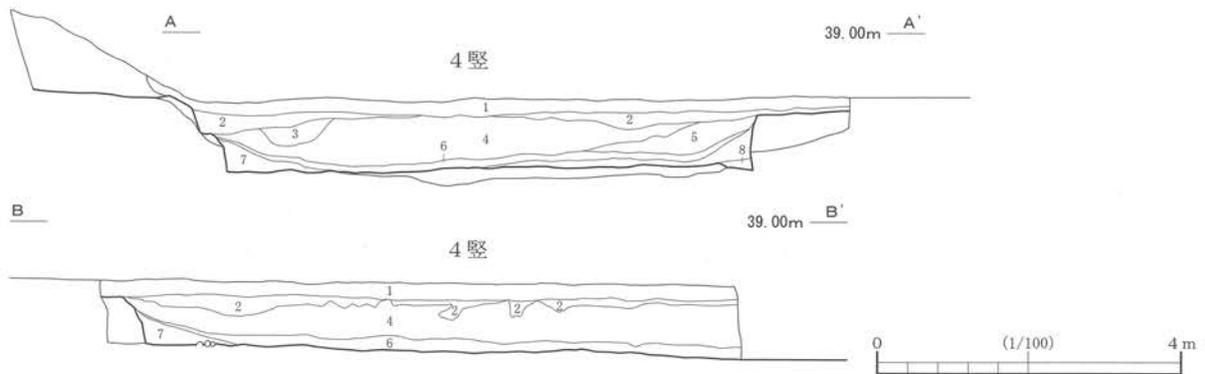
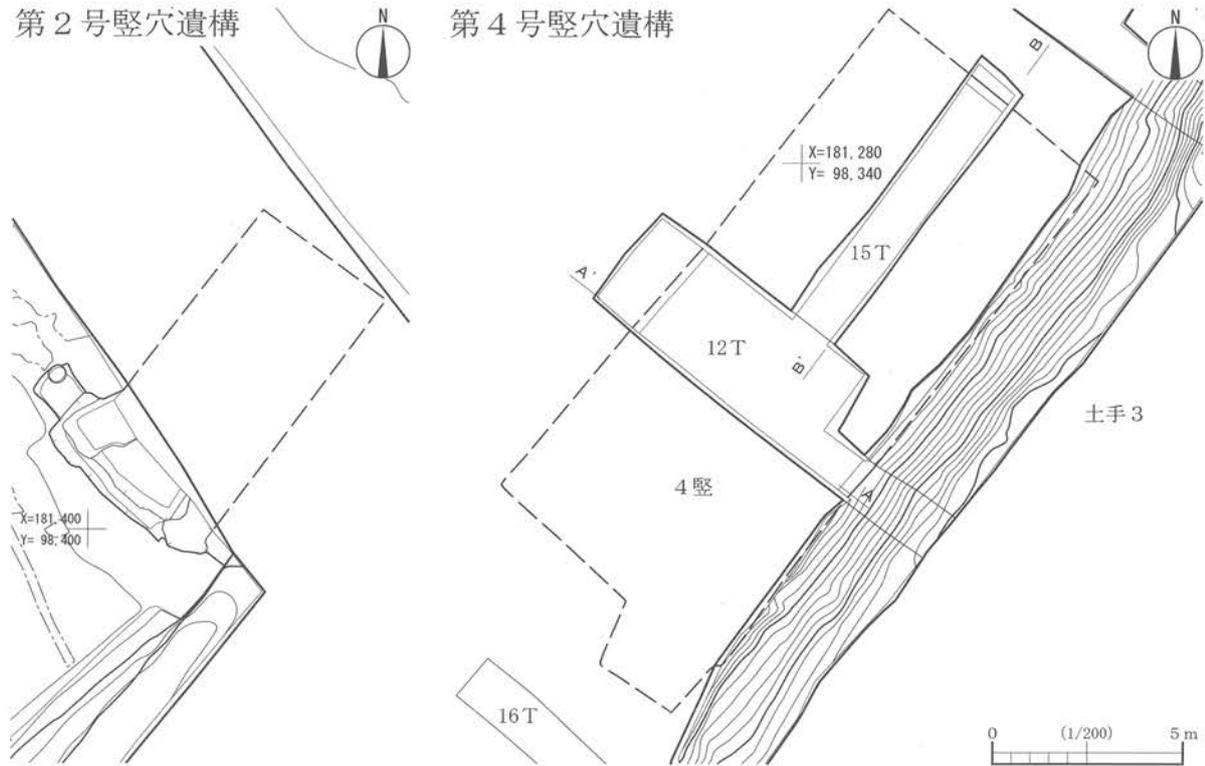
平成19年度の試掘調査により、近代の土手1下層には遺物包含層が遺存していることが確認されていた。

平成19年度に実施された試掘調査の成果及び平成20年度の本発掘調査における土手1周辺での土層観察によれば、現表土（試掘LⅠ層）下には土手1及び野馬土手構築以前の旧表土層である層厚約0.6mのL1・2層黒褐色土（試掘LⅡa層）、層厚約0.1～0.2mのL3・4層黒褐色土（試掘LⅡb層）が堆積する。その下層には層厚約0.1mのL5層褐色土（試掘LⅢ層）が堆積するが、このL5層上面が遺構検出面となり、地山は黄褐色土層となる（第36図）。

遺物包含層からの出土遺物については、遺物の出土状況や分布状況を把握するために「土手

第2号竖穴遺構

第4号竖穴遺構



第4号竖穴遺構 (12・15号トレンチ) 土層注記 (A-A'、B-B')

- 1 灰色土 (Hue7.5Y4/1) 粘性、しまり強い。現水田耕作土。
- 2 黄灰色土 (Hue2.5Y4/1) 粘性、しまり強い。灰色粘土ブロックを70%、黄褐色土ブロックを30%含む。
- 3 黄灰色土 (Hue2.5Y4/1) 粘性、しまり強い。灰色粘土ブロックを50%、黄褐色土ブロックを50%含む。
- 4 黄褐色土 (Hue2.5Y5/3) 粘性、しまり強い。黒色土ブロックを含む。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 粘性、しまり強い。地山の黄褐色土ブロックを5%含む。
- 6 褐灰色土 (Hue10YR4/1) 粘性、しまりあり。上面にビニール等混入。
- 7 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 粘性、しまりあり。竖穴遺構廃絶後の自然堆積層。中央部グライ化顕著。
- 8 褐灰色粘土 (Hue10YR4/1) 粘性あり、しまり強い。竖穴遺構機能時の堆積層もしくは掘り方覆土。

第35図 第2・4号竖穴遺構

第8表 野馬土手・原町西町遺跡 竖穴遺構一覧

単位：m

遺構	検出地点	平面形態	長軸	短軸	底面標高	壁 高 (cm)				長軸方向	重複関係	備考
						東壁	西壁	南壁	北壁			
1 竖	A区①	長方形	16.69	8.06	35.996	128	108	152	131	N44° E	土手1	土手1付設、防空壕か
2 竖	A区②	長方形か	4.20	<2.44>	35.671	-	147	86	146	N50° W		攪乱か
3 竖	A区①	長方形か	-	-	-	-	-	-	-	-	沢跡1	攪乱か
4 竖	B区	長方形か	(16.56)	(7.39)	37.143	101	73	70	61	N37° E	土手3	防空壕か

第9表 遺物包含層出土遺物数量一覧(1)

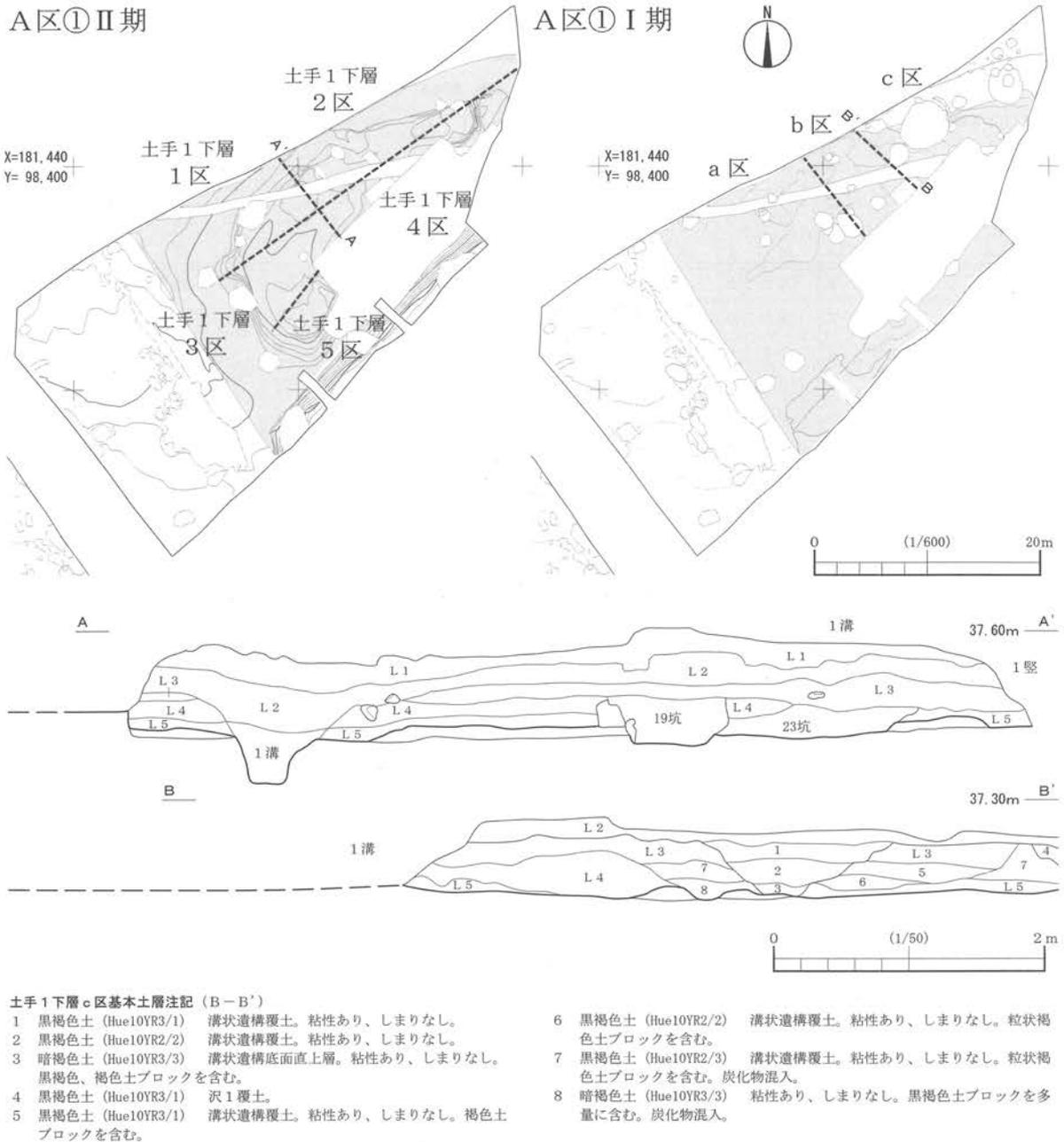
出土地点		縄文	弥生	石器 石製品	礫	剥片	土製品	合計		
1区	LII	919	0	1	87	38	0	1,045	1,058	4.4%
	LIII上面	11	0	0	0	2	0	13		
2区	調査区	78	0	0	0	0	0	78	3,849	15.8%
	LII	3613	0	3	85	14	0	3,715		
	LIII上面	55	0	0	1	0	0	56		
3区	LII	1228	0	4	50	16	0	1,298	1,409	5.8%
	LIII上面	8	0	0	0	0	0	8		
	LIII	89	0	0	14	0	0	103		
4区	LII	887	0	1	19	3	0	910	910	3.7%
5区	LII	27	0	0	5	0	0	32	39	0.2%
	LIII	7			0		0	7		
a区	LII	87	0	0	4	2	0	93	292	1.2%
	LIII	82	1	0	2	9	0	94		
	L4	97	0	1	1	6	0	105		
b区	調査区	0		1	0		0	1	651	2.7%
	LII	255	0	0	19	6	0	280		
	LIII	4			2		0	6		
	L3	331	0	1	20	2	0	354		
	L5	9	0	0	1	0	0	10		
c区	調査区	1			0		0	1	3,683	15.2%
	LI	351	0	0	13	0	0	364		
	LII	252	0	0	16	6	0	274		
	LIII	259	0	0	11	0	0	270		
	L3	2626	9	2	70	3	0	2,710		
	L4	63	0	0	1	0	0	64		
沢跡1		6814	18	5	130	17	6	6,990	7,243	29.8%
	LII	165	0	0	0	0	1	166		
	L1	76	0	0	0	0	0	76		
	L2	11	0	0	0	0	0	11		
土手1下層	LII	506	0	0	15	2	0	523	524	2.2%
	LIII	1						1		
土手1北側	黒色土	1			0	1	0	2	490	2.0%
	調査区	11		1	1	2	0	15		
	LII	432	0	1	33	6	1	473		
土手1西側	LI	41	0	0	0	0	0	41	158	0.7%
	LII	100	0	2	12	3	0	117		
土手1東側	LII	1536	0	1	41	8	0	1,586	1,586	6.5%
土手1ベルト	LII	190	0	1	9	7	0	207	211	0.9%
	LIII	3			1		0	4		
土手2下層	黒色土	5			0		0	5	204	0.8%
	LII	194	0	0	5	0	0	199		
調査区		473	0	9	2	0	5	489	1,983	8.2%
	LII	0		3	21	3	0	27		
	LII	1343	0	0	58	1	0	1,402		
	LIII	58	0	0	2	5	0	65		
合計(破片数)		23,299	28	37	751	162	13	24,290	24,290	100.0%
合計(比率)		95.9%	0.1%	0.2%	3.1%	0.7%	0.1%	100.0%		

1西側」・「土手1北側」・「土手1東側」、
「土手1下層1～5区」または「a～c区」等の区画を調査の進捗に応じて設定(第36図)し、あわせて「LI～III」及び「L1～5」の層序毎に取り上げることとした。

近代の土手1を除去した段階でのA区①の地形は、調査区北端に形成されている沢状地形(沢跡1)に向かって南から北へ、西から東へ徐々に標高を減じる地形となる。遺物包含層を取り除いた旧地形の段階でも、この地形の状況には大きな変化はないが、遺物包含層は西から東へ、南から北へ徐々に層厚を増して堆積している。この沢状地形の縁辺には、縄文時代の竪穴住居跡や生産に関連すると推測される遺構が集中しているが、遺物もこれらの遺構が集中する範囲である「土手1下層2区」及び「c

第10表 遺物包含層出土遺物数量一覽(2)

出土地点	縄文 早期	縄文 前期	縄文 中期	縄文時代後期			縄文時代晩期			条痕文		縄文		捺糸文		無文	底部	合計	
				前葉	末葉	後期	前葉	中葉	後葉	刷毛目	櫛菌	羽状	斜縄文	網状	縦位				
L I	土手1西側	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	0	2	0	25	3	41	
	c区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	69	13	3	68	91	13	84	10	351
L II	1区	0	5	1	0	151	1	6	4	7	50	32	1	93	181	56	296	35	919
	2区	0	3	8	2	32	0	1	75	10	681	137	24	611	720	126	1059	124	3,613
	3区	6	19	10	1	61	14	2	12	2	70	103	5	78	210	43	540	52	1,228
	4区	1	0	6	3	13	0	0	15	19	171	44	6	146	196	22	215	30	887
	5区	0	1	0	0	1	0	1	0	0	2	2	1	1	7	1	6	4	27
	a区	6	2	3	0	0	0	3	0	0	0	2	2	9	7	1	50	2	87
	b区	0	0	0	0	6	0	1	1	5	25	13	0	24	63	8	98	11	255
	c区	0	1	0	0	14	5	0	8	7	1	16	0	55	46	13	81	5	252
	土手1下層	1	0	1	1	7	0	0	9	3	57	7	3	59	76	12	264	6	506
	土手1北側	7	9	5	0	21	0	0	8	2	26	8	2	56	89	25	162	12	432
L III	土手1西側	1	0	0	0	4	0	0	1	0	5	9	1	29	4	1	41	4	100
	土手1東側	0	0	1	4	5	3	0	10	29	401	43	5	290	244	66	392	43	1,536
	土手1ベルト	0	1	1	0	13	1	0	5	2	17	8	1	22	22	6	87	4	190
	土手2下層	0	2	0	0	6	0	0	1	0	6	12	0	34	60	0	69	4	194
	沢1覆土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	3	1	41	28	14	51	6	165
	調査区	5	5	3	2	34	1	0	20	21	118	78	22	236	322	32	412	32	1,343
	番号付	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1区	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	5	0	11
	2区	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	2	0	7	20	8	15	0	55
	3区	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5	0	8
L III	3区	0	13	0	1	11	0	0	3	0	2	3	0	7	2	1	44	2	89
	5区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	2	7	
	a区	1	4	0	1	1	0	3	1	2	1	0	0	6	11	1	49	1	82
	b区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
	c区	0	1	12	0	2	1	0	2	1	39	18	0	55	30	25	73	0	259
	土手1下層	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	土手1ベルト	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3
	調査区	2	0	1	0	2	0	0	1	1	4	1	0	8	4	0	33	1	58
	L 1	沢1覆土	0	0	0	0	0	0	0	0	16	6	1	9	11	13	20	0	76
	L 2	沢1覆土	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1	0	1	0	3	0	11
L 3	b区	0	0	2	2	4	1	2	2	6	14	21	3	54	69	23	118	10	331
	c区	0	4	22	0	41	6	3	52	26	231	177	30	470	586	54	841	83	2,626
L 4	a区	1	0	0	0	6	0	3	4	0	2	8	0	3	7	0	60	3	97
	c区	1	2	0	0	0	0	0	0	0	6	4	1	10	17	14	8	0	63
L 5	b区	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	3	1	9	
沢跡1		0	0	6	0	41	9	0	153	18	978	322	53	1049	1207	670	2082	226	6,814
黒色土	土手2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3	0	5	
	土手1北側	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	
調査区	土手1北側	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1			1	4	3	0	11	
	2区	0	0	0	0	0	0	0	0	8	2	0	9	22	7	27	3	78	
	b区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	c区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	番号付	6	0	0	1	11	0	0	18	3	28	21	30	74	134	11	92	44	473
合計(破片数)	39	75	83	19	490	42	25	406	164	3056	1130	196	3622	4492	1271	7426	763	23,299	
合計(比率)	0.2%	0.3%	0.4%	0.1%	2.1%	0.2%	0.1%	1.7%	0.7%	13.1%	4.8%	0.8%	15.5%	19.3%	5.5%	31.9%	3.3%	100.0%	



第36図 遺物包含層 (A区① I・II期)

区」から多く出土している。遺物包含層が流れ込む沢跡1を含めた遺物包含層出土遺物数量24,290点のうち、土手1下層2区3,849点(15.8%)、c区からは3,683点(15.2%)、沢跡1から7,243点(29.8%)が出土している。

この遺物包含層はA区②及びB区の土手3の積土下層からも確認されているが、出土する遺物数量は圧倒的にA区①からが多い。

遺物包含層からは、縄文時代早・前・中・後・晩期の縄文土器や石器・石製品、土製品が出土する。発掘調査では、層序による出土遺物の把握に努めたが、層序による出土遺物の時代別の傾向は窺われず、いずれの層からも本遺跡の主体となる縄文時代後・晩期に比定される縄文土器が出土している。

第3章 遺物各説

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、陶磁器、石器・石製品、土製品、銭貨等がある。縄文土器はA区①の遺物包含層からの出土が多いが、A区②、B区からもわずかに出土している。

弥生土器は、表土及び遺物包含層から弥生土器と推測される小破片が数点出土している。

石器・石製品類は遺物包含層から石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石棒、剝片などが出土している。いずれも縄文時代に比定されると推測される資料である。

土製品は遺物包含層より土錘、土版、耳環が出土している。近世以降の遺物として陶磁器と銭貨がある。陶磁器は表土中から近・現代に使用された日常生活雑器が出土している。

第1節 縄文土器

縄文土器は、縄文時代早期から晩期までの資料が出土している。主にA区①の遺物包含層からの出土である。縄文時代後期後葉及び晩期中葉に比定される縄文土器が主体となり、当地方のいわゆる「新地式」に伴って、関東地方の安行式に比定される資料も散見される。

ここでは出土した全ての縄文土器については精製・半精製土器、粗製土器、胴部・底部資料（半精製・粗製土器を含む）に分類し、型式学的所見に照合して群別に細分した。

第I群土器

縄文時代早期に比定される土器を一括した。いずれも破片資料である（第37図）。

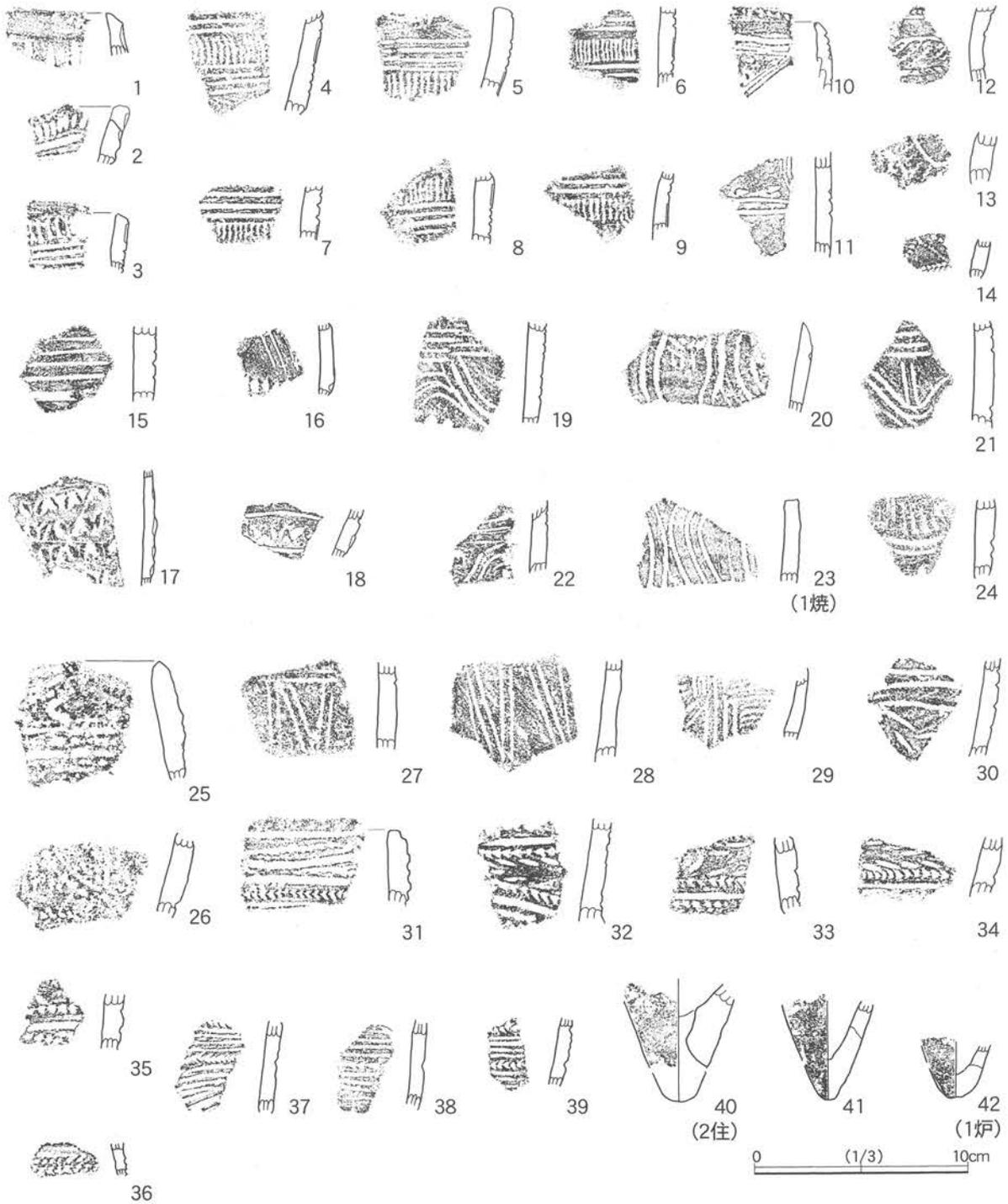
1 類 1～18は、貝殻・沈線文系土器のうち田戸下層式後半もしくは田戸上層式への移行期に併行する土器である。口唇部は外側に傾斜するように外削りされる（1～3）。4～9は数条の平行沈線間にヘラ状工具により幅広の簾状角押文が施文される。平行する沈線と沈線は結合しない（4・6）。

10～16は胎土に繊維を含まず、沈線文と棒状工具による刺突文あるいは貝殻腹縁文が組み合わされるもの。10・11は半截竹管状工具による平行沈線区画文内に棒状工具による刺突が施され、10の口唇部内面にも連続する刺突が施される。また12・13は横位の沈線間に貝殻腹縁文が施される。いずれも焼成は堅緻である。17・18は胎土に繊維を含まず、「ハ」の字状につまみあげた爪形文（刺突文）を施すもの。外面には煤が付着する。

2 類 19～24・27～30は同じく半截竹管状工具による平行沈線文が施された田戸上層式期に比定される資料である。また19～21には竹管状工具による刺突が認められる。

3 類 大寺式あるいは常世式系土器で、関東地方の田戸上層式後半、あるいはその直後期に併行すると比定される土器である（25・26・31～39）。「く」字もしくは「V」字の矢羽根状刺突が施される土器である。25は緩い波状を呈する口縁部資料である。波頂部にはわずかに

第1節 縄文土器



第37図 縄文土器 (1)

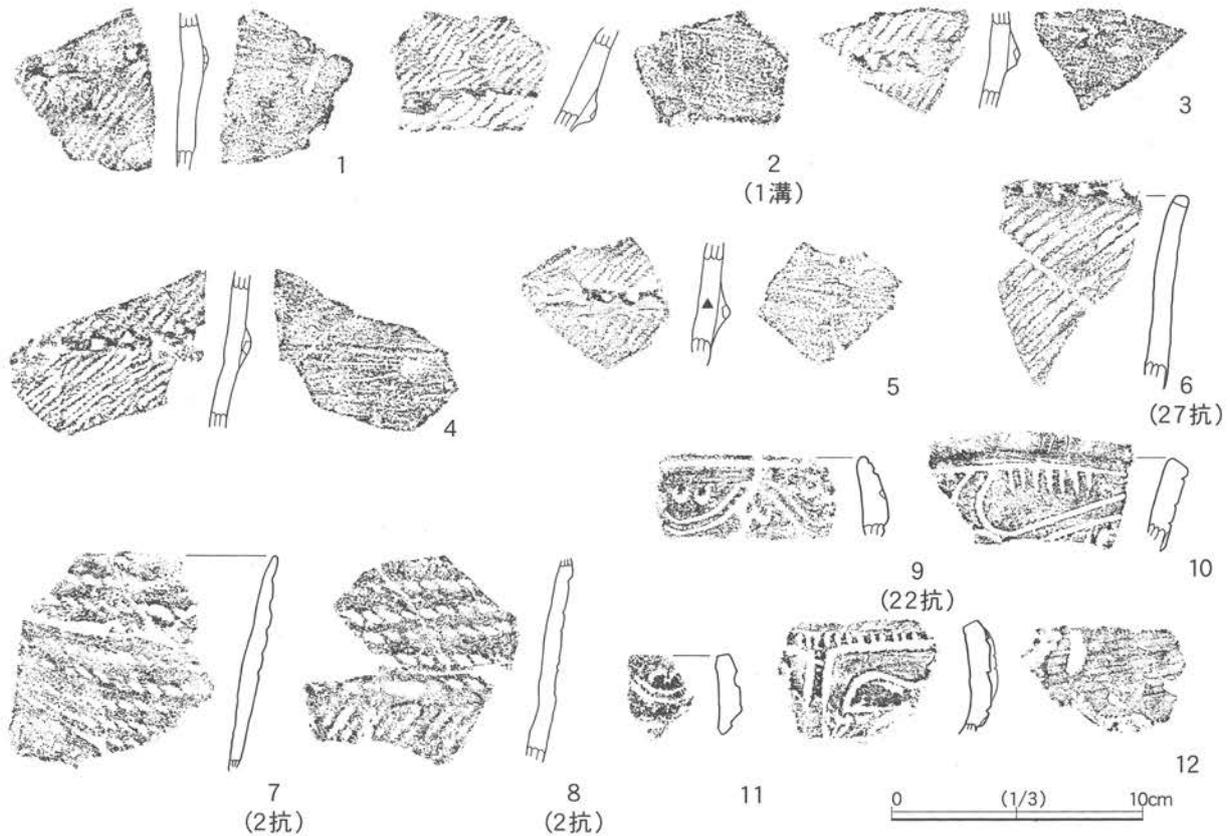
コブ状の突起が認められる。

4 類 底部資料を一括する (40~42)。尖底となる資料である。

第 II 群 土器

縄文時代前期に比定される。いずれも破片資料である (第38図)。

1~5は隆帯に竹管状工具による刺突が施されるもので、内面には条痕が遺存する。6は口唇部に刻目が施される。7・8は刺突状に原体を押圧する。胴部には斜縄文が施されるようで



第38図 縄文土器 (2)

ある。9～11は平行沈線が波状となるもの。9・11は2個一対の竹管状工具による刺突が施される口縁部資料で、2次火熱による器表面の磨滅が顕著である。12は内面にわずかに条痕文が観察されるようである。また12は縦・横の隆帯に刻目文、隆帯に沿って沈線文が施される。

第Ⅲ群土器

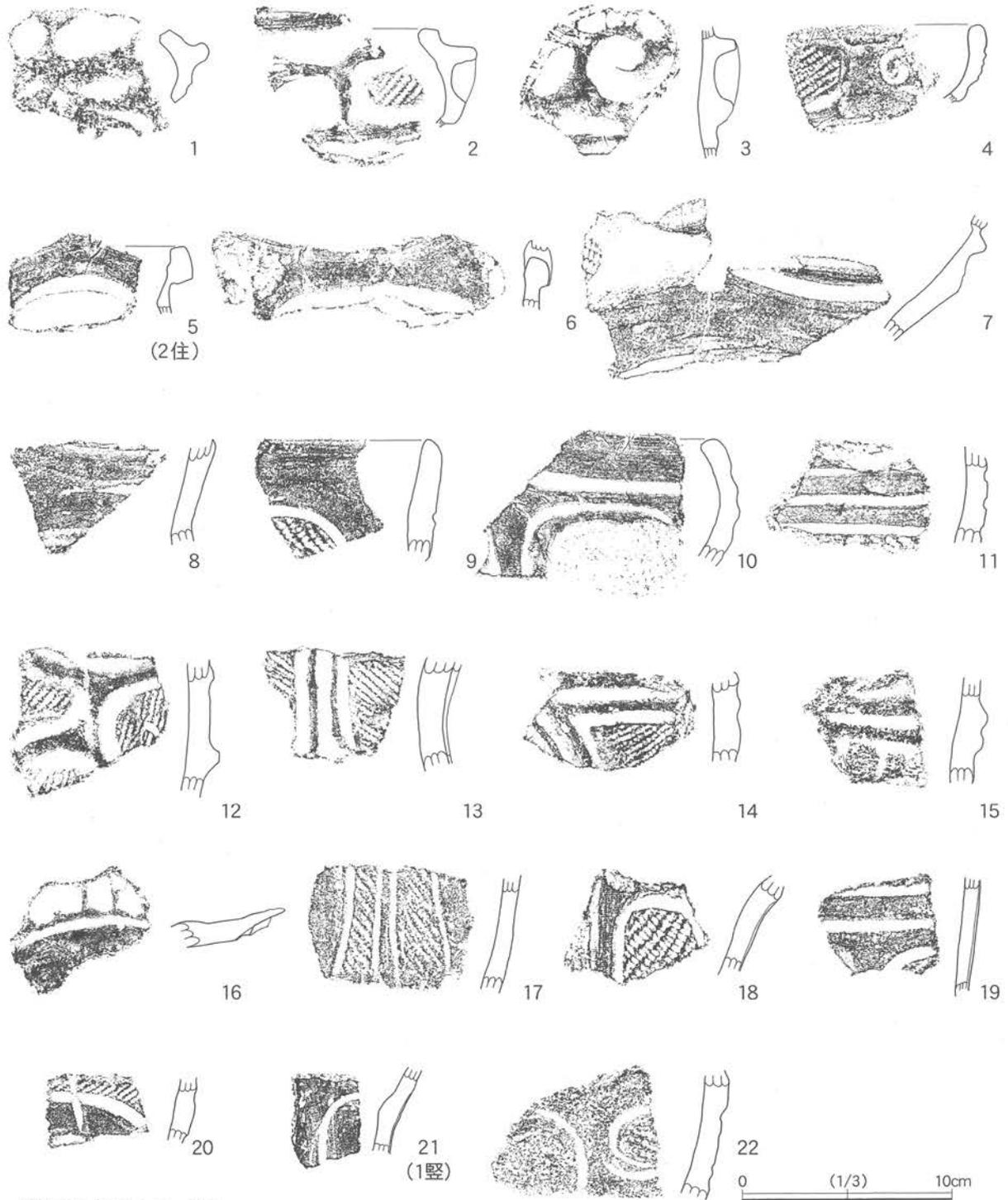
縄文時代中期に比定される土器群を一括し、22点を図化した(第39図)。大木9式期に比定されるものである。

1 類 いずれも口縁部が内彎し、胴部が筒状となるキャリパー形の器形を有する深鉢形土器と推測され、口縁部文様帯に隆帯による渦巻文や縄文が充填された楕円形文が配されるが、隆帯等の剝離が顕著である。

1は口縁部に立体的な装飾が施されるもの。2～4は隆帯による渦巻文が付され、縄文が充填された楕円形文が施される。4の渦巻状隆帯は剝離している。

2 類 隆帯および沈線文により区画文様が施され、区画文内に縄文が充填される深鉢形土器である。5～9は波状口縁、10は口縁部が内彎する平縁のものである。7・8は6と同一個体と推測される。7の頸部は無文となる。9は口縁部直下から縄文が充填された沈線による縦位の区画文が描出される。

11～22は胴部資料で、沈線もしくはミガキ調整が施された隆帯によって区画された縦位もしくは横位の楕円形文等の文様が施されるものである。



第39図 縄文土器 (3)

第IV群土器

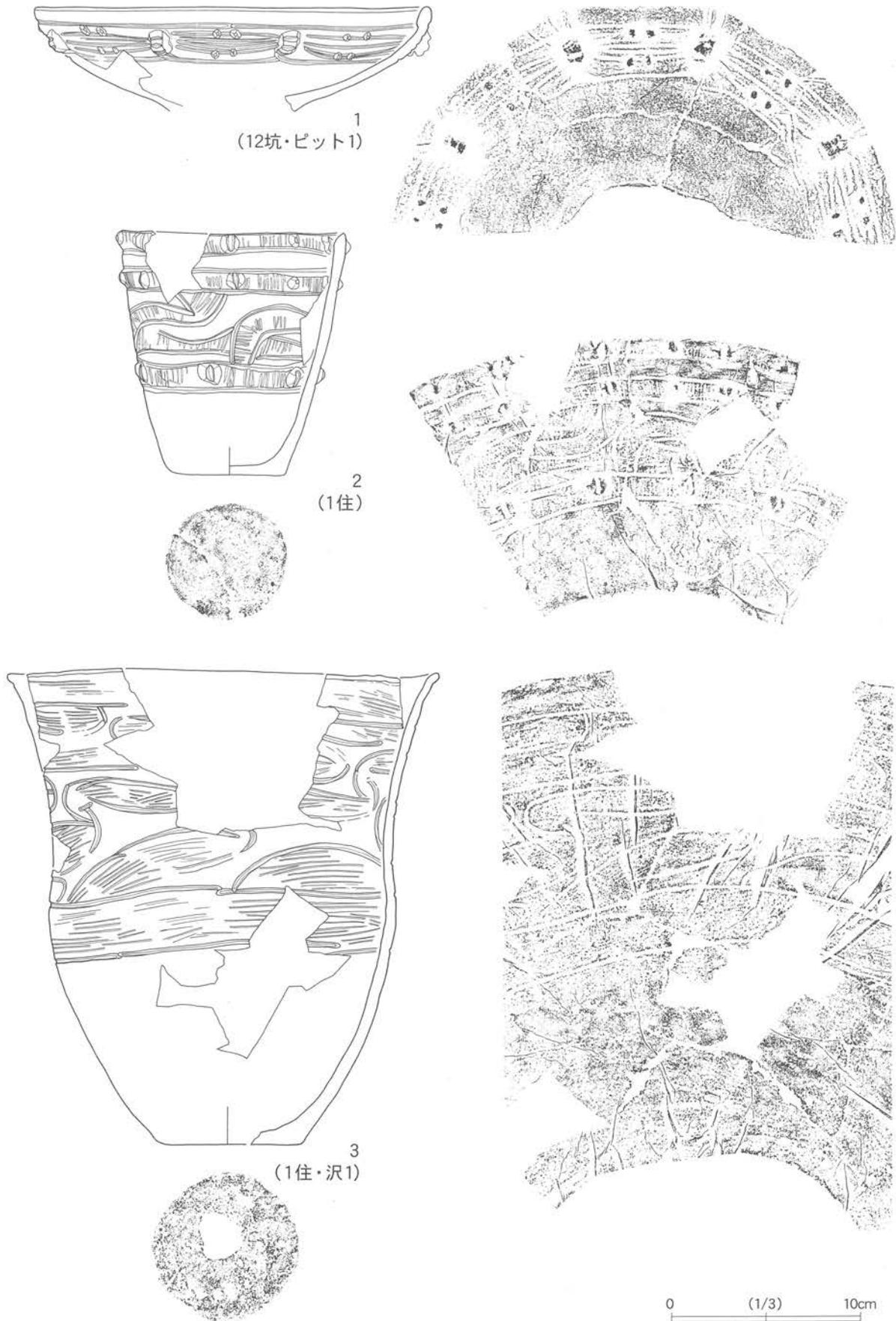
縄文時代後期前葉から中葉に比定される土器群を一括した。出土数はきわめて少ない。

1 類 口縁部と胴部が横位隆帯によって区画されたもの (第46図 1~3・5・10)。

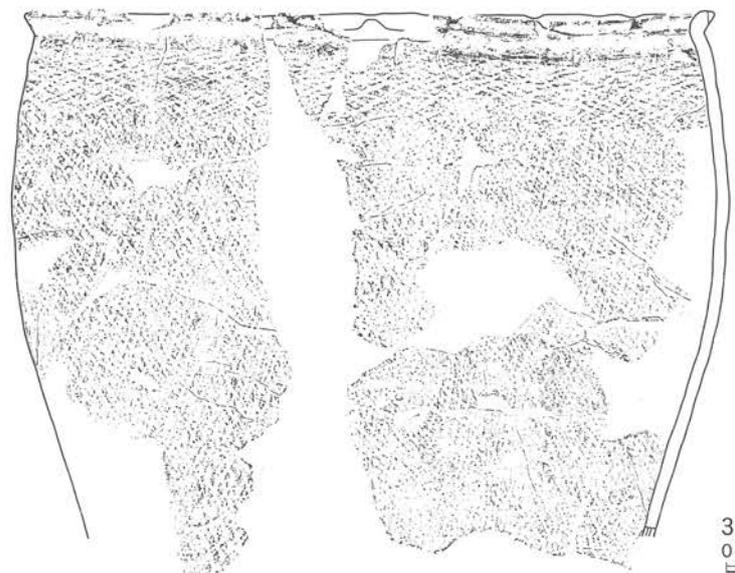
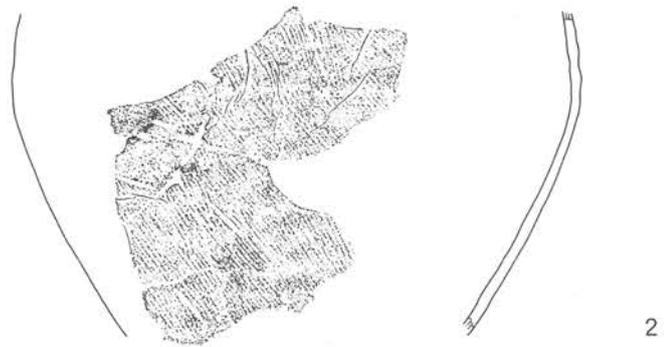
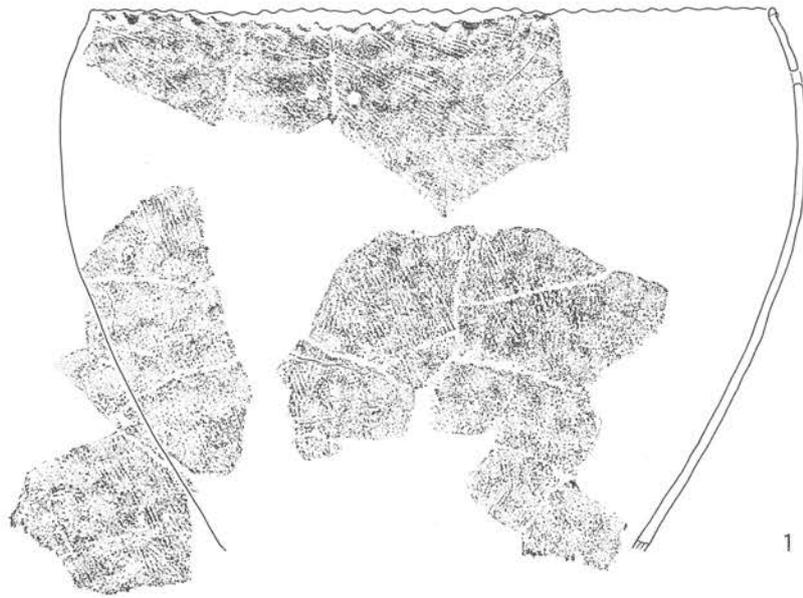
いずれも、深鉢形土器で口縁部が内彎気味に立ち上がるものが多い。

a 種 波状口縁となり、連鎖状隆帯 (5) や逆「C」字状隆帯 (3) が沈線をともなって施されるもの。逆「C」字状隆帯の上・下端には円形の盲孔が施される。

b 種 破片のため文様構成は不明であるもの (第46図 1・2)。いずれも、平縁と推定され

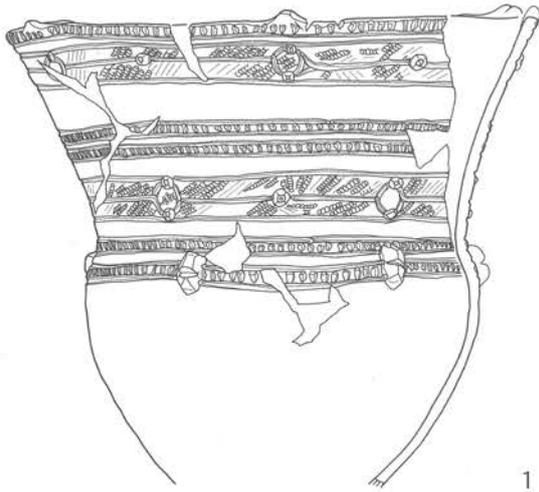


第40図 縄文土器 (4)

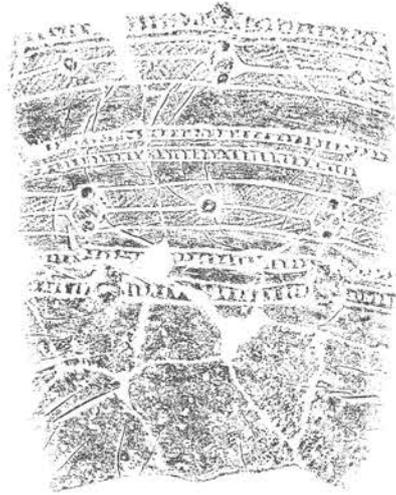


3 (4坑・沢1)
0 (1/4) 10cm

第41図 縄文土器 (5)



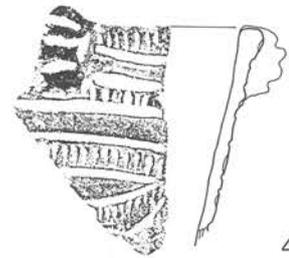
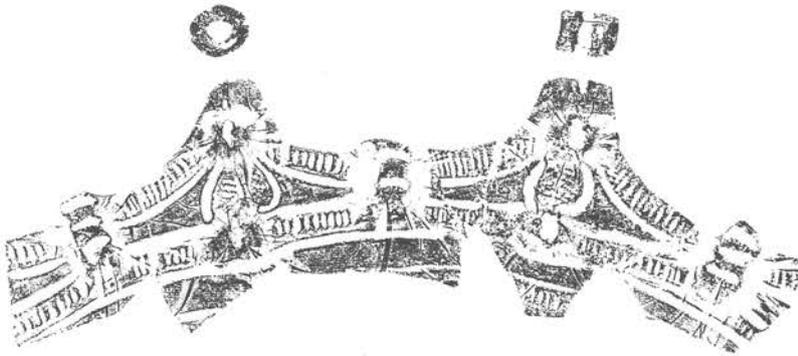
1
(12坑)



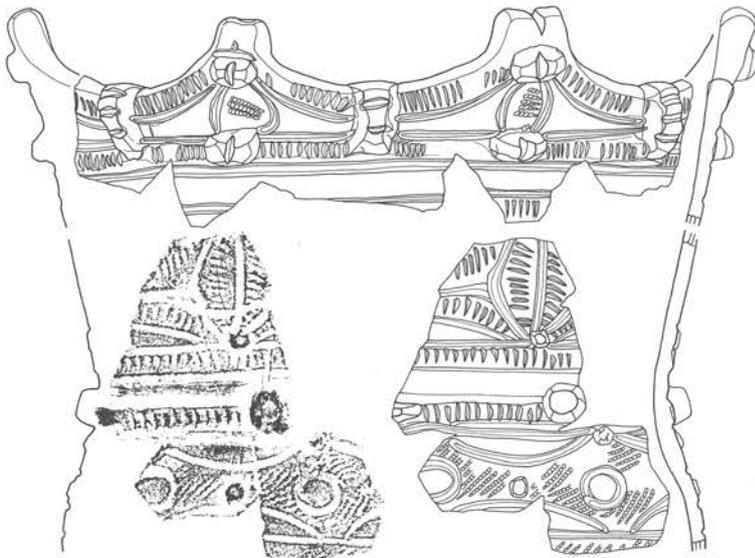
0 (1/4) 10cm



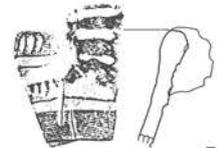
3



4
(12坑)



2
(12坑)



5



6



7



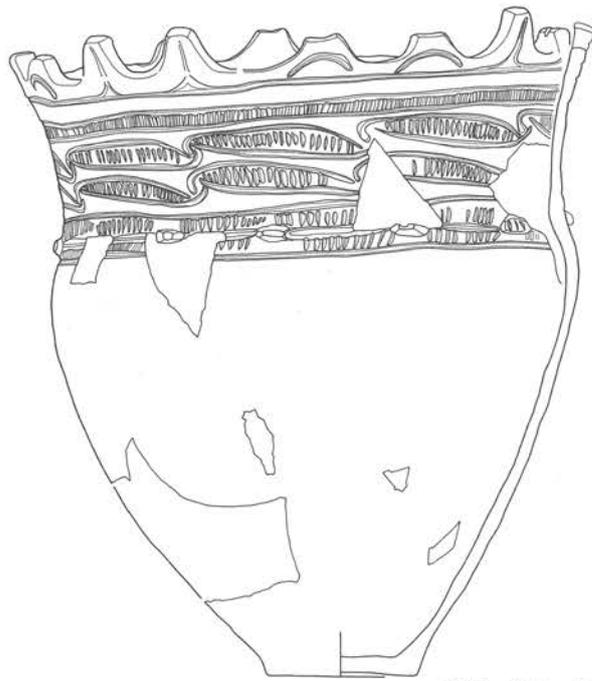
8



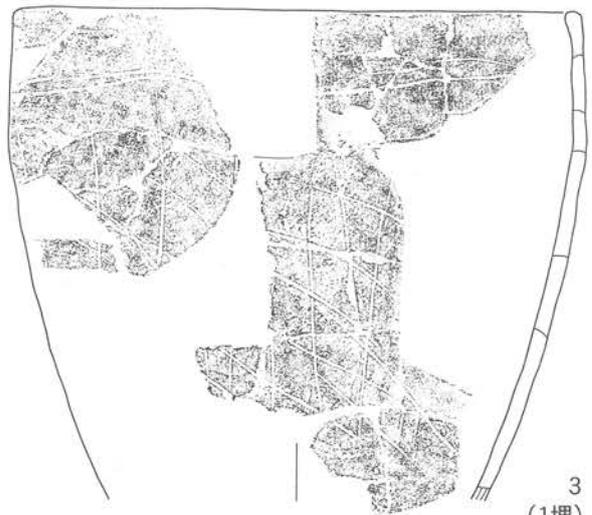
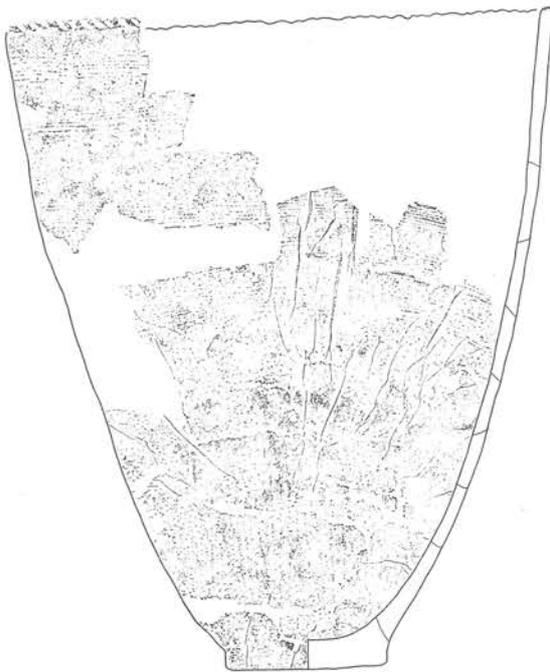
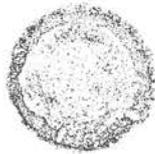
9

0 (1/3) 10cm

第42図 縄文土器 (6)

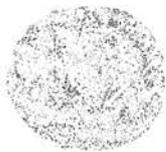


1
(4埋・沢1・ピット1)



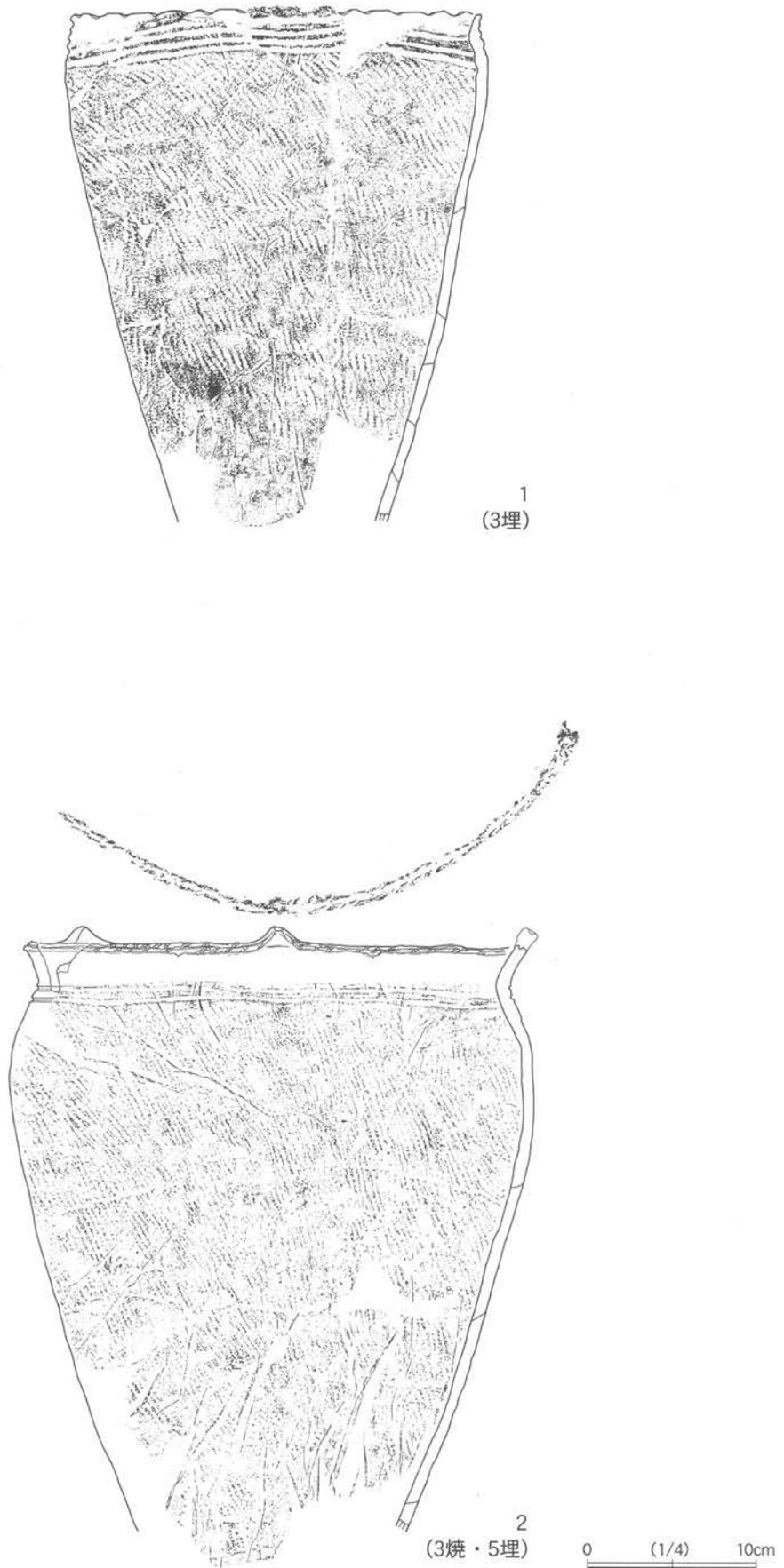
2
(2埋)

3
(1埋)

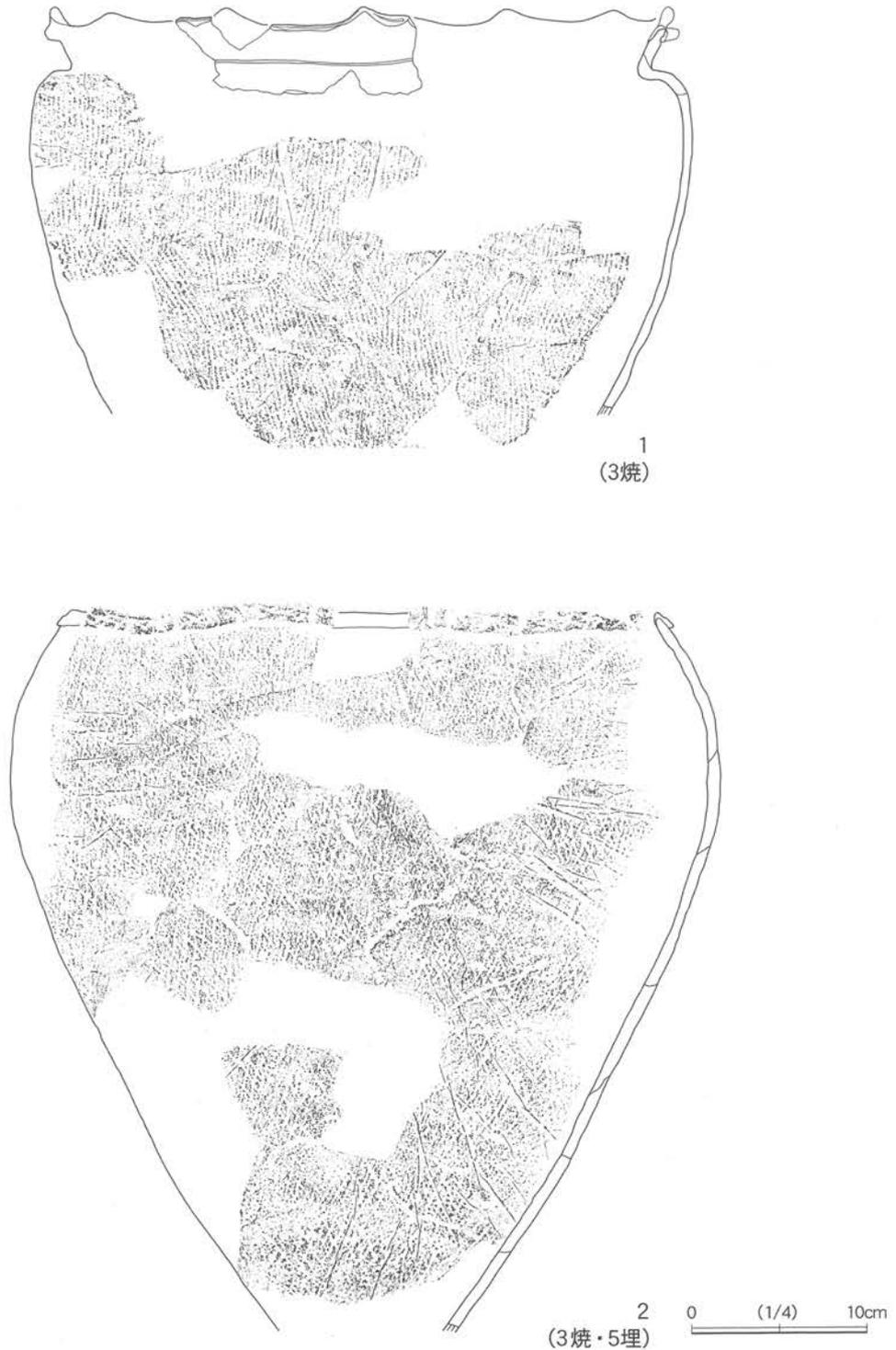


0 (1/4) 10cm

第43図 縄文土器 (7)



第44図 縄文土器 (8)



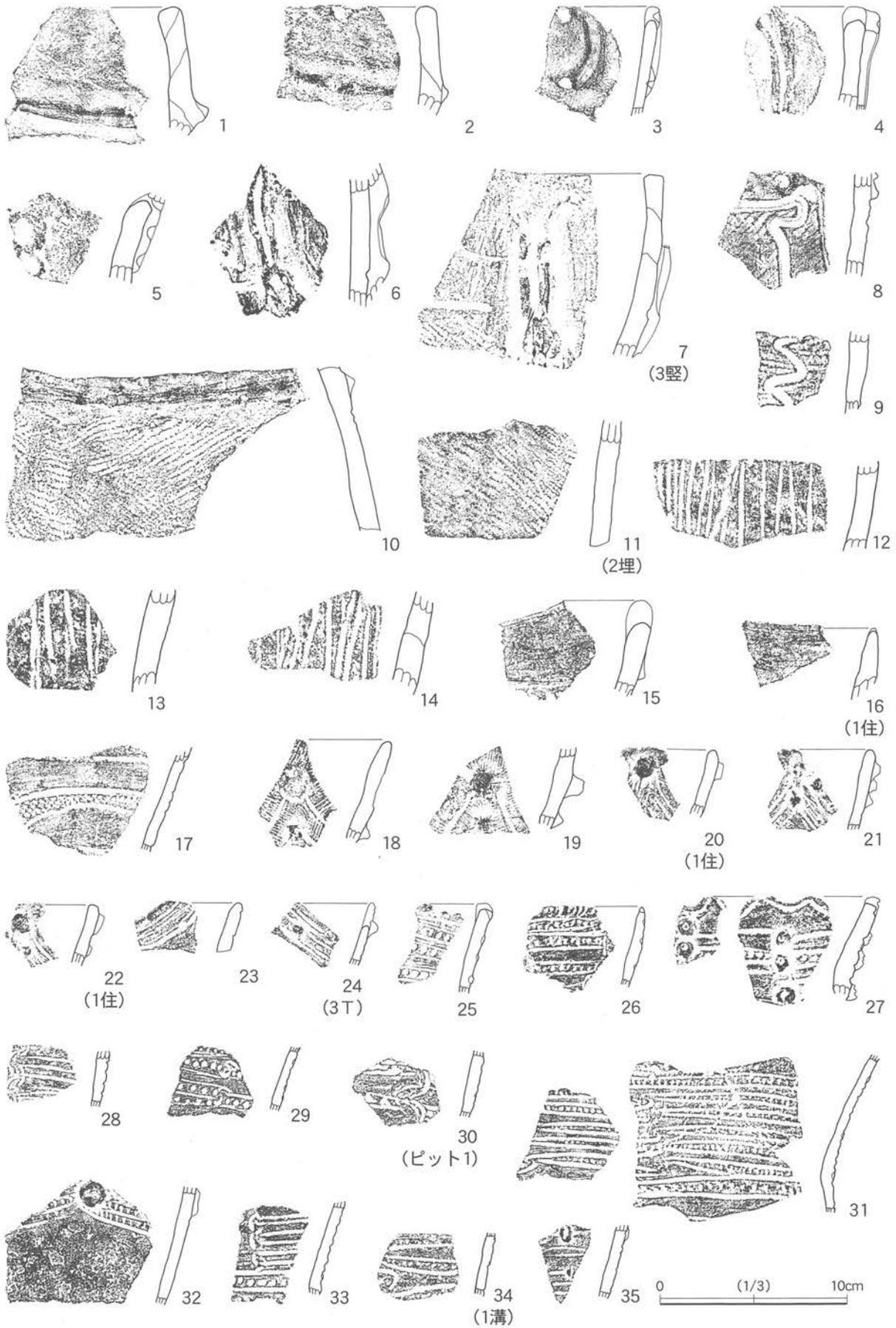
第45図 縄文土器 (9)

る。1の隆帯はやや左上がりとなり、「ノ」の字状となる可能性がある。

2 類 口縁部と胴部の区画に沈線が用いられるもの (第46図4・6～9)。

口縁部に1類同様弧線状の隆帯が沈線と盲孔をともなって施文される。口縁部は無文となる。胴部文様は、垂下する沈線によって描かれる。8は横位区画線から一体で沈線が施され、磨消縄文手法が取り入れられている。9はジグザグ文が縄文地に施文されている。

3 類 無文の口縁部資料を一括した (第46図15・16)。



第46図 縄文土器 (10)

いずれも波状口縁と推定され、丁寧に磨かれている。

4 類 胴部資料を一括した(第46図11~14)。

11は縄文のみが施される。12~14は縄文地に垂下する多条沈線が施されるものである。

5 類 磨消縄文手法により文様が描かれるもの(第46図17)。

胴部上半は横位沈線により区画されるようである。主文様は平行する曲線文で文様が描かれ、周囲は強く磨り消されるためやや窪む。施文順位は、縄文→沈線→磨消である。後期中葉に比定されるものであろう。

第V群土器

縄文時代後期後半に比定される土器群を一括した。これらの土器群は、瘤が多用されることから「瘤付土器」などと呼称され、新地式などと型式分類されているものに相当する。

1 類 口縁部が大波状(山形)を呈するもの(第46図18~24)。

18・19は同一個体である。口縁内部がやや肥厚するようである。口縁部には平行沈線を巡らし、線間は櫛歯条線文を充填している。波頂下の沈線交点部分には上段に円形浮文、下段には小形瘤が貼付されている。20~24も同一個体の口縁部で、山形口縁頂部は鱗状に張り出す。口縁部には3条の沈線文が巡らされ、1段目と3段目には櫛歯状沈線を充填する。波頂部下の沈線交点部分には円形の瘤が配される。小形の瘤は刻目帯に多用されるようであるが、剥落が多く認められる。

2 類 口唇部に台形状の突起が施されるもの(第49図33・34)。

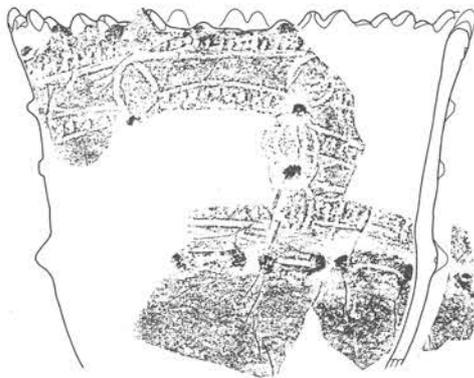
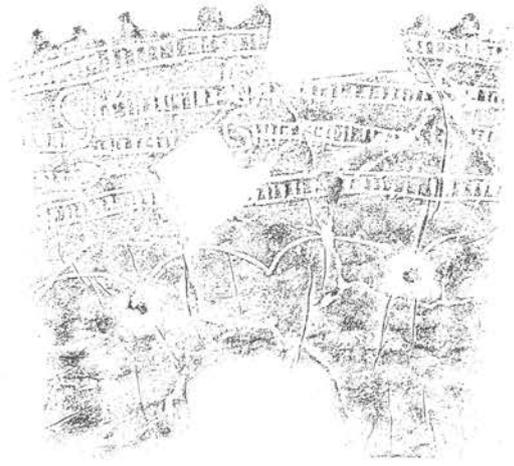
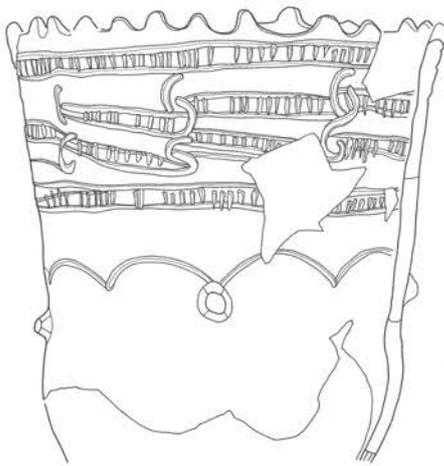
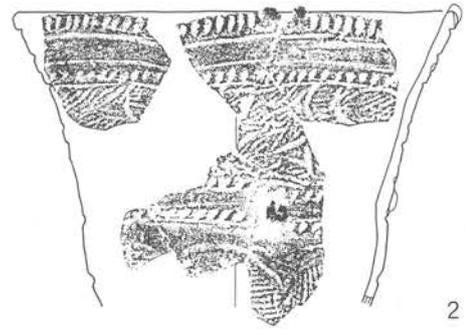
口縁部は肥厚し、下端に横位沈線が1条巡り、突起部と合わせて縄文帯となる。

3 類 入組文内に櫛歯条線文を充填するもの(第40図3、第47図1、第49図31)。

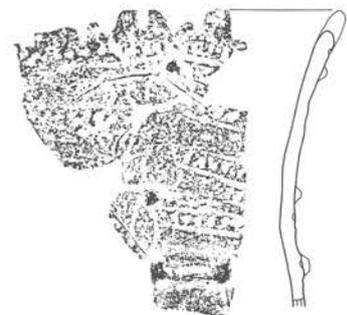
第40図3は胴部上半で緩くくびれを有する器形となる。口縁部下端は沈線が巡り無文帯となる。頸部は左下がりの入組带状文が施され、胴部上半は平行沈線で頸部との区画をなしている。胴下半は無文となる。本土器には底部外側から打ち欠いた穿孔が認められ、埋設土器に利用されていたことが想定される。

第47図1は胴部上半で「く」の字状に屈曲し口縁部が外傾する鉢形土器である。口縁部片と胴部片が直接の接合関係をもたないため、図上復元を試みた。口縁部は沈線で区画され、2個一対と推定される瘤が貼付された後に櫛歯条線状の細かい刻目が連続して施される。下半は強く削られ、段を有する無文帯となり磨かれている。胴部上半は口縁部との境と屈曲部付近が刻目帯で区画され、内部には鋸歯状の平行沈線が描かれる。瘤は鋸歯状文と刻目帯との接点および上下刻目帯の接点に対応する位置にそれぞれ貼付される。下端刻目帯の下側の沈線は瘤に対応した弧線が連結したものである。胴部下半の上部には平行沈線により区画された刻目文帯が施される。以下無文となる。第49図31は櫛歯条線を地文としているものである。口縁部以下には平行沈線を横位に施文している。

4 類 縦長の瘤や三日月形の粘土紐が貼付されるもの(第48図29~35、第49図20・30・39・41・42)。



(1住)



0 (1/3) 10cm

第47図 縄文土器 (11)

29は口縁部に三日月形の瘤を背合わせに「X」字状に貼付し、口縁部は連続刺突文帯となる。頸部には木の葉状文が横位に連結して多段構成をとる。各交点には小さな瘤が貼付される。30も同様の文様構成となろう。31～33は同一個体と推定される。口縁部は4条の平行沈線が巡り、2段目と4段目には連続刺突が施され、中間線間は無文帯となる。口唇には刻目が入れられ、縦長の瘤は口縁部上段に貼付される。34・35も同一個体で、胎土などは33と酷似する。頸部下端は平行沈線文と連続刺突文で区画され、くびれ部には背合わせ状態の隆帯が「X」字状に貼付される。第49図20は縦長瘤の左右に平行沈線と連続刺突文が描かれている。30は口縁部が欠落する。粗製土器的な様相を呈し、平行沈線と刺突文が上半に施される。さらに、口縁端部に「X」字状の粘土紐貼り付けが施される。41は2個一対の瘤が口縁直下に貼付される。42は胴部下半に2個一対の瘤が貼付される。

5 類 粘土粒状の小さな瘤が文様の支点等に多用されるもの。頸部文様帯に様々な構成がみられる。

a 種 円形刺突のある平らな瘤が貼付されるもの（第46図27・32）。27は「M」字状の突起を口唇部に付し、口唇直下には器形に沿って沈線が巡る。波底部下には瘤が縦列に配され、瘤を支点として沈線文が左右に展開する。線間の一部には連続刺突が施される。32も部位は底部下半であるが、同様の文様構成となろう。

b 種 平行沈線間に規則正しく瘤を貼付けるもの（第40図2、第49図27・28）。第40図2は胴部が内彎気味に立ち上がる鉢形の器形となる。口縁部は平行沈線が3条引かれ、口縁直下と3段目には連続刻目と貼瘤が施される。中間は無文帯となる。胴部文様はクランク状の入組文が描かれ、下端は口縁部同様の貼瘤が貼付された連続刻目文帯により区画され、以下無文となる。第49図27・28は口縁部資料で胴部文様については不明であるが、口縁部の文様は前図と同じ構成となる。同一個体である。

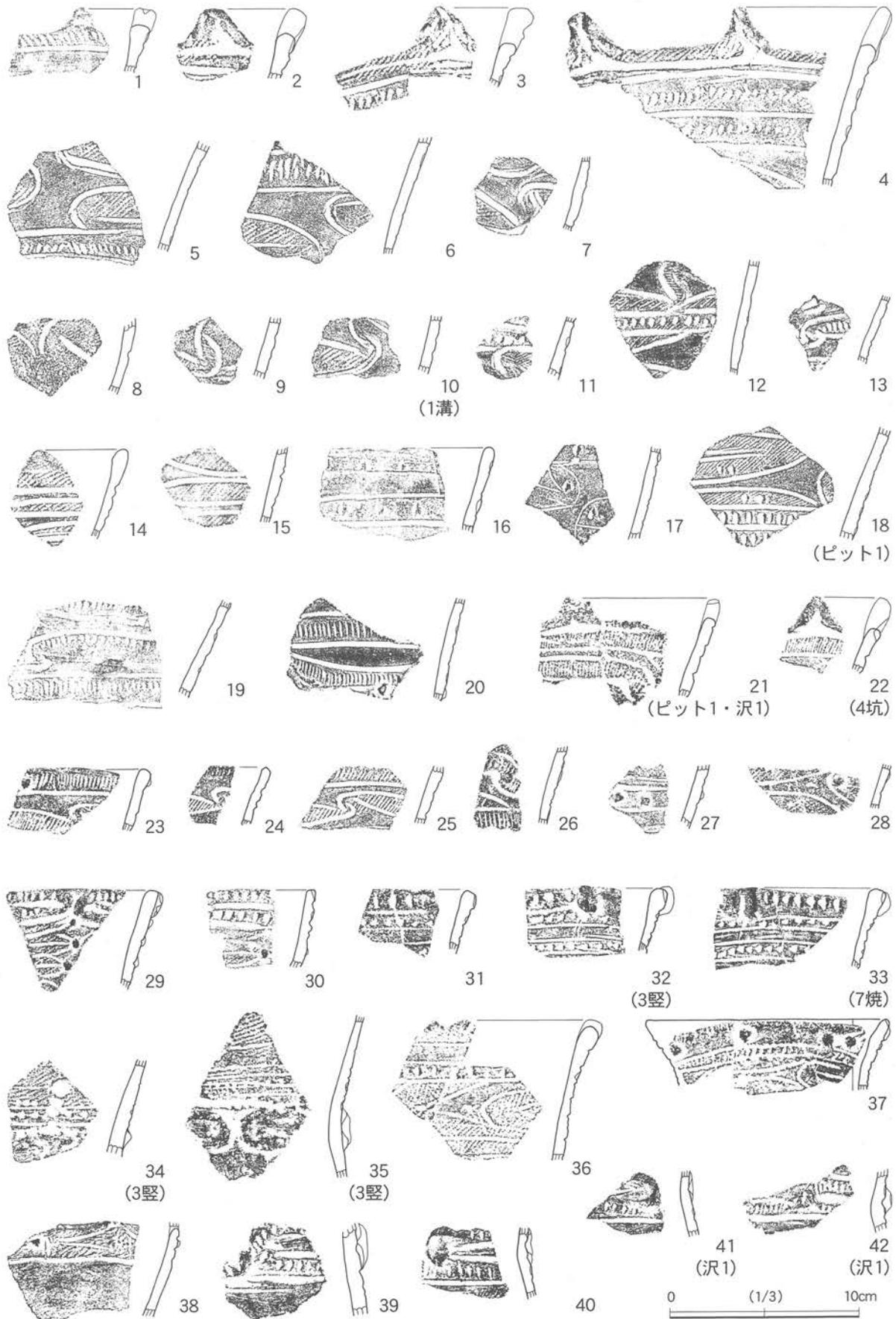
c 種 弧線文と横「V」字や「U」字を組み合わせた入組文と瘤が共存しているもの（第48図27・28・37・38）。27は平行沈線間に、28は入組带状文の入組部に1個ないし2個一対の豆瘤が貼付される。37は口縁部が外反気味に立ち上がり、口縁部と頸部の区画には連続刺突文帯が巡らされ、瘤は口縁部に規則正しく配置される。頸部には弧線文と横「U」字状の曲線の組合せで文様が描かれている。38も類似した文様を描き、交点に瘤が貼付される。

6 類 いわゆる掘り起こしコブや刺突文、刻目文が文様の主体として施文されるもの。

口縁部は平縁となるものが多い。器形は、胴部中段にくびれを有する深鉢形土器が主体となるようである。文様施文に丁寧さはなく、雑な感じが見て取れる。

a 種 口縁部に横位の平行沈線を3条程度巡らし、線間に刺突文等が連続して施されるもの（第49図1～17）。平縁で口唇に刻目を施すものも多いが、11～13は突起が付され、14・15は波状口縁となるものである。

b 種 頸部に入組带状文ないし弧線文が施されるもの（第49図18・19）。18は口唇に刻目が施される。19は縦にスリットを加えた小突起が付され、口縁部は無文帯となる。



第48図 縄文土器 (12)

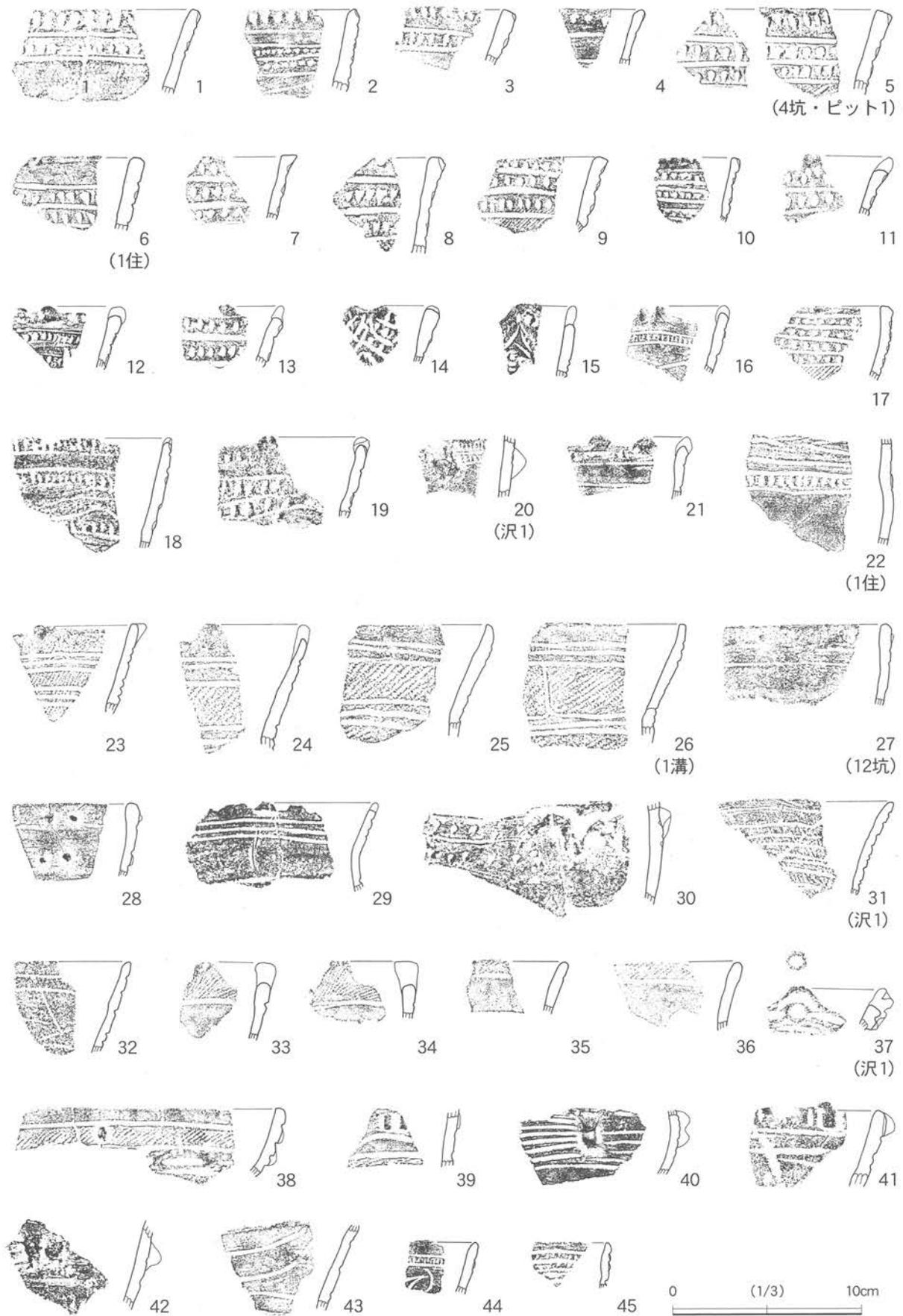
c種 頸部文様などの入組帯状文内に刺突文や刻目文が充填されたもの（第43図1・第46図28～31・33～35、第47図3・4、第48図19・20・23～25）。第43図1は胴部でくびれる深鉢である。口頸部が胴部に比べて低い傾向にある。口縁は2個一組の山形突起と台形突起が4単位ずつ配置される。口縁直下には沈線が巡り、山形突起の直下では上方に延び三叉文状となる。台形突起の下部は弧線で縁取られるのみである。口縁部と頸部の境には連続刻目文帯が一周する。頸部文様は、右下がりの入組帯状文が2段にわたって施文され連続刻目で充填される。くびれ部は2段の連続刻目帯で区画され、中段沈線上に瘤が貼付される。胴部は無文となる。第46図31は胴部中段のくびれ付近と上半部分に横位平行沈線による区画が連続刺突をともなって施文され、内部に5段の入組文が配置され一部に連続刺突文が施される。28～30・33も同様の文様構成であろう。第47図3は口縁部から胴部下半までの大形破片である。胴部にわずかなくびれをもち、口頸部が長く、傾きが弱い特徴がある。口唇部には2個一対・2組が1単位となる突起が付される。口縁部は無文となる。頸部文様帯の上半は、上・下端を幅1cm程度の刻目帯で区画している。区画内には右下がりの入組帯状文が2段にわたり推定6単位で配され、入組部分は段違いの対向する弧線により連結されている。下半は連弧文が入組帯状文に対応して描かれ、弧線の接点には一つおきに大型瘤が貼付されるようである。4も同様の大型破片が数個あり、口唇部の突起も4個一対で3と同様である。口縁部は下端を沈線で区画し連続刺突文が施される。頸部は3段の右下がりの入組帯状文が連続刺突文を充填して描かれている。入組部は、「()」状に対向する弧線により連結され、小形瘤が貼付されている。くびれ部にはメガネ状隆帯に類似する短沈線と瘤状突起の組合せによる区画が付され、胴部との区画をなしている。胴部は無文となる。いずれも、入組部分の対向弧線が強調されている。第46図25は口唇部に瘤状突起が付され、入組帯状文の連続刺突が掘り起こし瘤状となる。26は口唇部に連続する細かな刻目が施され、くびれをもたない器形となるようである。31は胴部中段のくびれ付近と上半部分に横位平行沈線による区画が連続刺突をともなって施文され、内部に5段の入組文が配置され一部に連続刺突文が施される。28～30・33・34も同様の文様構成であろう。第48図19は入組部分が強調され、深く抉られる。20は文様内に豆瘤が貼付される。23～25は同一個体である。細かい刻目文が施され、19同様入組部が深く抉られている。

d種 掘り起こし瘤が用いられたもの（第48図16～18）。16は口縁部資料で、平行沈線文が施され、線間に掘り起こし瘤が配される。17は胴部資料で、入組帯状文内に掘り起こし瘤が配される。いずれも、無文地である。18は頸部下半の資料で、下端は連続刺突文帯で区画される。頸部文様の入組文や弧線文内に掘り起こし瘤が付される。

e種 くびれ部に「X」字状の隆帯や瘤と沈線の組合せによるメガネ状文が施されるもの（第48図39～42）。上・下端は沈線で区画され、内部にはレンズ状の無文部分や太沈線が施される。隆帯上などには刻目が施される。

7 類 三叉文が出現する段階のもの（第48図1～15・21・22・26）。

口唇部には山形突起が付される特徴がある。2～4は同一個体の口縁部資料である。口縁部下端には沈線が巡り、突起直下の位置で上方に延び三叉文状を呈する。口縁部は縄文帯となる。



第49図 縄文土器 (13)

頸部との境は、平行沈線3条で区画された2段の連続刻目帯となる。頸部は入組文となるようである。5～7などの胎土や施文方法などが前者と酷似しているため、4などに対応する頸部資料と推定される。頸部下端は平行沈線間に連続刺突文が施され、上端同様区画される。21・22にはA突起が付されるが、口縁部は無文帯となる。さらに、頸部の入組帯状文の入組部端部は三叉文状に強く刻まれ強調されている。

8 類 平行沈線で文様が構成されるものを一括した。瘤の貼付は少ない。

a 種 口縁部に縄文帯をもつもの(第49図35・36)。縄文帯以下は無文で、丁寧に磨かれている。同一個体で、器形は不明である。

b 種 平行沈線文が施文されるもの(第49図23～26・29)。23は口縁端部に突起が貼付される。口縁部は無文帯で平行沈線文は2段にみられ、中間は縄文が施される。24～26は同一個体。縄文地に2段ないし3段の平行沈線文が巡り、沈線間は磨り消される。縄文部分には縦位の沈線が加わり方形区画となる箇所もある。口唇部には台形状の突起が施される。29は口唇に刻目が施され、口縁部に3条の平行沈線が巡る。地文は無文である。

c 種 曲線文様が描かれるもの(第49図43)。頸部資料で、瘤の貼付もみられない。

第VI群土器

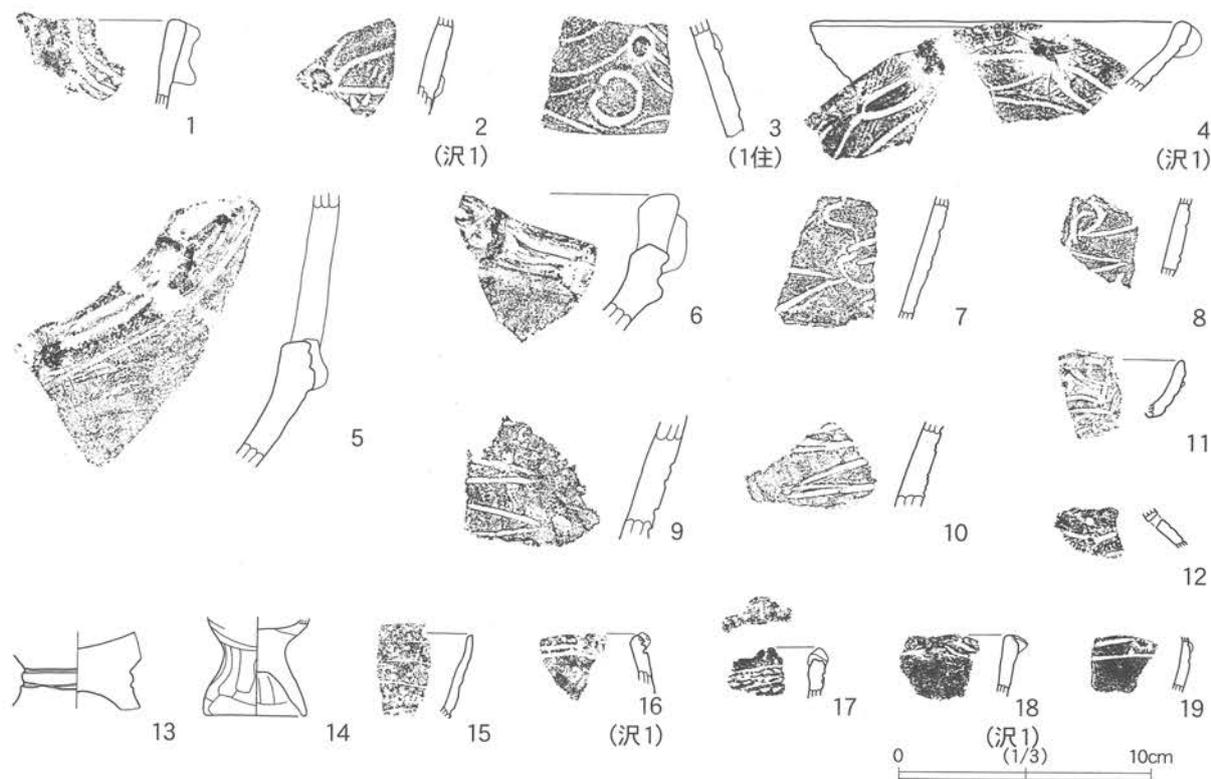
後期後半に位置づけられる異系統の土器群を一括した。

1 類 高井東式系統の土器を一括した(第50図5～10)。

5・6は口縁部資料である。大波状口縁を呈する深鉢形土器と想定される。口縁部に沿った凹線文が隆帯で区画される。波底部付近には縦長の瘤が隆帯を跨いで付加される。7～10は頸部付近の破片と推定される。7・8には蛇行沈線文、9・10にはジグザグ文がそれぞれ描かれる。

2 類 安行式系統の土器を一括した。

a 種 波状口縁深鉢形土器である(第42図2～9、第50図1～3)。第42図2～9は第12号土坑から出土した深鉢形土器である。口縁部と頸部で直接の接合関係はないが、図上で器形復元を試みた。口縁部形態は山形突起が6単位付されるものと想定されるが、頭頂部は円形刺突が施されるものと1条のスリットが施されるものがあり、交互に配置される可能性が高い。波底部には横3段のスリットを有した大型の縦長の瘤が貼付される。口縁部文様は、口唇に沿って沈線が巡り刻目が施される。波頂部の直下には三角形区画が配置され、頂点と底辺中央に縦スリットを有する横長の瘤が付される。さらに、瘤と瘤とは対向した弧線文により「()」状に連結される。「()」状文内には縄文が施され、周辺は磨消されている。口縁部と頸部の境は、三角形区画の底辺と平行する沈線が3条引かれ、1段目と3段目は刻目帯となる。頸部文様は、山形突起の下部には縦位の木の葉状文が配され、上・下端には小さな瘤が付される。中間区画には重弧文が上下に接するように配され、縦区画の木の葉状文と接する部分は沈線が誇張されて三叉文状となる。くびれ部は、頸部上端同様に刻目帯と無文帯で区画される。下端の刻目帯にはボタン状の瘤が口縁部の突起に対応した位置に付される。胴部上半は、上・下端を沈線で



第50図 縄文土器 (14)

区画し連結弧線文が施される。縄文が充填され、上部の連弧文の接点付近には小さな瘤が貼付され、中央に円文が配置される。また、円文と円文の間地点にも小さな瘤が付される。下半については縄文が観察されるが、全容は不明である。第50図1は波頂部分の資料で、縦長の瘤が貼付される。2・3は第42図2に酷似する頸部および胴部文様を有する深鉢形土器である。前資料とは別個体と推定される。

b種 平縁深鉢形土器である(第42図1、第47図2)。第42図1は胴部でくびれる深鉢形土器で、端正な作りである。口唇には小突起が推定6単位付される。口縁直下には連続刻目が施され、平行沈線で区画された縄文帯が存在する。縄文帯の中段には、端部が三叉状となる沈線が交互に配され、突起に対応する位置では接続して円形の文様構成となる。上下には豆瘤が付され、さらに接続部分中間にも沈線上に円形刺突を有する瘤が配される。文様構成は6単位と推定される。頸部中段には連続刻目帯が2段にわたって施され、上・下段を区画している。下半部でも上半部同様の文様を2分の1単位ずらした状態で施文している。くびれ部にも2段の刻目帯が巡らされ、下方には2分割された縦長の瘤が貼付される。第47図2は口縁部から胴部上半までの大型破片である。口縁には瘤状突起が2個一対で付され、端部は刻目が連続して施される。口縁部と頸部、頸部とくびれ部の境は連続刺突文帯で区画される。頸部文様は磨消縄文手法の三角形区画が2段にわたって配される。くびれ部には瘤が貼付される。胴部は縄文地に連弧文が施され、上方が磨り消されている。

c種 浅鉢形土器を一括した(第40図1、第49図38・40、第50図4)。第40図1は体部が2分の1ほど残存する。底部付近の状態から台部が付く可能性が高い。口縁部はやや肥厚し無文

となる。体部は上・下端は沈線で区画されるが、下端の沈線は瘤の位置で上方に延び三叉文状となる。内部は横スリットを有する縦長の瘤が8単位で割り付けられ、3条から5条の弧線や沈線が施文される。さらに、沈線文のうち上・下端の中央付近には豆瘤が2個一対で沈線上に貼付される。同様に第49図40も多条の沈線が縦長の瘤を起点に施文される。瘤は中央で分割されている。38は体部に縄文帯を有し、豆瘤が単独で貼付される。下端は、短沈線と瘤状突起からなるメガネ状の隆帯で区画される。第50図4は体部が4分の1ほど残存している。口縁部はやや肥厚し、下端には沈線が巡り縄文帯となる。体部は沈線で区画され、連弧文が施される。文様は8単位と推定され、沈線の接点には縦長の瘤と横長の瘤が交互に配置される。三角形区画には縄文が充填され、半円形区画は磨り消される。

第Ⅶ群土器

後期に比定される注口土器・台付土器など、その他の土器を一括した。

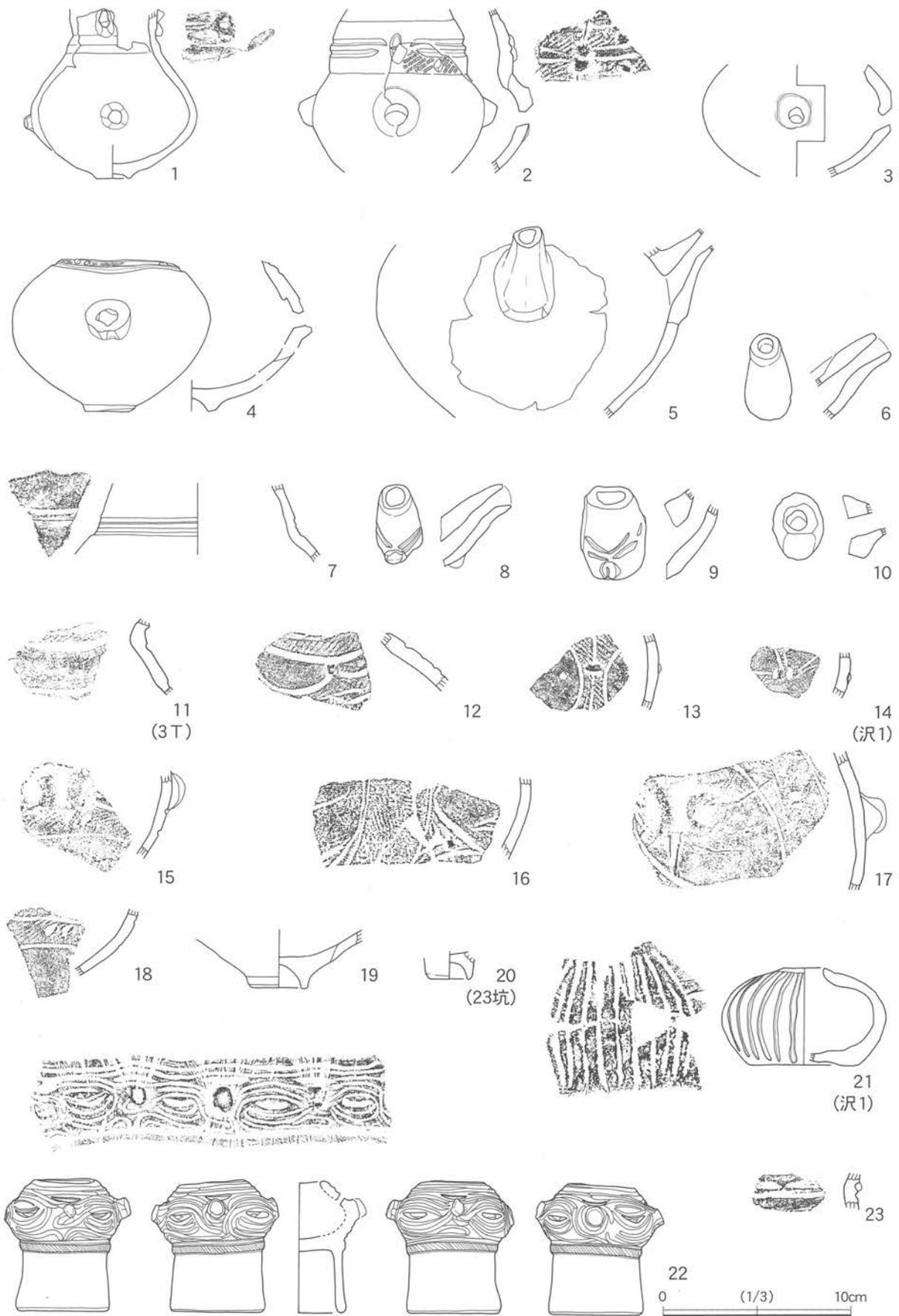
1・類 注口土器を一括した(第51図1~18)。

a種 瘤が貼付されるもの(第51図1・2・4・12~18)。1は下膨れ状の胴部で、直立気味に立ち上がる口縁部となる。体部中段に大型の瘤、口縁部下端には2分割された縦長の瘤がそれぞれ付される。口縁部は瘤を起点として弧線文が観察される。底部は小さく、やや上げ底状となる。2は胴部が球状で、丁寧に磨かれている。口縁部は内彎気味に立ち上がる。口縁部下端にはレンズ状文が磨消手法で描かれ、接点には2分割された瘤が付される。さらに下端の縄文帯内部にも粒状の瘤が配される。破片の上部には無文帯が観察される。4も胴部が球状で、無文となる。胴部上端にのみ沈線が巡らされ、2個一対の粒状の瘤が4単位貼付される。12は胴部上半の資料である。上端は縄文帯で沈線が巡り、連弧状文や弧線文が配される。接点部分に小さな瘤が付される。13~18は胴部資料である。13は縦位の沈線を中心に弧文が配され、縄文部となる。垂線上に横長の瘤が付される。弧文内部は磨り消される。14は重弧文が集中する箇所掘り起こし瘤が配される。重弧文内部には縄文が観察される部分もある。15は横位沈線文が施され縄文帯となり、2個一対の糸巻き状の瘤が貼付される。さらに、下部には2個の掘り起こし瘤が配される。16・17は同一個体で、入組弧線文が磨消縄文手法で施される。胴部中央部には糸巻き状の大型の瘤が貼付される。さらに、弧線文内部には掘り起こし瘤が配される。18は胴部下半の縄文帯内に掘り起こし瘤が2個一対で付される。

b種 平行沈線が施されるもの(第51図7・11)。7は口縁部下端に、11は口縁上端にそれぞれ平行沈線文が施される。

c種 無文のもの(第51図3・5)。出土資料の部位のみで判断しているため不確定である。3はやや扁平の球状、5は大型の球状胴部を呈する。

d種 注口部を一括した(6・8~10)。6は無文で、基部が太く先端部に行くにつれて細くなる形状であるが、端部はリング状に粘土が巻かれ太くなる。8は急角度で立ち上がるが、先端付近でやや屈曲する。基部には沈線文と横長の瘤が付されている。9は先端が欠損する。基部には二重の沈線文と縦スリットの入った瘤が配される。10は小形で無文であるが、基部下



第51図 縄文土器 (15)

端が膨らむ形状となる。

e種 底部資料である(第51図19・20)。1や4と同様の上げ底状の底部と推定される。

2類 小形壺形土器(第51図21)。

胴上部で内彎し、口縁部がわずかに直立する器形となる。胴部全面に推定30本の垂線が施される。底部はやや上げ底状となる。

3類 台付土器(第50図13・14、第51図22)。

精製土器で、異形台付土器と呼ばれるもの(第51図22)。台部はほぼ直立して立ち上がり、丁寧に研磨されている。体部との境には櫛歯条線が斜位に施された隆帯が一周し、上端にのみ沈線が施される。体部はやや扁平な球状を呈する。上端に2条の沈線が巡り、体部中央には筒状の瘤状突起が4単位配される。突起の上方および中間地点には合わせて8箇所の三日月状の透かしが施される。文様は沈線により、突起や透かしに規制されながら描かれたようで、弧線文や曲線文・楕円文・円文・流水文など、どの位置を見ても定型化した意匠配置は認められない。

4類 その他の土器を一括した(第50図11~19)。

a種 釣手土器の取手部分と推定されるもの(11)。弧線文と粒状瘤によって文様が施されている。無文部は丁寧に磨かれている。

b種 ミニチュア土器を一括する(12~19)。13・14は台付土器。13は台部上端に平行沈線文が施される。14は袴状の台部に体部がつくもの。作りはケズリで雑である。12・15~18は平行沈線間に刺突が施されるもの。16には瘤、17には突起が付される。19は平行沈線文と瘤が付される。いずれも、小形で鉢形を呈するものと推定される。

第Ⅷ群土器

縄文時代晩期前葉に比定される土器を一括した。大洞B式やBC式に相当するものである。出土量は少ない。深鉢形土器と浅鉢形土器がみられる。

1類 口縁部の突起や波頂部直下に三叉文が配されるもの(第52図1~7)。

a種 波頂部を中心に口縁直下に弧線が配されるもの。弧線は波頂部で接合せず「八」の字状となる。波頂下の三角形区画に三叉文が施される。5は底辺にも沈線が施されている。弧線内は縄文が施されるもの(1・2・5)と施されないもの(3)がある。

b種 三叉文が単独で配されるもの(7)。口縁は山形突起となり、頂部には2条の刻目が施される。

c種 縄文をともなって魚眼状三叉文が施されるもの(6)。

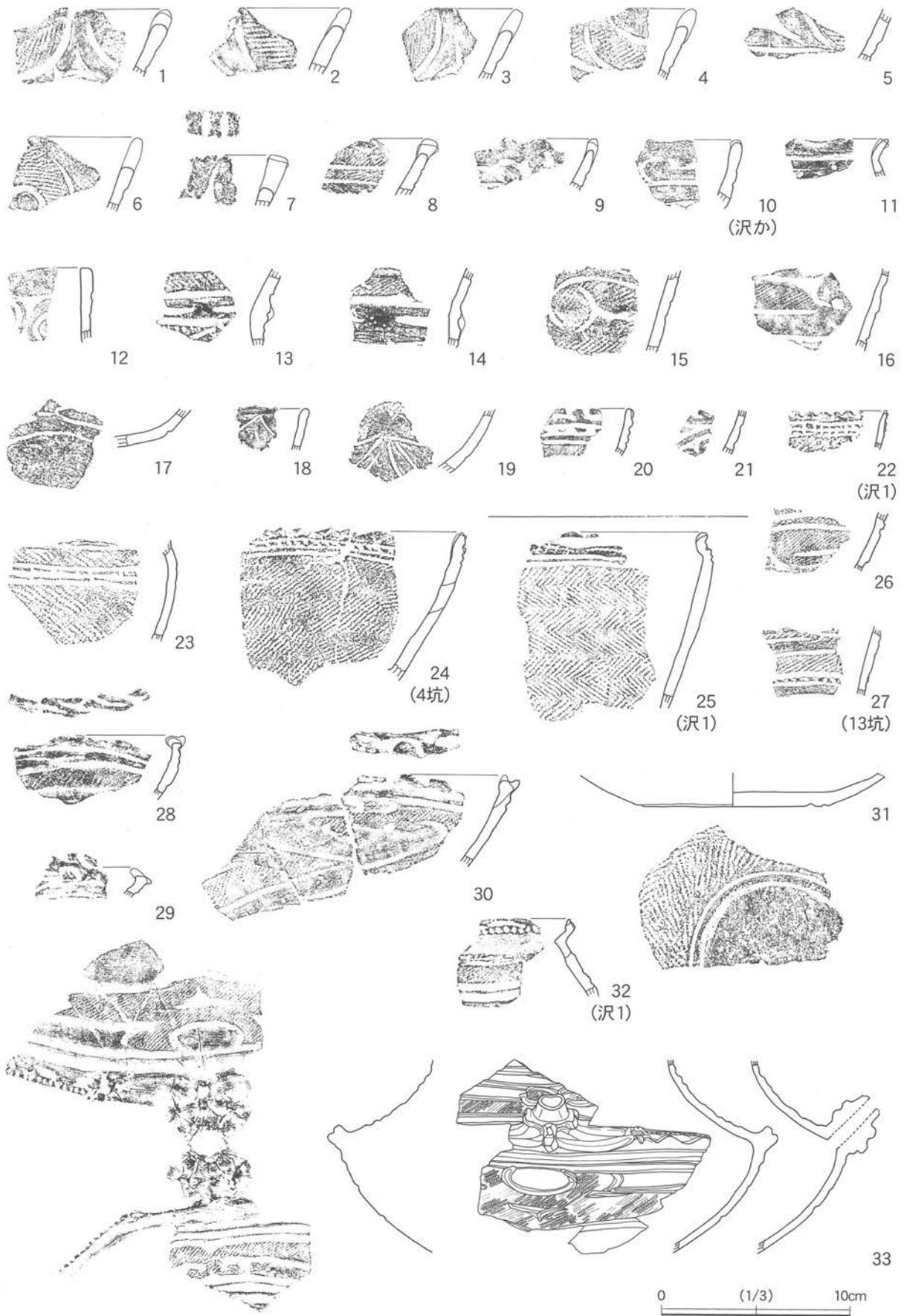
d種 下向きの重弧線文が縄文をともなって施されるもの(4)。

2類 口縁部に玉抱き三叉文が施されるもの(第52図9・10)。

口唇部にはB突起が付される。突起部の直下に玉抱き三叉文が配され、下端は沈線が巡り区画される。2点は同一個体である。

3類 深鉢形土器の胴部に三叉文が施されるもの(第52図15・16)。

15は入組文の端部と三叉文が共存するもの。16は玉抱き三叉文が入組文と交わっている。



第52図 縄文土器 (16)

4 類 浅鉢形土器（第52図17～19）。

いずれも、無文地に沈線文で文様が施されるものである。17は底部付近に入組弧線文が施される。18・19は同一個体であろう。

5 類 羊歯状文が文様の主体となるもの（第52図20・21）。出土量はきわめて少ない。

口縁部に文様が集約されるようになる。20は羊歯状文が陽刻的に施されたもの。21は三叉文が絡み合い羊歯状文化するものである。

第IX群土器

縄文時代晚期中葉に比定される土器を一括した。大洞C₁式やC₂式に相当するものである。出土量は、後半期の大洞C₂式期になると増加する傾向がある。

1 類 深鉢形および鉢形土器。

a種 平行沈線と刺突による列点が施されるもの（第52図22～25）。22・24は口縁部に刻目が入り小波状を呈する。口縁部は3条の平行沈線間を巡らせ、22は縦位の短沈線、24は連続刺突がそれぞれ施される。23は胴部資料で、胴部上半には3条の平行沈線が巡らされ、上方の沈線間に等間隔でまばらに刺突が施される。さらに、破片の中央付近には上下の沈線間を繋ぐ「S」字状の蛇行短沈線がみられる。25は口唇部が小波状を呈し、頸部で屈曲する。頸部の沈線は陽彫的で繋がらず、連続刺突が施される。胴部上端には平行沈線が施文される。胴部は全面に縄文が施され、25は羽状構成となる。

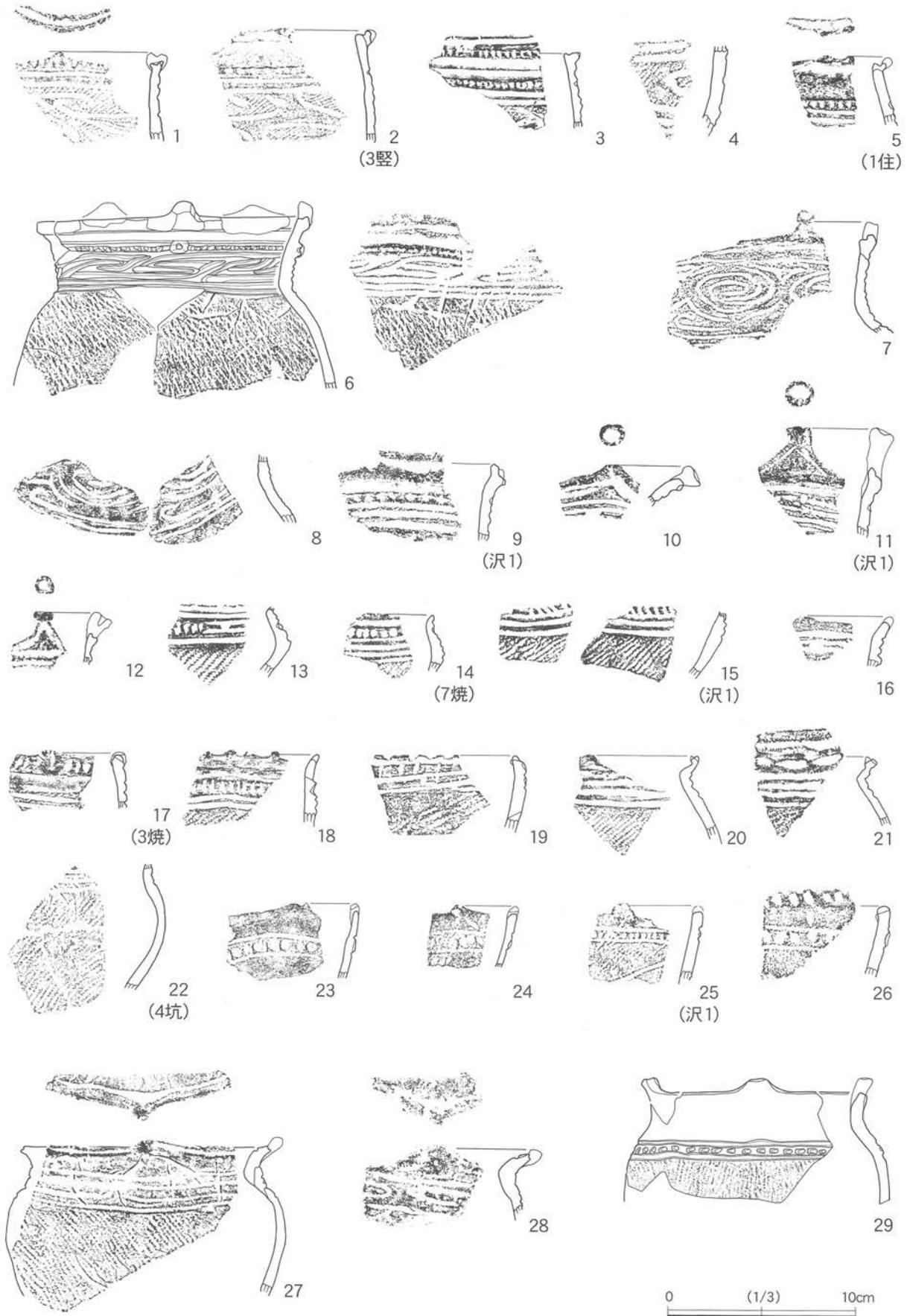
b種 胴部が丸みを帯びて屈曲せずに口縁部が内傾気味のもの（第53図2～5）。2は口唇に沈線が一周し、端部に突起が付される。口縁部は無文となり、下端には平行沈線が巡り、溝底の刺痕が施される。胴部上半には磨消縄文手法による雲形文が配される。3は口唇端部に刻目が施され、口縁部には4条の平行沈線文が巡り一条に連続刺突がみられる。胴部上半には雲形文が施されるようである。5は2個一対の瘤状突起が付され、平行沈線の上端には連続刺突が施される。4は雲形文が施される胴部である。

c種 口縁部が屈曲する鉢形土器（第56図33）。口唇部にはA突起が付され、沈線が巡る。口縁部は無文で磨かれている。胴部文様は対向する三叉文が施され、周囲には横位の「V」字状文が配される。上下は平行沈線文で区画される。地文は縄文である。

2 類 浅鉢形土器。

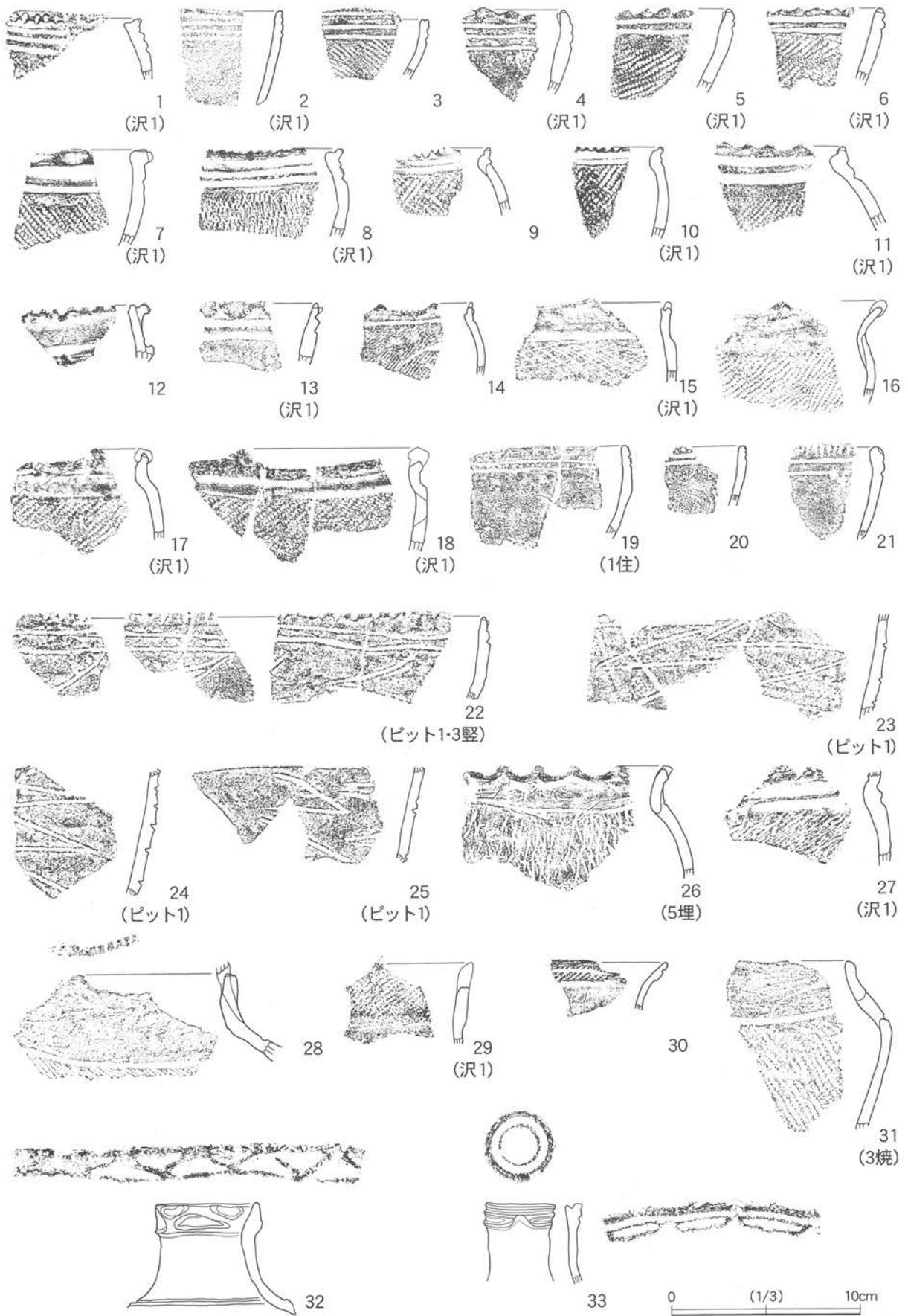
a種 口唇部はB状突起を主体とした立体的な装飾をなすもの（第52図28・30・31）。30は口唇直下に2条の沈線が巡り、以下体部全面に雲形文が描かれる。雲形文は磨消部が彫り込まれ陽彫的な意匠となる。破片左部分の文様はやや直線的である。表面にタール状の付着物が認められる。28も同様の文様構成を取るが、やや直線化した雲形文が陽彫的に描かれるものであろう。31は底部資料で、体部下半は羽状縄文が施され、底面には2条の沈線が施される。

b種 口縁は平縁で、体部中央で屈曲し口縁部が内傾するもの（第55図12）。屈曲部にはメガネ状隆帯が付される。12は口縁部が肥厚し、折返口縁となる。頸部には横位の平行沈線が一周する。体部上端には3条の平行沈線が施されている。



第53図 縄文土器 (17)

第1節 縄文土器



第54図 縄文土器 (18)

c種 頸部がゆるく屈曲して段をもち、口縁部が直立気味に立ち上がるもの（第54図30、第55図13・16、第56図12～20・22・23）。口縁は平縁となるものが多く、屈曲部にはb種同様メガネ状隆帯が付される。口縁部は無文となり、端部に段を有するもの（第55図13、第56図12～14・16）は口唇にも沈線が巡る。メガネ状隆帯の間隔は第56図15や23のように短いものと、16などのように長いものなど様々である。体部文様は磨消縄文手法による雲形文が主体となり、上下に横位沈線を1条ないし2条巡らせ区画される。雲形文は軟化したものも多く、第55図13は横長の三角連繫文、第56図15は二重の楕円形文、16は端部が接続しない三角形意匠、19は「C」字状文がそれぞれみられる。また、磨消縄文手法が用いられないもの（第55図13、第56図20など）もみられる。第55図13には横位沈線からトゲ状の短沈線が延び三叉文状となる箇所がみられる。第55図16は口唇に山形突起が施される例である。頂部には粘土を巻き付けボタン状とし、中間にも小突起が付される。口縁部にも沈線が巡り、体部文様は直線的である。第56図22も本種に含まれるものと思われる。口縁部文様は浮線状を呈し、口唇部には連続刺突が施される。20は頸部の屈曲が強く外反気味に立ち上がる。第54図30の口縁部資料とは同一個体と思われ、薄く精巧な作りである。口縁部は段を持ち、1条の沈線が巡る縄文帯を形成する。メガネ状隆帯上にも縄文が施される。体部も縄文地に弧線文で文様が描かれる。

d種 波状口縁となるもの（第55図14）。1点のみである。波頂部は台形状となり、口唇部には大きな刺突が施される。口唇直下には沈線が巡り、波頂部下には横位の弧線が配され、三角形区画が形成される。体部には楕円区画の沈線文が施される。口唇内面にも沈線が施され、突起部では短沈線が上方に延びる。

e種 体部で屈曲しないで内彎気味に立ち上がるもの（第56図1～10・31）。口唇部は沈線が巡らされ、刻目が施されるもの（1・31）、口角を斜め上方から押圧するもの（2～4）、細かな刺突が施されるもの（5）、平縁のもの（7～9）、刻目と三角状挟りが施されたもの（10）などがある。口縁部には平行沈線文が施されるものが多い。体部文様は雲形文（1～5）、平行沈線文（6・10）、縄文のみのもの（8・9・31）、無文のもの（7・11）などがある。雲形文については、軟化して1や5のように沈線化しているものが多い。縄文には斜縄文のほか羽状構成（8）がある。なかでも31は、口縁部が無文、体部が斜縄文で特異な意匠である。

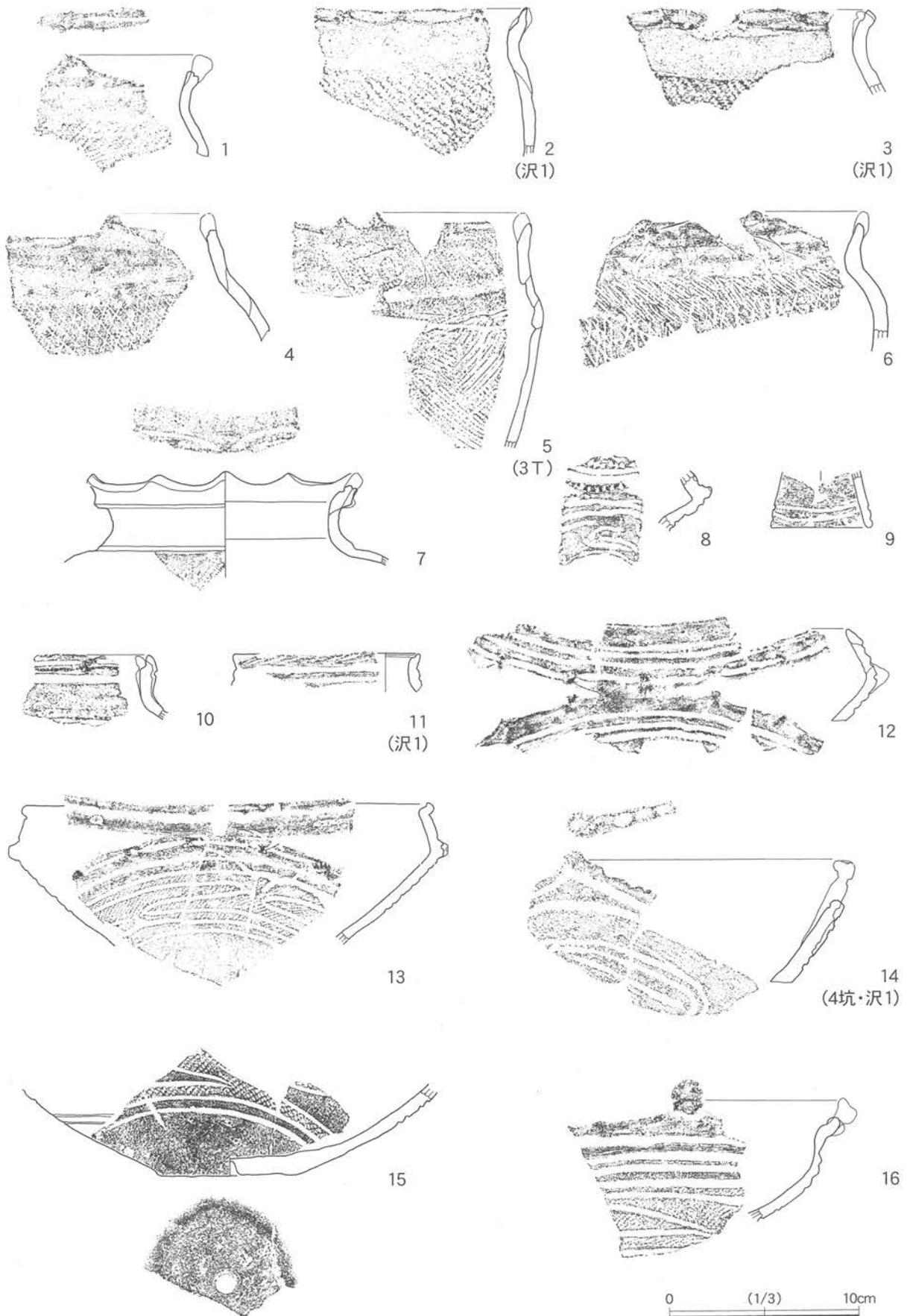
f種 器高が低く皿状のもの（第56図11・21）。口唇部には沈線が巡る。11は平行沈線文、21は平行沈線文とB状突起がそれぞれ施されている。縄文は施されていない。

g種 体部資料を一括した（第56図26～30・32）。26・27は同一個体。体部文様は磨消縄文手法による方形区画が配される。28・30は雲形文が施される。32は底部である。体部には縄文が施され、底面外縁には沈線が配される。

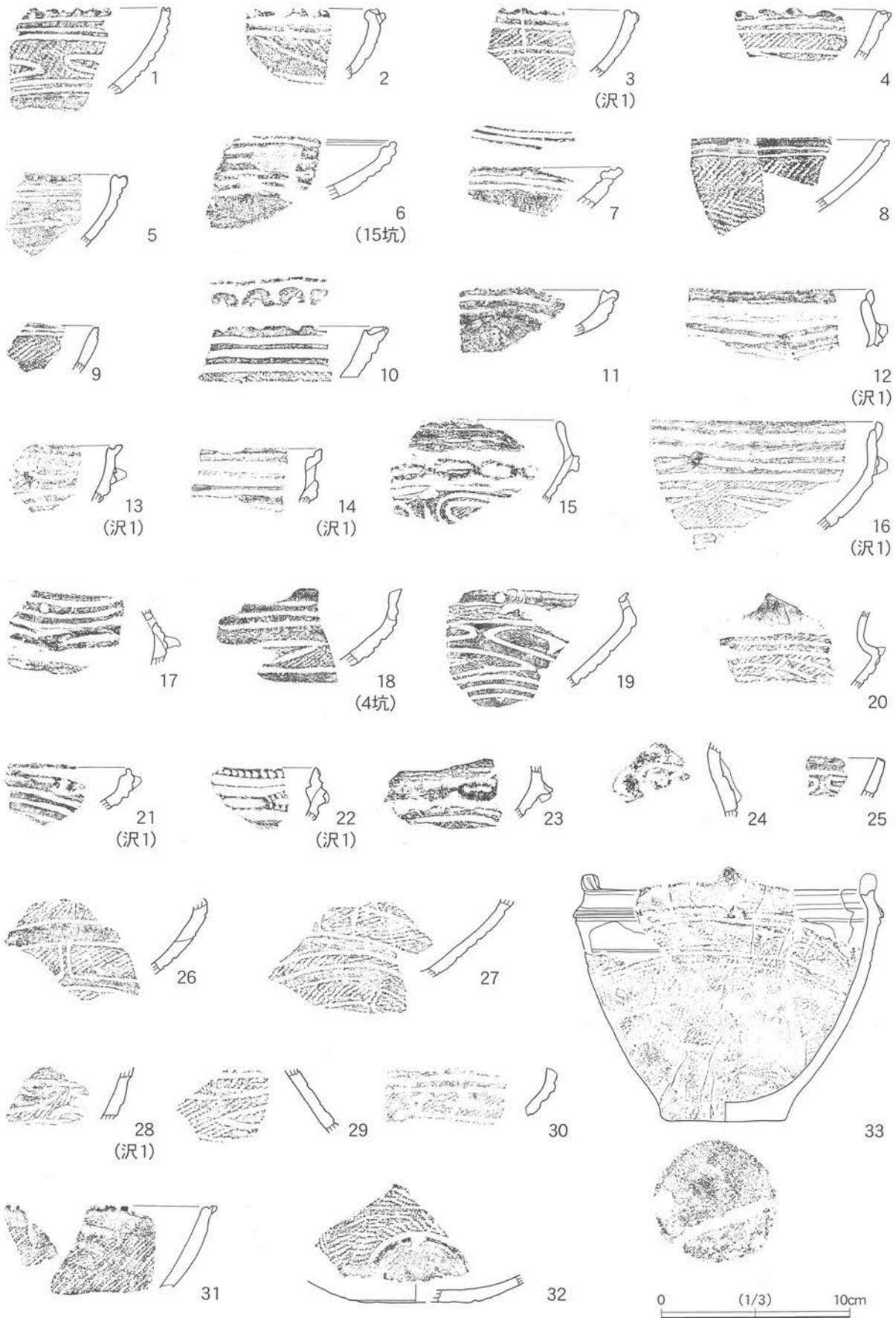
3 類 注口土器（第52図29・32・33）。

29は受け皿状を呈する口縁部資料で、口唇には突起が複雑に付され、浮彫状の装飾が施される。33は唯一器形を推測できる資料である。また、32の口縁部資料も胎土や施文縄文などから33と同一個体の可能性が高い。胴部は浅鉢形土器同様丸みを帯びたボウル状で、頸部との境では鋭角的に屈曲し、頸部は外反気味に直立する。頸部文様は上・下端を平行沈線文で区画され、

第1節 縄文土器



第55図 縄文土器 (19)



第56図 縄文土器 (20)

陽彫的な「X」字状文等が施される。32から上端には縄文帯が配されるようである。胴部は屈曲部直下に平行沈線が巡り、注口部下位には円文が配され、周囲は弧線や横位沈線で陽彫的な意匠が構成される。屈曲部は浮彫状の装飾と連続刻目文が施されている。口縁は直線的に短く外傾し、端部で直立する受皿状となる。口唇外面は屈曲部同様連続刻目が施され、内側には突起が付されて浮彫状の装飾が施される。注口部は短く、基部付近に隆帯が巡り、B状突起が四方に貼付される。

4 類 広口短頸壺形土器。

a種 頸部文様帯を有するもの(第53図6～8)。6は口縁部から胴部上半までの資料である。口唇部には山形突起が付され、口縁部文様帯は沈線状に連続刺突が施される溝底の刺痕であり、横長の瘤が4単位配されている。頸部文様は彫刻的な沈線により入組文が施される。下端は平行沈線で区画され、胴部は網目状撚糸文が全面に施文される。7・8は同一個体である。口唇部には頂部が凹む山形突起が付されて沈線が巡る。口縁直下は横位沈線で区画され、頸部文様は沈線による渦巻文が主文となり、下端には連弧文が施される。隙間空間には、上部は三叉文、下部は横位の「し」字状文が配され、胴部との境には平行沈線が巡らされる。胴部は縄文施文のようである。

b種 口縁部が無文となるもの(第53図27～29、第55図7・10、第59図3)。第55図27・28は同一個体。頸部が短いもので、口唇部にはA突起が付される。口唇端部および内面直下には沈線が巡り、突起部下では三角形に彫り込まれている。口縁部下端には沈線が一周し、頸部には内部に連続刺突文を有する横長楕円形文が施される。単位数は不明である。胴部との境は沈線で区画され、胴部は全面縄文が施される。29はややくびれが弱い器形となるが、口唇部には頂部が凹む台形突起が付される。単位は不明。口頸部は無文となり、胴部上端には平行沈線間に刺突文が連続して施される。胴部には縦位の条痕文が全面に施される。第55図7は口縁部に段を有し、波状口縁となる。口唇直下内面には27同様の沈線が巡らされる。10は口唇に内面から押し出された瘤状の突起を有し、両端には横位沈線が施される。口縁部には1条の沈線が巡る。第59図3は口縁に突起を有し、頸部には平行沈線文と瘤状突起が施される。

c種 直立気味の口縁部が短く、口唇は平縁となるもの(第55図11)。口縁部がやや肥厚し、斜位の沈線が施される。下端には平行沈線文が施される。

5 類 長胴壺形土器(第53図1・9～12)。確実なのは第53図1のみである。

出土量はわずかである。1は口唇部に刻目を有し、A突起が付される。口縁部は平行沈線が巡り、頸部文様は磨消縄文による雲形文が配される。9～12も同器種の口縁部資料と推定される。9・11は同一個体で、山形突起が付され、頂部は円形に凹む。口唇部には沈線が配され、突起部直下は三角形区画が沈線で描かれる。頸部には平行沈線文と溝底の刺痕が施される。12は突起端部にドーナツ状の隆帯が付され、頂部の刺突は深い。突起直下の三角形区画は隆帯で囲まれる。

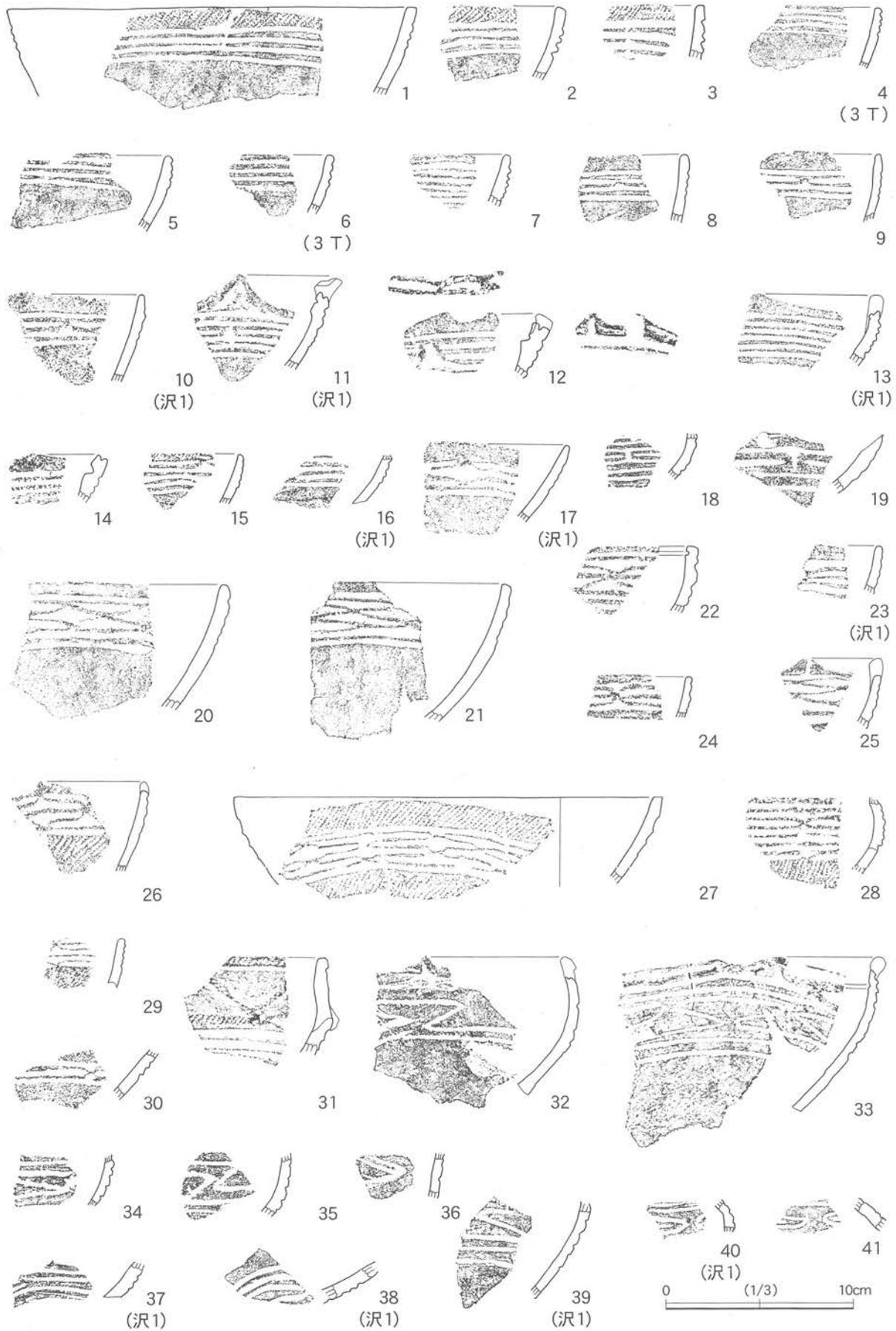
6 類 壺形土器(第54図32・33)。

細口の壺形土器で、口縁部にのみ隆線(32)や「π」字状文(33)が付される。



第57図 縄文土器 (21)

第1節 縄文土器



第58図 縄文土器 (22)

33の口唇端部には沈線が巡らされる。

7 類 その他の土器を一括した。

a種 香炉形土器と推定されるもの(第55図8)。体部中央で強く屈曲する香炉部である。体部は上下を平行沈線文で区画し、沈線による入組文が配される。屈曲部は張り出し、注口土器同様連続刻目が施される。口縁部下端は平行沈線が連続刺突文と平行して巡らされ、部分的に有孔となるようである。

b種 台付土器の台部が出土している(第55図9)。立ち上がりは急角度で、台部下端には平行沈線が配されている。

第X群土器

縄文時代晩期の半精製土器をまとめた。

1 類 深鉢形および鉢形土器。

a種 胴部上半で屈曲し、口縁部が内傾し口唇が短く外反するもの(第49図13・14)。口縁部には平行沈線文と連続刺突文が施される。13は二溝間を潰す連続刺突と単独の刺突が施される。14は上端の溝間に刺突が施される。いずれも丁寧な作りである。

b種 口縁部が緩く外反するもの(第53図18)。口唇部には刻目が施される。口縁直下は無文となる。平行沈線文と沈線間の連続刺突文が施される。

c種 屈曲がなく胴部から口縁部へいたる器形で、無文地に、二溝間の点列と平行沈線文が施されるもの(第53図23～25、第54図19～21)。第53図23・24同一個体で、口唇部は刻目入りの突起が付される。平行沈線文間に円形の刺突が施される。地文はなく、内・外面とも赤彩が施されている。25は二溝間の点列以下に縄文が施され、斜位沈線で区画された磨消部がみられる。文様構成は不明である。精製土器の範疇になる土器かもしれない。第54図19は無文地に二溝間の点列が施される。20・21は平行沈線のみが配される。21の口縁には連続刻目が施される。

d種 c種同様の器形であるが、地文に縄文が使用されるもの(第53図15・19・26、第54図2～6)。口唇部は刻目が施されるものが多い。口縁部文様には、平行沈線文間に連続刺突が施されるものと(第53図19・26)、平行沈線文のみが施されているもの(第53図15、第54図2～6)がある。第53図19は平縁で二溝間の点列のみが施される。

e種 肩が張り口縁部が外反するもの(第44図1・2、第54図1・7～11)。口唇部は大小の差はあるが刻目が施される。第44図1は口縁端部が短く外反し、口唇部に刻目が施される。肩部には平行沈線文が施される。2はA突起が付され、口唇部には沈線と刻目が施される。口縁部文様は平行沈線文のみが施される。胴部には縄文が全面に施される。斜縄文のほか、羽状縄文(9)や網目状撚糸文(8)、撚糸文(第44図2)もみられる。

f種 口縁部が強く屈曲し外傾するもの(第53図20・21)口縁部は小波状となり、内面にも沈線が巡る。文様は胴部上半に平行沈線のみが施文される。

g種 c種同様の器形となるが胴部にも文様が施されるもの(第54図22～25)。すべて同一個体の資料である。口唇部は刻目が施される。口縁部には1本施文具で平行沈線を巡らし、胴

部にはやはり同一の工具を使用して縦位のジグザグ文が施される。

h種 口縁部が無文となり胴部が縄文施文となる小型の鉢形土器（第59図1）。口縁部下には沈線が巡らされる。

2 類 壺形土器。

a種 短頸の壺形土器を一括した（第54図28・31）。口縁部は無文で、頸部下端には沈線が巡る。胴部には縄文が施される。28の口唇部にはA突起が付され、縄文は無節の縄文が使用されている。

b種 広口の壺形土器を一括した（第54図26・27、第55図1～6）。口唇部にはA突起や刻目が施され、口縁部は無文となる。胴部との境には沈線が巡るもの（第54図26・27）などもある。胴部には縄文のほかに網目状撚糸文や条痕文などがある。

c種 胴部に縄文が施される小型の壺形土器（第59図2）。

第 XI 群 土 器

縄文時代晩期後葉に比定される土器を一括した。大洞A式やA'式に相当するものである。

1 類 深鉢形および鉢形土器。主文様は平行沈線文や綾杉文などが施される。

a種 平行沈線文が施されるもの（第57図1～12・17・18、第59図4）。胴部には縄文が地文として施されるものが多い。施文部位や施文手法により二大別が可能である。

①口縁部に3条から4条の平行沈線文が施されるもの（1～8・17・18）。器形には、胴部で屈曲するものとしめないものがある。口唇部は平縁のもの（7・8）、A突起が付されるもの（1）、小波状口縁となるもの（2～4）がある。胴部にいずれも斜縄文が施される。7・8は同一個体と推定される。平行沈線文の中間線は、一周せずに一部途切れる手法が取り入れられている。17は平縁、18はA突起が付される。

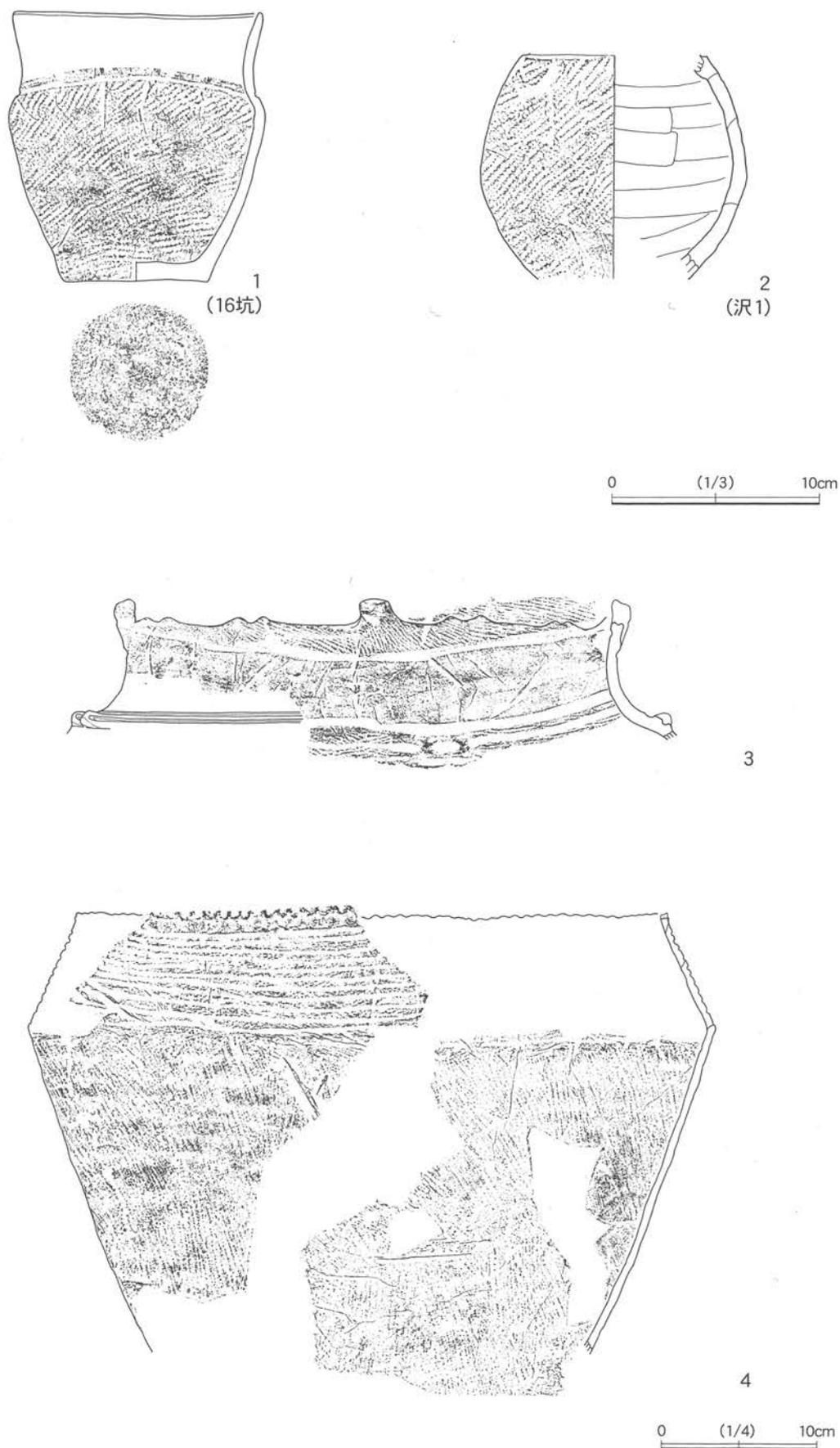
②胴部上半に最大径を有し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの（9～12）。同一個体の破片である。口縁部は無文となり、胴部との境は2条の平行沈線で区画される。胴部上半には3条の平行沈線文を巡らせ、瘤が貼付される。瘤の上方には刺突が施される。胴部の地文は縦位の条痕文である。

③屈曲し内傾する口縁部に平行沈線文が施されるもの（第59図4）。胴部は条痕文となる。

b種 横位の綾杉状文が施されるもの（第57図19～33）。口唇部は平縁が多数を占めるが、28のようにA突起が付されるものもある。器形も胴部でくびれるものとくびれないものの二者があるようである。

①口縁部に綾杉文が施されるもの（19～29）。口縁部には下端に横位沈線が1条ないし2条引かれ、無文帯が主体をなす。以下、綾杉文が施される。綾杉文は1段のものが多いと考えられる。文様の下端には横位沈線が引かれ、胴部下半と区画される。28は口縁部および胴部に縄文が充填される。

②多段に綾杉文が施されるもの（30・31）。器形は胴部ですぼまる深鉢形土器と推定される。文様帯の下方には突起状の瘤が貼付される。



第59図 縄文土器 (23)

③胴部に綾杉文が施されるもの(33)。②と同様に破片の上端で屈曲するようで、胴部下半と推定される。上位には2条の横位沈線が施され、以下は1本工具による縦位の綾杉文が施文される。地文は斜位の撚糸文である。

c種 関東地方の影響を受けた土器が少量出土している(第57図34・35)。34は口縁部が外傾する平縁の深鉢形土器である。口縁部には平行沈線が巡り、胴部には2本一組の棒状工具で雑書文風なジグザグ文を縦位に配している。35も同様の文様が施されるものであろう。

2 類 壺形土器。

a種 広口の壺形土器で、多条の平行沈線が施されるもの(第57図13~16)。13・14は同一個体。口縁部は折返口縁でA突起が付される。頸部には9条の横位沈線が配される。胴部は条痕文が施される。15は外反度が強く、波状口縁で6条の横位沈線が配される。16は口縁部が短く外反し、口唇部には刻目、頸部には8条の横位沈線が施される。地文は縄文である。

b種 器形復元は不可能であるが、壺形土器の肩部を想定させる資料である(第58図40・41)。三角連繫文が沈線をともなって施されている。

3 類 浅鉢形土器。主文様には平行沈線文や工字文、浮線網状文などがある。また、本来赤彩されたものも多いようであるが、現状では識別できるものは少ない。

a種 平行沈線文が施されるもの(第58図1~7)。口唇部は平縁のみである。口縁部には4条の平行沈線が施されるものが多い。7は6条の横位沈線がみられる。1~3は同一個体で、口縁直下には縄文帯が施される唯一の例である。4と6も同一個体である。

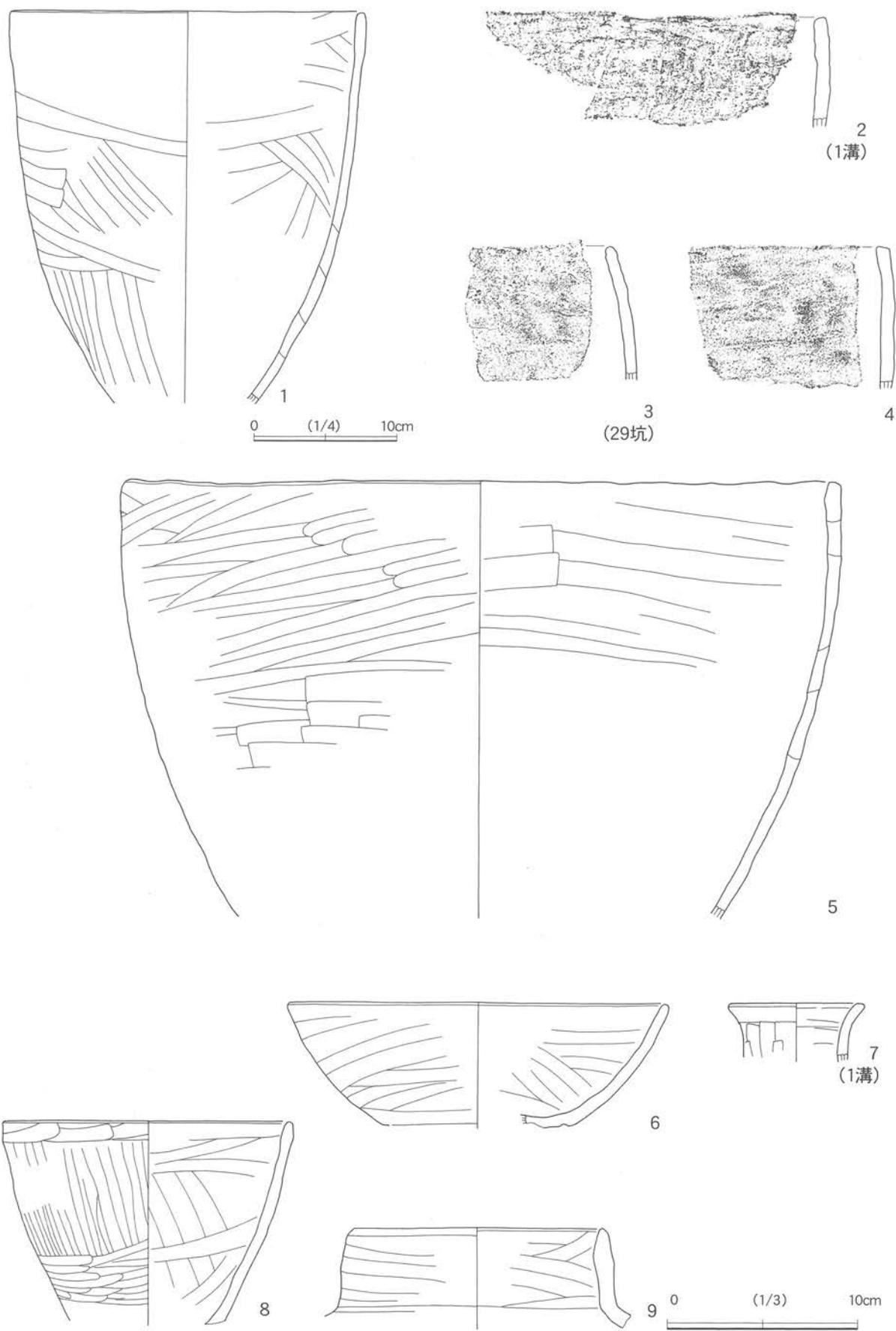
b種 「π」字状文や工字文が施されるもの(第58図10~19)。口唇部は平縁のほか、A突起が付されるもの(11・13)、2個一対のA突起が付されるもの(12)がある。突起が付されるものには口唇部および内面にも沈線が施される。また、11と13の突起には頂部の刻目の有無で差異がみられるが、同一個体の可能性が高い。両者が交互に配されていたのだろう。12はやや厚手の作りで他の土器とは異質である。鉢形土器かもしれない。

文様については、1段のみ(10・11)、対向するもの(15~17)逆向きのもの(19)などがある。12は「π」字の頂点部分の三角形の袢り込みが2条の沈線にわたっておこなわれ、他より横線が多い現象がみられる。

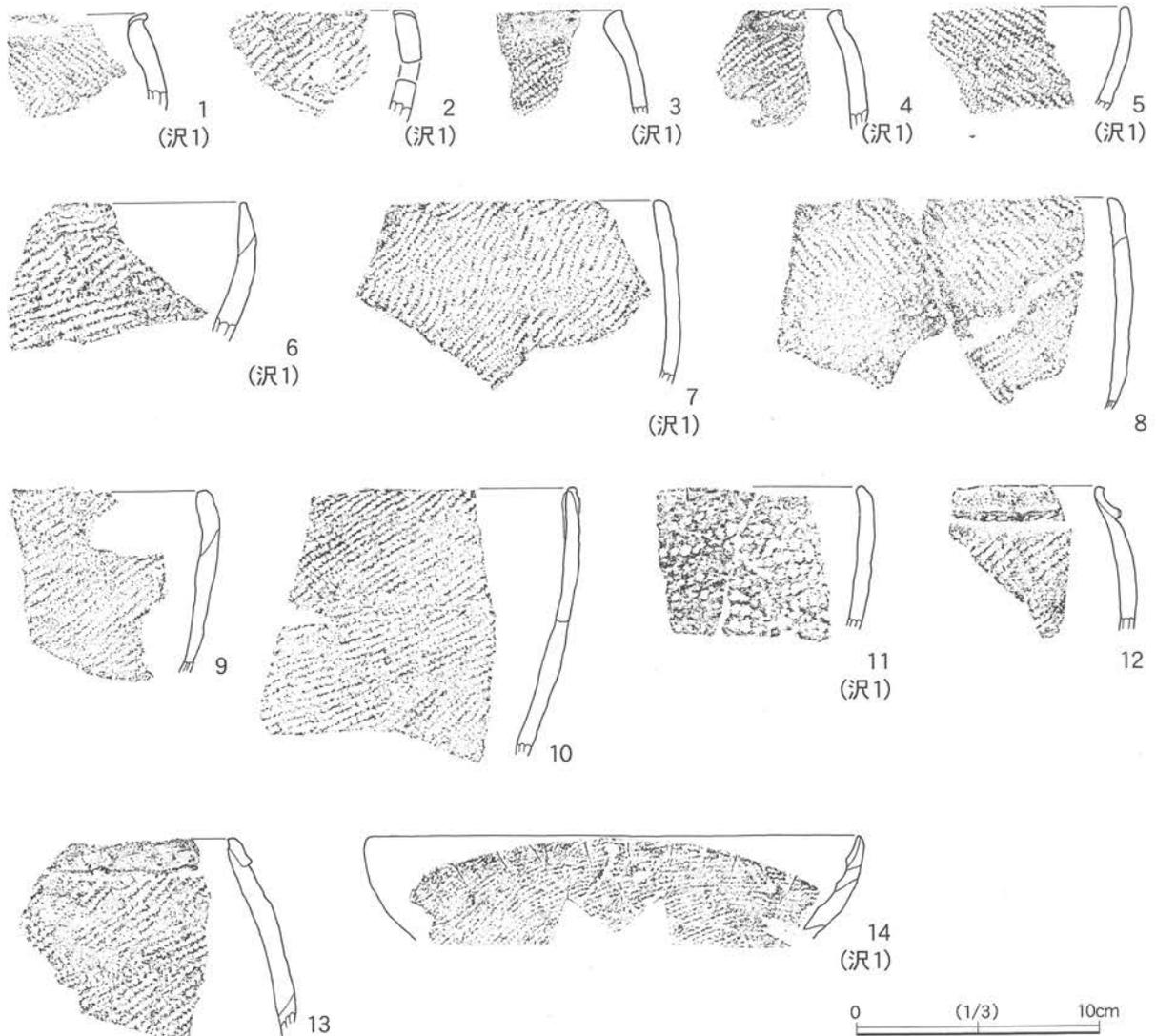
c種 浮線網状文が施されるもの(第58図20~30)。口唇部は平縁が多いが、25・26のようにA突起が配されるものもある。文様構成はバラエティーに富み、菱形状やレンズ状の構成で1段ないし2段構成で施されている。縄文は27の口縁部と胴部、26・28の胴部にのみ施されている。20・21は同一個体。

d種 沈線による三角連繫文などが施されるもの(第58図32~39)。32と35、33と39はそれぞれ同一個体である。32と33は口唇部にA突起が付され沈線が巡り、突起部にはトゲ状の沈刻が施される。33のみは内面にも沈線が巡り、口縁端部にはメガネ状隆帯が部分的ではあるが配されている。32は上・下端1条、33は上端1条下端2条の沈線で区画される。

e種 口縁部が直立気味に立ち上がり、縄文が施された隆帯により文様が構成されるもの(第58図31)。体部下端は凹線状の平行沈線文が施されている。



第60図 縄文土器 (24)



第61図 縄文土器 (25)

第Ⅱ群土器

縄文時代に比定される粗製土器を一括したが、精製・半精製土器の胴部資料が含まれている可能性がある。

1 類 無文土器を一括する。

A 胴部から口縁部が内彎する深鉢形土器 (第60図 1～5・8)。いずれも胴部内・外面にはナデ調整が施される。

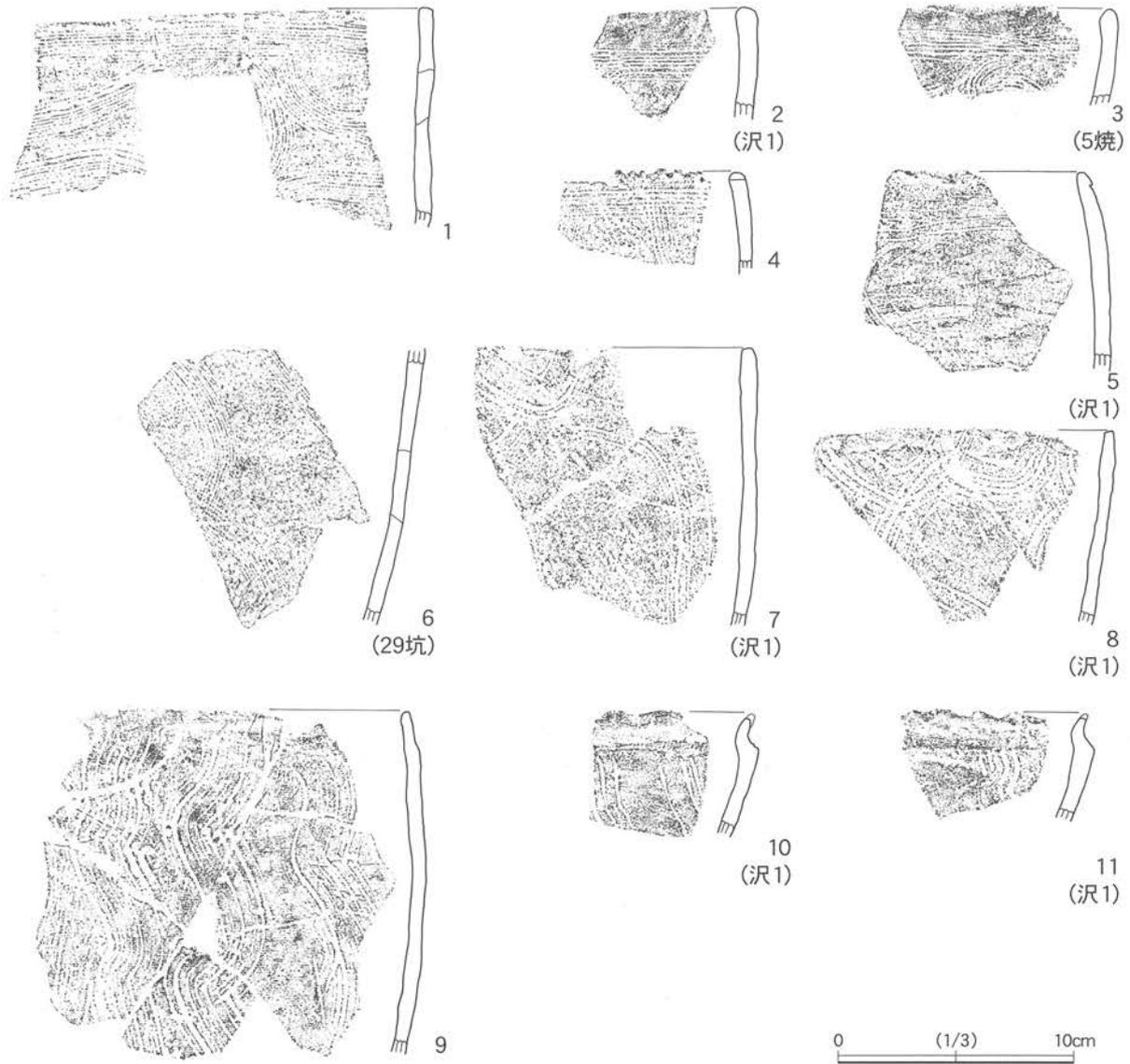
B 口縁部が内彎外傾する浅鉢形土器 (第60図 6)。底部が剝離により欠損する。高杯形土器の可能性もある。

C 壺形土器 (第60図 7・9)。いずれも口縁部は直立するが、7の口縁端部は外傾する。

2 類 縄文が主体となる土器である (第61図 1～14)。

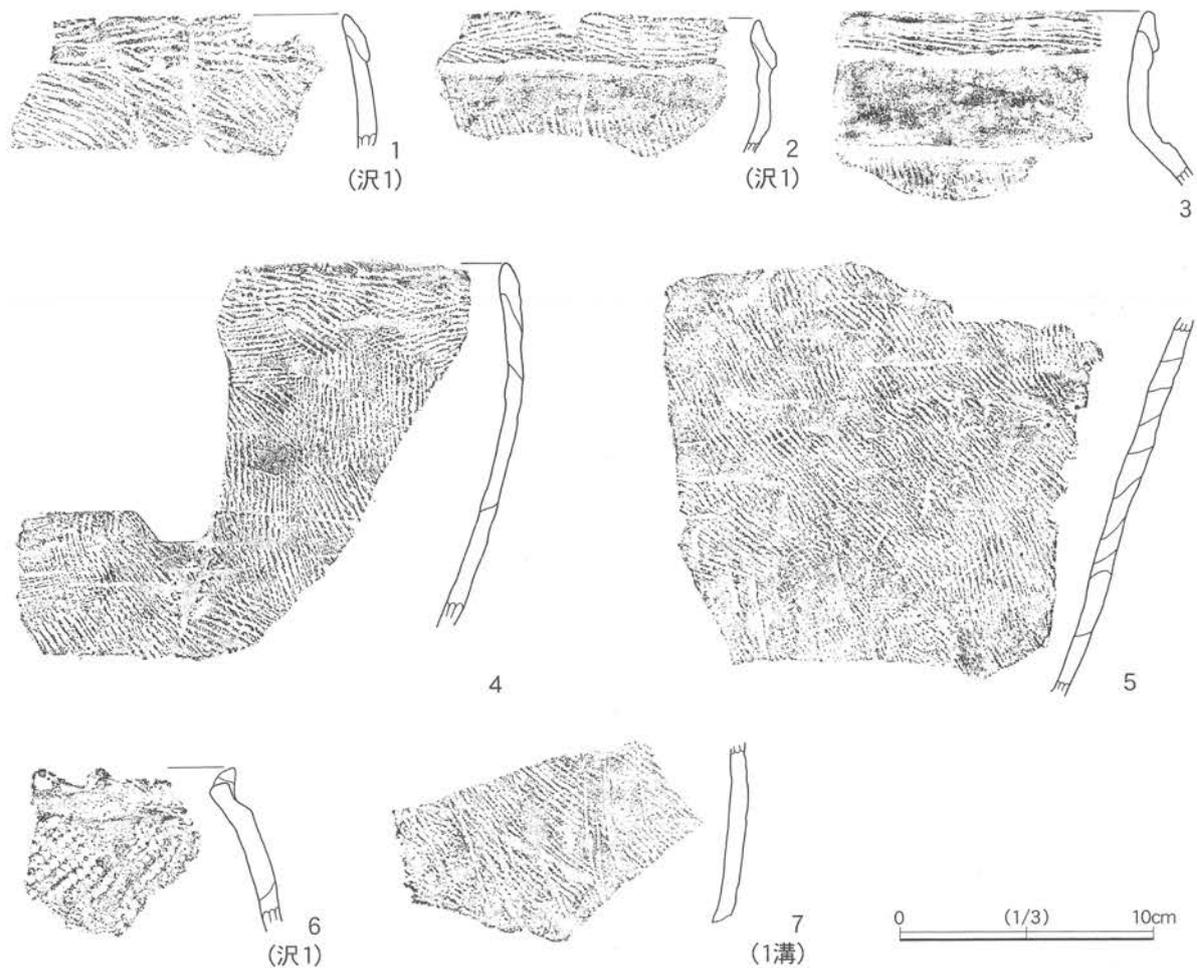
A 羽状縄文が施された深鉢形土器 (第61図 1・2)。2には補修孔が認められる。

B 口縁部が無文、胴部に斜縄文が施される深鉢形土器 (第61図 3・4)。4の口唇部には刺突が施される。



第62図 縄文土器 (26)

- C 斜縄文が施された深鉢形土器 (第61図5～10)。
- D 横位の縄文が施された深鉢形土器 (第61図11)。
- E 口縁部が折返口縁となる深鉢形土器 (第61図12・13)。いずれも折返口縁部は無文となるもの。
- F 斜縄文が施された浅鉢形土器 (第61図14)。
- 3 類 櫛描文が施される土器である (第43図2、第62図)。
- A 口縁部に横位、胴部に連弧文が施されるもの (第62図1)。
- B 口縁部に横位櫛描文、胴部に縦位波状櫛描文が施されるもの (第62図2・3・5)。
- C 口縁部に横位、胴部に鎖状櫛描文が施されるもの (第62図4・6)。
- D 口縁部に連弧状、胴部に鎖状櫛描文が施されるもの (第62図7・8)。
- E 縦位波状文が施されるもの (第62図9～11)。9は平縁、10・11は小波状口縁で無文。
- F 口縁～胴部に横位櫛描文が施されるもの (第43図2)。
- 4 類 撚糸文が施される土器である (第63・64図)。



第63図 縄文土器 (27)

A 胴部に斜位の撚糸文が施される深鉢形土器 (第63図)。

1～3は折返口縁に横位の撚糸文が施される。3の頸部は無文となる。4は平縁で口縁部は横位の撚糸文が施される。5・7は胴部資料である。7には櫛描文が加描される。6は山形突起を有する口縁部資料である。

B 胴部に縦位撚糸文が施されるもの (第45図1、第64図1～3)。1は口縁部に平縁で口縁部に横位の撚糸文が施される。2は小波状口縁を有し、頸部に沈線が施される。3は山形突起を有するもの。

C 鋸歯状の撚糸文が施されるもの (第64図4)。

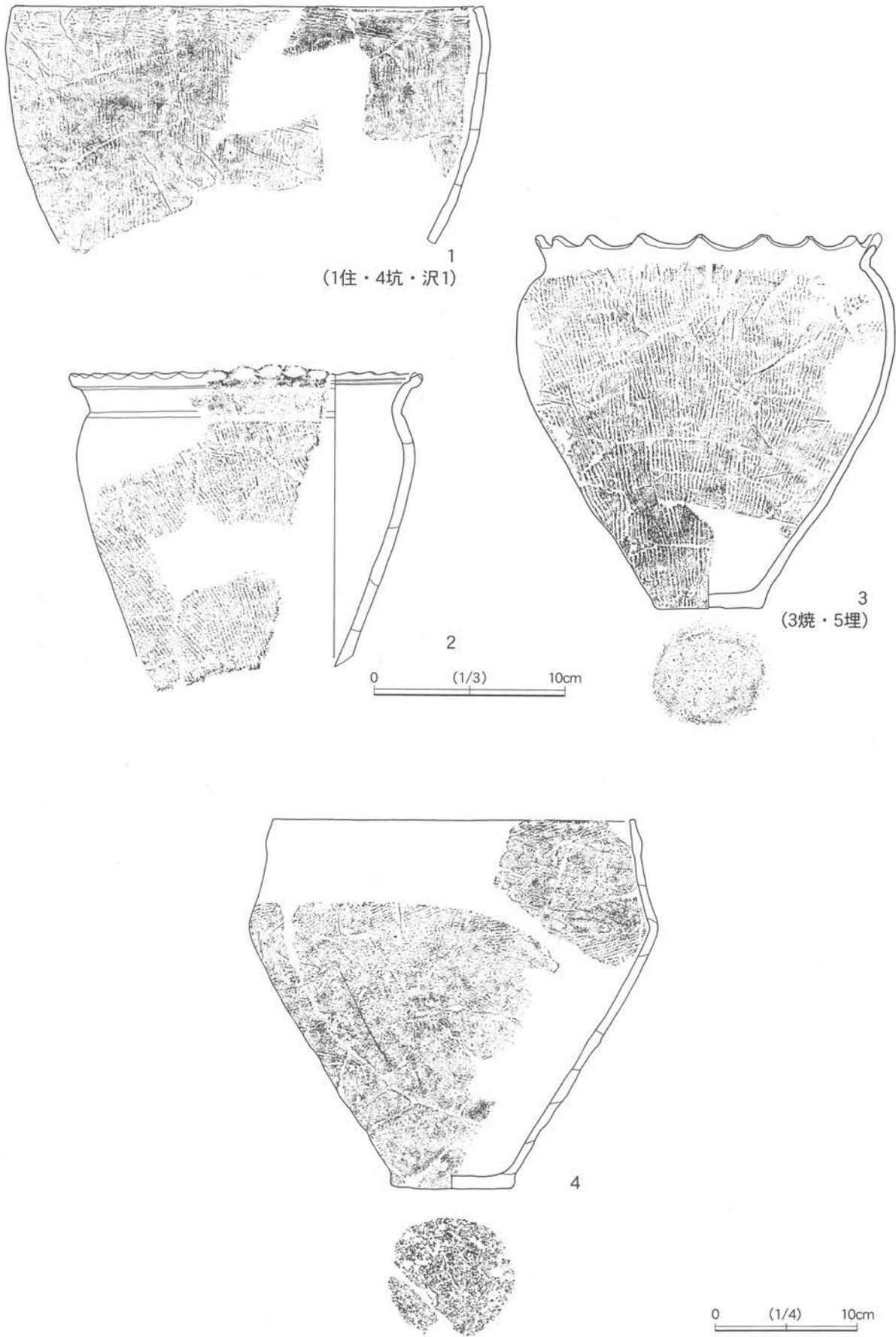
5 類 網目状撚糸文が施される土器である。(第41図3、第65・66図)。

A 口縁部が小波状口縁となるもの (第41図3、第65図1・2)。

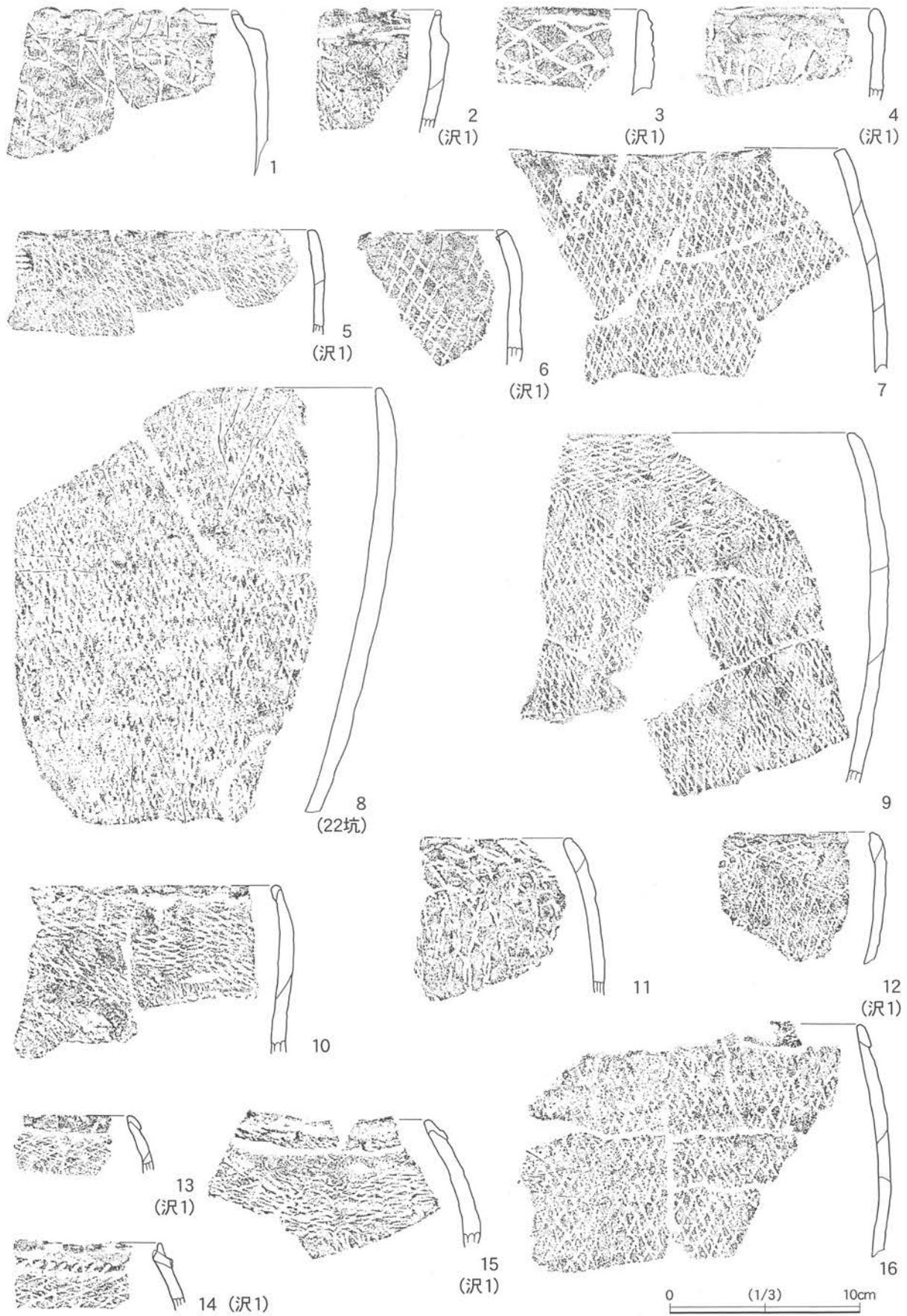
B 口縁部が平縁となり、口縁-胴部に網目状撚糸文が施されるもの (第65図3～8、第66図1)。

C 口縁部に横位、胴部に縦位の網目状撚糸文が施されるもの (第65図9～12)。

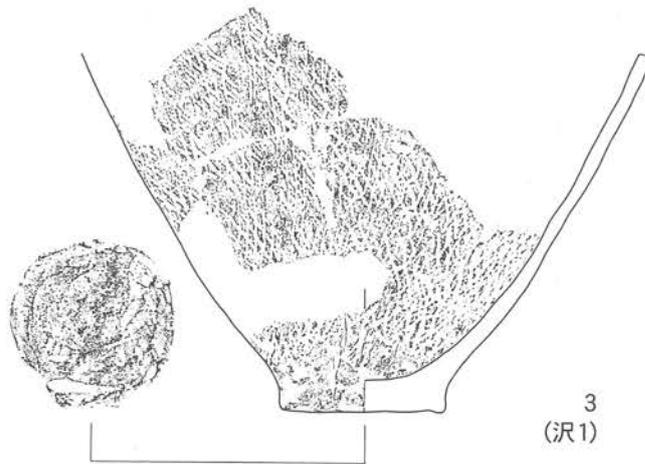
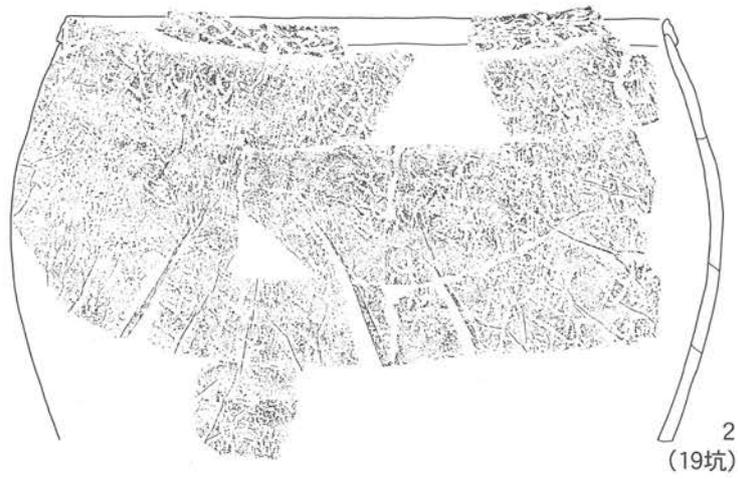
D 口縁部が折返口縁となるもの (第45図2、第65図13～16、第66図2)。口縁部が無文となるもの (第65図13～16)。第66図2は折返口縁にも網目状撚糸文が施される。第66図2の底部は同図3のような形態を呈すると推測される。



第64図 縄文土器 (28)



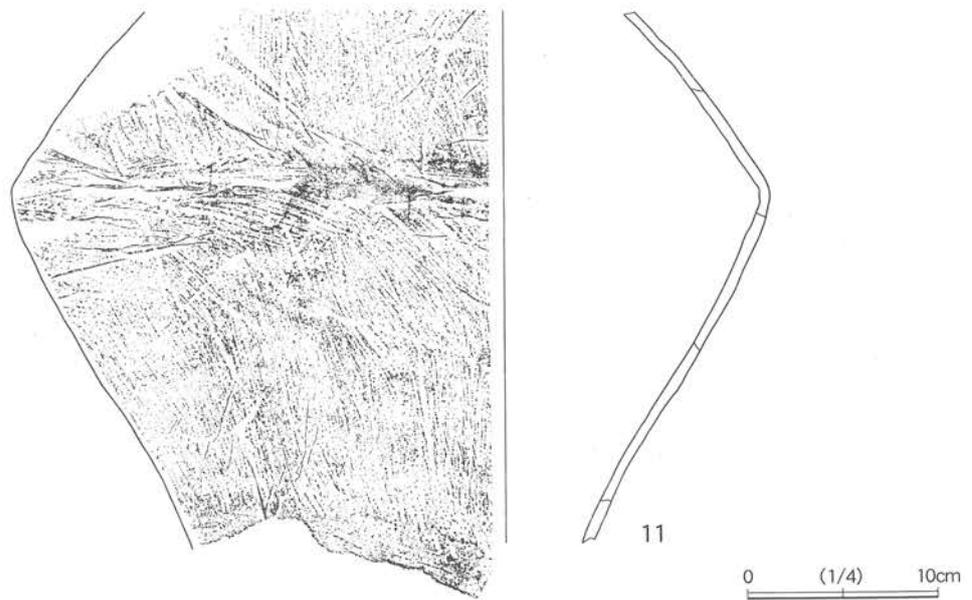
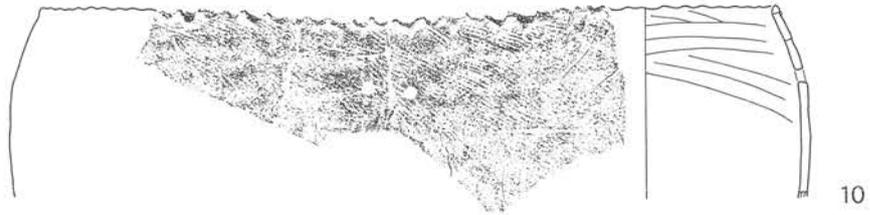
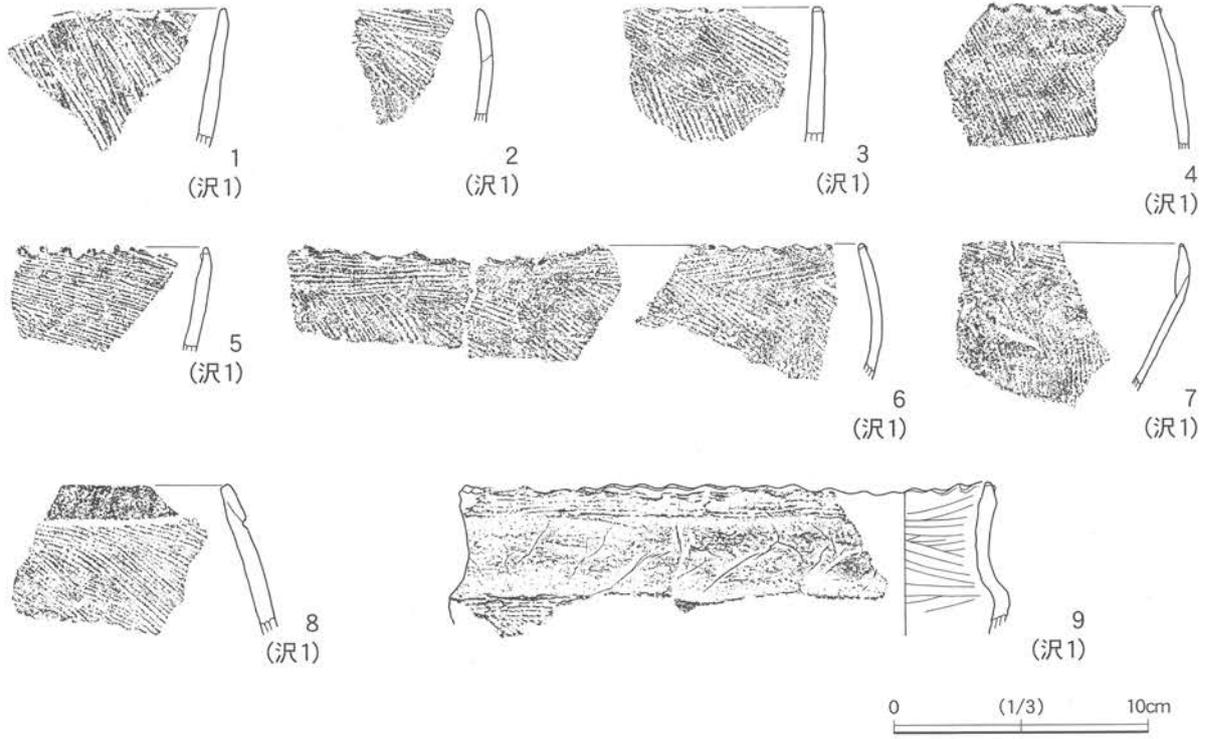
第65図 縄文土器 (29)



0 (1/4) 10cm

第66図 縄文土器 (30)

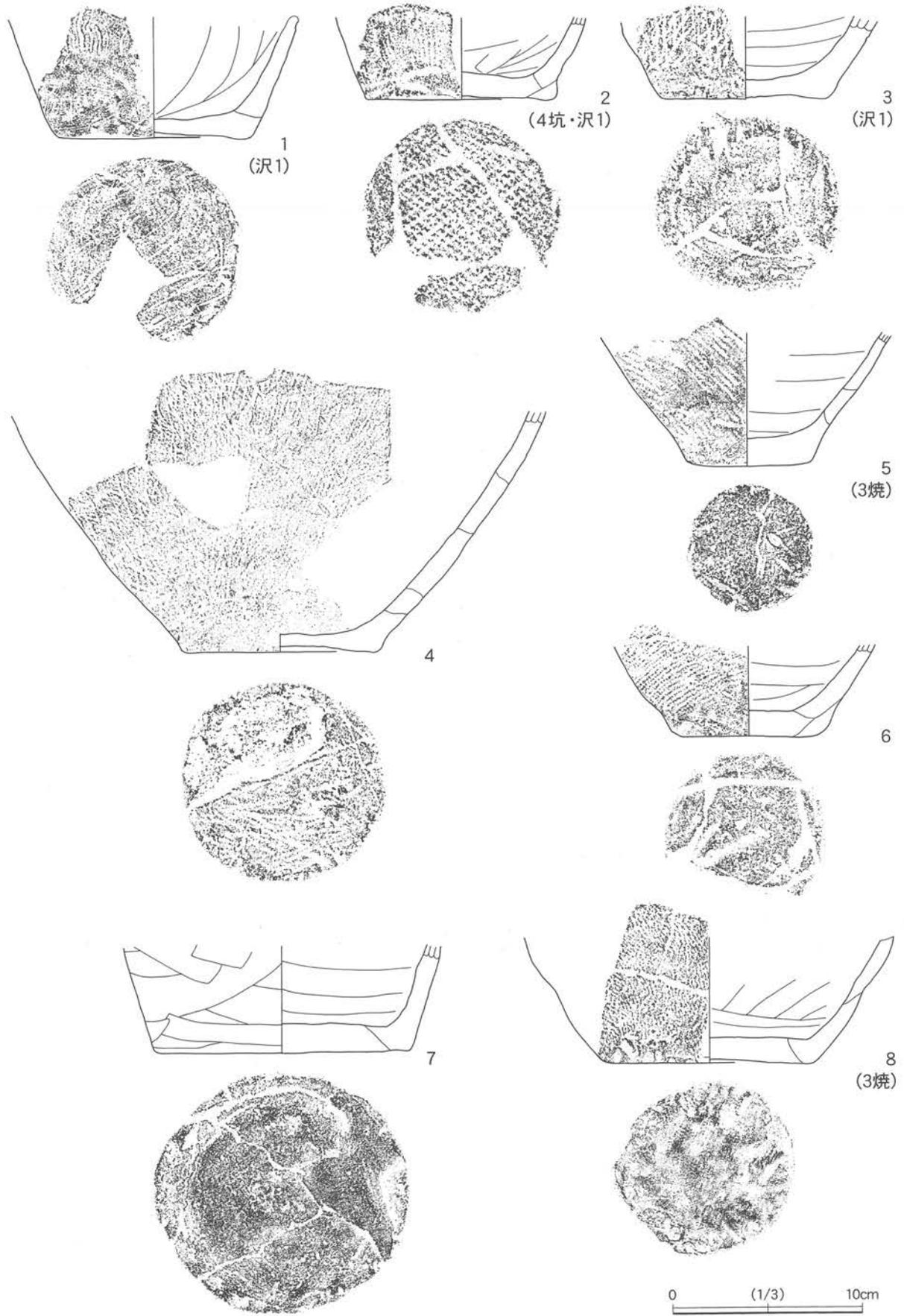
第1節 縄文土器



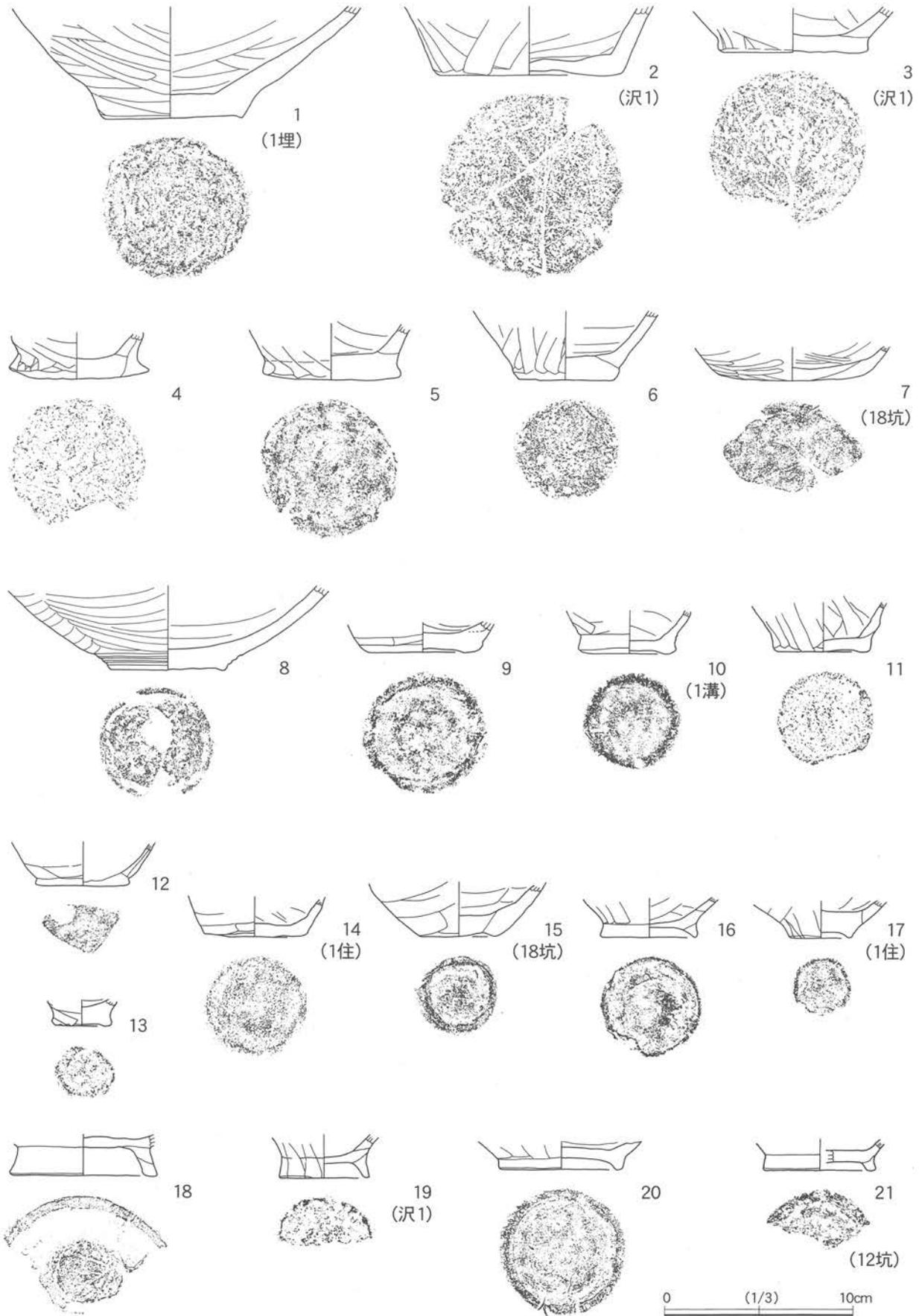
第67図 縄文土器 (31)



第68図 縄文土器 (32)



第69図 縄文土器 (33)



第70図 縄文土器 (34)

第1節 縄文土器

第11表 出土遺物（縄文土器）一覧（1）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
37・1	1区LⅡ(p38)	深鉢	平縁。口：簾状刺突文。	縄文早期	
37・2	土手1ベルト1盛土下層	深鉢	波状口縁。頸：刻目文。	縄文早期	
37・3	a区LⅡ	深鉢	波状口縁か。口：簾状刺突＋平行沈線文。	縄文早期	3炉周辺。
37・4	3区LⅡ	深鉢	口：簾状刺突文。	縄文早期	
37・5	3区LⅡ	深鉢	口：簾状刺突文。	縄文早期	
37・6	土手1北LⅡ	深鉢	口：簾状刺突文。	縄文早期	
37・7	土手1北LⅡ	深鉢	口：簾状刺突文。	縄文早期	
37・8	土手1北LⅡ	深鉢	口：簾状刺突文。	縄文早期	
37・9	a区L4	深鉢	口：簾状刺突文。	縄文早期	
37・10	土手1北LⅡ	深鉢	波状口縁か。口：刺突文。口唇部内面に連続刺突文。	縄文早期	
37・11	調査区	深鉢	口：平行沈線文＋刺突文。	縄文早期	
37・12	土手1北LⅡ	深鉢	口：沈線＋貝殻腹縁文。	縄文早期	
37・13	排土	深鉢	口：沈線＋貝殻腹縁文。	縄文早期	
37・14	a区LⅡ	深鉢	口：刺突文。	縄文早期	
37・15	c区L4	深鉢	胴：平行沈線文。	縄文早期	胎土砂質。
37・16	土手ベルト盛土下	深鉢	口：刺突文。	縄文早期	
37・17	a区LⅡ、攪乱	深鉢	口：八字状刺突文。	縄文早期	
37・18	排土	深鉢	頸：八字状掘起しコブ。	縄文早期	
37・19	5区LⅡ	深鉢	胴：平行沈線文＋竹管状工具による刺突文。	縄文早期	2次火熱。
37・20	1区LⅡ	深鉢	胴：平行沈線文＋刺突文。	縄文早期	
37・21	a区LⅡ	深鉢	胴：平行沈線文。	縄文早期	
37・22	A区①LⅢ・L5	深鉢	胴：竹管状工具による刺突文。	縄文早期	
37・23	1焼	深鉢	胴：平行沈線文。	縄文早期	胎土硬質。
37・24	c区L4	深鉢	磨滅顕著。胴：簾状刺突文。	縄文早期	
37・25	土手1北LⅡ	深鉢	磨滅顕著。波状口縁。口：沈線＋矢羽根状連続刺突文。	縄文早期	
37・26	土手1ベルト1盛土	深鉢	磨滅顕著。口：矢羽根状連続刺突文。	縄文早期	
37・27	3区LⅢ	深鉢	胴：平行沈線文。	縄文早期	
37・28	a区LⅢ	深鉢	胴：平行沈線文。	縄文早期	
37・29	3区LⅡ	深鉢	口：平行沈線文。	縄文早期	
37・30	a区LⅡ	深鉢	口：矢羽根状短沈線文。	縄文早期	
37・31	土手2下LⅡ	深鉢	平縁。口：沈線＋矢羽根状連続刺突文。	縄文早期	
37・32	排土	深鉢	口：矢羽根状連続刺突＋矢羽根状短沈線か。	縄文早期	
37・33	土手1表土	深鉢	口：矢羽根状連続刺突＋矢羽根状短沈線か。	縄文早期	
37・34	A区①LⅡ	深鉢	口：矢羽根状連続刺突＋矢羽根状短沈線か。	縄文早期	
37・35	A区①LⅡ	深鉢	口：矢羽根状連続刺突文。	縄文早期	
37・36	a区LⅡ	深鉢	口：刺突文。	縄文早期	
37・37	3区LⅢ	深鉢	口：矢羽根状連続刺突文。	縄文早期	胎土精緻。
37・38	3区LⅢ	深鉢	口：矢羽根状連続刺突文。	縄文早期	
37・39	3区LⅡ	深鉢	口：矢羽根状連続刺突文。	縄文早期	
37・40	2住(1区)	深鉢	尖底。底：無文。	縄文早期	2次火熱。
37・41	c区(p290)	深鉢	尖底。底：無文。	縄文早期	2次火熱。
37・42	1炉覆土	深鉢	尖底。底：無文。	縄文早期	製塩土器か。
38・1	c区LⅡ	深鉢	胴：隆帯＋刺突＋縄文。	縄文前期	
38・2	1溝覆土	深鉢	胴：縄文＋隆帯＋刺突文。	縄文前期	
38・3	c区LⅡ	深鉢	胴：縄文＋隆帯＋刺突文。	縄文前期	
38・4	c区LⅡ	深鉢	胴：隆帯＋刺突＋縄文。	縄文前期	

第12表 出土遺物（縄文土器）一覧（2）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
38・5	b区L3	深鉢	胴：縄文+隆帯+刺突文。	縄文前期	
38・6	27坑覆土	深鉢	小波状口縁。口-胴：縄文。	縄文前期	2次火熱。
38・7	2坑ø2(p1)	深鉢	平縁。口：原体押圧。	縄文前期	胎土に繊維。
38・8	2坑覆土、1T	深鉢	口：原体押圧。胴：縄文。	縄文前期	胎土に繊維。
38・9	22坑覆土・3区LII	深鉢	平縁。口：平行沈線文+円形刺突。	縄文前期	
38・10	土手1北LII	深鉢	口：平行沈線文+刻目文。	縄文前期	
38・11	土手1北LII	深鉢	平縁。口：平行沈線文+円形刺突。	縄文前期	
38・12	c区L4	深鉢	口：隆帯+刻目+沈線文。内面：条痕文。	縄文前期	
39・1	土手1表土	深鉢	装飾か。	縄文中期	
39・2	c区(p266)	深鉢	平縁。口：隆帯による渦文。円形沈線区画+縄文。	縄文中期	2住上面。
39・3	c区LIII	深鉢	口：隆帯による渦文。沈線区画文。	縄文中期	
39・4	土手1ベルト1LII	深鉢	平縁。口：楕円形沈線区画+縄文。	縄文中期	隆帯剥離。
39・5	2住(4区)	深鉢	波状口縁。	縄文中期	
39・6	2・4区LII、c区L3	深鉢	波状口縁。	縄文中期	
39・7	4区LII(p89)	深鉢	頸：隆帯+沈線区画+縄文。	縄文中期	
39・8	4区LII	深鉢	口：沈線区画文。	縄文中期	
39・9	c区LIII	深鉢	波状口縁。口：円形沈線区画+縄文。	縄文中期	
39・10	c区LIII	深鉢	平縁。口：沈線文。	縄文中期	2次火熱。
39・11	c区L3	深鉢	口：平行沈線文。	縄文中期	
39・12	c区L3	深鉢	胴：隆帯文。沈線区画+縄文。	縄文中期	
39・13	土手1北	深鉢	胴：沈線区画+縄文。	縄文中期	2次火熱。
39・14	c区L3	深鉢	胴：縄文+沈線文。	縄文中期	2次火熱。
39・15	土手2東区表土	深鉢	磨滅顕著。胴：隆帯+沈線文。	縄文中期	
39・16	調査区	浅鉢	口：沈線+隆帯文。	縄文中期	
39・17	c区LIII	深鉢	胴：沈線区画+縄文。	縄文中期	
39・18	土手1表土	深鉢	胴：沈線区画+縄文。	縄文中期	
39・19	c区L3	深鉢	胴：沈線文。	縄文中期	2次火熱。
39・20	4区	深鉢	胴：沈線区画文。	縄文中期	胎土精緻。
39・21	1堅覆土	深鉢	口：沈線文。ミガキ。	縄文中期	
39・22	c区LIII	深鉢	磨滅顕著。口：楕円形沈線区画+縄文か。	縄文中期	2次火熱。
40・1	12坑、ピット1覆土	浅鉢	口：無文。体：沈線文+横割縦長コブ+丸コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
40・2	1住、c区L3他	鉢	平縁。口：平行沈線+連続刻目+コブ。胴：入組文。	縄文後期後半	
40・3	1住、c区(p295)、沢1他	深鉢	頸：入組文+楕円条線文。胴：無文。底：底部穿孔。	縄文後期後半	2次火熱。
41・1	土手1東LII	深鉢	小波状口縁。口-胴：斜位刷毛目条痕文。	縄文後期後半	2次火熱。
41・2	土手1東LII	深鉢	胴：斜位刷毛目条痕文。	縄文後期後半	2次火熱。
41・3	4坑、沢1、c区L3	深鉢	小波状口縁。胴：網状燃糸文。	縄文後期後半	2次火熱。
42・1	12坑覆土	深鉢	平縁。口：小突起。頸：三叉状沈線文+横割縦長コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
42・2	12坑、c区(p278)1他	深鉢	波状口縁。口：刻目文。頸：弧線連結文+刻目文。	縄文後期後半	1住周辺。
42・3	1区LII	深鉢	波状口縁。口：連結弧線文+横割縦長コブ。	縄文後期後半	
42・4	12坑	深鉢	波状口縁。口：刻目文。縦長横割コブ。	縄文後期後半	
42・5	3区LII(p174)	深鉢	波状口縁。連続弧線文+横割縦長コブ。口：刻目文。	縄文後期後半	23坑周辺。
42・6	攪乱	深鉢	頸：弧線文+充填刻目文。連続刻目文。	縄文後期後半	
42・7	3区LIII上面	深鉢	波状口縁。口：刻目文。胴：区画沈線+縄文。	縄文後期後半	
42・8	土手1ベルト1LII	深鉢	頸：連結弧線文+縄文。円形平コブ。	縄文後期後半	
42・9	3区LII	深鉢	頸：連弧文+魚眼文+縄文。	縄文後期後半	
43・1	4埋、沢1、ピット1覆土	深鉢	突起口縁。口：刻目文。頸：入組文+刻目+横長コブ。	縄文後期後半	

第1節 縄文土器

第13表 出土遺物（縄文土器）一覧（3）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
43・2	2埋、c区(p294)、c区LⅡ他	深鉢	小波状口縁。口一胴：横方面の櫛条痕文。底：ナデ。	縄文後期後半	2次火熱。
43・3	1埋、LⅡ(p11・12)他	深鉢	平縁。口一胴：格子状沈線文。	縄文後期後半	2次火熱。
44・1	3埋	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期	2次火熱。
44・2	3焼、5埋、4区LⅡ他	深鉢	突起口縁。頸：平行沈線文。胴：縦位撚糸文。	縄文晩期	2次火熱。
45・1	3焼11・82-下 89・82-下	深鉢	突起口縁。胴：縦位撚糸文。	縄文後期後半	2次火熱。
45・2	3焼、5埋、b区LⅢ他	深鉢	折返口縁。口 底：網状撚糸文。	縄文後期後半	2次火熱。
46・1	土手2東区表土	深鉢	平縁。横位隆帯。	縄文後期前葉	
46・2	土手1東LⅡ	深鉢	平縁。横位隆帯。	縄文後期前葉	
46・3	3区LⅢ	深鉢	口：横位隆帯+逆C字状隆帯文。	縄文後期前葉	
46・4	4区LⅡ	深鉢	波状口縁か。口：沈線+逆C字状隆帯文。	縄文後期前葉	
46・5	土手1東LⅡ	深鉢	波状口縁。口：連鎖状隆帯。	縄文後期前葉	
46・6	3区LⅡ	深鉢	平縁。口：沈線+逆C字状隆帯文。	縄文後期前葉	
46・7	3区(p267)	深鉢	平縁。口：無文+逆C字状隆帯文。	縄文後期前葉	
46・8	土手1下LⅡ	深鉢	口：隆帯+盲孔。胴：磨消縄文+蕨手文。	縄文後期前葉	
46・9	3区LⅡ	深鉢	胴：縄文+波状ジグザグ文。	縄文後期前葉	
46・10	土手2東区表土	深鉢	口：隆帯文。胴：羽状縄文。	縄文後期前葉	
46・11	2埋	深鉢	胴：縄文。	縄文後期前葉	
46・12	3区LⅡ	深鉢	胴：縄文+多条沈線。	縄文後期前葉	
46・13	3区LⅡ	深鉢	胴：縄文+多条沈線。	縄文後期前葉	
46・14	3区LⅡ	深鉢	胴：縄文+多条沈線。	縄文後期前葉	
46・15	土手1東攪乱	深鉢	波状口縁。	縄文後期前葉	
46・16	1住(3区)覆土	深鉢	波状口縁か。	縄文後期前葉	
46・17	土手1北LⅡ	深鉢	頸：縄文+曲線文+磨消。	縄文後期前葉	
46・18	4区LⅡ	深鉢	波状口縁。口：沈線+櫛条線文+円形浮文+コブ。	縄文後期後半	
46・19	A区①LⅡ	深鉢	波状口縁。口：沈線+櫛条線文+円形浮文+コブ。	縄文後期後半	
46・20	1住(1区)覆土	深鉢	波状口縁。口：沈線+櫛条状沈線+丸コブ。	縄文後期後半	
46・21	c区LⅢ	深鉢	波状口縁。口：沈線+櫛条状沈線+丸コブ。	縄文後期後半	
46・22	1住(3区)覆土	深鉢	波状口縁。口：沈線+櫛条状沈線+丸コブ。	縄文後期後半	
46・23	c区LⅢ	深鉢	波状口縁。口：沈線+櫛条状沈線+丸コブ。	縄文後期後半	
46・24	3T	鉢	波状口縁。口：沈線+櫛条状沈線+丸コブ。	縄文後期後半	
46・25	1区LⅡ	深鉢	刻目平縁。口：コブ状突起。頸：入組文+掘起コブ。	縄文後期後半	
46・26	土手1ベルト1LⅡ	深鉢	刻目平縁。口：頸：刺突文。	縄文後期後半	
46・27	3・4区LⅡ	深鉢	突起口縁。口：沈線文。頸：連続刺突+コブ。	縄文後期後半	
46・28	3区LⅡ	深鉢	頸：入組文+連続刺突文。	縄文後期後半	
46・29	1区LⅡ	深鉢	頸：入組文+連続刺突文。	縄文後期後半	
46・30	ピット1覆土	深鉢	頸：入組文+連続刺突文。	縄文後期後半	
46・31	3区(p161)、1・3区LⅡ	深鉢	頸：入組文+連続刺突文。	縄文後期後半	
46・32	3区LⅡ	深鉢	胴：連続刺突+コブ。	縄文後期後半	
46・33	b区LⅡ	深鉢	頸：入組文+連続刺突文。	縄文後期後半	
46・34	1溝覆土	深鉢	頸：入組文+連続刺突文。	縄文後期後半	
46・35	4区LⅡ	深鉢	頸：弧線文+縦長割コブ(豆コブ)。	縄文後期後半	
47・1	4区LⅡ(p72・73・210)	鉢	平縁。口：連続刻目。胴：弧線連結文+丸コブ。	縄文後期後半	1住周辺。
47・2	3区LⅢ	深鉢	平縁。口：連続刻目。頸：三角区画。胴：連弧文。	縄文後期後半	
47・3	土手1ベルト1LⅡ(p305)	深鉢	突起口縁。頸：入組文+連続刻目。胴：連弧文+コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
47・4	1住、c区(p288)、c区LⅢ他	深鉢	突起口縁。頸：入組文+連続刻目。胴：メガネ状隆帯。	縄文後期後半	2次火熱。
47・5	3区LⅡ・LⅢ上面(p180)	深鉢	突起口縁。頸：入組文+充填刻目。胴：メガネ状突帯。	縄文後期後半	

第14表 出土遺物（縄文土器）一覧（4）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
48・1	3区LⅡ	深鉢	山形突起。口：連続刻目文。	縄文後期後半	
48・2	a区LⅡ	深鉢	山形突起。口：縄文。	縄文後期後半	
48・3	1区LⅡ	深鉢	山形突起。口：縄文。頸：連続刻目文。	縄文後期後半	
48・4	2区LⅡ、土手1西	深鉢	山形突起。口：縄文。頸：連続刻目文。	縄文後期後半	
48・5	1区LⅡ	深鉢	頸：連続刻目文。入組文+縄文。	縄文後期後半	
48・6	1区LⅡ	深鉢	頸：連続刻目文。入組文+縄文。	縄文後期後半	
48・7	c区L3	鉢か	胴：入組文+縄文。	縄文後期後半	
48・8	a区(3炉周辺)LⅡ	深鉢	胴：入組文+縄文。2次火熱。	縄文後期後半	胎土砂質。
48・9	1区LⅡ	深鉢	頸：入組文。	縄文後期後半	
48・10	1溝覆土	深鉢	胴：入組文+縄文。	縄文後期後半	
48・11	a区L4	深鉢	頸：掘起しコブ。入組帯状文。	縄文後期後半	
48・12	1区LⅡ	深鉢	頸：入組文+縄文。刺突文。	縄文後期後半	
48・13	c区L3	深鉢	頸：入組文+充墳刻目文。連続刻目文。胎土硬質。	縄文後期後半	胎土硬質。
48・14	A区①LⅡ	深鉢	突起口縁。口：縄文。	縄文後期後半	
48・15	排土	深鉢	頸：入組文+縄文。	縄文後期後半	
48・16	調査区1	深鉢	平縁。口-頸：平行沈線+掘起コブ。	縄文後期後半	
48・17	3区LⅡ	深鉢	頸：入組文(沈線のみ)+掘起コブ。	縄文後期後半	
48・18	ピット1覆土	深鉢	頸：入組文+掘起コブ。平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
48・19	4区LⅡ、土手1東	深鉢	頸：入組文+充墳刻目文。	縄文後期後半	
48・20	1・a区LⅡ	深鉢	頸：弧線連結文+充墳刻目文+豆コブ。	縄文後期後半	
48・21	ピット1覆土、沢1他	深鉢	A突起。口：無文。頸：三叉状入組文+充墳刻目文。	縄文後期後半	
48・22	4坑	深鉢	A突起。口：無文。頸：連続刻目文。	縄文後期後半	
48・23	1区LⅡ	深鉢	平縁。口：入組文+充墳刻目文。	縄文後期後半	
48・24	1区LⅡ	深鉢	平縁。口-頸：入組文+充墳刻目文。	縄文後期後半	
48・25	1区LⅡ	深鉢	頸：入組文+充墳刻目文。	縄文後期後半	
48・26	A区①LⅡ	深鉢	頸：入組文+充墳刻目文+豆コブ。	縄文後期後半	
48・27	c区L3	深鉢	頸：2個一對豆コブ。	縄文後期後半	
48・28	3区LⅡ	鉢か	胴：入組帯状文+豆コブ。	縄文後期後半	
48・29	3区LⅡ	深鉢	口：三日月隆帯+連続刺突文。頸：木葉状文+丸コブ。	縄文後期後半	
48・30	土手1北LⅡ	深鉢	口：連続刺突文。頸：木葉状文+丸コブ。	縄文後期後半	
48・31	c区LⅡ	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
48・32	3壜覆土	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
48・33	7焼覆土	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
48・34	3壜覆土	深鉢	頸：平行沈線+連続刺突+横長コブ。	縄文後期後半	胎土黒色。
48・35	3壜覆土	深鉢	頸：平行沈線+連続刺突+X字状隆帯文。	縄文後期後半	胎土黒色。
48・36	4区LⅡ	深鉢	口：2対1組突起。胴：刺突文。入組帯状文+縄文。	縄文後期後半	
48・37	3区LⅡ・LⅢ	鉢	平縁。口：連続刺突+弧線文・横U字曲線文+丸コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
48・38	4区(p307)	鉢	口：連結弧線文+丸コブ。	縄文後期後半	23坑上面。
48・39	c区L3	深鉢	頸：刻目X字状隆帯。	縄文後期後半	
48・40	土手2下LⅡ	深鉢	頸：充墳刻目文+X字状隆帯文。	縄文後期後半	
48・41	沢1	深鉢	頸：充墳刻目文+X字状隆帯文。	縄文後期後半	
48・42	沢1	深鉢	頸：連結弧線文+充墳刻目文+2分縦割横長コブ。	縄文後期後半	
49・1	1・3区LⅡ	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・2	1区LⅡ	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・3	土手1北LⅡ	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・4	c区LⅢ	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	

第1節 縄文土器

第15表 出土遺物（縄文土器）一覧（5）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
49・5	4坑、ピット1覆土	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・6	1住(4区)	深鉢	平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・7	1区LⅡ	深鉢	平縁か。頸：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・8	土手1北LⅡ	深鉢	突起口縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・9	1区LⅡ	深鉢	平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・10	調査区1	深鉢	平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・11	1区LⅡ	深鉢	突起口縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・12	1区LⅡ	鉢	突起口縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・13	3区LⅡ	深鉢	突起口縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・14	4区LⅡ	深鉢	波状口縁。口：弧線文+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・15	A区①LⅡ	深鉢	波状突起。口：弧線文+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・16	攪乱	深鉢	突起口縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・17	土手1北LⅡ	深鉢	平縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・18	1区LⅡ	深鉢	刻目平口縁か。口：平行沈線+連続刺突文・弧線文。	縄文後期後半	
49・19	4区LⅡ	深鉢	磨滅顕著。突起口縁。口：平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	2次火熱。
49・20	沢1	深鉢	胴：平行沈線+連続刺突文+縦長コブ。	縄文後期後半	
49・21	4区LⅡ	深鉢	突起口縁。口：平行沈線文。	縄文後期後半	
49・22	1住(1区)	深鉢	頸：入組文+平行沈線+連続刺突文。	縄文後期後半	
49・23	c区L3	深鉢	平縁。口：無文+突起。頸：平行沈線+縄文。	縄文後期後半	
49・24	4区LⅡ	深鉢	突起口縁。口：無文。頸：平行沈線+縄文。	縄文後期後半	
49・25	4区LⅡ	深鉢	平縁。口：無文。頸：縄文+沈線区画。	縄文後期後半	
49・26	1溝覆土	深鉢	平縁。口：無文。頸：縄文+沈線区画。	縄文後期後半	
49・27	12坑	深鉢	口：2対丸コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
49・28	3区	壺か	口：2対丸コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
49・29	c区L3	壺	刻目平縁。口：平行沈線文。	縄文後期後半	
49・30	c区(p287)	深鉢	胴：平行沈線+連続刺突+X字状粘土紐貼付。	縄文後期後半	
49・31	沢1	深鉢	平縁。口：入組文+楕円条線文	縄文後期後半	
49・32	A区①LⅡ	鉢	磨滅顕著。平縁。口：平行沈線文。	縄文後期後半	2次火熱。
49・33	1区LⅡ	深鉢	山形突起。口：沈線+縄文。	縄文後期後半	
49・34	3区LⅡ	深鉢	山形突起。口：沈線+縄文。	縄文後期後半	
49・35	a区LⅡ	鉢	平縁。口：縄文+沈線。	縄文後期後半	
49・36	1区(p212)、4区LⅡ	壺か	平縁。口：縄文+沈線。	縄文後期後半	
49・37	沢1	深鉢	突起口縁。口：沈線+盲孔平コブ。	縄文後期後半	
49・38	1区LⅡ	浅鉢	口：縄文+縦長コブ。体：メガネ状隆帯文。	縄文後期後半	
49・39	土手2表土	壺	胴：弧線文+縄文+縦長コブ。	縄文後期後半	注口か。
49・40	a区L4	深鉢	体：多条沈線+2分縦長コブ。	縄文後期後半	
49・41	A区①LⅡ	深鉢	磨滅顕著。刻目平縁。口：2個一對コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
49・42	c区L3	深鉢	胴：2個一對コブ。	縄文後期後半	
49・43	3区LⅡ(p156)	深鉢	頸：弧線連結文。	縄文後期後半	
49・44	1区LⅡ	深鉢	平縁。頸：連続刺突文。入組帯状文。	縄文後期後半	
49・45	4区LⅡ	鉢	平縁。口：連続刺突文。	縄文後期後半	
50・1	A区①LⅡ	深鉢	波状口縁。口：沈線+横割縦長コブ。	縄文後期後半	2次火熱。
50・2	沢1	深鉢	頸：弧線文+平コブ。連続刻目文。	縄文後期後半	
50・3	1住(4区)	深鉢	頸：連結弧線文+円形平コブ。	縄文後期後半	
50・4	沢1	浅鉢	口：縄文+縦・横長コブ。体：三角形区画+充填縄文。	縄文後期後半	2次火熱。
50・5	4区LⅡ・3T	深鉢	大波状口縁。口：凹線文+縦長コブ。内・外面ミガキ。	縄文後期後半	

第16表 出土遺物（縄文土器）一覧（6）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
50・6	c区L3	深鉢	大波状口縁。口：凹線文+縦長コブ。内・外面ミガキ。	縄文後期後半	
50・7	土手1北LII	深鉢	頸：蛇行沈線文。	縄文後期後半	
50・8	a区L4	深鉢	頸：蛇行沈線文。	縄文後期後半	
50・9	c区L3	深鉢	頸：ジグザグ文。	縄文後期後半	
50・10	4区LII	深鉢	頸：ジグザグ文。	縄文後期後半	
50・11	土手1北	釣手か	胴：弧線文+粒コブ。	縄文後期後半	
50・12	1区LII	注口	壺か。体：平行沈線+充填刺突文。	縄文後期後半	
50・13	4区LII(p181)	台付	台：平行沈線文。	縄文後期後半	1住上面。
50・14	b区(p283)	台付	台：無文。	縄文後期後半	
50・15	1区LII	鉢	平縁。口：平行沈線+充填刺突文。	縄文後期後半	
50・16	沢1	鉢	コブ状突起口縁。口：平行沈線+充填刺突文。	縄文後期後半	
50・17	1区LII	鉢	突起口縁。口：平行沈線+充填刺突文。	縄文後期後半	
50・18	沢1	鉢	平縁。口：平行沈線+充填刺突文。	縄文後期後半	
50・19	1区LII	鉢	口：平行沈線+豆コブ。	縄文後期後半	
51・1	1区LII	注口	口：横割縦長コブ。体：平・丸コブ。	縄文後期後半	
51・2	b区(p308)	注口	口：レンズ状文。横割縦長コブ。頸：縄文+粒コブ。	縄文後期後半	
51・3	3区LII(p177)	注口	胴：無文。	縄文後期後半	穿孔径6mm。
51・4	土手1西LII(p1)	注口	頸：沈線+縄文+丸コブ。	縄文後期後半	
51・5	土手2下(p136)、土手2下LI	注口	胴：無文。	縄文後期後半	
51・6	1区LII	注口	注口：無文。	縄文後期後半	穿孔径15mm。
51・7	3区LII	注口	口：平行沈線文。	縄文後期後半	胎土硬質。
51・8	土手1西(p2)、4区	注口	注口：沈線文+横長コブ。	縄文後期後半	穿孔径8mm。
51・9	土手1表土	注口	注口：沈線文+平コブ。	縄文後期後半	穿孔径9mm。
51・10	c区LII	注口	注口：無文。	縄文後期後半	穿孔径10~12mm
51・11	3T	注口	口：平行沈線文。	縄文後期後半	
51・12	c区L3	注口	胴：連弧文・弧線文+縄文+豆コブ。	縄文後期後半	
51・13	調査区LIII	注口	胴：弧文+縄文+横長コブ。	縄文後期後半	
51・14	沢1	注口	胴：重弧文+2対掘起コブ。	縄文後期後半	
51・15	1区LII(p173)	注口	胴：横位沈線文+縄文。糸巻状コブ。2対掘起コブ。	縄文後期後半	23坑上面。
51・16	1・4区LII	注口	胴：入組弧線文。	縄文後期後半	
51・17	1区LII(p159)	注口	胴：入組弧線文+掘起コブ+糸巻状コブ。	縄文後期後半	
51・18	1区LII	注口	胴：弧線文+掘起コブ。	縄文後期後半	
51・19	3区LII(p157)	注口	底：上げ底状。	縄文後期後半	
51・20	23坑	注口	底：上げ底状。	縄文後期後半	
51・21	沢1、c区LIII・L3	壺	胴：垂線。	縄文後期後半	
51・22	c区(p284)	台付	体：三日月状透かし+沈線文+突起。台：無文。	縄文後期後半	沢跡1。
51・23	c区LII	注口か	頸：メガネ状突帯文。	縄文後期後半	
52・1	2区LII、c区L3	深鉢	山形突起（2対）。口：弧線文+縄文。	縄文晩期前葉	
52・2	c区L3	深鉢	波状口縁。口：弧線文+縄文。	縄文晩期前葉	
52・3	c区L3	深鉢	山形突起。口：弧線文。	縄文晩期前葉	
52・4	表探	深鉢	波状口縁。口：重弧線文+縄文。	縄文晩期前葉	
52・5	A区①LII	深鉢	口：弧線文+縄文。	縄文晩期前葉	
52・6	土手1東LII	短頸壺	山形突起。口：溝底刺痕。頸：入組文。胴：網状撚糸文。	縄文晩期前葉	
52・7	b区L3	短頸壺	縦割山形突起。口：沈線文。頸：渦巻文。	縄文晩期前葉	
52・8	5区LII	短頸壺	縦割山形突起。口：沈線文。頸：渦巻文。	縄文晩期前葉	
52・9	c区L3	深鉢	B突起。口：玉抱き三叉文。	縄文晩期前葉	

第1節 縄文土器

第17表 出土遺物（縄文土器）一覧（7）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
52・10	沢か	鉢	波状口縁。口：雲形文か。	縄文晩期前葉	
52・11	A区①L II	壺	小波状口縁。口：無文。	縄文晩期前葉	2次火熱。
52・12	c区L 3	深鉢か	口：浮彫状三叉入組文。	縄文晩期前葉	
52・13	1区L II	深鉢	頸：沈線＋充填刻目＋メガネ状突帯文。	縄文晩期前葉	胎土砂質。
52・14	排土	浅鉢	胴：縄文。	縄文晩期前葉	
52・15	土手2下L I	深鉢	胴：入組文・三叉文。	縄文晩期前葉	
52・16	b区L II	深鉢	胴：入組文・玉抱き三叉文。	縄文晩期前葉	
52・17	土手1ベルト1、1区L II	浅鉢	底：入組弧線文。	縄文晩期前葉	
52・18	1区L II	浅鉢	平縁。口：沈線文。	縄文晩期前葉	胎土精緻。
52・19	1区L II	浅鉢	胴：沈線文（連結弧線文か）。	縄文晩期前葉	
52・20	b区L 3	鉢	平縁。口：羊歯状文。胴：捺糸文。	縄文晩期前葉	
52・21	表採	鉢	口：羊歯状文。	縄文晩期前葉	
52・22	沢1	鉢	小波状口縁。口：平行沈線＋縦位短沈線。胴：捺糸文。	縄文晩期中葉	2溝間の截痕。
52・23	土手1ベルト1L III	鉢	口：平行沈線＋連続刺突文。S字状蛇行短沈線。	縄文晩期中葉	
52・24	4坑覆土	鉢	小波状口縁。口：平行沈線＋連続刺突文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
52・25	沢1	鉢	小波状口縁。頸：沈線＋連続刺突文。胴：羽状縄文。	縄文晩期中葉	溝底の刺突。
52・26	土手1東L II	鉢	口：雲形文。	縄文晩期中葉	
52・27	13坑覆土	深鉢	頸：入組文＋縄文。	縄文晩期中葉	
52・28	4区	浅鉢	B状突起。口：雲形文。	縄文晩期中葉	
52・29	c区L 3	注口	浮彫裝飾口縁。	縄文晩期中葉	
52・30	c区L 3・L II	浅鉢	B状突起。口：平行沈線文。体：雲形文。	縄文晩期中葉	
52・31	c区L 3	浅鉢	底部。体：羽状縄文。底：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
52・32	沢1、4区	注口	浮彫裝飾口縁。頸：平行沈線。	縄文晩期中葉	胎土硬質。
52・33	2区(p188)、c区L 3他	注口	浮彫裝飾口縁。頸：平行沈線＋X字状文。注口：円文。	縄文晩期中葉	胎土精緻。
53・1	4区L II	壺	A突起。口：刻目・平行沈線。頸：雲形文。	縄文晩期中葉	
53・2	3壺	鉢	突起口縁。口：平行沈線＋溝底の刺痕。胴：雲形文。	縄文晩期中葉	
53・3	2区(p195)	鉢	刻目口縁。口：平行沈線＋連続刺突文。胴：雲形文か。	縄文晩期中葉	
53・4	4区L II	鉢	胴：雲形文。	縄文晩期中葉	
53・5	1住(4区)	鉢	コブ状突起口縁。口：平行沈線＋連続刺突文。	縄文晩期中葉	2次火熱。
53・6	c区(p254～256・258・259)	短頸壺	突起口縁。口：沈線文。頸：雲形文。胴：捺糸文。	縄文晩期中葉	2住上面。
53・7	3区L II (p176)	短頸壺	突起口縁。頸：渦巻文。	縄文晩期中葉	12坑上面。
53・8	土手1西L II (p116・170)	短頸壺	突起口縁。頸：渦巻文。	縄文晩期中葉	
53・9	沢1	壺	山形突起。口：連続刺突文（溝底の刺痕）。	縄文晩期中葉	2次火熱。
53・10	3区L II	壺	山形突起。口：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
53・11	沢1	壺	山形突起。口：連続刺突文（溝底の刺痕）。	縄文晩期中葉	2次火熱。
53・12	c区(p285)	壺	突起口縁。	縄文晩期中葉	
53・13	3区L II	鉢	平縁。口：平行沈線＋連続刺突文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	胎土精緻。
53・14	7坑覆土	鉢	平縁。口：平行沈線＋連続刺突文。胴：捺糸文。	縄文晩期中葉	
53・15	沢1	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
53・16	c区L 3	鉢	頸：工字文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
53・17	3坑	鉢	突起口縁。口：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
53・18	c区	鉢	刻目口縁。頸：平行沈線＋連続刺突文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
53・19	c区L 3	鉢	刻目平縁。口：平行沈線＋連続刺突文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
53・20	4区L II	鉢	小波状口縁。頸：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
53・21	4区L II	鉢	小波状口縁。頸：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
53・22	4坑覆土	鉢	平縁。口：平行沈線文。胴：斜縄文。	縄文晩期中葉	

第18表 出土遺物（縄文土器）一覧（8）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
53・23	a区LⅢ	鉢	刻目突起口縁。口：平行沈線＋円形刺突文。	縄文晩期	赤彩。
53・24	1区LⅡ	鉢	刻目突起口縁。口：平行沈線＋円形刺突文。	縄文晩期	赤彩。
53・25	沢1	鉢	突起口縁。口：連続刺突文。	縄文晩期	
53・26	4区LⅡ	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線＋連続刺突文。	縄文晩期	
53・27	c区(p241)	短頸壺	A突起。口：楕円形文＋連続刺突文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	2住上面。
53・28	土手1東LⅡ	短頸壺	A突起。口：楕円形文＋連続刺突文。	縄文晩期中葉	剥離顕著。
53・29	4区LⅡ	短頸壺	突起口縁。口一頸：無文。胴：平行沈線＋連続刺突文。	縄文晩期中葉	2次火熱。
54・1	沢1	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
54・2	沢1	鉢	平縁。口：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
54・3	3区LⅡ	鉢	平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・4	沢1	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・5	沢1	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・6	沢1	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・7	沢1、c区LⅡ	鉢	小波状口縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・8	沢1	鉢	刻目平縁。口：刺突文。胴：網状燃糸文。	縄文晩期中葉	
54・9	c区L3	鉢	刻目平縁。頸：平行沈線文。胴：羽状縄文。	縄文晩期中葉	
54・10	沢1	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・11	沢1	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・12	2区(p193)	鉢	刻目平縁。	縄文晩期中葉	
54・13	沢1	鉢	細波状口縁。頸：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
54・14	土手1北LⅡ	鉢	突起口縁。頸：沈線文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・15	沢1	深鉢	突起口縁。胴：網状燃糸文。	縄文晩期中葉	
54・16	c区(p243)	鉢	突起口縁。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
54・17	沢1	鉢	突起口縁。胴：縄文。	縄文晩期中葉	2次火熱。
54・18	沢1	鉢	山形突起。胴：縄文。	縄文晩期中葉	2次火熱。
54・19	1住(1・4区)	鉢	平縁。口：2溝間の点列。	縄文晩期中葉	赤彩。
54・20	c区(p297)	鉢	口：平行沈線文。胴：刷毛目状条線文か。	縄文晩期中葉	2住古上面。
54・21	3区LⅢ	鉢	刻目平縁。口：平行沈線。	縄文晩期中葉	
54・22	ピット1覆土、3堅	鉢	刻目平縁。口：沈線文。	縄文晩期中葉	2次火熱。
54・23	ピット1覆土	鉢	胴：ジグザク文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
54・24	ピット1覆土	鉢	胴：ジグザク文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
54・25	ピット1覆土	鉢	胴：ジグザク文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
54・26	5埋22一外	壺	小波状口縁。口：無文。頸：沈線文。胴：網状燃糸文。	縄文晩期	
54・27	沢1	壺	口：無文。頸：沈線文。胴：縄文。	縄文晩期	2次火熱。
54・28	c区(p246)	壺	A突起。刻目平縁。口：無文。胴：沈線＋縄文。	縄文晩期	18坑上面。
54・29	沢1	壺	突起口縁。口：縄文。	縄文晩期	
54・30	4区LⅢ上面	壺	平縁。口：斜縄文＋沈線文。	縄文晩期中葉	
54・31	3焼、b区L3	壺	平縁。口：無文。胴：縄文。	縄文晩期	2次火熱。
54・32	4区(p209)	壺	平縁。口：鋸歯状文。頸：無文。胴：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
54・33	4区LⅡ(p182)	壺	平縁。口：π字状文。	縄文晩期中葉	1住上面。
55・1	土手1東LⅡ	壺	突起口縁。胴：縄文。	縄文晩期	2次火熱。
55・2	沢1	壺	小波状口縁。胴：縄文。	縄文晩期	
55・3	沢1	壺	小波状口縁。胴：縄文。	縄文晩期	
55・4	A区①LⅡ	壺	突起口縁。胴：網状燃糸文。	縄文晩期	
55・5	3T	壺	突起口縁。胴：刷毛目状条痕文。	縄文晩期	
55・6	c区L3・LⅢ、4区LⅡ	壺	突起口縁。胴：網状燃糸文＋燃糸文。	縄文晩期	

第1節 縄文土器

第19表 出土遺物（縄文土器）一覧（9）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
55・7	土手1北LⅡ	短頸壺	波状口縁。胴：縄文。	縄文晩期中葉	
55・8	2区(p201)	香炉	体：平行沈線+入組文。	縄文晩期中葉	1住上面。
55・9	c区L3	台付	台：平行沈線文。	縄文晩期中葉	朱彩。
55・10	c区LⅠ・Ⅱ	短頸壺	口：メガネ状突帯文。	縄文晩期中葉	
55・11	沢1	短頸壺	平縁。口：斜位沈線文。	縄文晩期中葉	
55・12	b区LⅡ(p236・244・245)	浅鉢	平縁。体：メガネ状隆帯・平行沈線文。	縄文晩期中葉	2住上面。
55・13	4区LⅡ、2区(p197)他	浅鉢	体：三角連繫文状雲形文+メガネ状隆帯文。	縄文晩期中葉	
55・14	4坑覆土、沢1	浅鉢	磨滅顕著。小波状口縁。口：平行沈線・三角形区画文。	縄文晩期中葉	
55・15	土手1西、土手2中区表土	浅鉢	胴：雲形文+縄文。	縄文晩期中葉	
55・16	2区LⅡ(p191)	浅鉢	山形突起。体：三角形状雲形文。	縄文晩期中葉	
56・1	a区LⅡ	浅鉢	刻目口縁。口：平行沈線文。体：沈線による雲形文。	縄文晩期中葉	
56・2	2区(p196)	浅鉢	鋸歯状口縁。口：平行沈線文。体：雲形文。2次火熱。	縄文晩期中葉	2住古上面。
56・3	沢1	浅鉢	磨滅顕著。鋸歯状口縁。口：平行沈線。体：雲形文。	縄文晩期中葉	
56・4	4区LⅡ	浅鉢	鋸歯状口縁。口：平行沈線文。体：雲形文。	縄文晩期中葉	
56・5	4区LⅡ	浅鉢	平縁。口：刺突。胴：沈線による雲形文。	縄文晩期中葉	
56・6	15坑覆土	浅鉢	磨滅顕著。平縁。口：平行沈線文。	縄文晩期中葉	胎土砂質。
56・7	4区LⅡ	浅鉢	平口縁か。口：平行沈線文。体：無文。	縄文晩期中葉	
56・8	4区LⅡ、c区L3	浅鉢	平縁。口：平行沈線文。体：羽状縄文。	縄文晩期中葉	
56・9	4区LⅡ	浅鉢	平縁。口：平行沈線文。体：縄文。	縄文晩期中葉	
56・10	4区LⅡ	浅鉢	浮彫装飾口縁。口：平行沈線文。体：縄文。	縄文晩期中葉	
56・11	A区①LⅡ	浅鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。体：無文。	縄文晩期中葉	
56・12	沢1	浅鉢	平縁。	縄文晩期中葉	
56・13	沢1	浅鉢	平縁。体：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
56・14	沢1	浅鉢	平縁。体：平行沈線。	縄文晩期中葉	
56・15	c区L3	浅鉢	体：楕円形文状雲形文+メガネ状隆帯文。	縄文晩期中葉	
56・16	沢1	浅鉢	平縁。体：雲形文。	縄文晩期中葉	
56・17	土手1東LⅡ	浅鉢	体：平行沈線文。	縄文晩期中葉	穿孔径4mm。
56・18	4坑覆土	浅鉢	体：雲形文。	縄文晩期中葉	
56・19	2区LⅡ(p214)	浅鉢	口：C字状雲形文。	縄文晩期中葉	
56・20	c区(p280)	浅鉢	頸：無文。体：雲形文。	縄文晩期中葉	胎土硬質。
56・21	沢1	浅鉢	平縁。口：平行沈線文+B状突起。	縄文晩期中葉	
56・22	沢1	浅鉢	刻目平縁。体：刻目文。	縄文晩期中葉	
56・23	土手1東LⅡ	浅鉢	体：平行沈線文。メガネ状隆帯文。	縄文晩期中葉	
56・24	4区LⅡ	深鉢	頸：X字状隆帯文。	縄文晩期中葉	
56・25	A区①LⅡ	鉢	口：変形工字文。	縄文晩期中葉	
56・26	c区L3	浅鉢	体：沈線区画+縄文。	縄文晩期中葉	
56・27	c区L3	浅鉢	体：沈線区画+縄文。	縄文晩期中葉	
56・28	沢1	浅鉢	体：雲形文。	縄文晩期中葉	
56・29	4区LⅡ	深鉢	体：縄文+雲形文。	縄文晩期中葉	
56・30	c区LⅡ	浅鉢	口：雲形文。	縄文晩期中葉	2次火熱。
56・31	c区L3	浅鉢	刻目口縁。口：無文。体：縄文。	縄文晩期中葉	
56・32	c区L3	浅鉢	底部。体：羽状縄文。	縄文晩期中葉	
56・33	2・4区LⅡ	鉢	A突起。胴：平行沈線+対向三叉文。胴：縄文。	縄文晩期中葉	2次火熱。
57・1	16坑覆土	深鉢	A突起。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
57・2	4区LⅡ	鉢	小波状口縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
57・3	沢1	鉢	小波状口縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	

第20表 出土遺物（縄文土器）一覧（10）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
57・4	調査区LⅡ	鉢	小波状口縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
57・5	c区LⅡ	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
57・6	4坑覆土、1住、c区LⅡ	鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
57・7	2区(p230)	鉢	平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
57・8	4区LⅡ	鉢	平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
57・9	A区①LⅡ	鉢	平縁。口：無文。頸：平行沈線+コブ。胴：条痕文。	縄文晩期後葉	
57・10	1住1区	深鉢	平縁。口：無文。頸：平行沈線+コブ。胴：条痕文。	縄文晩期後葉	
57・11	3区LⅡ	深鉢	平縁。口：無文。頸：平行沈線+コブ。胴：条痕文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
57・12	b・c区L3、b区LⅡ	深鉢	突起平縁。複合口縁。頸：平行沈線文。胴：条痕文。	縄文晩期後葉	
57・13	土手1東LⅡ	壺	頸：捺糸文+突起。	縄文晩期後葉	
57・14	b区L3	壺	頸：平行沈線文。胴：刷毛目状条痕文。	縄文晩期後葉	
57・15	b区(p300)、4区LⅡ	壺	A突起。頸：平行沈線文。	縄文晩期後葉	
57・16	4坑掘り方覆土	壺	刻目平縁。頸：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
57・17	沢1	鉢か	平縁。口：平行沈線文。	縄文晩期後葉	
57・18	4区LⅡ	深鉢	A突起。口：平行沈線文。	縄文晩期後葉	
57・19	調査区LⅡ	鉢	平縁。口：綾杉文。	縄文晩期後葉	胎土硬質。
57・20	4区LⅡ	鉢	平縁。口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・21	4区LⅡ	鉢	平縁。口：綾杉文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
57・22	土手1東LⅡ	深鉢	口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・23	土手1東	深鉢	平縁。口：綾杉文。	縄文晩期後葉	赤彩。
57・24	沢1	鉢	口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・25	4区LⅡ	深鉢	口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・26	4区LⅡ	鉢	口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・27	c区L3	鉢	口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・28	3区、土手1東LⅡ	鉢	A突起。口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・29	1・4区LⅡ	鉢	口：綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・30	土手1北LⅡ	深鉢	口：縄文+綾杉文。胴：縄文+突起。	縄文晩期後葉	
57・31	c区L3	鉢	口：縄文+綾杉文。胴：縄文+突起。	縄文晩期後葉	
57・32	c区L3	鉢	口：綾杉文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
57・33	土手LⅡ	鉢	胴：捺糸文+綾杉文。	縄文晩期後葉	
57・34	3区LⅡ	深鉢	平縁。口：平行沈線文。胴：ジグザグ文。	縄文晩期後葉	
57・35	c区LⅡ	深鉢	胴：ジグザグ文。	縄文晩期後葉	
57・36	土手1東LⅡ	深鉢	頸：鋸歯状充填刺突文。	縄文晩期後葉	
58・1	4区LⅡ	浅鉢	平口縁か。口：縄文・平行沈線文。	縄文晩期後葉	胎土硬質。
58・2	c区LⅢ	浅鉢	平縁。口：縄文・平行沈線文。	縄文晩期後葉	
58・3	4区LⅡ	浅鉢	平口縁か。口：縄文・平行沈線文。	縄文晩期後葉	
58・4	3T	浅鉢	平縁。口：平行沈線文。体：無文。	縄文晩期後葉	
58・5	c区L3	浅鉢	平縁。口：平行沈線文。体：無文。	縄文晩期後葉	
58・6	3T	浅鉢	平縁。口：平行沈線文。体：無文。	縄文晩期後葉	
58・7	土手1東LⅡ	浅鉢	平縁。口：平行沈線文。	縄文晩期後葉	
58・8	土手1東LⅡ	浅鉢	平縁。口：兀字状文。	縄文晩期後葉	
58・9	土手1東LⅡ	浅鉢	平縁。口：π字状文。	縄文晩期後葉	
58・10	沢1	浅鉢	磨滅顕著。口：π字状文。胴：無文。工字文。	縄文晩期後葉	
58・11	沢1	浅鉢	A突起。口：π字状文。	縄文晩期後葉	
58・12	土手1北LⅡ	浅鉢	A突起。口：π字状文。	縄文晩期後葉	
58・13	沢1	浅鉢	A突起。口：平行沈線文。	縄文晩期後葉	

第1節 縄文土器

第21表 出土遺物（縄文土器）一覧（11）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
58・14	1区LⅡ	浅鉢	口：工字文。	縄文晩期後葉	
58・15	土手1東LⅡ	浅鉢	平縁。口：工字文+縄文。	縄文晩期後葉	
58・16	沢1	浅鉢	口：工字文状沈線文。	縄文晩期後葉	
58・17	沢1	浅鉢	平縁。口：工字文。	縄文晩期後葉	
58・18	排土	浅鉢	口：工字文。	縄文晩期後葉	
58・19	b区L3	浅鉢	口：工字文。	縄文晩期後葉	
58・20	4区LⅡ	浅鉢	平縁。口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	
58・21	排土	浅鉢	平縁。口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	赤彩か。
58・22	4区LⅡ	浅鉢	平縁。口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	
58・23	沢1	浅鉢	平縁。口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	胎土硬質。
58・24	4区LⅡ	浅鉢	平縁。口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	
58・25	4区LⅡ	浅鉢	A突起。口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	
58・26	4区LⅡ	浅鉢	磨滅顯著。A突起。口：浮線網状文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	胎土砂質。
58・27	土手1東LⅡ、4区LⅡ	浅鉢	平縁。口：浮線網状文+縄文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
58・28	c区(p248)	浅鉢	平縁。口：浮線網状文。胴：縄文。	縄文晩期後葉	
58・29	表採	浅鉢	磨滅顯著。口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	
58・30	土手1東LⅡ	浅鉢	口：浮線網状文。	縄文晩期後葉	
58・31	土手1北LⅡ	浅鉢	平縁。口：沈線+縄文。胴：丸コブ。隆帯+原体押圧。	縄文晩期後葉	
58・32	土手1北LⅡ	浅鉢	A突起。口：三角連繫文。	縄文晩期後葉	
58・33	2区(p233)、c区(p242)	浅鉢	A突起。口：三角連繫文。	縄文晩期後葉	2住上面。
58・34	4区LⅡ	浅鉢	口：三角連繫文。	縄文晩期後葉	
58・35	3区LⅡ	浅鉢	口：三角連繫文か。	縄文晩期後葉	
58・36	c区L3	浅鉢	胴：三角連繫文。	縄文晩期後葉	2次火熱。
58・37	沢1	浅鉢	底部。底縁：沈線文。	縄文晩期後葉	高杯か。
58・38	沢1	浅鉢	胴：沈線文。	縄文晩期後葉	胎土精緻。
58・39	沢1	浅鉢	口：三角連繫文。	縄文晩期後葉	
58・40	沢1	壺	胴：三角連繫文。	縄文晩期後葉	
58・41	c区LⅠ・Ⅱ	壺	胴：三角連繫文。	縄文晩期後葉	
59・1	16坑検出面(p292)	鉢	平縁。頸：沈線文。胴：縄文；底：ナデ。	縄文晩期後葉	
59・2	沢1、4・c区L3・LⅡ	壺	胴：縄文。	縄文晩期後葉	
59・3	1区LⅡ(p137・145)	深鉢	突起口縁。口：沈線+。胴：沈線+縄文。	縄文晩期後葉	
59・4	c区(p289)、4区LⅡ	深鉢	小波状口縁。口：平行沈線文。胴：刷毛目状条痕文。	縄文晩期後葉	
60・1	土手1北LⅡ	深鉢	平縁。口-胴：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
60・2	1溝覆土、a区L4	深鉢	平縁。口-胴：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
60・3	29坑04焼土下	深鉢	平縁。口-胴：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
60・4	b区LⅡ	深鉢	平縁。口-胴：無文。	縄文後・晩期	
60・5	3区LⅡ(p172)、c区L3他	深鉢	平縁。口-胴：無文。2次火熱。	縄文後・晩期	23坑上面。
60・6	2区(p196)	浅鉢	平縁。口-胴：無文。2次火熱。	縄文後・晩期	2住古上面。
60・7	1溝覆土	壺	平縁。口-頸：無文。	縄文後・晩期	
60・8	c区L3	鉢	平縁。口-胴：無文。	縄文後・晩期	
60・9	土手2下LⅡ	壺	平縁。口-胴：無文。	縄文後・晩期	
61・1	沢1	深鉢	平縁。胴：縄文。	縄文後・晩期	
61・2	沢1	深鉢	平縁。口-胴：羽状縄文。	縄文後・晩期	穿孔径5~10mm。
61・3	沢1	深鉢	平縁。胴：縄文。	縄文後・晩期	2次火熱。
61・4	沢1	深鉢	平縁。胴：縄文。	縄文後・晩期	外面煤付着。
61・5	沢1	深鉢	平縁。口-胴：縄文。	縄文後・晩期	2次火熱。

第22表 出土遺物（縄文土器）一覽（12）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
61・6	沢1	深鉢	平縁。口一胴：縄文。	縄文後・晩期	
61・7	沢1	深鉢	平縁。口一胴：縄文。	縄文後・晩期	
61・8	4区LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：羽状縄文。	縄文後・晩期	2次火熱。
61・9	b区L3	深鉢	平縁。口一胴：縄文。	縄文後・晩期	
61・10	4区LⅡ	深鉢	突起口縁。口一胴：縄文。	縄文後・晩期	2次火熱。
61・11	沢1	深鉢	平縁。口一胴：撚糸文。	縄文後・晩期	
61・12	土手2下LⅡ	深鉢	折返口縁。胴：縄文。	縄文後・晩期	2次火熱。
61・13	b区L3	深鉢	折返口縁。胴：縄文。	縄文後・晩期	
61・14	沢1、c区L3	浅鉢	平縁。口一胴：縄文。	縄文後・晩期	
62・1	土手2下LⅡ	深鉢	平縁。口：横位櫛描条痕文。胴：弧文状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
62・2	沢1	深鉢	平縁。口一胴：横位櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
62・3	5焼	深鉢	平縁。口一胴：横方向+流水文状の櫛描文。	縄文後・晩期	
62・4	1区LⅡ	深鉢	刻目平縁。口一胴：横・縦位櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
62・5	沢1	深鉢	平縁。口一胴：横位+流水文状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
62・6	29坑	深鉢	胴：流水文状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
62・7	沢1	深鉢	磨滅顕著。平縁。口一胴：櫛描条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
62・8	沢1	深鉢	磨滅顕著。平縁。口一胴：櫛描条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
62・9	c区L3	深鉢	平縁。口一胴：流水状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
62・10	沢1	鉢	小波状口縁。口一頸：無文。胴：櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
62・11	沢1	鉢	磨滅顕著。小波状口縁。無文。胴：櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
63・1	沢1覆土、L1	深鉢	折返口縁。口：横位撚糸文。胴：縦位撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
63・2	沢1	深鉢	折返口縁。口：横位撚糸文。胴：縦位撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
63・3	A区①LⅡ	深鉢	折返口縁。口：横位撚糸文。頸：沈線。胴：撚糸文。	縄文後・晩期	
63・4	4区LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：横・縦・斜位撚糸文。	縄文後・晩期	
63・5	4区LⅡ	深鉢	胴：斜位撚糸文。	縄文後・晩期	
63・6	沢1	鉢	突起口縁。胴：撚糸文。	縄文後・晩期	
63・7	1溝覆土	深鉢	胴：斜位撚糸文。	縄文後・晩期	
64・1	1住、4坑覆土・底面、沢1他	深鉢	平縁。口一胴：撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
64・2	4区	鉢	小波状口縁。胴：縦位撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
64・3	3焼、5埋、b・c区L3他	深鉢	突起口縁。口一頸：無文。胴：撚糸文。底面：ナデ。	縄文後・晩期	
64・4	c区(p285)	深鉢	胴：撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
65・1	土手1北LⅡ	深鉢	小波状口縁。胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・2	沢1	深鉢	小波状口縁。胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・3	沢1	深鉢	平縁。口：網状撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
65・4	沢1	深鉢	平縁。胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
65・5	沢1	深鉢	平縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・6	沢1覆土、2区L1	深鉢	小波状口縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・7	3区LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・8	3区(22坑上面p175)、3区LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
65・9	土手1北LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・10	3区LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
65・11	土手1北LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・12	沢1	深鉢	平縁。口一胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・13	沢1	深鉢	折返口縁。胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・14	沢1	深鉢	細波状口縁(折返口縁)。口：刻目。胴：網状撚糸文。	縄文後・晩期	
65・15	沢1	深鉢	折返口縁。口・胴：網状撚糸文。頸：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。

第1節 縄文土器

第23表 出土遺物（縄文土器）一覧（13）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
65・16	c区(p264)、c区L3	深鉢	折返口縁。口一胴：網状捺糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
66・1	c区(p285・286)、4区(p68・69)	深鉢	1住上面。平縁。口一胴：網状捺糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
66・2	19坑、1・3区LⅡ(p143)他	深鉢	折返口縁。口一底：網状捺糸文。	縄文後・晩期	2次火熱。
66・3	2区(p200・232)、沢1他	深鉢	胴：網状捺糸文。底：ナデ。	縄文後・晩期	2住上面。
67・1	沢1	深鉢	平縁。口：斜位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
67・2	沢1	深鉢	口：横位刷毛目状条痕文。胴：斜位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	
67・3	沢1	深鉢	小波状口縁。口一胴：斜位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
67・4	沢1	深鉢	小波状口縁。口：斜位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
67・5	沢1	深鉢	小波状口縁。口：横位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
67・6	沢1	深鉢	小波状口縁。口一胴：横位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	2次火熱。
67・7	沢1	深鉢	刻目平縁。口：横位刷毛目、胴：縦位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	
67・8	沢1	深鉢	折返口縁。胴：斜位刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	
67・9	沢1覆土、L1	浅鉢	小波状口縁。口：横位捺糸文。頸：無文。胴：捺糸文。	縄文後・晩期	
67・10	土手1東側	深鉢	小波状口縁。口一胴：斜方向の刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	
67・11	c区(p289)	深鉢	胴：刷毛目状条痕文。2次火熱。	縄文後・晩期	2住上面。
68・1	4区表土	深鉢	胴：縄文。底：木葉痕。	縄文後・晩期	2次火熱。
68・2	4区LⅡ	深鉢	底部。胴：無文。底面：木葉痕。	縄文後・晩期	2次火熱。
68・3	土手2下(p315)	深鉢	胴：無文(ナデ)。底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
68・4	c区(p297)、c区L3他	深鉢	胴：無文。底：ナデ。2次火熱。	縄文後・晩期	2住古上面。
68・5	c区LⅢ・L3	深鉢	底部。胴一底：無文(ミガキ)。	縄文後・晩期	
68・6	3区LⅡ	深鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
68・7	4区LⅡ	壺	底部。胴：平行沈線文。底：無文。	縄文後・晩期	赤彩か。
68・8	沢1	壺	底部。胴：縄文。底：無文。	縄文後・晩期	
69・1	沢1	深鉢	底部。胴：櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
69・2	4坑、沢1、土手1東LⅡ	深鉢	底部。胴：刷毛状条痕文。底面：網代痕。	縄文後・晩期	
69・3	沢1	深鉢	底部。胴：網状捺糸文。底面：高台状。	縄文後・晩期	
69・4	3区LⅡ、排土	深鉢	胴：網状捺糸文。底：ナデ。	縄文後・晩期	2次火熱。
69・5	3焼90・88・22中	深鉢	底部。胴：縄文。底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
69・6	c区(p274)、c区L3	深鉢	底部。胴：胴結節縄文。	縄文後・晩期	
69・7	2区LⅡ、c区L3	深鉢	胴一底：無文。	縄文後・晩期	
69・8	3焼、土手1北LⅡ	深鉢	底部。	縄文後・晩期	
70・1	1埋	深鉢	底部。胴：無文。底面：高台状。	縄文後・晩期	
70・2	沢1	深鉢	底部。胴：無文。底面：木葉痕。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・3	沢1	深鉢	底部。胴：無文。底面：木葉痕。	縄文後・晩期	
70・4	1区LⅡ(p149)	深鉢	底部。胴：無文。底：無文。2次火熱。	縄文後・晩期	22坑上面。
70・5	4区LⅡ	深鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・6	c区	深鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・7	18坑覆土	浅鉢	胴一底部：無文。	縄文後・晩期	
70・8	2区(p198)	壺	底部。胴：平行沈線文。	縄文後・晩期	
70・9	1区LⅡ(p151)	鉢	底部。胴：無文。底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・10	1溝覆土	鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・11	3区LⅡ	深鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・12	土手2東区表土	鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・13	A区①LⅡ	鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	
70・14	1住4区	鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・15	18坑覆土	浅鉢	底部。胴：無文。底：上げ底。	縄文後・晩期	

第24表 出土遺物（縄文土器）一覧（14）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
70・16	1区LⅡ	鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・17	1住(4区か)	鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	2次火熱。
70・18	土手1北LⅡ	台付鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	
70・19	沢1	台付鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	台内赤彩か。
70・20	a区(p277)	台付鉢	底部。胴一底：無文。	縄文後・晩期	12坑上面。
70・21	12坑覆土	台付鉢	底部。胴：無文。底：高台状。	縄文後・晩期	

6 類 刷毛目状条痕文が施される土器である。

A 平縁の深鉢形土器（第67図1・2）。1は口縁部が直線的に外傾し、2の口縁部は内彎・内傾する。

B 小波状口縁を有する深鉢形土器（第41図1・第67図3～7・9・10）。

C 突起口縁となる深鉢形土器（第55図5）。口縁部は無文なるが、胴部には斜行する条痕文が施される。

D 折返口縁となる深鉢形土器（第67図8）。口縁部は内傾し、折返口縁部が無文となる。

E 胴部資料である（第41図2、第67図11）。第67図11は内傾する口縁部には縦位、胴部には斜行する条痕文が施される。

7 類 格子状沈線が施される土器である（第43図3）。

8 類 深鉢形土器、壺形土器、浅鉢形土器の底部資料を一括する。体部には縄文、網目状撚糸文、櫛描条痕文、刷毛目条痕文、無文がある。底面の形態により、平底、上げ底、高台状、丸底に分類する（第68図～第70図）。

A 底面がほぼ平坦で平底のもの（第68図・第69図1・2・4～8・第70図1～7）。

底面に網代痕が認められるもの（第69図2）、木葉圧痕の後に網代痕が圧痕されているもの（第64図4）、木葉痕が認められるもの（第70図2・3）があるが、平底となる底面にはナデやケズリによる最終調整が施される。第68図4は平底の底部から直線的に緩く外傾する器形を呈する。外面には積み上げ痕が遺存するが、内面は丁寧なナデ調整により均されている無文土器である。外面は2次火熱により赤褐色に変色しているが、内面は胴部下位より上部は黒く変色している。

B 底面が上げ底となり輪高台状となるもの（第70図8～11・13～15）。

完全な高台ではなく、高台部が非常に低く、断面が丸い弧状となるものである。いわゆる「輪高台」部分は使用により磨滅している状況が観察される。8は底部から内彎・外傾して胴部が緩く立ち上がる壺形もしくは浅鉢形土器の底部と推測される。底部周縁に3条の平行沈線文が施される。15の底部は、いわゆる「碁笥底」状となる。

C 底面が高台状になるもの（第70図16～21）。

平底の底部に高台が貼付されているものである。16・17の高台は断面三角形状となる。

D 底面が丸底状となるもの（第70図7）。

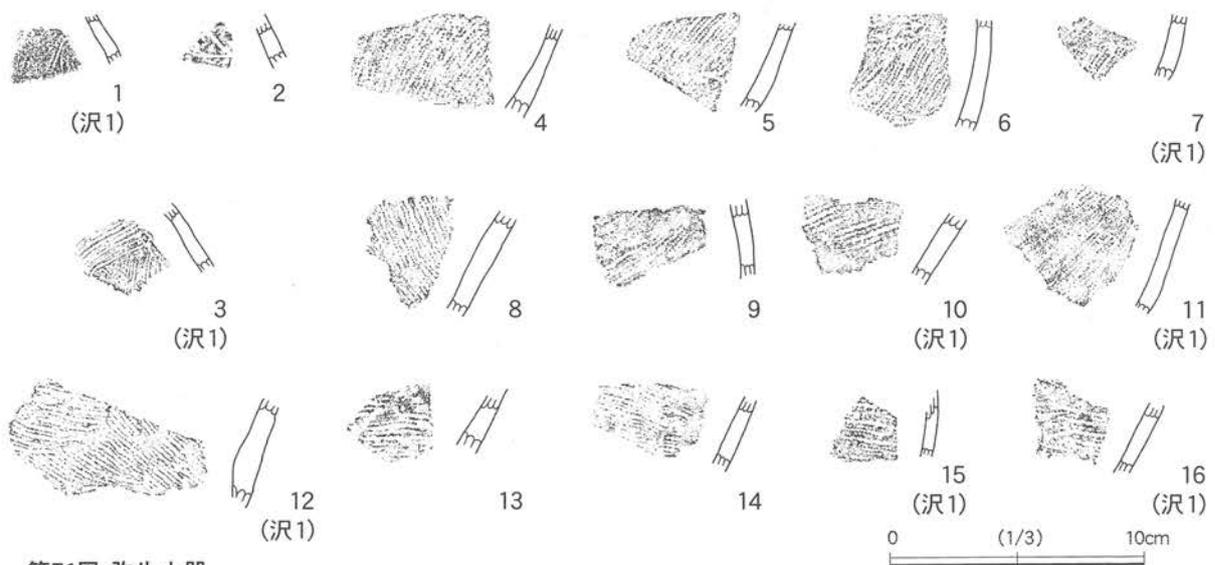
ミガキ状の丁寧なナデ調整が底部外面から周縁に施されている。

第2節 弥生土器

弥生土器と明確に断定される資料は少ない。遺構にともなう状態で出土するものもなく、表土等から小破片がわずかに出土するのみである。弥生土器の壺もしくは甕と推測される小破片16点を掲載した(第71図)。

第71図1・2・7は櫛歯状工具により斜格子文もしくは山形文と推測される文様が描出される頸部周辺の資料であろう。このうち2は1本沈線により斜格子状の文様が描出される。

3～6・8～11は付加条第1種縄文が施される胴部資料。12～16は横位の撚糸文が施される胴部資料である。



第71図 弥生土器

第25表 出土遺物(弥生土器)一覽

図番号	出土地点	器種	文様	時期	備考
71・1	沢1	壺	頸：櫛歯状工具による山形文。	弥生後期	
71・2	a区LⅢ	壺か	頸：1本沈線による斜格子状文様。	弥生時代中期	胎土精緻。
71・3	沢1	壺	頸：櫛歯状工具による鋸歯状文(山形文)。	弥生時代中期	
71・4	c区L3	壺	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・5	c区L3	壺	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・6	c区LⅢ	壺か	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・7	沢1	壺	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・8	c区L3	壺か	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・9	c区L3	壺	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・10	沢1	壺か	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・11	沢1	壺か	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・12	沢1	壺か	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	胎土硬質。
71・13	土手1ベルト1盛土	壺	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・14	c区L3	壺か	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・15	沢1	壺か	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	
71・16	沢1	壺	胴：付加条第1種縄文。	弥生時代中期	

第3節 石器・石製品類

遺物包含層から石鏃、尖頭器、不定形石器、磨石・敲石、打製石斧、磨製石斧、石棒、剥片などが出土している。

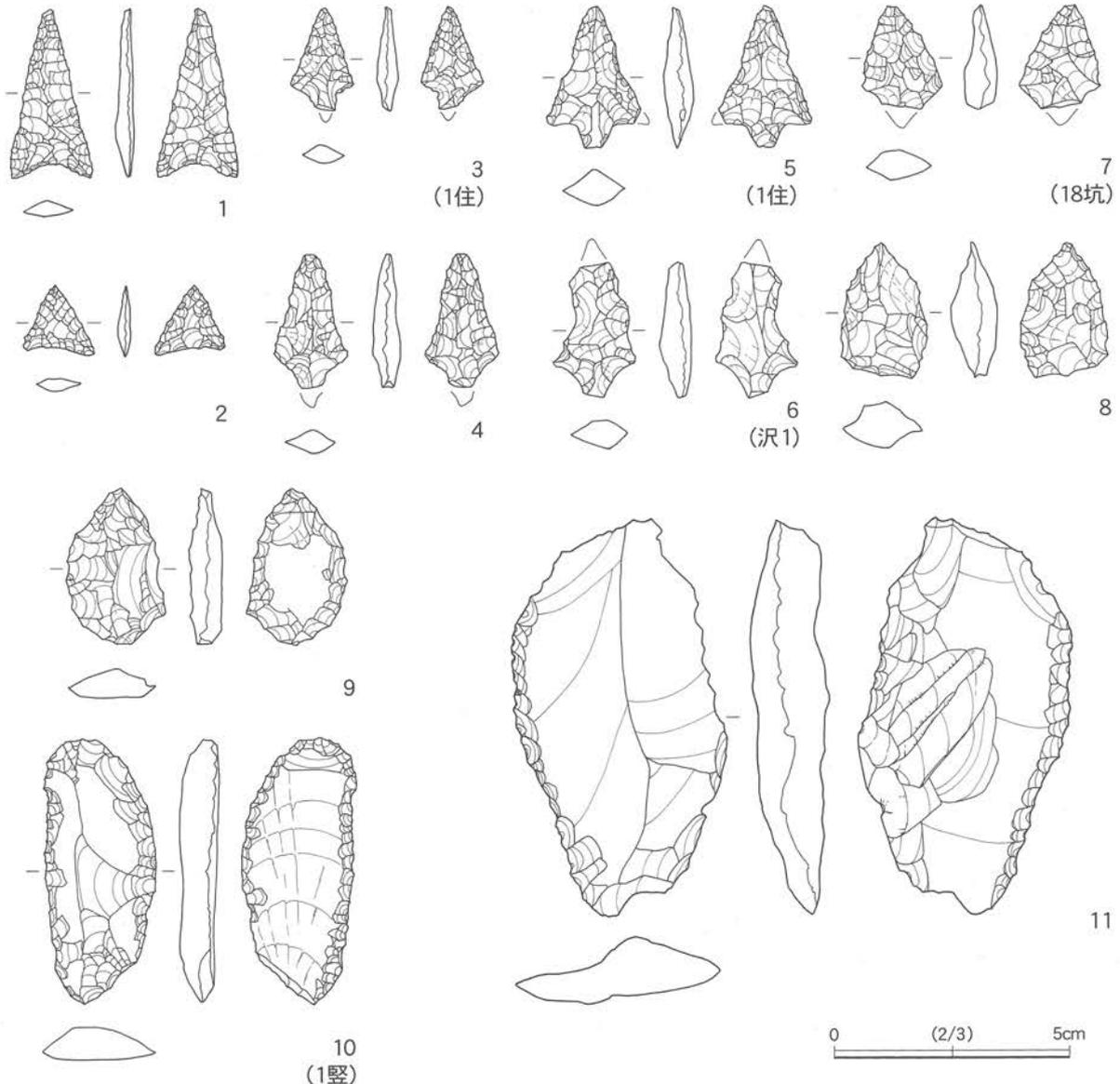
石 鏃

未製品と推測される資料を含めて9点を図化した。形態により分類する。

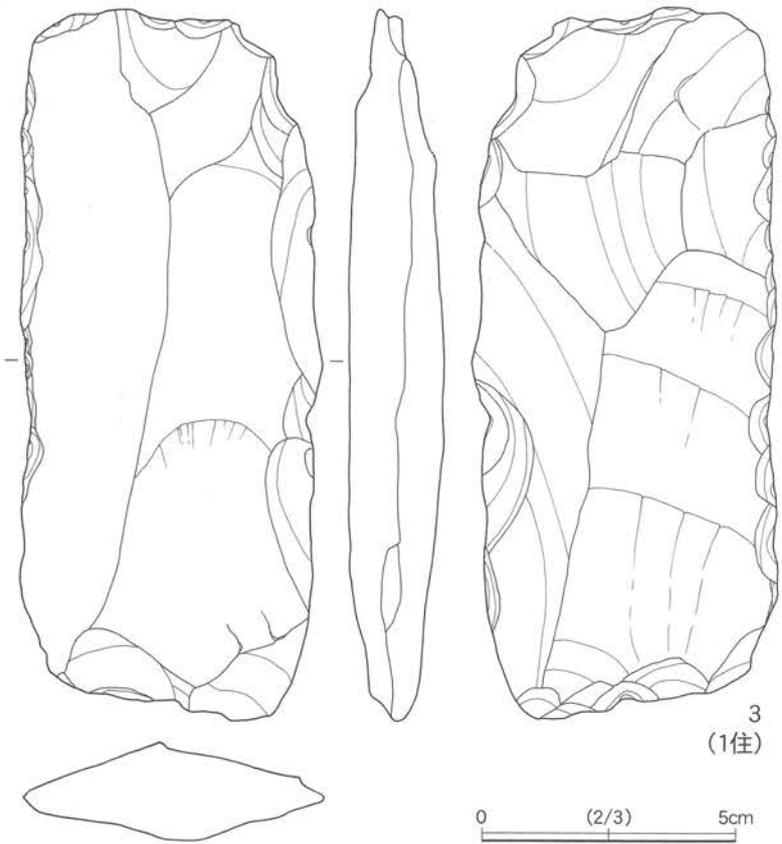
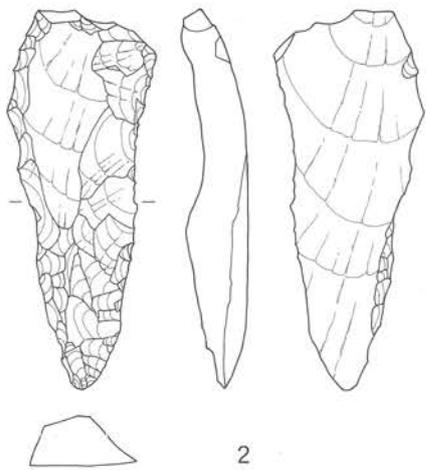
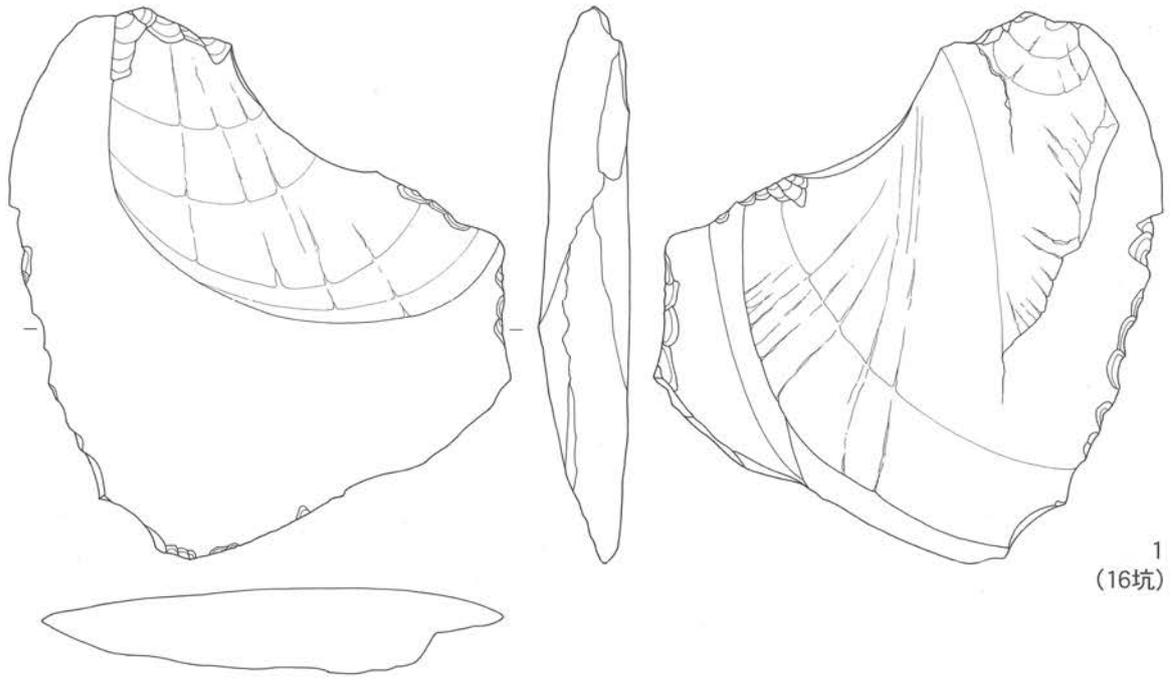
凹基無茎石鏃 第72図1・2がある。1は身が細長く、2は短いもので、いずれも基部の抉りが浅いものである。縄文時代の所産と推測される。

平基有茎石鏃 茎部がわずかに欠損する。第72図5の2等辺三角形となる身部側辺にはわずかに抉りが観察される。縄文時代後期の所産と推測される。

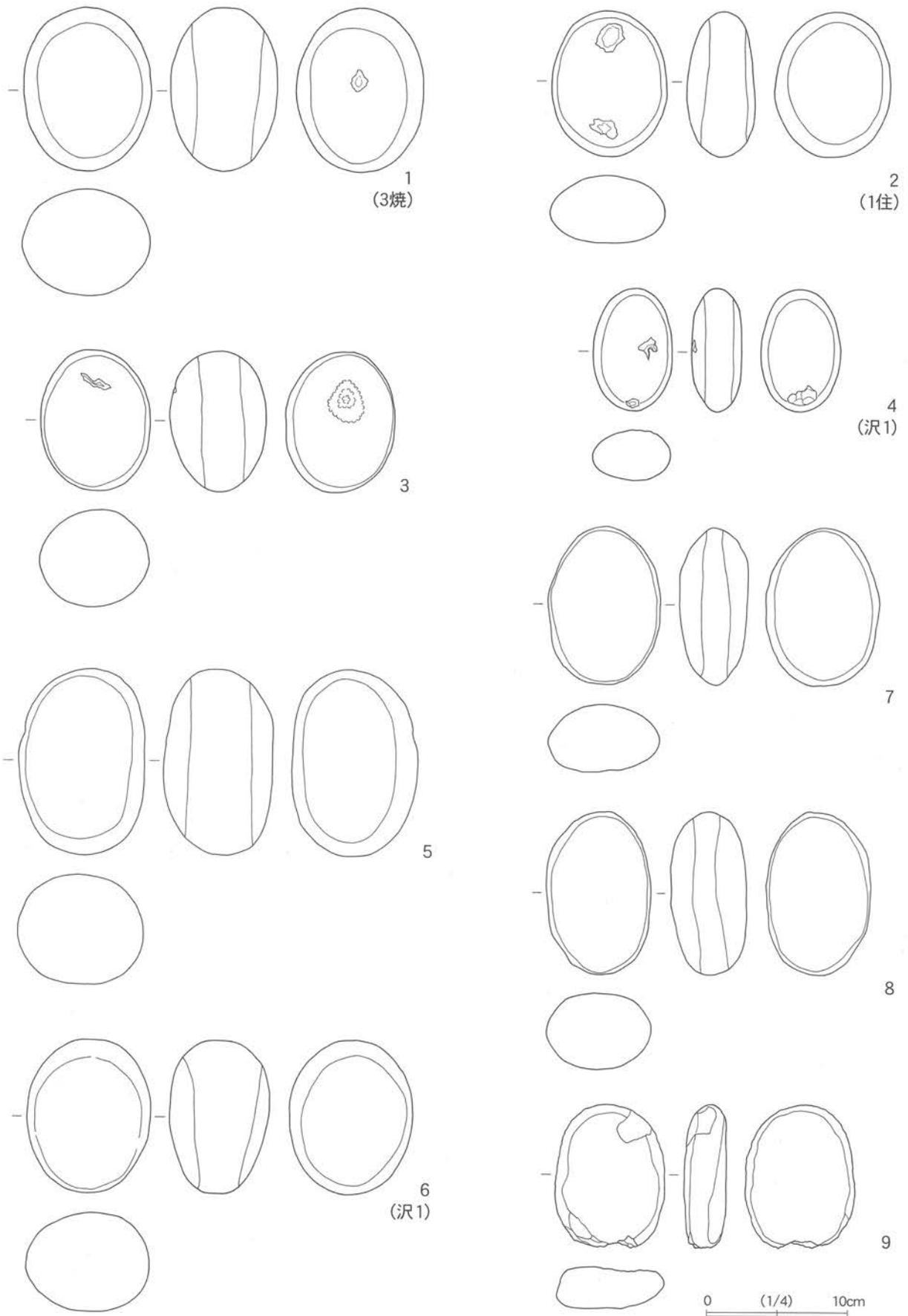
凸基有茎石鏃 第72図3・4の2点がある。6も未成品もしくは欠損品と推測される。いずれも先端部・茎部を欠損する。3は比較的小型、4・6は身部が細長い。縄文時代晩期から



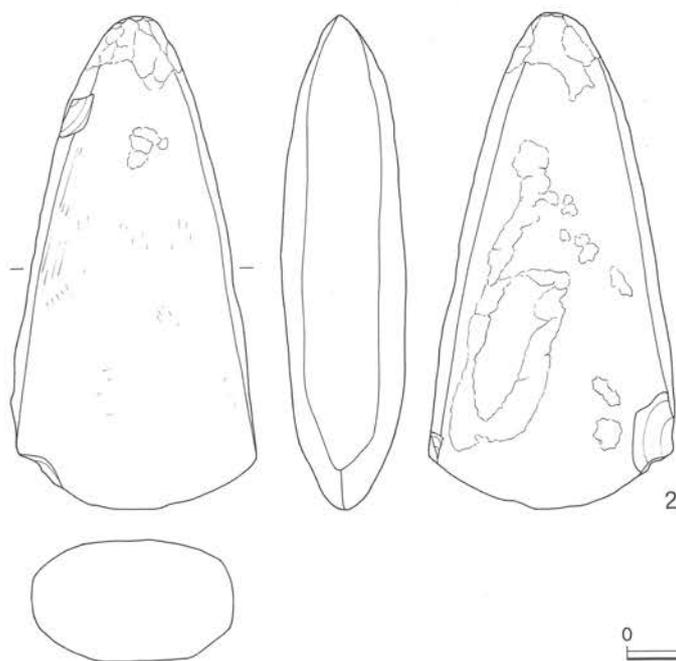
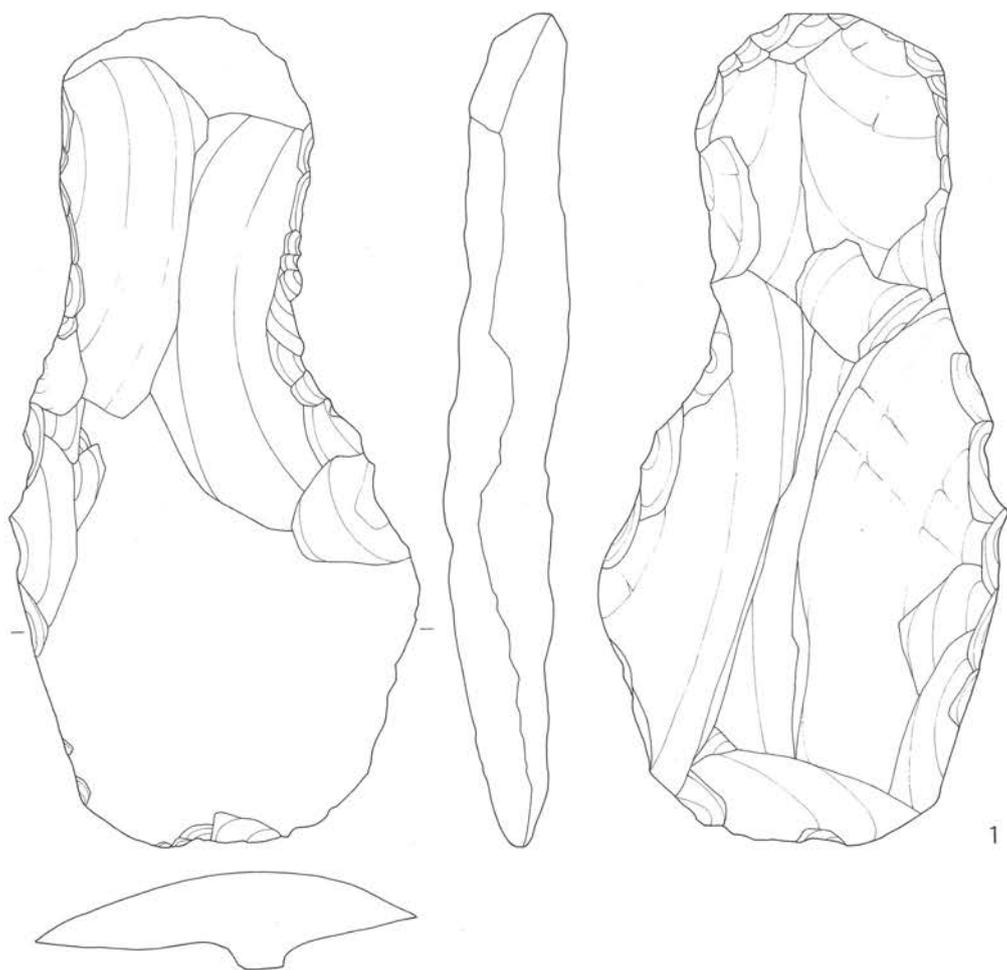
第72図 石器・石製品 (1)



第73図 石器・石製品 (2)

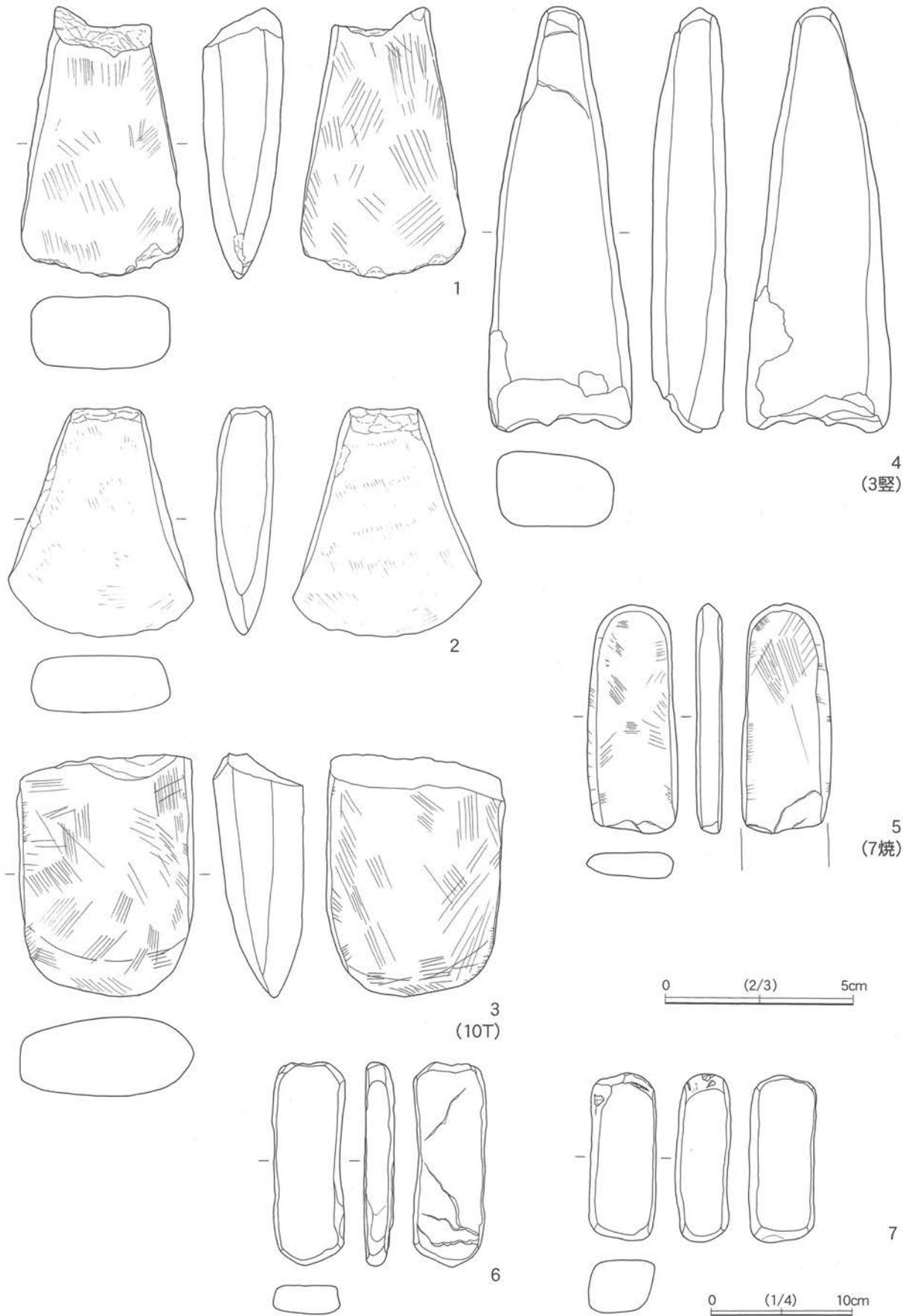


第74図 石器・石製品 (3)



0 (2/3) 5cm

第75図 石器・石製品 (4)



第76図 石器・石製品 (5)



第77図 石器・石製品 (6)

第26表 出土遺物（石器・石製品）一覧

単位：cm、g

図番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	特 徴	石材	備考
72・1	土手1西・3区LⅡ	石鏃	3.6	1.7	0.4	1.4	凹基無茎石鏃。	流紋岩	
72・2	a区L4	石鏃	1.5	1.5	0.3	0.4	凹基無茎石鏃。	流紋岩	
72・3	1住覆土	石鏃	2.2	1.3	0.4	0.8	凸基有茎石鏃。	チャート	
72・4	b区	石鏃	2.9	1.6	0.6	1.9	凸基有茎石鏃。	チャート	
72・5	1住（1区）	石鏃	3.0	2.0	0.7	2.5	平基有茎石鏃。	チャート	
72・6	沢1	石鏃	2.9	1.9	0.7	2.2	凸基有茎石鏃。	流紋岩	未製品か。
72・7	18坑覆土	石鏃	2.2	1.7	0.7	2.2	凸基有茎石鏃。	チャート	
72・8	c区L3	石鏃	2.9	1.9	1.0	4.2	石鏃未製品か。	チャート	
72・9	c区L3	石鏃	3.3	2.1	0.7	4.9	石鏃未製品か。	チャート	
72・10	1 竪	不定形	5.6	2.4	0.8	10.9	側縁に2次加工。	スレート	
72・11	調査区	不定形	8.4	4.6	1.7	47.2	側縁に2次加工。	チャート	スクレイパー。
73・1	16坑	不定形	11.0	10.0	1.8	176.7	2次加工。	アブライト	
73・2	1区LⅡ（p108）	搔器	7.5	3.0	1.3	19.8	側縁に加工痕。	頁岩	石匙か。
73・3	1住（p11）	不明	14.1	6.0	1.9	188.1	未成品。	スレート	石包丁か。
74・1	3焼（p99）	磨石	11.8	9.0	7.6	1,118.6	敲打痕。	アブライト	
74・2	1住（4区）	磨石	10.3	8.2	4.9	600.2	敲打痕。	アブライト	
74・3	4区LⅡ	敲石	10.0	7.7	6.9	737.2	敲打痕。	アブライト	
74・4	沢1	磨石	8.7	5.6	3.6	260.5	敲打痕。	アブライト	
74・5	2区（p190）	磨石	13.2	8.9	7.8	1,401.8	全面に使用痕。	アブライト	沢跡1。
74・6	沢1覆土	磨石	10.9	8.7	7.2	1,013.4	全面に使用痕。	カコウ岩	
74・7	4区（p273）	磨石	11.2	7.9	4.8	613.0	全面に使用痕か。	アブライト	磨石か。
74・8	4区LⅡ（p124）	磨石	11.6	7.5	5.4	672.7	磨石か。	アブライト	
74・9	3区LⅡ	敲石	10.2	7.7	3.0	356.3	磨面なし。	カコウ岩	
75・1	2区（p215）	打製石斧	16.5	8.1	2.5	291.4	撥形。	スレート	2住上面。
75・2	c区（p293）	磨製石斧	9.8	4.8	2.4	160.3	円刃・蛤刃。	スレート	1住上面。
76・1	2区LⅡ（p222）	磨製石斧	7.2	4.3	2.1	93.6	円刃・蛤刃。	スレート	
76・2	c区（p285）	磨製石斧	6.1	4.9	1.6	64.6	円刃・蛤刃。	スレート	510・715と同一地点。
76・3	B区10T	磨製石斧	6.5	4.7	2.4	108.8	円刃・蛤刃。	スレート	基端欠損。
76・4	3 竪	磨製石斧	11.3	3.8	2.0	129.4	表面に磨面。	スレート	刃部欠損。
76・5	7焼覆土	砥石か	6.1	2.4	0.7	19.0	表面に加工痕。	スレート	
76・6	1区LⅡ	砥石か	14.5	5.1	2.1	292.8	上下面に使用痕。	アブライト	
76・7	3区LⅡ	砥石か	11.9	4.7	3.9	422.9	全面に使用痕。	スレート	
77・1	2区（p205）	石棒	13.5	4.4	1.6	135.1	全面に加工痕。	スレート	沢跡1。
77・2	沢1覆土	石棒	8.2	3.8	1.4	50.2	表面に加工痕。	スレート	下端欠損。
77・3	土手1ベルト1LⅡ	石棒	8.8	2.8	0.5	20.3	両端欠損。	スレート	
77・4	4区（p210）	石棒	7.7	3.2	0.9	34.0	両端を欠損。	スレート	1住周辺。
77・5	土手1西LⅠ	石棒	8.3	3.5	1.0	34.6	加工痕（擦痕）。	スレート	両端欠損。
77・6	4区LⅡ	石棒	10.8	4.1	1.4	99.8	表面に加工痕。	スレート	
77・7	b区L3	石棒	9.1	2.8	1.5	47.6	加工痕（擦痕）。	スレート	
77・8	3区LⅡ	石棒	6.5	2.8	1.4	32.1	表面に加工痕。	スレート	両端欠損。
77・9	4区LⅡ	石棒	13.8	2.8	1.0	55.3	表面剥離顕著。	スレート	

弥生時代の所産と推測される。

尖 頭 器

石鏃の未成品の可能性があるが、石鏃の形態分類にあてはまらないものを尖頭器とした（第72図7～9）。7～9はいずれも木葉形の形態を呈する。7は凸基有茎石鏃未成品とも推測される。

不定形石器

側辺に微細な2次加工により鋭角的な刃部を形成するものを不定形石器として、第72図10・11、第73図1・2の4点を掲載した。いずれも不定形な形態を呈する。第73図3は自然礫を打ち欠いて側辺に2次加工を施したものである。

磨石・敲石類

磨痕・敲打痕などの使用痕を有する礫である。第74図1～9の9点を掲載した。いずれも球状もしくは扁平な円形の礫で遺物包含層からの出土である。

打製石斧 第75図1の1点がある。基部側面が内彎する撥形の形態を呈する。一部に自然面を残す。刃部は円刃であり、先端がやや欠損するが使用痕であるのかは不明である。

磨製石斧 第75図2、第76図1～3の4点を掲載した。いずれ刃部は両凸刃（蛤刃）で刃縁は円刃の形態となる。第75図2は完形品で側縁は基端に向かって内彎する。断面は楕円形状を呈する。研磨は丁寧であるが、器表面の凹凸により一部に自然面が残る。第76図1～3はいずれも基端部を欠損する。第76図1は基端に向かって直線的に内傾し、2は外反、3は直立する。断面の形態は1・2が隅丸長方形を呈し、3は楕円形状を呈する。研磨はいずれも丁寧で、磨痕が遺存する。

4は磨製石斧の基部資料と推測されるが、表面に明確な加工痕が観察されない。

用途不明石製品

器表面の加工痕もしくは使用痕と推測される磨痕や形態から石製品と推測されるものを4点掲載した（第73図3・第76図5～7）。第73図3は方形を呈する。何らかの製品の未成品または石包丁とも推測される。

第73図5・6は扁平な礫で5の表・裏面には明瞭に使用痕と推測される磨痕が観察される。6・7には明瞭な使用痕跡は観察されないが、6は上・下端に敲打された痕跡が認められる。7は全面が平滑である。いずれも砥石のような用途が推測される。

石 棒

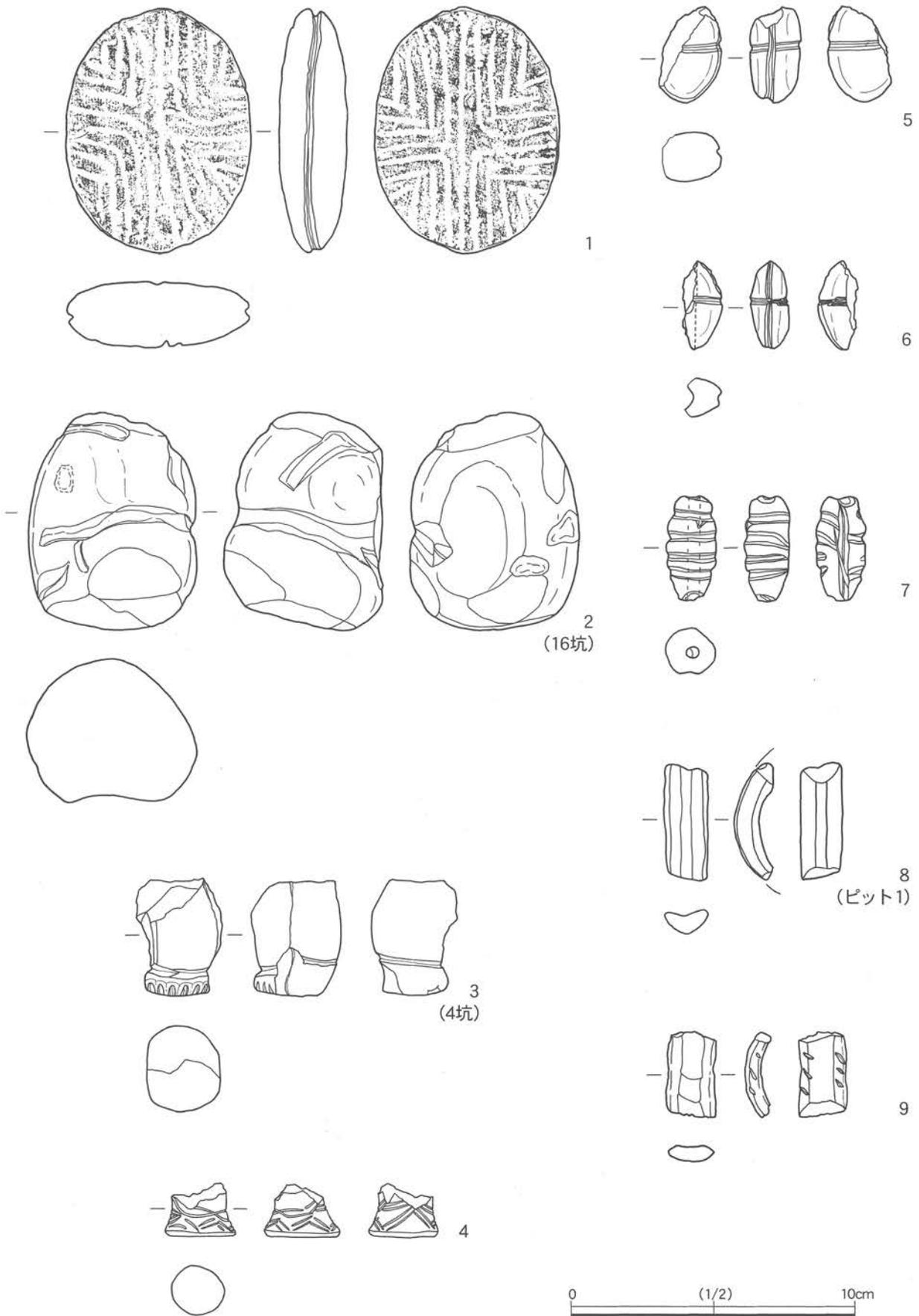
磨製の石棒9点を掲載した（第77図）。第77図1・2は頭部の資料である。1は先端部が台形状、断面形は扁平で平坦面を有する。2の先端部は三角形状を呈し、断面形は楕円形状を呈する。3～9は頭部及び基端部を欠損する。1・6は表面の色調及び断面の形状等から同一個体と推測される。3～6・9はやや扁平な楕円形状の断面形を呈する。縄文時代後・晩期の所産であろう。7・8の断面形は円形を呈し、縄文時代中期の所産と推測される。

第4節 土 製 品 類

土製品は遺物包含層より土錘、土偶、耳環状土製品、土版、粘土塊が出土している。このうち9点を掲載した（第78図）。

土 版

1点出土している（第78図1）。楕円形状を呈する。断面形も扁平な楕円形状を呈する。長



第78図 土製品

第27表 出土遺物（土製品）一覧

図番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	特 徴	備考
78・1	c区 (p261)	土盤	8.7	6.5	2.4	136.9	沈線による文様。	2住周辺。
78・2	16坑検出面 (p292)	粘土塊	7.2	6.0	5.6	226.7	指頭圧痕。	378と共伴。
78・3	4坑覆土	土偶	4.1	3.0	3.1	—	脚部。足指7本。	
78・4	b区 (p309)	土偶	1.9	2.5	2.7	—	土偶か。沈線による鋸歯状文。	13坑周辺。
78・5	2区 (p204)	土錘	3.5	2.2	1.8	12.5	無文。有溝。	2住上面。
78・6	c区L3	土錘	3.2	1.4	1.4	4.2	無文。有溝。	
78・7	c区 (p285)	土錘	3.7	1.7	1.6	9.3	有溝4条。	510・696と同一地点。
78・8	ピット1覆土	耳飾	4.2	1.5	0.9	—	無文。	直径6cm
78・9	b区 (p304)	耳飾	3.0	1.8	0.9	—	刺突。	23坑上面。

軸と側面に周回する溝を有し、表・裏面には鍵手状の溝が充填される。縄文時代晩期の所産と推測される。

粘 土 塊

第16号土坑上面から出土した縄文時代晩期に比定される土器（第59図1）の内部から出土した不整な楕円形状を呈する粘土塊である（第78図2）。表面は指頭によるナデ調整が施されている。用途は不明である。

土 偶

2点出土している（第78図3・4）。3は第4号土坑覆土中より出土した脚部資料で、脚を開いた状態を表現していると推測される。表面はミガキが施される。上脚部断面は楕円形状を呈し、また1条の沈線によって足首とふくらはぎが区画され、6条の縦方向の刻目によって足指が表現される。4は沈線により鋸歯状の文様が施される脚部の資料であろう。

土 錘

有溝土錘3点が出土している（第78図5～7）。5・6は溝が短軸と側面を周回する。7は短軸方向に溝が4条めぐりものである。6・7は長軸方向に穿孔される。

耳環形土製品

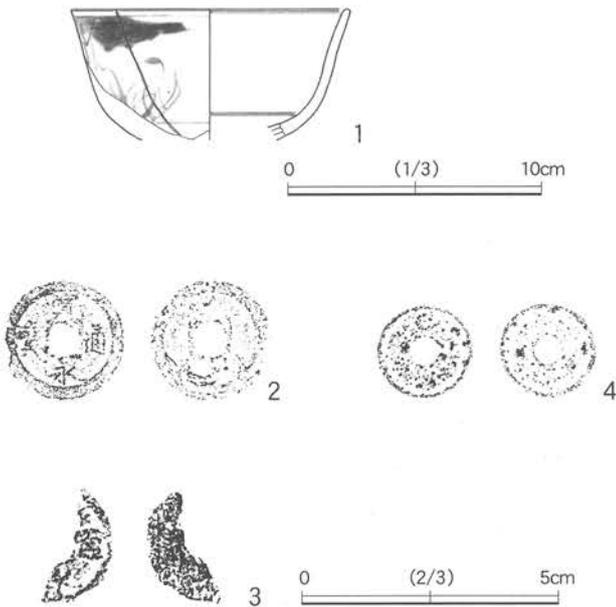
耳環と推測される環状の土製品が2点出土している（第78図8・9）。8・9とも外側中央が8は強く、9は緩やかに凹み、内側中央が凸状となる断面形態を呈する。8は直径6cm、9は直径5cmと推測される。9の内面には2個1対となる刺突が3組遺存している。

第5節 陶磁器・銭貨

近世以降の遺物である陶磁器や銭貨は表土中や攪乱坑から出土している。陶磁器は近・現代に使用された日用生活雑器がほとんどである。

磁 器

肥前系の磁器染付碗1点を掲載した。口縁部がわずかに外反する器形となる。外面には草花文、内面には圈線が描出される。17世紀代の資料である。



第79図 陶磁器・銭貨

銭 貨

3点が出土している（第79図2～4）。
2はA区②の近・現代の攪乱坑、3はA区①土手1東側から出土した寛永通宝である。3は錆化により劣化が顕著であり、破損により「永」・「寶」の2字が欠損する。

2は寛永元年（1639）初鑄である「古寛永」銭であるが、3も同じく「古寛永」銭であると推測される。

4は近代の第1号竪穴遺構の西側の出入口付近から出土した「昭和19年」銘がある10銭錫貨である。

第28表 出土遺物（磁器）一覧

単位：cm

図番号	出土地点	器種	口径	器高	底径	文 様	時期	備考
79・1	4区LⅡ	碗	11.0	5.2	—	外：草花文。内：圏線。	近世	肥前系。

第29表 出土遺物（銭貨）一覧

単位：cm、g

図番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	特 徴	備考
79・2	A区②攪乱	寛永通宝	2.3	2.3	0.1	1.79	「古寛永」。1636～1659年鑄造。	
79・3	A区①土手1東LⅡ	寛永通宝	2.2	1.3	0.1	0.78	「寛」・「寶」字欠損。	磨滅顕著。
79・4	A区①土手1西出入口表土	10銭錫貨	1.9	1.9	0.2	2.28	「昭和19年」	

引用参考文献

安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式」『石器時代』第9号 石器時代文化研究会
 安孫子昭二 1993 「高井東様式大波状口縁深鉢の編年と分布」『東京考古』11 東京考古談話会
 猪狩みち子他 2007 『大塚遺跡・野馬土手』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第5集 南相馬市教育委員会
 石岡憲雄他 1992 シンポジウム「縄文時代後・晩期安行文化—土器型式と土偶型式の出会い—」『埼玉考古』別冊4 埼玉考古学会・「土偶とその情報」研究会
 井 憲治他 1991 「前原A遺跡」『国営総合農地開発事業 矢吹地区遺跡発掘調査報告8』福島県教育委員会
 梅宮茂・大竹憲治 1986 『霊山根古屋遺跡の研究』 霊山根古屋遺跡調査団
 大 熊 町 1984 『大熊町史』第二巻史料 原始・古代・中世 大熊町史編纂委員会
 川田 強 2006 『浦尻貝塚2』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第1集 南相馬市教育委員会
 川田 強他 2008 『南相馬市内遺跡発掘調査報告書4』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第10集 南相馬市教育委員会
 日下部善己 2003 「複式炉以前—U字型の炉から複式の炉へ—」『福島考古』第44号 福島県考古学会
 後藤 勝彦 1990 『仙台湾貝塚の基礎的研究』
 木幡成雄他 1997 『相子島貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第47冊 財団法人いわき市教育文化事業団
 木幡成雄他 2000 『連郷B遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第70冊 財団法人いわき市教育文化事業団
 木幡成雄他 2002 『連郷遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第88冊 財団法人いわき市教育文化事業団

- 縄文文化検討会 1988 「亀ヶ岡式土器の編年について」第3回 縄文文化検討会シンポジウム
- 小林 圭一 2001 「東北南半の瘤付土器成立期の様相」『第14回 縄文セミナー 後期後半の再検討』—記録集— 縄文セミナーの会
- 小林 圭一 2004 「大洞B式「ノ字文」の系譜」『先史考古学研究』第9号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 小林 圭一 2008 「縄文時代晩期初頭に関する一断相」『先史考古学研究』第11号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 菅原 祥夫 2003 「複式炉の成立過程とその意義」『福島考古』第44号 福島県考古学会
- 鈴鹿 良一他 1987 「日向南遺跡(第3次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅸ』福島県文化財調査報告書第182集 福島県教育委員会
- 鈴木 正博 1985 「「荒海式」生成論序説」『古代探叢』Ⅱ 早稲田大学出版部
- 鈴木加津子 1990 「安行式文化の終焉(一)」『古代』第90号
- 鈴木加津子 1991 「安行式文化の終焉(二)」『古代』第91号
- 鈴木加津子 1992 「安行式文化の終焉(三)」『古代』第94号
- 鈴木加津子 1993 「安行式文化の終焉(四)・完結編」『古代』第95号
- 鈴木加津子 1995 「飛驒桜洞遺跡の大洞C2式土器」『古代』第99号
- 須藤 隆 1995 『中沢目貝塚Ⅱ』縄文時代晩期貝塚の研究2 東北大学文学部考古学研究会
- 竹島 國基 1992 『桜井』竹島コレクション考古図録第3集
- 田部井 功 1993 「大洞A₂式に関する覚書」『古代』第95号 早稲田大学考古学会
- 中山雅弘他 2001 『松ノ下遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第73冊 いわき市教育委員会
- 西村 正衛 1984 『石器時代における利根川下流域の研究』 早稲田大学出版部
- 橋本 勉 1990 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集
- 蜂屋 孝之 2004 「縄文時代後期の釣手土器」『先史考古学研究』第9号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 林 紘太郎 2008 『野馬土手』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第9集 南相馬市教育委員会
- 廣岡敏・榑良幸広 2000 『上ノ台遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第67冊 いわき市教育委員会
- 馬目順一他 1966 『寺脇貝塚』 磐城市教育委員会
- 馬目 順一 1970 『福島県郡山市一人子遺跡の研究』 南奥考古学研究叢書Ⅰ
- 馬目順一他 1982 『竹之内遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊 いわき市教育委員会
- 宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第111集 宮城県教育委員会
- 村田 章人 1991 「関東地方における大洞C2式系土器群—杉田C類の再検討を中心に—」『埼玉考古学論集』設立10周年記念論文集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 目黒吉明他 1984 「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告16』 福島県教育委員会 財団法人福島県文化センター
- 森 幸彦 1988 『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告第17集 福島県立博物館
- 村田 章人 1993 「大洞B式と安行3a式の関係についての予察」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 安田稔・今野徹他 1996 「タタラ山遺跡(第2次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告9』福島県文化財調査報告書第331集 福島県教育委員会 財団法人福島県文化センター
- 山内 幹夫 1986 「一斗内遺跡出土縄文晩期土器の再検討」『しのぶ考古9』 財団法人福島県文化センター
- 山内幹夫・吉野滋夫他 2002 「馬場前遺跡(2次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告29』福島県文化財調査報告書第388集 福島県教育委員会 財団法人福島県文化センター
- 山内幹夫・坂田由紀子他 2003 「馬場前遺跡(2・3次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告34』福島県文化財調査報告書第398集 福島県教育委員会 財団法人福島県文化センター
- 雄 山 閣 1986 「縄文土器の編年」『季刊考古学』第17号 雄山閣
- 領塚 正浩 2006 「東北・北海道地方における早期中葉の土器編年」『第18回縄文セミナー 早期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 渡辺 一雄 1986 『弘源寺貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第13冊 いわき市教育委員会
- 渡辺一雄・大竹憲治他 1983 『道平遺跡の研究』大熊町文化財調査報告Ⅲ 大熊町教育委員会

第4章 考察

複式炉の施工プランについて

－複式炉の配石における対称性と配石高の直線的志向－

1 はじめに

縄文時代中期から後期に出現する複式炉は、数千基を超える数の複式炉が調査されており、その分布域は北陸・関東・東北北部まで達している。福島県内では、200件以上の遺跡から検出されており、中通り地方だけでも1,100基以上の複式炉が調査されたと言われている(新井2005)。複式炉の研究は盛んでその論考も多く、平成3年に福島県で開催された日本考古学協会では、シンポジウムのテーマとなり、関係各県の複式炉が集成されると共に、これまでの成果が集大成されている。

今回、発掘調査が行われた原町西町遺跡でも複式炉が1基確認されている(第80図)。この複式炉の発掘調査の測量段階で複式炉作成における配石に、有る一定の規則性があることに気がついたので、今回はそれについて報告しておきたい。1つ目は、複式炉の石組部における石組みが、目安となる石を基準として左右対称に配石されていること。2つ目は、縁石における配石の頂部の高さについて、丁張りして高さを捕り、直線的に配石していることである。

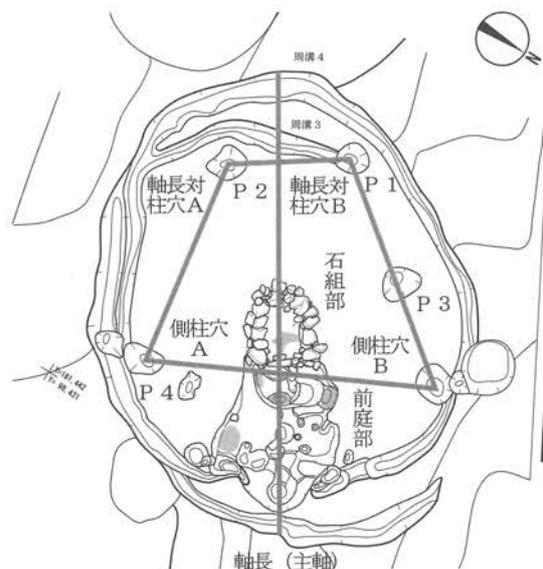
複式炉の住居跡内の位置や柱との関係などについては数々の論考があるが、石組の今、問題としている配石状況等については、手近の文献ではほとんどみられないようであった。あるいは、既にご承知のことで今更言うまでもないことであるのかもしれないが、今後の研究の進展を考えると、あながち無意味なことではないと考えられるためあえて提示してみることにした。

2 原町西町遺跡出土複式炉の

住居跡内での位置と柱穴との関係

原町西町遺跡から竪穴住居跡が2棟確認されており、その1棟の第2号竪穴住居跡から複式炉が1基検出されている。時期は、その様相から縄文時代中期後葉の複式炉と考えられる。

出土した複式炉は、平面形態が楕円形となる住居跡の長軸端部に位置する。主軸方向は石組部を南西方向に、前庭部の開口部を北東方向に向けており、前庭部は住居跡の壁に接続させて構築されている。本竪穴住居跡から検出されている柱穴は、森幸彦氏の呼称(森1996)に従えば、複式炉脇の側柱穴A(P4)と側柱穴B(P7)および軸長



第80図 原町西町遺跡出土複式炉の住居跡内の位置と柱穴

対柱穴A (P2)・B (P1)、また側柱穴Bと軸長対柱穴Bとの間に、柱穴P3が確認されている。両側柱穴および両軸頂対柱穴は、炉の軸線に対称に配置され、両側柱穴を結ぶ線は石組部と前庭部の丁度境を通る。坂田由紀子氏の指摘のとおり「複式炉が住居跡の主軸線上に構築され」、「その配置により強い規制があった」(坂田2003)ことが窺える。

3 原町西町遺跡出土複式炉の様相

原町西町遺跡から検出された複式炉の形態は、石組部と前庭部で構成されるものである。石組部の底面に敷石を施さず、土器埋設部を持たない型式である。炉の平面形態は、石組部が楕円形に近い台形を呈し、それに接続する前庭部は南側の裾がやや外に広がる形をとっている。あたかも高さのある跳び箱状の台形を呈する。床面の深さは、石組部で25cm、前庭部では根の攪乱が甚だしいが、20cmとやや浅くなっている。石組部の主軸長は92cm前後、中央部の幅は75cm前後を測る。前庭部は、主軸長が154cm、基底付近の最大幅が130cmを測る。

石組部を形成する石は、形状については四角形の板状の平石を主に石材とし、それらの石の産状状態は破碎礫が少なく、河原などに見られる転石を主体としている。石の規模は10cmの小ぶりの石もあるが、大きなものでは長軸が25cm前後のものもある。石質は、花崗岩やせん緑花崗岩・アプライト・せん緑岩が大半を占め、僅かに凝灰岩やカクセン片岩等が含まれる。

焼土の位置や石の焼け具合は、床面では中央より前庭部側に焼土が見られ、石組部では奥壁両側の石や前庭部側の両側面の石が顕著に焼けている。

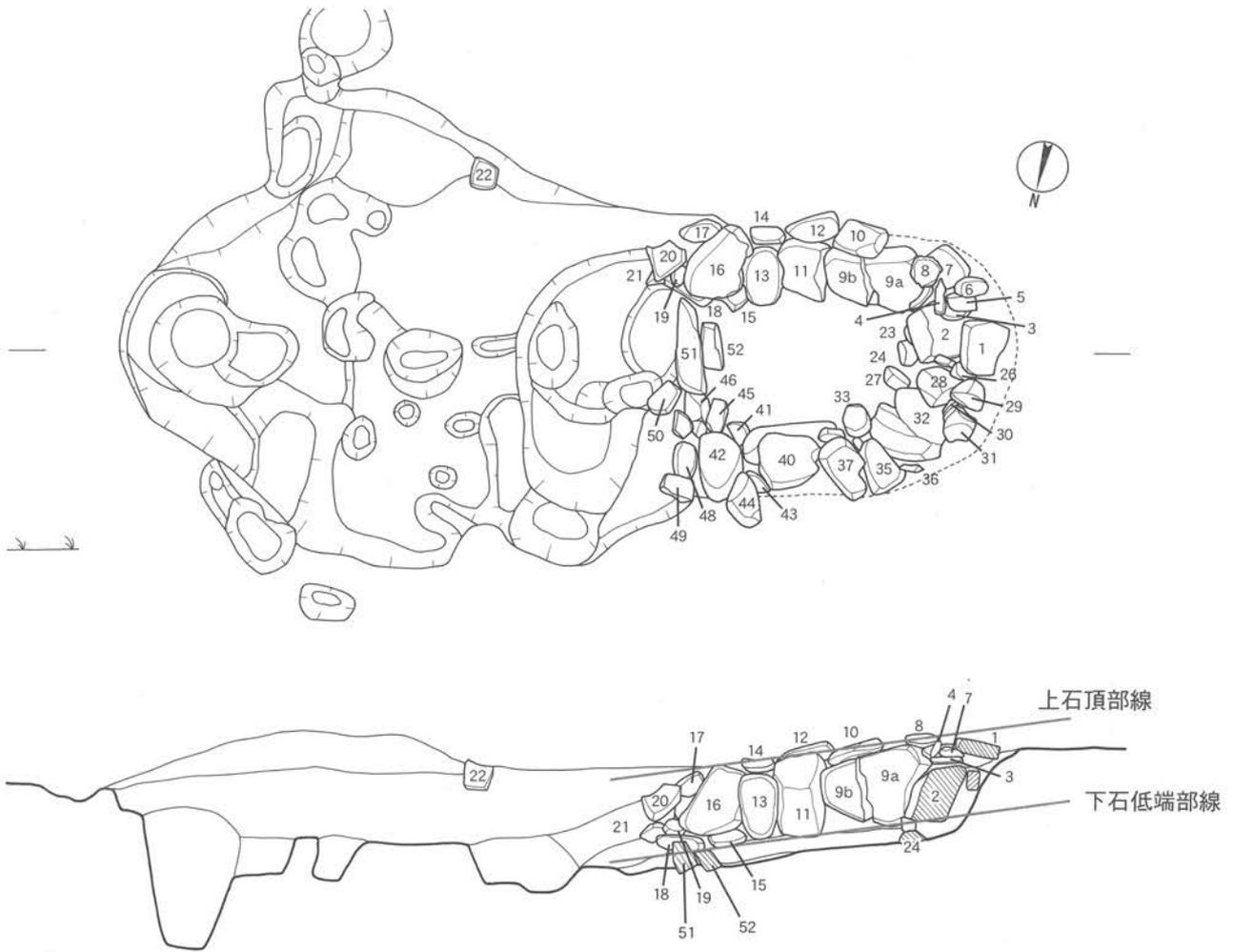
4 石組部の配石状況から見る配石の対称性と配石高の直線性について

配石状況は、大きい平石では長軸を横にし、外開きに配してやや傾斜のある側壁を形成している。平坦面を炉側に向けて、両面が平坦でない石は平坦面を表側(炉内側)にして配石する。これらの石は単に炉の堀方を囲繞するのではなく、一定の規則性を持って配石されている。

配石の基準と考えられる石は、第81図に示したごとく石1と石51である。これが石組部(複式炉)の主軸であり、軸長線上に載る石である。観察によればそれらの石を基準として、各石が炉跡の主軸線(軸長線)を基線とし左右対称に配石される。石1の両脇に5と29、3と26、石9a・9bと石32・33が対称となる。平面で見ると石33は斜めに倒立しているので小さく見えるが、実際は長形で大きい。8と31、石11・13と39・40が対称。縦長に配した石11・13の持つ高さを、横長に寝かした石39・石40を重ねることによって対称性を補っている。10と35、12と37、石16と石42、石15と石41、石18と46、20と48、17と49がそれぞれ対称の配石となる。

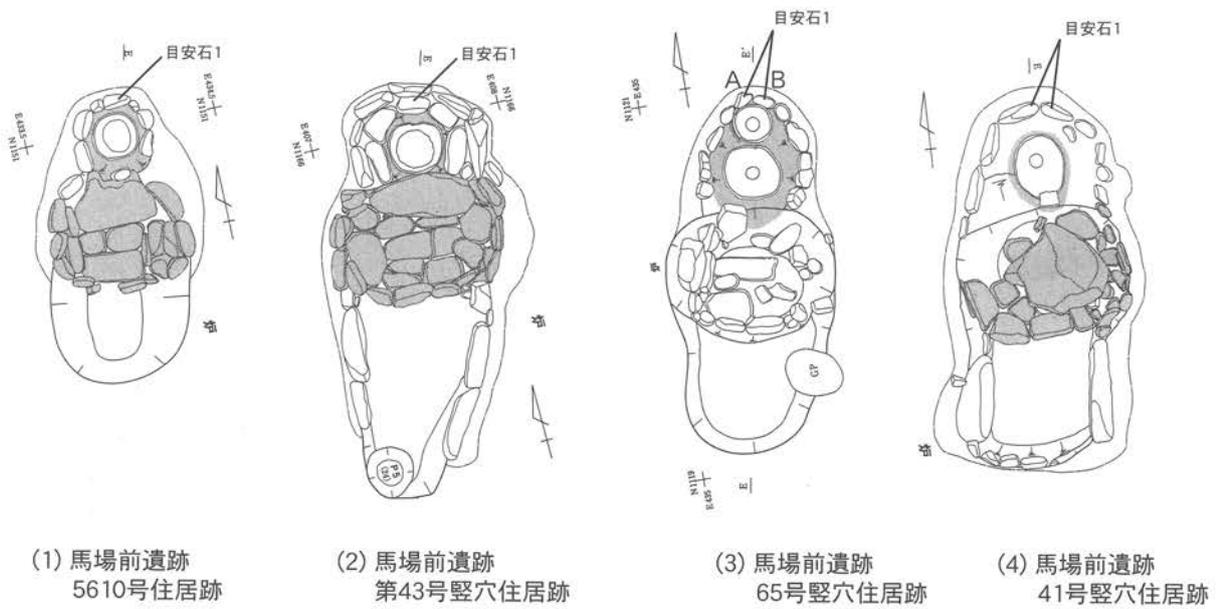
石組部における配石の対称性志向を実現するためには、基準となる目安が必要である。複式炉施工においてこの基準点となり、割付の最初の目安となる石が目安石1(石1)と考えられる。そして、この石は、竪穴住居跡の軸長線上に置かれる。

次に配される石が、目安石1に相対し主軸線上に乗る目安石2(石51)である。石組部の石は、この二つの石、特に目安石1を中心として左右対称に割り付けられていく。順次目安石1を起点に、目安石2に向かって配される傾向にあるが、左右対称が優先するので、順次配して



第81図 原町西町遺跡第2号住居跡出土の複式炉 (縮尺: 1/20)

0 (1/20) 50cm



第82図 複式炉の対称性と目安石の二つのタイプ (縮尺: 1/40)

いくと言うより、目安石1と2の間を左右対称に割り付けていくという認識のほうが適切であろう。大きい石の向かい側には同じくらいの大きさ（長さ）の石、同程度の石がなければその大きさを複数個の石で補い相対させる。

目安石は、軸長線上に配されるが、本複式炉の場合、目安石は軸頂線のほぼ中心（竪穴住居跡の中心）に据えられている（第80図）。この目安石は、本跡出土複式炉や福島県双葉郡檜葉町所在の馬場前遺跡第56号竪穴住居跡から検出された第82図（1）や同遺跡第43号竪穴住居跡から検出された（2）のように、目安石1が1個の場合と、第82図（3）・（4）のように目安となる目安石1が2個の場合があるものと考えられる。馬場前遺跡第65号・41号竪穴住居跡出土の目安石1が2個というのは、石組部の先端に置かれた2個の石の間が「目安」となるもので、軸長線の上に置かれる目安石1個ではなく、軸長線をまたぐ2個の目安石1-A、1-Bである。

ただし、配石の順序は本跡出土複式炉を見る限りでは、目安石と呼んだ石1が石2や石26の上に乗っているため、必ずしも最初に配されるわけではないともいえる。目安石が2個の場合を考えると、あらかじめ紐などを張って設定した主軸線の両側に、石2個（目安石）をその紐の両側に置くことで目安とする場合や、主軸線を張る起点のピン（軸棒）を途中あるいは最後にはずして、そこに目安石を配していることも考えられる。

配石順・割付順については、今後大いに検討の余地があるが、いずれにせよ、複式炉を形成する石が、安易に順次直列的に並べられるのではなく、軸線に沿って左右対称に、しかも石の規模や形状を選択しながら配されていること。この事実が極めて重要であると考えられる。この配石の相対称性志向が、複式炉施工に際して看取される1つ目である。

複式炉の壁を形成する石は、外傾して外開きに配されている。主軸線側からの見通し図（第81図の下）を見ると、上方にある石の頂部と下方にある石の底端部の上下幅は一定である（第81図下）。これは有る意味、炉の深さが一定であれば当然のことともいえるが、本炉の場合では、床面が北東方向に沿って（前庭部に向かって）低く傾斜しており、したがって壁を構成する石も上下幅を一定に保ちながら、前庭部に向かって傾斜していることとなる。ここで注目したいのは、壁石が傾斜しながらも掘方の平坦面に沿って置かれるため、下石の底端部が直線的になるのは当然のこととして、上石の頂部線も底端部線と平行して、同じように直線的となっていることである。上下幅を一定に保つため、石2の上方に石3・4・5を載せ、石9aの上に石8、9bの上に石10、石11の上に石12、石13の上に石14、また石16を上へ引き上げて下に石15、そして石17・石20と言う具合である。このようにして整えた頂端部（配石高）の直線性を、これをあえて意識したうえでの施工と考え、複式炉を構築する際の2つ目の指向性と捉えておきたい。

以上のように、本跡出土複式炉の観察からは、複式炉の施工における①配石の相対称性志向と②配石高の直線性が看取される。なお、壁の側面から見る上下の幅は25cm内外であり、平面から見た左右対称となる石組のそれぞれの長軸幅（単位幅）も24cm～26cmである。先に述べたように一箇の石で満たされなければそれを複数箇の石で補う。本複式炉の配石を見る限りで

は、25cm前後という単位が、この複式炉施工に関して意識されている可能性も合わせて指摘される。

5 結 び

さて、本跡出土複式炉の観察から、複式炉の施工における①配石の相対称性志向と②配石高の直線性が看取されることを指摘した。

配石の相対称性については、複式炉を形成する石が、安易に直列的に並べられるのではなく、軸線に沿って左右相対称に、しかも石の規模や形状を選択しながら配されている可能性があり、ここに配石の相対称性志向が認められる。

配石高の直線性については、もし、この直線性が複式炉における一般的傾向であるとするなら、その理由を考えなければならない。この頂端部（配石高）の直線性が、最上部の石の平坦面をもって形成されていることから、これら複式炉の縁石上に直線状の何かが載っていた、との想像も大いに膨らむ。現代の囲炉裏に見られる炉縁のように、配石された側縁の石の上に板や丸木状の、配石との接触部が平らなものが載る可能性も想起される。

今後、他の遺跡において検出されている複式炉が、今回指摘した2点について、合致するか否かの詳細な検討が必要である。

また、資料の集積という点では、複式炉の測量図の作成に十分な注意が必要となろう。複式炉の測量における注意の置き所は、配石状況を観察し、配石に相対称性などの規則性があるかどうか、埋没時あるいは埋没後の環境の影響、根などの「攪乱」や「割れ」による石の微妙な「前後左右」・「上下」の移動やずれが生じていないかどうかなどであり、その見極めと解釈が重要である。とりもなおさず、「配石は主軸線を挟んで左右対称に配石されているかも知れない」ことを念頭に置いての方眼測量が有効であろう。

また、配石高の直線性については、残念ながら見通し図を作成した例は僅少であり、図化資料からの検証は現段階では困難である。図化資料としての見通し図の作成についても、今後必要と考えられる。少なくとも両側に配された石の頂上部が、直線的であるか否かの観察と確認だけは行う必要があるだろう。

平面図は、立体的・多面的なものを視覚的に捉えて平面化するため、平面図ではなかなか明確に配石の相対称のイメージが表現できない。実際に現物を実見して、3次元で見て初めてその相対称性が分かる場合も多いと思われる。今回の本跡における複式炉の作図も、意識して（意図的ではなくもちろん客観的に）作図したにもかかわらず、それが端的にあらわされているとは言い難い。報告書などで資料を拝見しても、掲載縮尺が大きいなどの難点もあり、読み取る上で不明瞭な部分も多い。特に、上原型複式炉のように石組部の配石が密集したものについては、報告書の掲載図を見ただけでは検討が難しく、特に現地での丹念な意識的観察が必要である。

今回は、とりあえず予察という形で、複式炉の石組部における配石の相対称性と、配石高の直線的志向について提示しておくこととしたい。複式炉に関する論文や報告書などの文献を、

すべて読破したわけではないので、すでに同様の事柄を指摘しておられる方もいるかと思うが、少しでも研究の進展に参加できれば幸甚の極みである。

参考文献

- 1 森 幸彦 1996 「複式炉小考」論集しのぶ考古 目黒吉明先生頌寿記念
- 2 能登谷宣康 1996 「縄文時代中期末葉の竪穴住居跡にみられる特殊施設」論集しのぶ考古 目黒吉明先生頌寿記念
- 3 阿部 知己 2002 「馬場前遺跡2次調査」常磐自動車道遺跡調査報告29 福島県教育委員会 門脇秀典ほか
- 4 菅原 祥夫 2003 「前山A遺跡」常磐自動車道遺跡調査報告35 福島県教育委員会
- 5 坂田由希子 2003 「複式炉を伴う竪穴住居跡の規格」研究紀要2002 福島県文化財センター白河館
- 6 木幡 成雄 2005 「連郷遺跡における縄文時代中期後半の竪穴住居跡について」『歴史智の構想』歴史哲学者鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会
- 7 福島 雅義 2005 「復元的視点による竪穴住居跡の発掘調査」研究紀要2004 福島県文化財センター白河館
- 8 押山 雄三 2005 「複式炉研究の歩み」日本考古学協会2005年度福島県大会シンポジウム資料集 日本考古学協会2005年度福島県大会実行委員会
- 9 坂田由希子 2005 「複式炉と住居の構造」日本考古学協会2005年度福島県大会シンポジウム資料集 日本考古学協会2005年度福島県大会実行委員会
- 10 小暮 伸之 2005 「福島県における複式炉の編年」日本考古学協会2005年度福島県大会シンポジウム資料集 日本考古学協会2005年度福島県大会実行委員会
- 11 新井 竜哉 2005 「福島県における複式炉と集落の様相」日本考古学協会2005年度福島県大会シンポジウム資料集 日本考古学協会2005年度福島県大会実行委員会

第5章 ま と め

平成20年度における笹部川改修工事にかかる埋蔵文化財（野馬土手・原町西町遺跡）の発掘調査は、平成20年8月から12月にかけて約4,000㎡を対象に実施された。本遺跡の発見は平成19年に南相馬市教育委員会によって実施された試掘調査による。太平洋戦争時に原町中学校（現福島県立原町高等学校）の学徒により構築された原町飛行場に関連すると推測される土手の性格を判断するために設定されたわずかなトレンチから、縄文時代後期～晩期の土器と竪穴住居跡と推測される遺構が確認されたのである。その試掘調査の成果をうけて平成20年8月から実施された発掘調査の成果は第4章までに載録したとおりであるが、その内容は学術的にも注視されるものといえよう。

以下、平成20年度の調査区域内から出土した遺物と検出された遺構から、本調査区域内における時代的な景観の変遷について概観的に総括し、本報告のまとめとしたい。

縄文時代 平成20年度調査区における最古の資料は、縄文時代早期中葉の資料であり、型式的にいえば田戸下層式期にあたる。出土した幅広の簾状角押文土器は田戸下層式から田戸上層式への移行期に位置づけされる資料と理解される。これに「田戸上層式」、矢羽根状刺突文が施文される大寺・常世式期の資料が後続する。この時期に機能していたと推測される遺構は検出されていないが、本調査区域内における生活活動の初現はこの時期と推測される。

地球上で最後の氷河期であるウルム氷期が終わりを告げた約6,000年前の縄文時代前期においては、本調査区域内が狩猟活動の「場」となっていたことが、地形に応じて規則的に配置された落とし穴（第1・2・5・7・8・10・22・23・27・30号土坑）やその覆土に混入して出土した土器によって想定される。また、第6・9・11・14号土坑は該期の貯蔵穴（フラスコ土坑）の可能性がある。縄文時代前期は海岸線がもっとも内陸部に位置していたと推測される時期であり、新田川の段丘上に立地する本遺跡周辺においても、海・山・河川における狩猟・採集活動が活発に行われていたであろうことが想起される。これらの活動は徐々に海岸線が後退する縄文時代中期以降の時期においても、断続的ではあるが継続されたことが本調査区内から出土した該期に比定される遺物から推測される。

本遺跡が立地する河岸段丘上において本格的な生活活動が営まれるのは、検出遺構及び出土遺物数量より縄文時代中期後葉～晩期後葉の時期と理解される。本調査区域から検出された2棟の竪穴住居跡は、縄文時代中期末葉および後期後葉に機能していたと推測される。後世の削平等によりこれらの住居に伴う遺物の出土状態は明確な状態でなく、住居の機能した詳細な時期決定まではいたらなかった。しかし、これらの住居跡の存在は、南相馬市原町区内における該期の様相を窺う上でも注目される発見といえよう。特に第2号竪穴住居跡にともなう複式炉は、配石の方法に左右対称と直線性を意識していたことが窺え、複式炉構築にあたっては一定の規格性が存在したことを証する極めて良好な資料といえよう。さらには、土器埋設部をも

たない形態においても、浜通り地方南部でのあり方と合わせて今後吟味する必要があるものであろう。

竪穴住居廃絶後に形成された遺物包含層等からは、縄文土器、石器・石製品、土製品を含む後期末葉から晩期の資料が多量に出土している。本調査区域内から出土した縄文時代中期以降の編年的な構成は、東北地方南部に分布する大木9式期（中期後葉）、綱取I式期（後期前葉）、加曾利B式期（後期中葉）に比定される土器がわずかではあるが出土している。しかし出土数量が圧倒的に多いのは地方色が復活する後期後葉以降に位置づけられる土器であり、なかでも新地町新地貝塚を指標とする、いわゆる「貼瘤土器」が主体を占める。口縁・頸部の主体的文様に入組帯状文、弧線連結文、「掘起しコブ」、刺突文、刻目文を特徴的に施文し、口縁部の突起や文様モチーフの要所に粘土粒による「コブ」を配する深鉢形、浅鉢形土器や注口土器は、いわゆる「金剛寺式」、「西ノ浜式」、「宮戸Ⅲa・Ⅲb・Ⅳ式」、「新地式」といわれる土器と同様の特徴を有する土器と理解される。

後期後葉における関東系土器として知られる曾谷式系や安行Ⅱ式系の土器もわずかながらも出土する。両者間の交流が盛んだったことが伺われる事象であろう。

後期後葉に明確に位置づけられる遺構は、関東系の安行Ⅱ式期土器と東北系「貼瘤土器」が共伴して出土した第12号土坑及び連続刻目文を充填する入組帯状文が施文された土器を埋設した第4号埋設土器をはじめ1・2号埋設土器がある。遺物包含層から出土した遺物数量から本調査区周辺には該期の集落が存在していたことが推測される。

縄文時代晩期に比定される土器は大洞B式期から大洞A'式期に比定される土器が粗密の差はあるが出土している。なかでも晩期中葉に比定される大洞C₁・C₂式期の土器の出土数量が多い。

また縄文時代晩期に機能していたと推測される遺構には第4・28・29号土坑、第1～3号炉跡、第1～8号焼土跡など検出面に焼成面や覆土に焼土が混入する遺構が多い。また第3・5号埋設土器も、出土した土器の特徴からこの時期に比定されよう。本調査区内においては該期の竪穴住居跡が検出されていないことから、これらの炉跡、焼土跡や埋設土器は何らかの生活・生産活動のために使用されていたと推測され、縄文時代晩期の時期に本調査区域周辺における活動が活況を帯びていたことが推測される。

弥生時代 表土中などからわずかに中期に位置づけられる弥生土器が出土するのみである。この時代以降、本調査区域内における営みの痕跡は近世まで途絶えることになる。

近世 近世に属する遺構には野馬土手がある。今回の発掘調査では延長約230mが調査対象となった。調査区域A区②に遺存する野馬土手は近・現代の削平により遺存状態は良くなかったが、A区①及びB区に遺存する野馬土手の遺存状態は比較的良好であった。構築方法については、以前に調査を実施した他地区（原町区上渋佐字原畑・原町区牛来字大塚・小高区羽倉字太良谷地）における調査成果と比較すると、一部に地山の黄褐色土を使用するなど、使用する土は変えてはいるが、多くは表土と推測される黒褐色土を積土して構築されていることが確認された。しかし強度を保つための版築や「芯」となるようなシルト岩等は積土において確認

されなかった。要因は不明であるが、地区により土手の構築状況に相違があることは確認されているが、本地区における土手構築に何らかの制約があったものと理解されよう。

近代以降 近代以降の遺構としては、原町飛行場に関連すると推測される第1・4号竪穴遺構と第1号竪穴遺構にともなう土手1がある。第2・3号竪穴遺構については検出位置などから近・現代の攪乱坑とも推測される。

検出された第1・4号竪穴遺構は規模や長軸方向などに共通の規格性を推測することができ、計画的に構築されたものと推測される。使用目的については「防空壕」や「火薬庫」など諸説があるが、今回の発掘調査において明確にすることはできなかった。通常の防空壕は崖面に穿孔される例が多く、旧原町飛行場に隣接する赤柴遺跡（常磐自動車道関連）では、段丘崖面に横穴状に穿孔された防空壕が検出されている。しかし本調査区域周辺には横穴が穿孔されるような崖面は存在せず、また調査以前には、見通しのきかない背の高い樹木が繁茂していたという聞き取り調査結果から判断すると「防空壕（掩蔽壕）」であった可能性が高いことが示唆される。いずれにしても軍事色の濃い当時の社会状況から軍事関連施設として構築されたことは確実である。なお今後とも周辺地区においての聞き取り調査や類例の収集等の追加調査が必要であろう。

太平洋戦争後は、A区①は宅地、A区②・B区では水田として利用され、その後はA区②も盛土され宅地として利用される。野馬土手は笹部川の堤防として利用され、軍事関連遺構であった土手はその下に縄文時代の遺構・遺物を守るかのように存在し続け現在に至った。

以上、各時代の景観について出土遺物と検出遺構から概観し、まとめとした。本調査区域内は近世の野馬土手や近代の軍事関連施設が遺存するのみならず、縄文時代中期～晩期の集落跡であったことが確認されたことは大きな驚きであり、該期の研究に良好な資料を提示することができたことは特筆されよう。その考古学的成果は当地の歴史解明に大きく寄与することが期待される。

第 2 編

平成 2 1 年度調査

- 第 3 次 調査 -

第1章 調査の概要

第1節 調査要項

遺跡名称	原町西町遺跡（はらまちにしまちいせき）		
所在地	福島県南相馬市原町区西町三丁目地内		
遺跡現況	道路		
遺跡性格	縄文時代集落跡、遺物包含層		
調査原因	笹部川河川改修工事		
調査期間	平成21年7月1日～7月22日（C・D区） 平成21年9月8日～9月14日（E区） 平成21年12月7日～12月18日（F・G区）		
調査対象面積	223 m ²		
調査主体者	福島県南相馬市教育委員会	教育長	青木 紀男
担当調査員	川田 強 荒 淑人	佐川 久	
調査補助員	狭川 麻子		
整理補助員	牛渡由起子	松本 経子	渡部 定子
調査作業員	菅野 孝子	鞠子ナツイ	稲川 捷良 江井 新英 高倉 征一 田中 優 中島 真一

第2節 調査経過

平成21年（2009年）

7月1日（水）～7月4日（土） 1日に迂回路設置。2日に器材搬入。C・D区を設定し、重機による表土掘削、遺構検出を開始する。C・D区の遺構精査、写真撮影、図面作成等を行う。

7月6日（月）～7月10日（金） C・D区の遺構精査等を継続し、写真撮影、図面作成等を行う。10日に現地での記録作業は終了。

7月13日（月）～7月22日（水） 13日から重機を使用して、埋め戻し作業ならびに道路復旧作業を実施する。17日完了。22日に器材等を搬出し、C・D区の現地作業終了。

9月8日（火）～9月14日（月） 8日に器材搬入。E区を設定し、重機により表土掘削、遺構検出を開始する。9・10日にE区の遺構精査、写真撮影、図面作成等を行う。11日に重機を使用しての埋め戻し作業を実施する。14日に器材等を搬出し、E区の現地作業終了。

12月7日（月）～12月11日（金） 7日に器材搬入し、F区を設定し、重機により表土掘削、遺構検出を開始する。F区の遺構精査、写真撮影、図面作成を行う。11日に記録作業終了。

12月14日（月）～12月18日（金） 14日に重機を使用して、F区の一部埋め戻し作業を実施した上で、D区との空白部があることから、F区の北西部を拡張する。また、G区を設定し、表土掘削等を実施する。F区拡張部・G区の遺構精査等を行い、18日に記録作業は終了。埋め戻しは工事施工業者が工事の一環として行うこととし、同日器材を搬出し、発掘調査作業を終了した。

第3節 調査区の設定

笹部川改修事業関連発掘調査事業にかかる平成21年度の原町西町遺跡の本発掘調査区域は、平成20年度調査区に隣接する現道路部分にあたる。これらは平成20年度調査の結果から、現道路部分にも遺構等が分布する可能性が高く、かつ工事計画の変更が困難であることから、記録保存を図ることとしたものである。

平成21年度調査区は平成20年度調査のA区①北側道路ならびにA区①・②の間の道路部分にあたる。調査は現道路にあたるため、7月、9月、12月に分割して調査を行い、それぞれ調査区を設定した。7月の調査は、工事が実施されない部分を除き、2地区に分割した調査区を設置し、北東側をC区、南西側をD区と設定した。9月の調査区はD区の南西側にあたり、E区とした。12月の調査はD・E区間の未調査区をF区とし、平成21年度調査のA区①・②の間の道路部分に調査区を設定し、G区とした。

第4節 調査の概要

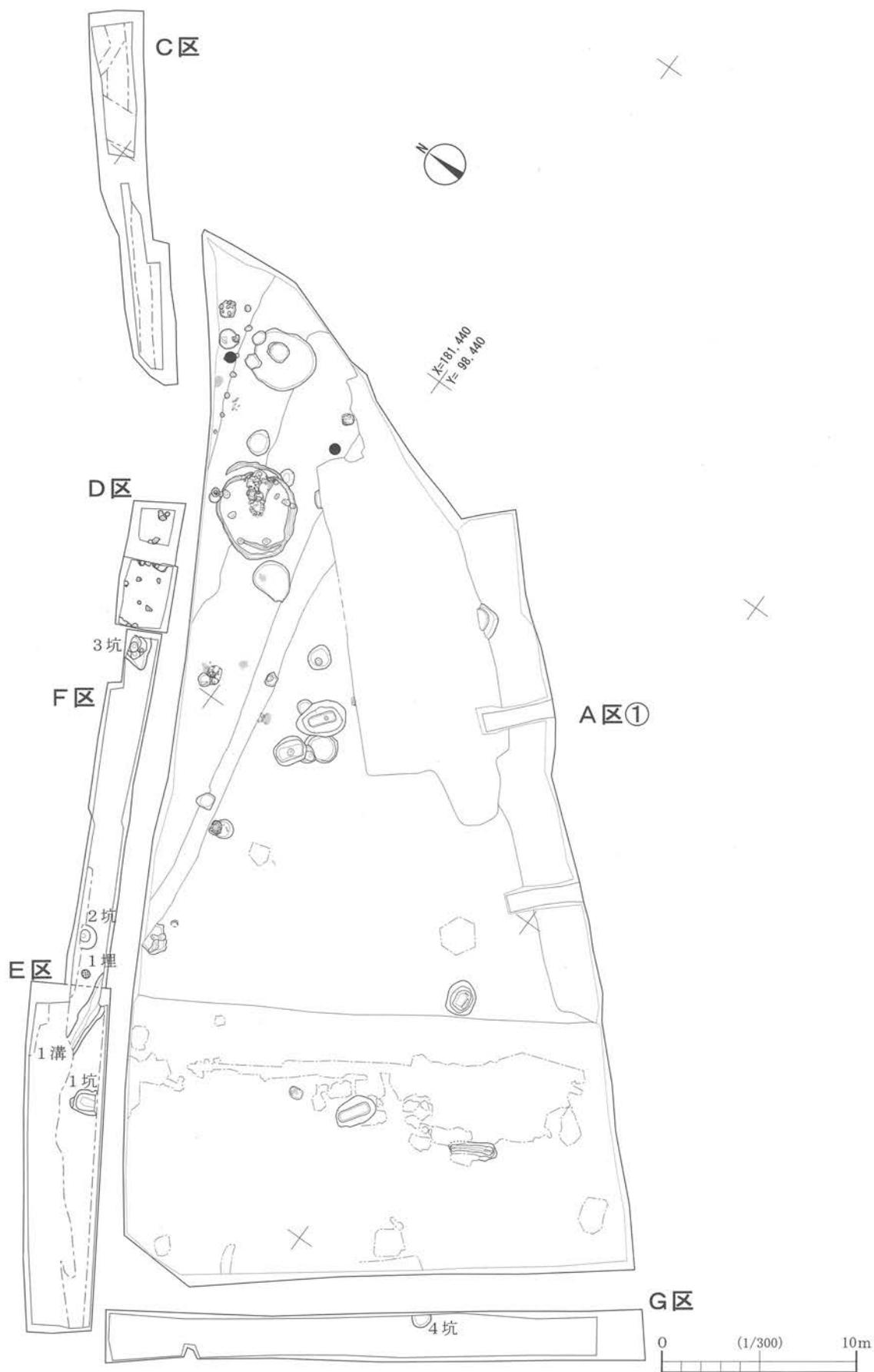
平成21年度調査は、開発区域のうち平成20年度に調査が実施できなかった現道路部分において、調査区を設定し調査を実施した。

これによりE・F・G区から、縄文時代の所産と考えられる土坑4基、D区から時期不明のピット12基、C区からは平成20年度調査A区①から続く縄文時代の遺物包含層1基、同じくE・F区からは近世以前の溝跡1条が検出された。

遺物は縄文土器、石器・石製品類、陶磁器が出土している。各遺物は平成20年度調査とほぼ共通するものである。縄文土器は縄文時代早期から晩期までの資料が出土しているが、後期後葉及び晩期中葉の土器が主体となる。石器・石製品類も縄文時代の所産と考えられる。

第5節 調査の方法

平成21年度の原町西町遺跡の本発掘調査は、調査時期から調査区を「C～G区」に分割して実施した。それぞれの調査は重機により、現道路の舗装除去ならびに表土掘削を行い、人力で遺構検出を行った。C～F区と平成20年度調査のA区①の間には水道管が埋設しているとみられること、G区とA区①の間には現道路も現在生活道路として利用されており、安全面の確保



第83図 平成21年度 遺構全体図

が困難であることから、調査区から除外した。また、F区の北側も水道管が埋設していることがE区の調査により確認されていたため、調査区から除外した。

遺構検出から遺構等の掘削・精査作業は、人力により層序を観察・確認しながら行った。遺構検出面はL6層（黄褐色土層）とした。出土遺物については、層位の観察に基づき分類して取り上げることに努めた。

図面作成作業は、遺構検出状況図及び遺構完掘状況図作成作業の作業効率向上を図るためトータルステーション（SOKKIA製 SET600S）を利用したデジタル実測ソフト（株式会社CUBIC製「遺構くんCubic」）を使用し、国土座標に基づき実施した。図面作成作業において器械点及び視準点として利用した国土座標値の一つは、X=181,449.244、Y=98,419.481（日本測地系）である。遺構等の土層断面図は、簡易遣り方測量により実施した。

遺構及び遺物の写真撮影は、遺構の状況や遺物の出土状態を記録するため、35mmカラーリバーサルフィルムおよび35mmモノクロフィルム、35mmカラーフィルム用い、デジタルカメラを補助的に使用して適宜写真撮影を実施した。

第6節 層序観察

平成21年度調査の調査区は平成20年度調査に隣接するため、基本的に平成20年度調査の層序観察に基づいて実施した。ただし、トレンチ状の調査区であり、すべてを対比させることが困難であるため、現道路構築層を含めた表土をLⅠとし、LⅠ除去後、地山のL6（黄褐色土）層上位にある層位をLⅡ、C地区で検出した遺物包含層をLⅢと大別した。

平成20年度調査における沢跡1や遺物包含層はC地区等の遺物包含層と一連のものであるが、層の対比は行わなかった。

第7節 資料整理

平成21年度に実施された本発掘調査による成果は、土坑4基、ピット12基、溝跡1条であり、縄文土器、石器・石製品の出土遺物がある。本発掘調査において記録した土層断面図等の図面記録（縮尺20分の1）は4枚である。平面図についてはすべてデジタルデータである。

遺構等の写真撮影は35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムのほか、適宜デジタルカメラを使用した。

出土品の整理は、狭川麻子、牛渡由起子、松本経子、渡部定子があたった。調査成果検討及び文章作成作業、報告書編成作業は川田が行った。

第2章 遺構各説

平成21年度における原町西町遺跡の本発掘調査は、現市道部分にあたる。工事の実施状況にあわせ、平成21年8月にC・D地区を実施し、同年9月にE地区、同年11・12月にF・G地区を実施した。この発掘調査により縄文時代の土坑4基、埋設土器1基、縄文時代以降のピット12基が検出された。また、平成20年度調査に確認された沢跡と中近世にあたる溝跡1条の延長部分も確認されている。本章ではこれらの遺構・遺物について詳述する。

第1節 土坑

土坑はE区より1基、F区より2基、G区より1基の合計4基が検出された。いずれの検出面もL6層（黄褐色土層）上面である。平成20年度調査では、縄文時代早期から前期の落とし穴と推定される土坑11基のほか、中期から晩期の貯蔵穴と推定される土坑5基、縄文時代後・晩期と推定される炉穴4基など、縄文時代を中心とした土坑計31基を検出している。

落とし穴とされるものは、A①・②区にわたって等高線に直行するように、ほぼ20m間隔で検出されている。また、焼土を伴うなど炉穴として機能したと推定される土坑は、堅穴住居や遺物包含層が堆積するA①区の北側を中心に分布している。

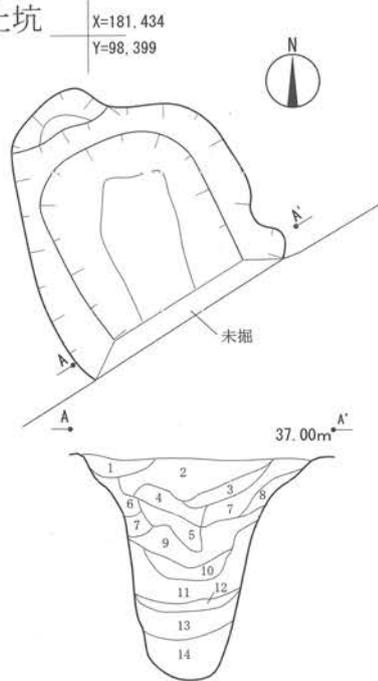
第1号土坑（第84図）

E区の第1号溝の南側から検出された。遺構の南側はA区①とE区の調査区区外となる。平面形態は検出部分では楕円形を呈するものの、長軸方向で141cm以上と大形の土坑であり、西側の調査区外に延伸するものとみられ、本来は長楕円形の土坑と推察される。壁は底面からほぼ垂直に立ちあがり、深さ110cm以上を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はほぼレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。遺物は覆土中より縄文土器9点が出土している。

本土坑は、A①区等で検出した縄文時代と推察された落とし穴と平面形・深さが類似するとともに、等高線に直行して構築されていることも一致することから、落とし穴として機能したと考えられる。また、出土土器は小破片であり、土器からの時期決定が難しいが、平成20年度調査の成果からすると、縄文時代前期以前の可能性が高い。

第2号土坑（第84図）F区の南端に位置し、第1号埋設土器の北側から検出された。遺構の北側は水道管理設時の攪乱に切られている。平面形態は確認範囲では円形を呈する。底面は平坦で、深さ90cm以上を測り、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが南側に一段のテラス状の段差が認められる。覆土は褐色基調で、レンズ状の堆積を示し、自然堆積と推察される。遺物は出土しなかった。本土坑は一部の検出に留まり全体を知りえないが、比較的深さを持ち、A①区等で検出した落とし穴とした土坑に覆土の特徴が類似することなどから、縄文時代前期以前の落とし穴の可能性が高い。

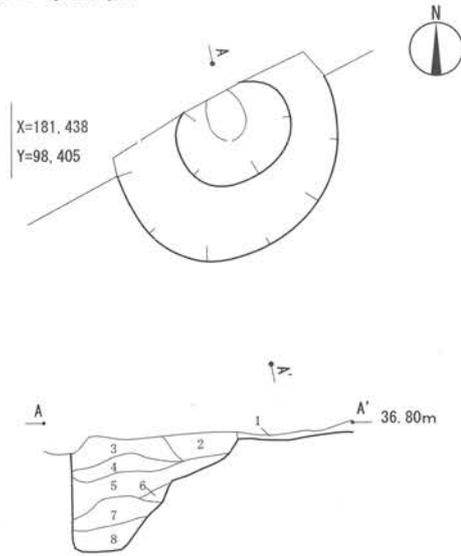
第1号土坑



第1号土坑土層注記

- 1 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量全体に含む ロームブロックまだらに少量含む
- 2 黒褐色土：粘性中 しまり中 小石、ローム粒少量全体に含む 炭化粒微量に含む
- 3 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒・ロームブロック少量全体に含む
- 4 黒色土：粘性やや弱 しまりやや弱 ローム粒少量全体に含む ロームブロック微量 炭化粒微量
- 5 黒色土：粘性やや弱 しまりやや弱 ローム粒・ロームブロック全体に含む 炭化粒微量
- 6 黄褐色土：粘性強 しまり強 ロームブロック主体 崩壊土
- 7 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒・ロームブロック多量
- 8 黄褐色土：粘性中 しまりやや強 ローム粒・ロームブロック主体
- 9 にぶい黄褐色土：粘性やや弱 しまりやや弱 ロームブロック主体
- 10 黒褐色土：粘性やや弱 しまりやや弱 ロームブロックまだらに少量含む
- 11 黄褐色土：粘性やや弱 しまりやや弱 ロームブロック主体
- 12 黒褐色土：粘性中 しまり弱 ロームブロック微量まだらに含む
- 13 黄褐色土：粘性中 しまり弱 シルト質土 ロームシルトブロック
- 14 灰褐色土：粘性中 しまり弱 シルト質土 ロームシルトブロック

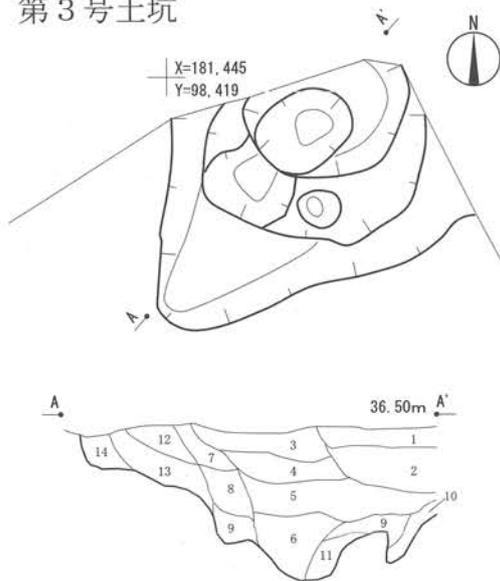
第2号土坑



第2号土坑土層注記

- 1 黒色土：粘性弱 しまり弱
- 2 褐色土：粘性中 しまり中 部分的に黄色土ブロック (φ1cm) 少量
- 3 暗褐色土：粘性中 しまり中 全体に暗褐色土、黄色土粒 炭化粒微量
- 4 黒褐色土：粘性弱 しまり弱 部分的に黄褐色粒微量
- 5 暗褐色土：粘性中 しまり弱 部分的に褐色土微量
- 6 褐色土：粘性中 しまり中 地山ブロック主体
- 7 黒褐色土：粘性弱 しまり弱 部分的に黄色土粒多量
- 8 黒褐色土：粘性弱 しまり弱

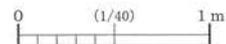
第3号土坑



第3号土坑土層説明

- 1 黒褐色土：粘性中 しまり弱 ローム粒全体の少量含む 炭化粒所々に少量 ロームブロック (φ1cm) 微量
- 2 黒褐色土：粘性中 しまり弱 ローム粒全体の多量 炭化粒微量 ロームブロック (φ1cm) 全体的に少量
- 3 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒微量 ロームブロックφ0.5cm 微量 炭化粒全体的に少量 土器少量 礫 (φ0.5cm) 少量
- 4 黒色土：粘性中 しまり中 ローム粒微量 ロームブロックφ0.5cm 微量 土器集中的に含む 炭化粒所々に微量
- 5 黒褐色土：粘性強 しまり中 ローム粒極微量 ロームブロックφ2~7cm 所々に含む 土器少ない 炭化粒所々に微量
- 6 黒色土：粘性強 しまり中 ローム粒微量 炭化粒所々に微量
- 7 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒全体の少量 ロームブロック (φ0.5cm) 微量 炭化粒微量
- 8 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒全体の少量 ロームブロック (φ2~3cm) 少量
- 9 黒褐色土：粘性中 しまり弱 ローム粒全体の少量 ロームブロック (φ2~3cm) 多量
- 10 黒色土：粘性弱 しまり弱 ローム粒全体の少量 ロームブロック (φ1cm) 微量
- 11 黄褐色土シルト：粘性中 しまり弱 ロームシルトブロック (φ5cm) 主体
- 12 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒極微量 ロームブロック (φ0.5cm) 所々に少量
- 13 褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒微量 ロームブロック (φ2~3cm) 全体的に少量
- 14 黒褐色土：粘性弱 しまり弱 ローム粒多量 ロームブロック (φ2~5cm) 全体的に少量

第84図 第1~3号土坑



第4号土坑



第85図 第4号土坑

第30表 原町西町遺跡 (第3次調査) 土坑一覧

遺構	検出地点	平面形態	長軸	短軸	底面標高	壁 高 (cm)				長軸方向	重複関係	備 考
						東壁	西壁	南壁	北壁			
1坑	E区 L6上面	楕円形	1.41~	1.24	35.624	111	111	-	124	N32° W		
2坑	F区 L6上面	円形	1.29	0.81~	35.820	92	94	88	-	N59° E		
3坑	F区 L6上面	不整形円形	1.88~	1.68~	35.480	94	-	99	-	N35° E		
4坑	G区 L6上面	円形	0.98	0.62~	37.004	19	-	15	4	N38° W		

第3号土坑 (第84図)

F区の北端で確認した。遺構の北側はD区とF区の調査区外となる。平面形態は不整形円形を呈し、長軸方向で188cm以上を測る大形の土坑である。深さは90cm以上を測り、底面はピット状に掘りこまれている。覆土は黒褐色・暗褐色を基調とし、堆積の傾斜から、1・2層、3~6層、7~11層、12~14層と層のまとまりが観察できる。これらは底面の凹凸と一致しており、遺構が埋没後、再掘削が行われたと推察される。遺物は縄文時代中期から晩期の土器が出土しているが、羽状縄文を施文するものが多く、縄文時代晩期に埋没したものと考えられる。

本土坑は、縄文時代後・晩期の所産とされるA①期の土坑に比し、深い遺構である特徴を持ち、堆積状況などから柱穴として機能した可能性がある。

第4号土坑 (第85図)

G区から検出された。遺構の北側はA①区・G区の調査区外となる。平面形態は円形を呈する。径90cmを測るが北西側は後世の攪乱 (1層) により、大きく切られている。深さは20cm以下と浅く、底面は舟底状を呈する。覆土は褐色基調であり、自然堆積を示す。遺物は4層中より、縄文時代中・後期の土器片が1点出土したのみである。

本土坑の機能は不明であるが、覆土の特徴や出土遺物から縄文時代後期以前の所産と考えられる。

第2節 埋設土器

第1号埋設土器 (第83図)

F区西端から検出された。第2号土坑の西側、第1号溝跡の北側に位置する。掘り方は確認されなかったが、横位の口縁部破片の下位に胴部が斜位の状態で確認できる。埋置された土器(第90図11・12)は口縁と胴部では接合しなかったが、器高40cm以上を測る大形の深鉢である。胴部内面には炭化付着物が明瞭に残る。

第3節 ピット群

ピットはD区から13基確認された(第86図)。P3～7・10は黒色土を基調とし、しまりも弱く木の根痕と推定される。縄文時代後・晩期に比定される土器がP3からは3点、P10からは12点出土しているが、流れ込みの可能性が高い。暗褐色・黄褐色を基調とするその他のピットは、覆土の特徴から縄文時代の所産の可能性はあるが、深さが30cmを越えるものはなく、人為的なものであるかどうかは定かではない。P2からは2点の縄文土器が出土しているが、その他のピットからは遺物は出土していない。

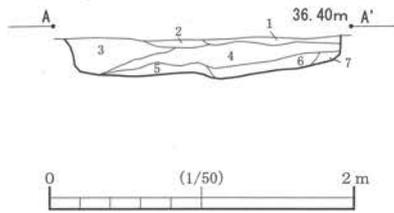
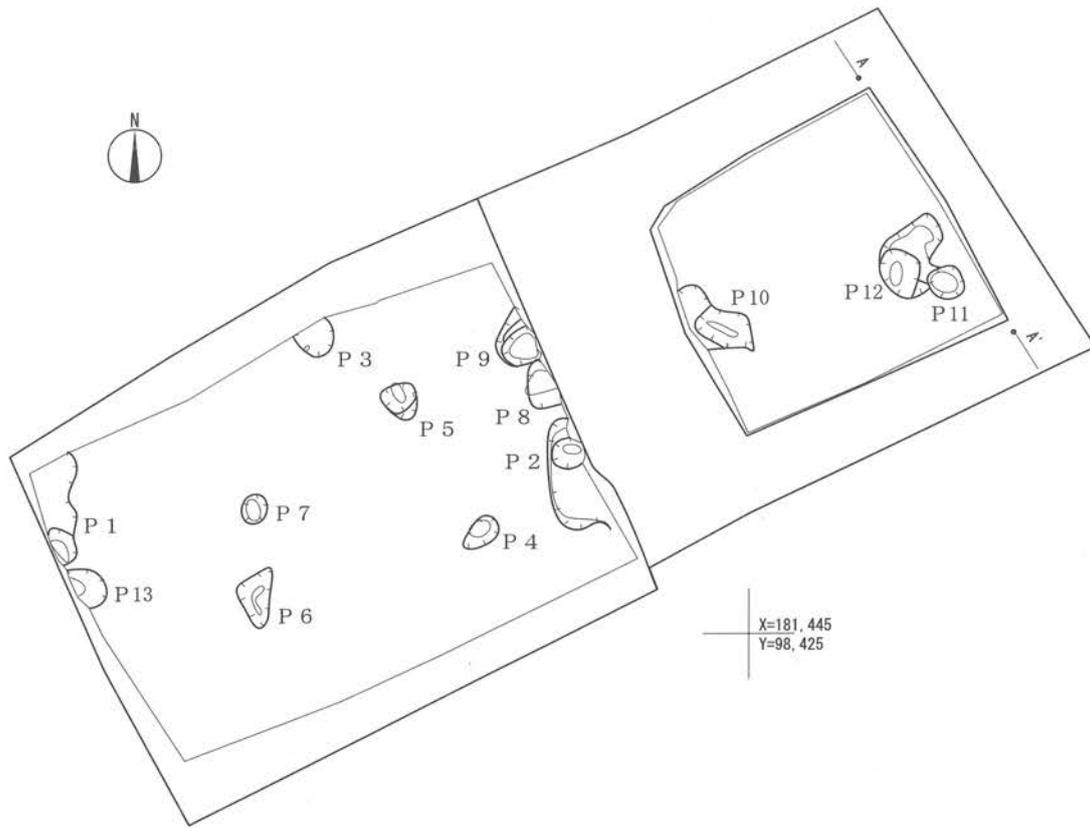
また、D区の南西側は平成20年度調査では縄文時代から弥生時代にかけて埋没したと考えられる沢跡1が確認されており、底面は標高36m前後を測る。D区のL6の標高は36.0～36.3mを測り、北東に向かって緩く傾斜するが、沢状の落ち込みは確認することができなかった。このことから、D区より東側に沢の上端が回ると推定され、D区で確認したピット群は、沢跡1と重複しないと考えられる。D区L6上面には黒褐色・暗褐色を基調とする土が堆積しており、1～3層で301点、4層で30点、5～7層で17点と比較的上層から多くの縄文土器が出土している。4層からまとまって半完形の第91図10、第93図3が出土しているが、流れ込みの可能性が高く、堆積時期を示すものではないと考えられる。

第4節 溝跡

E・F区でA区①で検出された溝跡の延長が確認されている(第89図)。A①区では、近代の土手1積土を除去した後に検出されており、遺物包含層L3層上面から掘り込まれている。

E・F区では約4mの長さを測り、A区①とあわせると約30m以上の溝跡であることが確認された。確認された上幅は約1m、下幅は0.16～0.35mを測り、覆土は黒色土を基調と自然堆積を示す。断面「V」字状を呈することなどA区①の検出状況と共通している。深さは約40cmを測り、A区①に比較するとやや浅いが、検出面が低いことが関係していると考えられる。

本溝跡からは縄文時代中～晩期に比定される縄文土器が少量出土した。A区①では、陶器が1点出土している。重複関係を含め、本溝跡は近世以前に機能していた溝跡と推測されるが、性格や機能した時期の詳細は不明である。



D地区土層注記

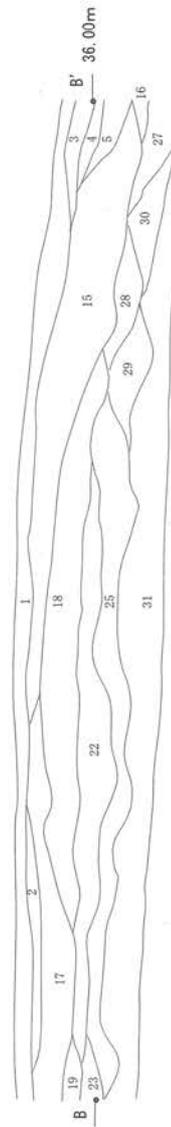
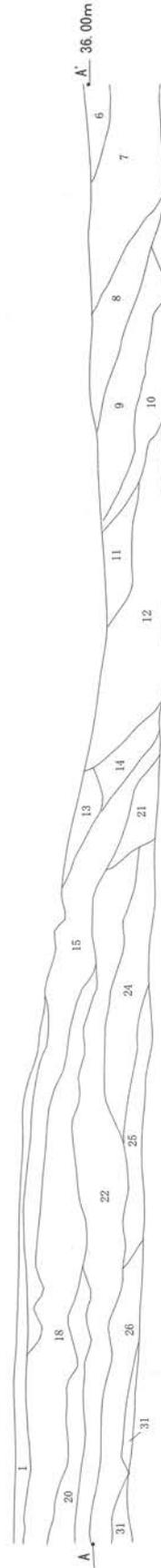
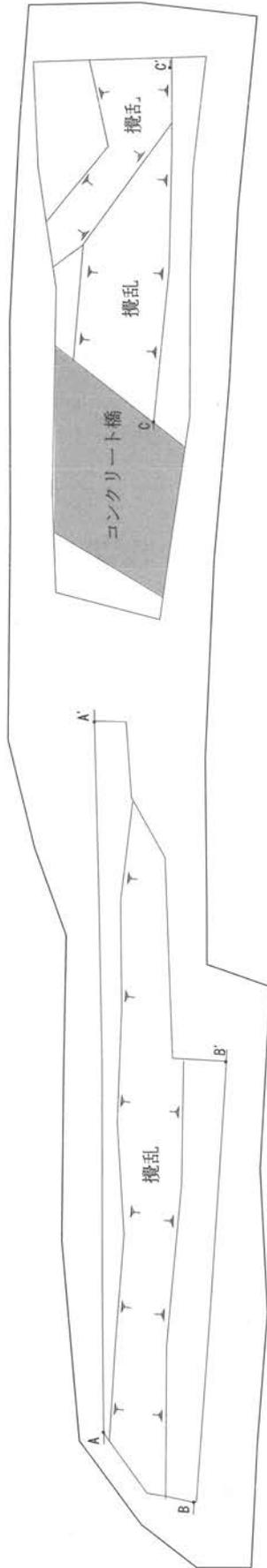
- 1 黒色土：粘性中 しまり弱 ローム粒少量
- 2 暗褐色土：粘性中 しまり弱 ローム粒少量 ロームブロック少量
- 3 暗褐色土：粘性中 しまり強 ローム粒少量 ロームブロック微量 土器少量
- 4 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 炭化粒少量 焼土粒微量 土器中量
- 5 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒極多量 ロームブロック極多量 土器微量
- 6 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 炭化粒少量 土器微量
- 7 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒極多量 ロームブロック極多量 土器微量

第86図 D区

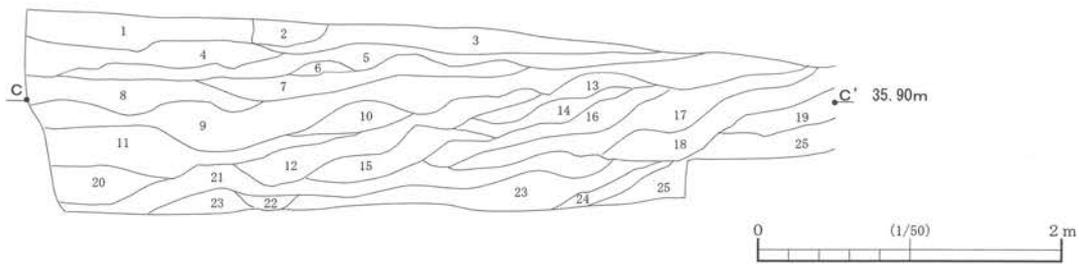
第31表 原町西町遺跡 ピット一覧

遺構	検出地点	平面形態	規模 (cm)			備考	遺構	検出地点	平面形態	規模 (cm)			備考
			長径	短径	深さ					長径	短径	深さ	
1	D区 L6層	楕円形	22	14~	32	暗褐色土	8	D区 L6層	不整形	27	19~	18	暗褐色土
2	D区 L6層	楕円形	22	18	22	暗褐色土	9	D区 L6層	楕円形	38~	27	13	暗褐色土
3	D区 L6層	楕円形	20~	24	40	黒色土	10	D区 L6層	不整形	45~	32	40	黒色土
4	D区 L6層	不整形	26	17	13	黒色土	11	D区 L6層	楕円形	28	24	30	暗褐色土
5	D区 L6層	不整形	27	23	22	黒色土	12	D区 L6層	不整形	54	42	27	暗褐色土
6	D区 L6層	不整形	32	23	14	黒色土 木根か?	13	D区 L6層	楕円形	30~	28	16	黄褐色土
7	D区 L6層	円形	17	15	17	黒色土							

Ks. 101, 460
Y. 98, 435



第87図 C区<1>



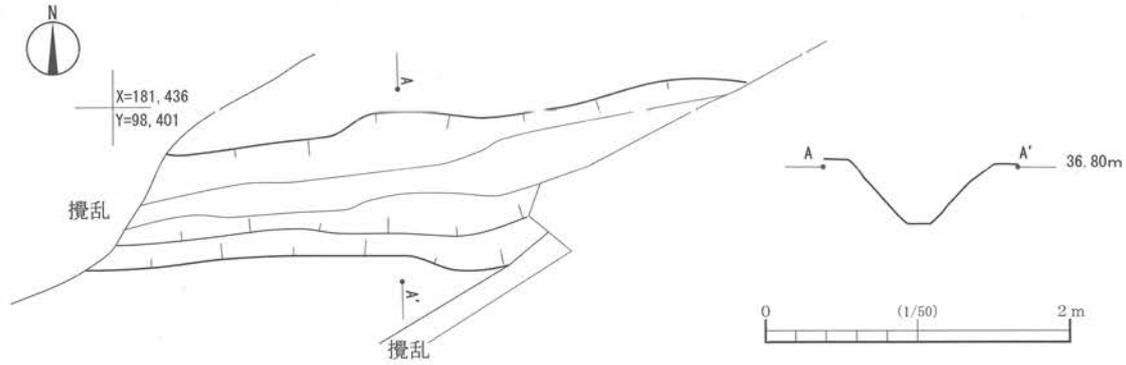
C地区土層注記 (A-A' B-B')

- 1 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 土器少量 黒色ブロック (φ1~3cm) 多量
- 2 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 炭化粒少量 焼土粒微量 土器少量
- 3 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 黒色土ブロック (φ3~5cm) 多量 1層より明るい
- 4 黒色土：粘性中 しまり弱 ローム粒少量 炭化粒微量
- 5 黒褐色土：粘性中 しまり弱 ローム粒少量
- 6 黒色土：粘性中 しまり中 ローム粒中量 ロームブロック中量
- 7 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 小礫中量含む
- 8 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 黒色ブロック (φ1~3cm) 中量 7層より暗い
- 9 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 黒色ブロック (φ3~5cm) 中量 8層より暗い
- 10 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 ロームブロック少量 黒色土と互層状に堆積
- 11 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック多量 黒色ブロック (φ1~3cm) 極多量 10層より明るい
- 12 黒色土：粘性中 しまり中 ローム粒中量 ロームブロック中量 黒色ブロック (φ1~3cm) 極多量
- 13 黒色土：粘性中 しまり中 ローム粒中量 黒色ブロック (φ1~3cm) 少量 12層より暗い
- 14 黒色土：粘性中 しまり中 ローム粒微量 黒色ブロック (φ1cm) 少量 13層より暗い
- 15 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 ロームブロック少量 炭化粒少量 焼土粒微量 (φ5~10cm) 極多量 灰白色砂質土 (φ3~5cm) 多量
- 16 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 小石少量
- 17 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 土器少量 黒色土ブロック (φ1~3cm) 少量
- 18 黒色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 炭化粒少量 焼土粒微量 土器多量 小礫少量
- 19 黒色土：粘性中 しまり中 焼土粒微量 土器多量
- 20 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 ロームブロック微量 炭化粒少量 土器多量
- 21 黒褐色土：粘性中 しまり中 小礫少量 暗褐色に近い
- 22 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック中量 炭化粒少量 焼土粒微量 土器中量 黒褐色に近い
- 23 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 ロームブロック少量 焼土粒微量 土器少量
- 24 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒微量 炭化粒微量
- 25 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒微量 炭化粒微量 黄白色粘土ブロック (φ3~5cm) 多量
- 26 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 ロームブロック少量 土器中量 黄白色粘土ブロック (φ3~5cm) 多量 25層より明るい
- 27 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒微量 ロームブロック微量 黄白色粘土ブロック
- 28 暗褐色土：粘性中 しまり中 黄白色粘土ブロック (φ1cm) 微量
- 29 暗褐色土：粘性中 しまり中 黄白色粘土ブロック中量 26, 27層より明るい
- 30 暗褐色土：粘性中 しまり中 黄白色粘土ブロック (φ5cm) 多量 27層より明るい
- 31 黄白色粘土：地山

C地区土層注記 (C-C')

- 1 黄褐色粘土：粘性強 しまり強
- 2 黒灰色粘土：粘性中 しまり中 礫φ5~8cm 多量 黄褐色粘土粒少量
- 3 黒灰色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土ブロック多量 礫φ3~5cm 少量
- 4 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土ブロック少量 黄褐色粘土粒微量
- 5 黄褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土ブロック主体 黒褐色粘土ブロック少量
- 6 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土粒極微量
- 7 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土ブロック少量 黄白色粘土粒微量
- 8 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土ブロック微量 黄白色粘土粒少量
- 9 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土ブロックまだらに少量 黄褐色粘土粒多量
- 10 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土粒微量
- 11 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 黄白色粘土ブロック微量 黄褐色粘土粒少量 礫φ3~5cm 微量
- 12 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 褐灰色粘土ブロック少量 小礫φ1cm 微量
- 13 黒色土：粘性中 しまり中 有機質含む 小礫径1cm 微量
- 14 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 礫φ3~5cm まばらに含む
- 15 暗褐色土：粘性強 しまり強 褐灰色粘土ブロック微量 マンガン沈着物微量
- 16 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 礫φ3~5cm 微量
- 17 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒多量 ロームブロック少量
- 18 黒褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒・ロームブロック多量
- 19 暗褐色土：粘性中 しまり中 ローム粒少量 ロームブロック微量
- 20 黒色粘土：粘性強 しまり強 褐灰色粘土ブロック微量 褐灰白粘土粒微量
- 21 暗褐色粘土：粘性強 しまり強 マンガン沈着多い 砂微量
- 22 緑灰色砂：粘性弱 しまり弱
- 23 黒色粘土：粘性強 しまり強 褐白色粘土ブロック微量
- 24 褐白色粘土：粘性強 しまり強 褐白色粘土ブロック主体
- 25 黒褐色粘土：粘性強 しまり強 マンガン沈着微量

第88図 C区 (2)



第89図 第1号溝跡

第5節 遺物包含層

C区は平成21年度調査A区①の北東に位置する。A区①では調査区北東端に北側に傾斜する沢跡1、沢跡1の上位に第3号竪穴遺構が確認されている。第3号竪穴遺構はC区の調査では認められなかった。沢跡1は縄文時代中期後半の竪穴住居より新しいことと出土遺物の検討から、縄文時代後・晩期から弥生時代にかけて埋没した可能性が高い。

C区では、調査区中央に水道管による攪乱があり、一部の確認に留まったが、沢跡1が確認された南側から傾斜する遺物包含層が確認された(第87・88図)。C区の中央よりやや東側にはコンクリート橋があり、付近住民からの聞き取り調査によると、コンクリート橋の下に小川が流れていたとのことから、コンクリート橋が確認された地点の南側に湧水があり、北側に流れていたものと考えられる。C区の調査区断面の土層では、コンクリート橋に向かって傾斜した堆積状況が確認されており、このことを裏付けることができる。南側で確認された31層(A-A'、

B-B')は黄白色粘土であり、地山と考えられる。これより北側は調査区が狭く、安全面に問題があることから、谷底までの調査を行うことはできなかった。

コンクリート橋の南側では2,057点と比較的多くの縄文土器が出土した。弥生時代以降の遺物は出土しなかった。出土土器は網目状捺糸文や無文の土器など後・晩期の粗製土器が多く、縄文時代後・晩期を中心とした遺物包含層と位置づけられる。特に17～20層とした南西側の中層に土器が集中しており、あわせて18層から25層には炭化粒や焼土粒が含まれており、人為的影響が強いことも見て取ることができ、A区①の北東部で確認された炉跡や焼土跡と関連する遺物包含層であることが推察される。また、15層より土器出土量が激減することから、15層より上位は縄文時代より新しい堆積である可能性が高い。

コンクリート橋より北側では南側に比較し、より粘質の強い土層であり、礫も全体的に含むことから、流水の影響が強い堆積状況といえる。縄文土器も含めて遺物はほとんど出土せず、縄文時代より新しい堆積と考えられる。

第3章 遺物各説

出土遺物は、縄文時代早期から晩期までの縄文土器が多く、少量の石器・石製品がある。主にC区遺物包含層からの出土であり、D区でも少量出土しているが、E～G区ではごく少量の出土に留まる。出土遺物は平成20年度調査とほぼ共通するため、第1編の分類に基づき記載する。縄文土器は遺構内出土と遺物包含層等の遺構外出土土器に分けて述べることとする。

第1節 遺構内出土縄文土器

第1号土坑（第90図1・2）

1は早期に比定される第I群土器である。小破片であるが、隆起線文が認められる薄手の土器で、野島・槻木下式と考えられる。2は刷毛目状条痕文を残す粗製土器である。

第3号土坑（第90図3～7）

3～6は縄文を施す粗製土器である。3～5は羽状縄文、6は単斜縄文を施す。いずれも節は小さく、横位に施文される。7は大木9式に比定される。縦位施文の縄文地に2条単位の隆帯が施される。

第4号土坑（第90図8）

8は縄文を施す粗製土器である。器壁が厚く、節が大きいことから縄文中・後期の所産と考えられる。

ピット10（第90図9・10）

9は網目状撚糸文、10は斜位の櫛描条痕文が施される粗製土器である。

第1号埋設土器（第90図11・12）

11・12は同一個体であるが、接合しなかった。器高40cm以上を測る大形の深鉢で、やや内湾気味に立ち上がる。口唇の内外面に刻目が施され、口縁外面に平行沈線文、胴部には弧文状の櫛描条痕文が施される。後期後半の所産と考えられる。

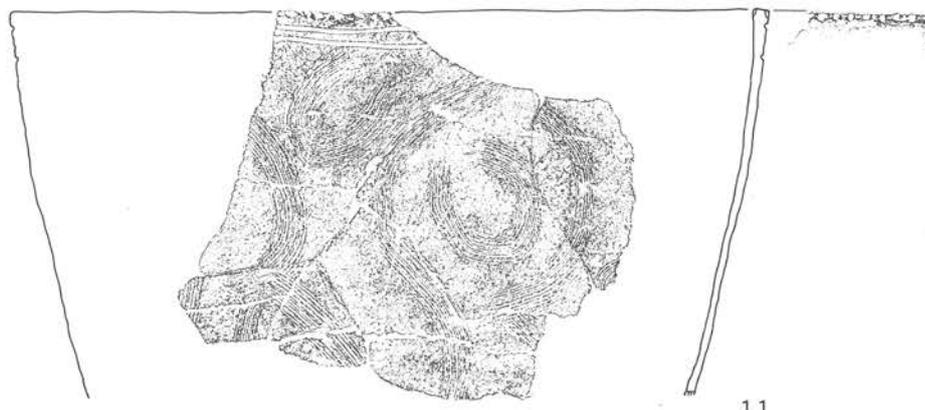
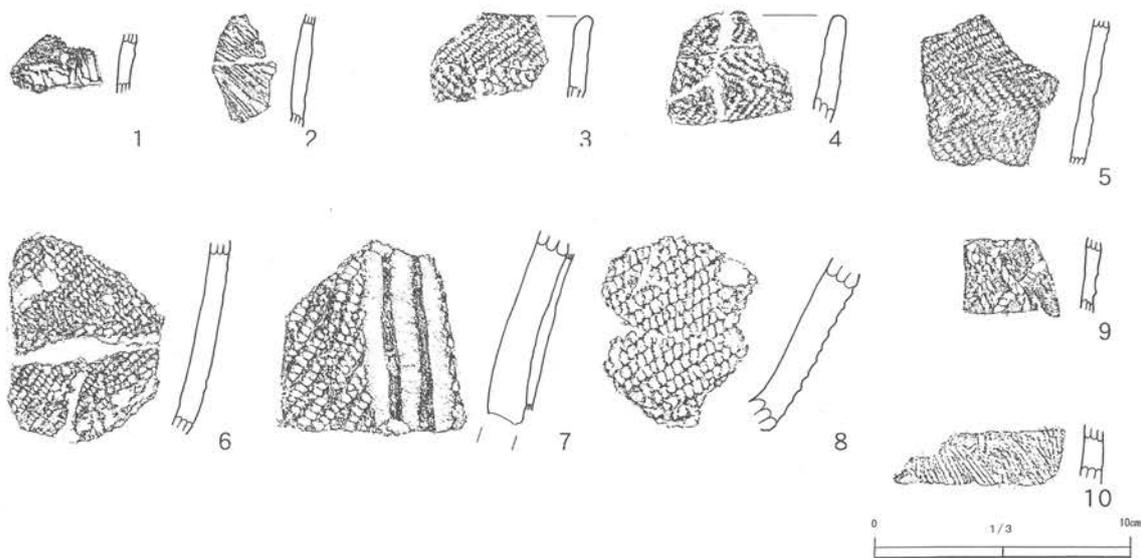
第2節 遺構外出土縄文土器

第II群土器

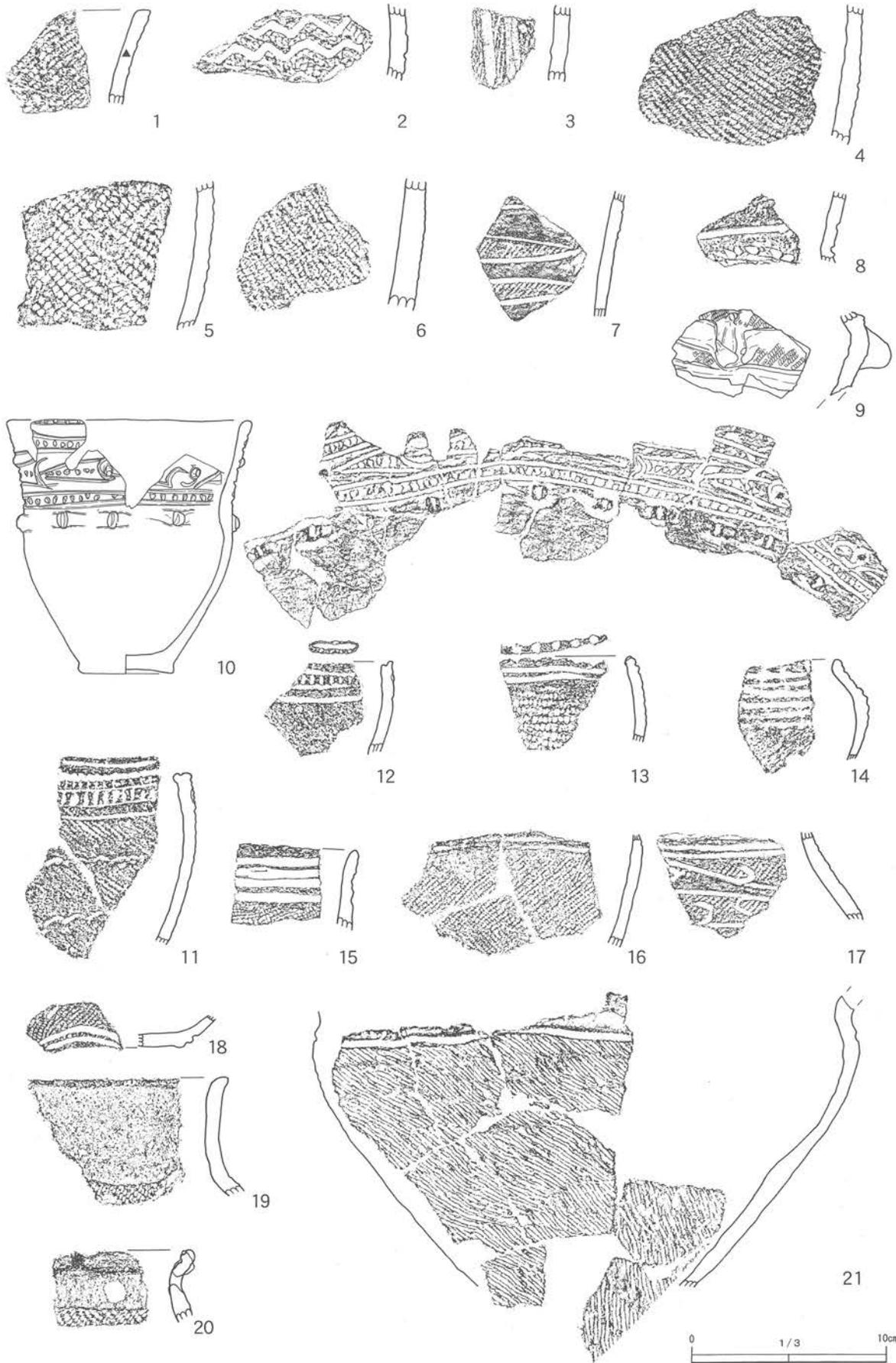
縄文時代前期に比定される。いずれも破片資料である（第91図1・2）。

1は胎土に繊維を含み、LR縄文が横位に施文される。口唇は内そぎ状となり、平坦化している。前期前半の所産と考えられる。2は横位LR縄文地に3条以上の山形単沈線が施される胴部破片である。球胴状の器形と考えられ、大木6式に相当する。

第2節 遺構外出土繩文土器

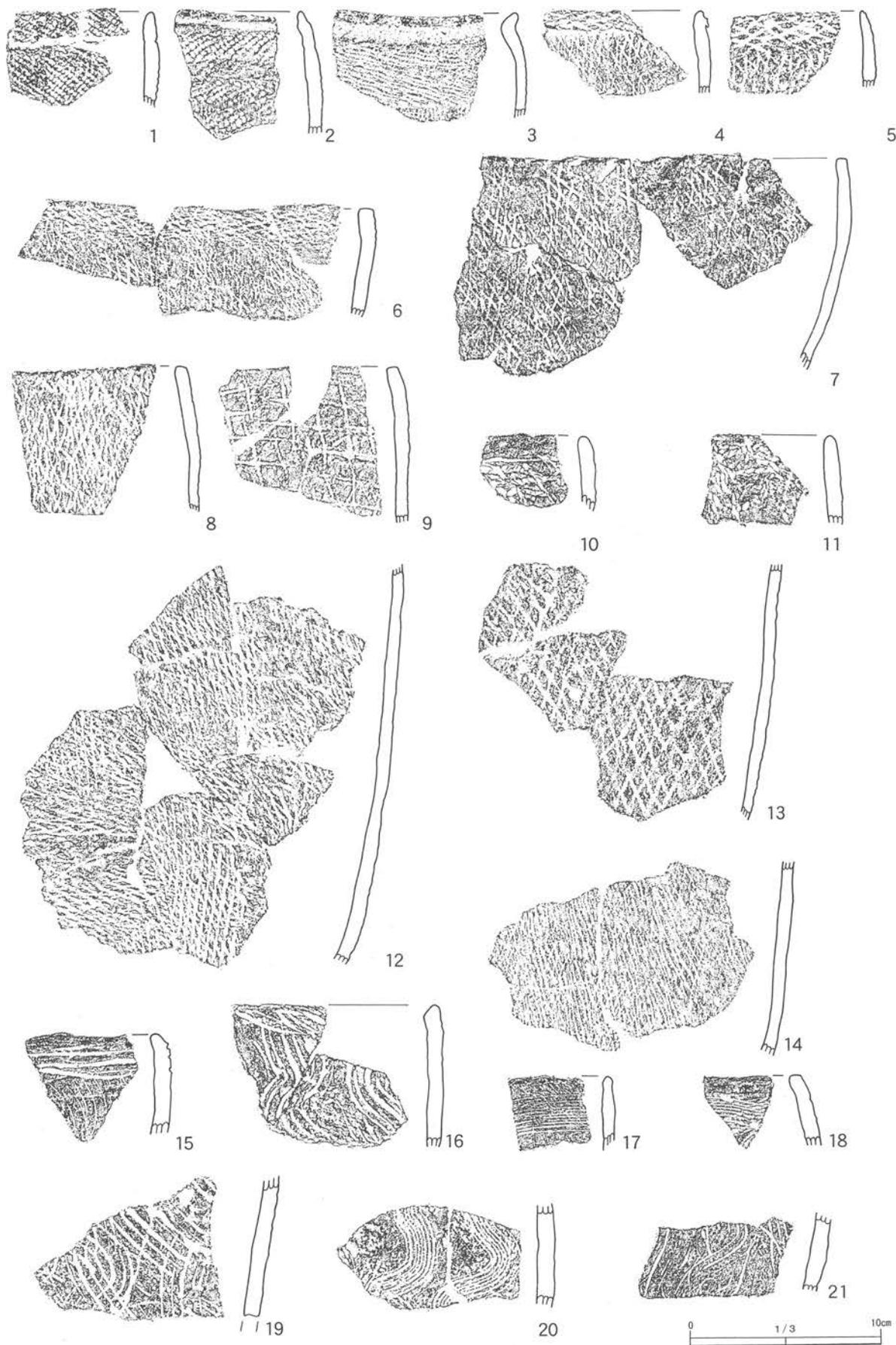


第90図 縄文土器 (35)

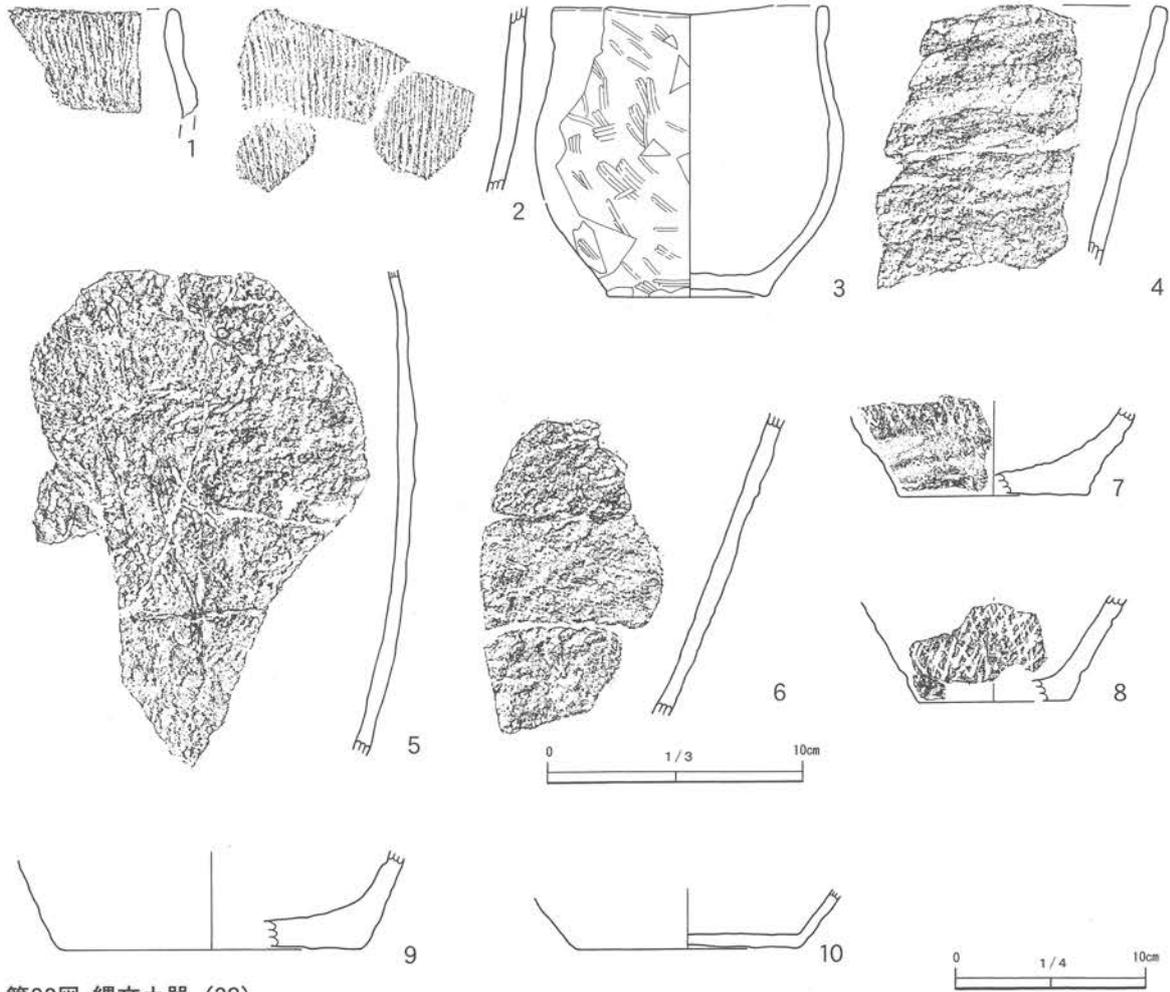


0 1/3 10cm

第91図 縄文土器 (36)



第92図 縄文土器 (37)



第93図 縄文土器 (38)

第Ⅲ・Ⅳ群土器

縄文時代中期～後期前半に比定される。いずれも破片資料である (第91図3～6)。

3は縦位に隆帯と沈線が施される。大木9式に相当する。4～6は縦位に縄文を施文し、比較的器壁の厚さがある深鉢である。中期～後期前半に相当すると考えられる。

第Ⅴ・Ⅶ群土器

縄文時代後期後半に比定される土器群である (第91図7～10)。

7は入組文の区画内に縄文、8は沈線区画内に刺突を充填する頸部破片である。10は小形の鉢である。胴部が張り出し、頸部で緩やかにくびれ、直線的に立ち上がる器形である。口唇に外方からの刻目を施す。頸部文様は刻目を充填した平行沈線帯で上下を区画し、区画内に丸コブを基点とした入組文を施し、刻目を充填する。胴部上位には縦割りのつまみ上げコブが貼り付けられている。

9は注口土器である。沈線区画内に縄文と丸コブを施し、縦割りの大コブが付加される胴部破片である。

第32表 出土遺物（縄文土器）一覧（15）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
90・1	第1号土坑	深鉢	口：隆起線文？	縄文早期	
90・2	第1号土坑	深鉢	胴：刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	
90・3	第3号土坑1～4層	深鉢	平縁。口：羽状縄文。	縄文後・晩期	
90・4	第3号土坑5～6層	深鉢	平縁。口一胴：羽状縄文。	縄文後・晩期	
90・5	第3号土坑1～4層	深鉢	胴：羽状縄文。	縄文後・晩期	
90・6	第3号土坑1～4層	深鉢	胴：縄文。	縄文後・晩期	
90・7	第3号土坑1～4層	深鉢	胴：隆帯文+縄文。	縄文中期後半	
90・8	第4号土坑	深鉢	胴：縄文。	縄文中・後期	
90・9	D区P10	深鉢	胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
90・10	D区P10	深鉢	胴：櫛描条痕文	縄文後・晩期	
90・11	F区第1号埋設土器	深鉢	刻目平縁。口：横位櫛描条痕文。胴：弧文状櫛描条痕文。	縄文後期後半	
90・12	F区第1号埋設土器	深鉢	90・11と同一個体。	縄文後期後半	
91・1	E区LⅡ	深鉢	口：外面縄文。内面ナデ。胎土に繊維含む。	縄文前期	
91・2	C区南18層	深鉢	胴：縄文+山形沈線文。	縄文前期後半	
91・3	D区1～3層	深鉢	胴：隆帯+沈線文。	縄文中期後半	
91・4	C区南18・19層	深鉢	胴：縄文。	縄文中・後期	
91・5	C区南18・19層	深鉢	胴：縄文。	縄文中・後期	
91・6	C区南1～14層	深鉢	胴：縄文。	縄文中・後期	
91・7	E区LⅠ	深鉢	胴：入組文+縄文。	縄文後期後半	
91・8	C区南20層	深鉢	胴：沈線+充填刻目文。	縄文後期後半	
91・9	E区Ⅰ層	注口	胴：縦割コブ+丸コブ+沈線+縄文。	縄文後期後半	
91・10	D区4層	鉢	刻目平縁。口：入組带状文+充填刻目文+コブ。	縄文後期後半	
91・11	C区南21層	深鉢	平縁。口：平行沈線+連続刺突文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・12	C区南22～24層	深鉢	平縁。口：平行沈線+連続刺突文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・13	C区南18層	深鉢	刻目平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・14	C区南18・19層	深鉢	平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・15	C区南17層	深鉢	平縁。口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・16	C区南22～24層	深鉢	口：平行沈線文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・17	C区南18・19層	注口or壺	頸：雲形文+縄文。	縄文晩期中葉	
91・18	C区南20層	浅鉢	底部。体：縄文。底：平行沈線文。	縄文晩期中葉	
91・19	C区南18・19層	壺	平縁。口：無文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・20	C区南18・19層	壺	小波状口縁。口：無文。胴：縄文。	縄文晩期	
91・21	C区南18・19層	壺	頸：沈線文。胴：縄文。	縄文晩期	
92・1	C区南18層	深鉢	平縁。口一胴：縄文。	縄文後・晩期	
92・2	C区南18層	深鉢	平縁。口一胴：縄文。	縄文後・晩期	
92・3	C区南18・19層	深鉢	平縁。口：無文。胴：擦糸文。	縄文後・晩期	
92・4	D区1～3層	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・5	C区南18・19層	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・6	C区南18・19層	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・7	E区LⅡ	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・8	C区南18・19層	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・9	C区南18・19層	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・10	E区LⅠ	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・11	C区南18・19層	深鉢	平縁。口一胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・12	C区南18・19層	深鉢	胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	
92・13	C区南18・19層	深鉢	胴：網目状擦糸文。	縄文後・晩期	

第33表 出土遺物（縄文土器）一覧（16）

図番号	出土地点	器種	主な文様	時期	備考
92・14	C区南21層	深鉢	胴：撚糸文。	縄文後・晩期	
92・15	C区南28～30層	深鉢	口：平行沈線文。胴：櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
92・16	C区南18・19層	深鉢	口－胴：流水文状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
92・17	C区南25・26層	深鉢	口：横位櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
92・18	D区1～3層	深鉢	口：横位櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
92・19	C区南18・19層	深鉢	胴：流水文状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
92・20	D区1～3層	深鉢	胴：流水文状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
92・21	C区南26層	深鉢	胴：流水文状櫛描条痕文。	縄文後・晩期	
93・1	D区4層	鉢	平縁。口：刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	
93・2	C区南18・19層	深鉢	胴：刷毛目状条痕文。	縄文後・晩期	
93・3	D区4層	鉢	口－体：無文（ミガキ）。底：ナデ。	縄文後・晩期	
93・4	D区4層	深鉢	口－胴：無文。	縄文後・晩期	93・6と同一。
93・5	C区南21層	深鉢	胴：無文（ミガキ）。	縄文後・晩期	
93・6	D区4層	深鉢	胴：無文。	縄文後・晩期	93・4と同一。
93・7	C区南18・19層	深鉢	底部。体：網目状撚糸文。底：ナデ。	縄文後・晩期	
93・8	C区南18・19層	深鉢	底部。体：網目状撚糸文。底：ナデ。	縄文後・晩期	
93・9	C区南18・19層	深鉢	底部。体－底：ナデ。	縄文後・晩期	
93・10	C区南18・19層	深鉢	底部。体－底：ナデ。	縄文後・晩期	

IX 群 土 器

縄文時代晩期中葉に比定される土器である（第91図17・18）。

17は壺または注口土器である。頸部破片で雲形文を施す。大洞 C₂ 式期に相当する。18は浅鉢で体部下半に縄文、下端に平行沈線が施文される。

第 X 群 土 器

縄文時代晩期の半精製土器をまとめた（第91図11～16、19～21）。

11～16は口縁に平行沈線が施されるものである。11・12は内湾気味に立ち上がり、平行沈線間に連続刺突文を施す。口唇には1条の沈線を施す。13も同様の器形であり、口縁にも刻目が施される。14は口縁が内屈する器形を呈し、平行沈線が多段化する。15は直線的に立ち上がる器形で平行沈線が多段化し、なぞり調整が加えられる。

19・20は鉢または壺形土器である。口縁は無文で胴部以下に縄文が施される。21は鉢である。口縁は無文で、頸部を沈線区画し、胴部には無節R縄文が施される。底部に向かって直線的にすばまる器形が特徴的である。

第 XII 群 土 器

縄文時代後期後半から晩期にかけての粗製土器である（第92・93図）。

1 類 無文土器を一括する（第93図3～6）。3は胴部が膨らみ頸部が緩やかにくびれる

小形の鉢である。外面はミガキ調性が認められ、口縁が肥高する。4・6は同一個体で直線的に立ち上がる器形を呈する。5は胴部が内湾する器形で、粗いミガキが施されている。

2 類 縄文が主体となる土器である（第92図1・2）。

3 類 櫛描条痕文が施される土器である（第92図15～21）。

口縁部に横位櫛描条痕文、胴部に縦位波状櫛描条痕文が施されるもの（15・16）、口縁部に横位櫛描条痕文（17・18）、縦位波状櫛描条痕文が施されるもの（19～21）がある。

4 類 捺糸文が施される土器である（第92図3～14）。

3・14は捺糸文が斜位に施される。3は短く屈曲する口縁を持つ鉢である。4～13は網目状捺糸文を施す。4は折り返し口縁を呈し、口縁は横位、胴部は縦位に施文する。5・6も同様の文様構成をとる。7～11は口縁部の資料で、口縁から胴部まで施文方向を変えない文様構成を呈す。口縁がやや内湾気味に立ち上がる器形を呈する。12・13は胴部の大形破片資料である。

6 類 刷毛目状条痕文が施されるものである（第93図1・2）。

7 類 底部資料を一括する（第93図7～10）

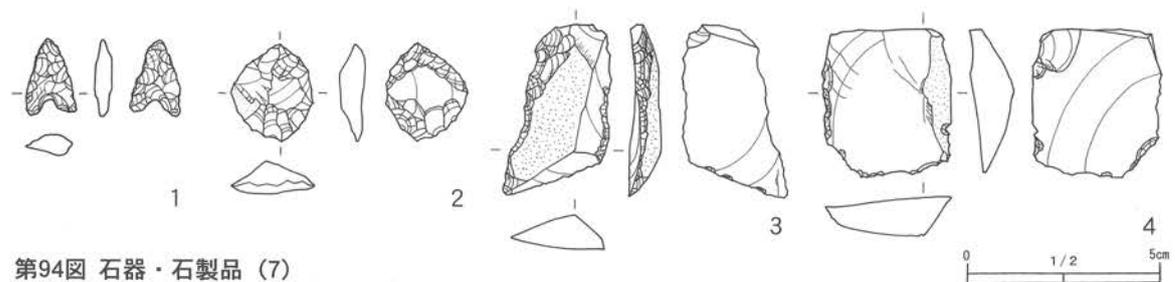
7・8は網目状捺糸文が施される底部資料である。底面はナデ調整で平坦である。9・10は無文のものである。10は器壁が薄く、底面に凹凸がみられ、やや粗雑なつくりを呈する。

第3節 石器・石製品類

遺物包含層から4点出土している（第94図）。平成21年度調査の分類に基づき記載する。

1は凹基無茎石鏃である。基部の挟りが浅く、縁辺が先端からかえしまで直線的である。流紋岩製である。2は石鏃の未成品である。側縁に放射状の剥離が認められる。赤チャート製である。

側辺に微細な2次加工により鋭角的な刃部を形成するものを不定形石器としている。3・4が相当する。いずれも頁岩製であり、自然面を残す。両縁を加工した片刃のものである。



第94図 石器・石製品 (7)

第34表 出土遺物（石器・石製品）一覧

単位：cm、g

図番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	石材	備考
94・1	E区LⅡ	石鏃	2.0	1.3	0.5	0.8	凹基無茎石鏃	流紋岩	
94・2	C区18・19層	石鏃未製品	2.6	2.2	0.9	3.8		チャート	
94・3	C区一括	不定形石器	5.1	2.8	0.9	9.5	スクレイパー	頁岩	
94・4	C区一括	不定形石器	4.0	3.4	1.1	16.2	スクレイパー	頁岩	

第4章 まとめ

平成21年度の発掘調査は、平成20年度調査に隣接する現道路部分223㎡を実施したものである。平成20年度調査に引き続き、縄文時代を中心とした遺構・遺物が確認され、調査面積は狭いながらも、平成20年度調査成果を補足する資料が得られたといえる。弥生時代以降の遺構・遺物は、平成20年度調査で確認された近世以前の溝の延長を確認するにとどまり、近代の軍事関連遺構等は確認されなかった。よって、以下では、平成20年度調査成果を踏まえて、平成21年度の縄文時代の調査成果を概観し、本編のまとめとしたい。

縄文時代 平成20・21年度調査では縄文早期中葉から晩期後葉までの遺物が見られ、本遺跡が長期間にわたり営まれたことが確認されている。

平成20年度調査の前期を中心とした落とし穴と推定される土坑は11基を数え、地形に沿って約20m間隔という規則的な配置を呈している。平成21年度調査の第1・2号土坑が形態ならびに覆土の特徴から、これに類似し、落とし穴と推定される。第1・2号土坑は10mほどの間隔を保ち、低地へと傾斜する落ち際に分布している。このことから、前期を中心とした段階では、調査区全体にわたって狩猟の場として利用されていたことが改めて裏付けられた。

平成21年度調査のC区の遺物包含層は、湧水地または小川がある地点に向かって南側から形成されていることから、南側に位置する平成20年度調査沢跡1ならびにA区①の遺物包含層と一連のものと考えられる。湧水地・小川に近く、後期後葉から晩期後葉の土器を中心とした多くの土器を含むことから、遺物包含層の周辺が水場として利用されていたことが想定される。

平成20年度調査では、この遺物包含層に近接して中期後葉から後期前葉の竪穴住居跡を確認しており、遺物包含層に重複しながら検出されている炉跡や焼土跡等の多くの遺構は、後期後葉から晩期後葉にかけての所産と考えられている。遺物包含層に近接する平成21年度調査第3号土坑も晩期に埋没したと推定される。このように本遺跡では湧水地・小川に沿った遺物包含層・遺構の形成が認められ、本遺跡の中期後葉以後の集落は湧水地・小川を中心とした集落構成を呈し、水場の利用が集落の選地、継続性に大きく関わっていると考えられる。また、後期後葉以後の出土量が多いことから、この段階に水場の利用が盛んであったとも推測されよう。このことは本遺跡の調査成果が、本地域の縄文集落研究に大きく寄与できる内容と評価できる。

東日本全体の特徴でもあるが、南相馬市小高区の浦尻貝塚の炭化種実の分析でも、トチノキの利用が中期中葉から晩期にかけて増加しており、中期中葉以後、生業の中で水場の重要性は高まったと考えられる。この動向に本遺跡の状況は整合的である。今後は周辺遺跡・遺物・古環境調査などを含めて、このことを総合的に検討していく必要がある。

引用参考文献

- 吉川純子 2008 「第4章 炭化種実」『浦尻貝塚3 第2分冊 一自然遺物編一』南相馬市教育委員会
 森 幸彦 1988 『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告第17集 福島県立博物館
 渡辺一雄・大竹憲治他 1983 『道平遺跡の研究』大熊町文化財調査報告Ⅲ 大熊町教育委員会



写1 A区①完掘状況



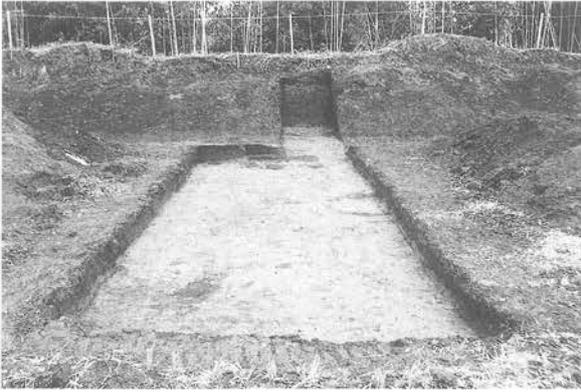
写2 A区①調査前現況



写1 A区②完掘状況



写2 A区②調査前現況



写1 B区10号トレンチ完掘状況



写2 B区11号トレンチ完掘状況



写3 B区12号トレンチ完掘状況



写4 B区13号トレンチ完掘状況



写5 B区14号トレンチ完掘状況



写6 B区15号トレンチ完掘状況



写7 B区16号トレンチ完掘状況



写8 第4号堅穴遺構検出状況



写1 第1号竪穴住居跡完掘状況



写2 第1号竪穴住居跡土層堆積状況



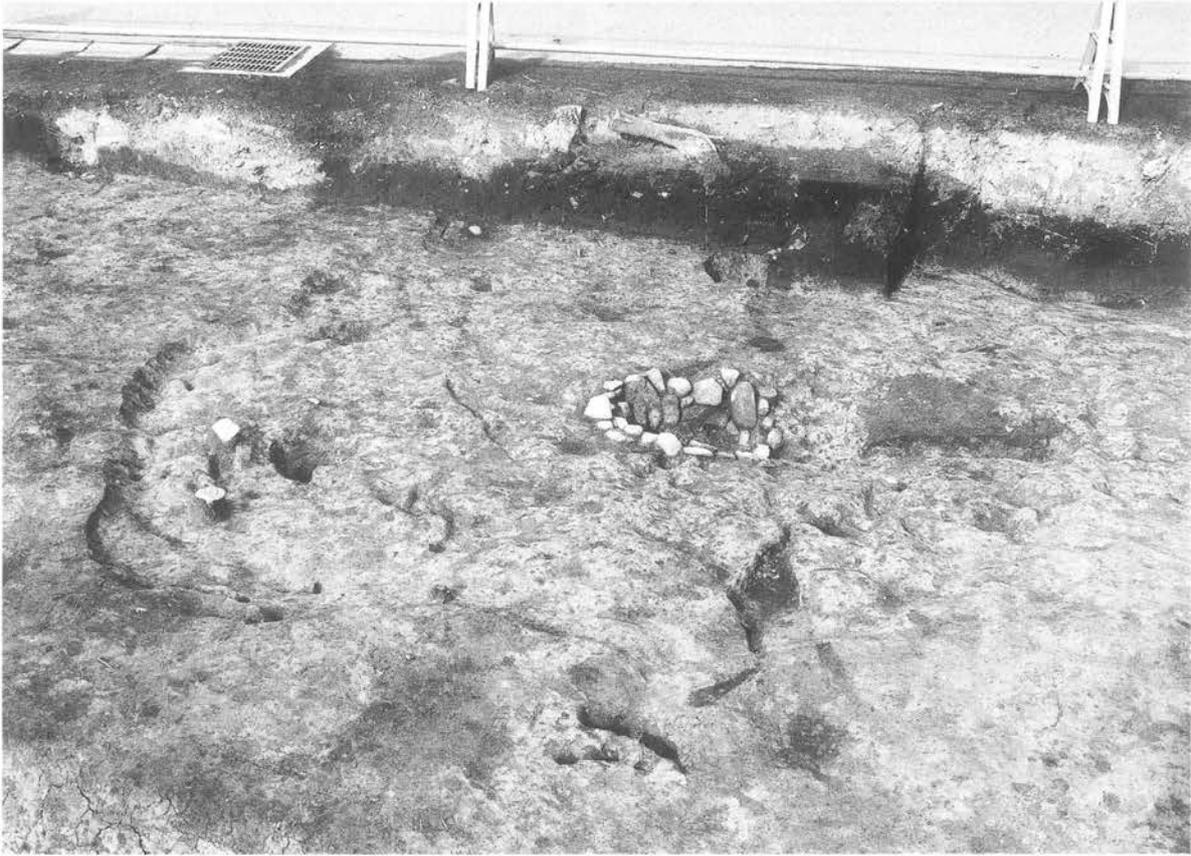
写3 第1号竪穴住居跡土層堆積状況



写4 第1号竪穴住居跡検出状況



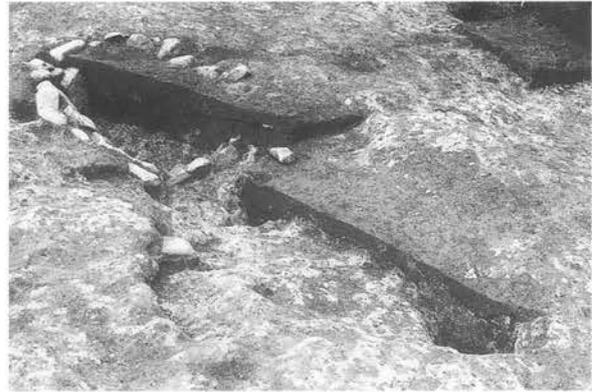
写5 第1号竪穴住居跡遺物出土状態



写1 第2号竪穴住居跡完掘状況



写2 第2号竪穴住居跡炉跡



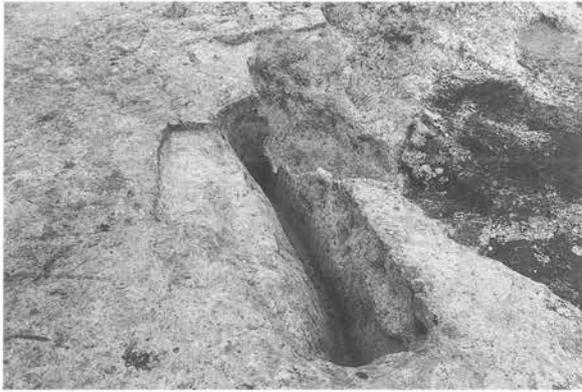
写3 第2号竪穴住居跡炉跡土層堆積状況



写4 第2号竪穴住居跡土層堆積状況



写5 第2号竪穴住居跡調査状況



写1 第1号土坑完掘状況



写2 第2号土坑完掘状況



写3 第2号土坑土層堆積状況



写4 第3号土坑完掘状況



写5 第4号土坑完掘状況



写6 第4号土坑検出状況



写7 第5号土坑完掘状況



写8 調査状況



写1 第7号土坑完掘状况



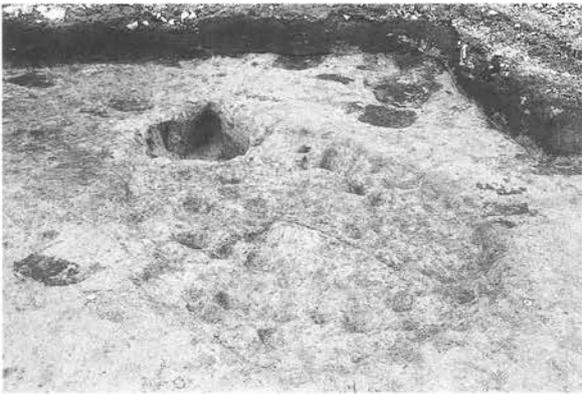
写2 第8号土坑完掘状况



写3 第9号土坑完掘状况



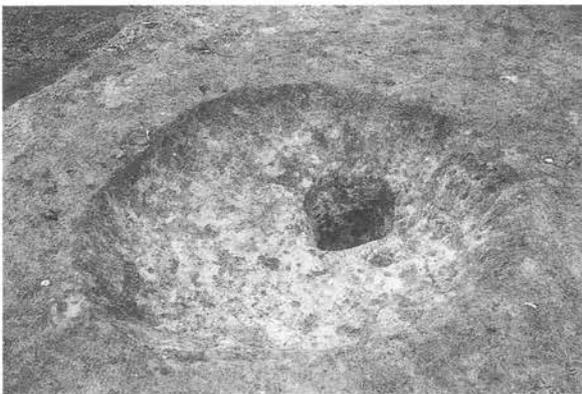
写4 第10号土坑完掘状况



写5 第11号土坑完掘状况



写6 第12·20号土坑完掘状况



写7 第13号土坑完掘状况



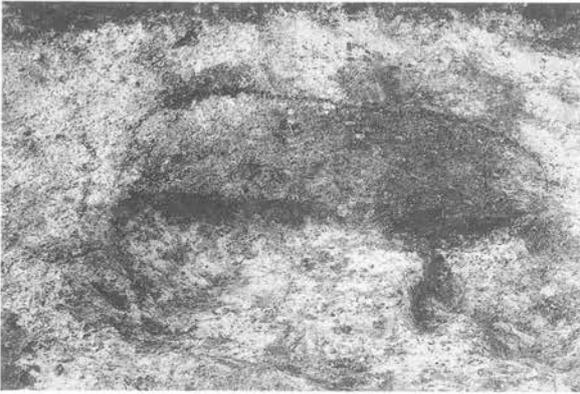
写8 第14号土坑土层堆积状况



写1 第15号土坑土层堆积状况



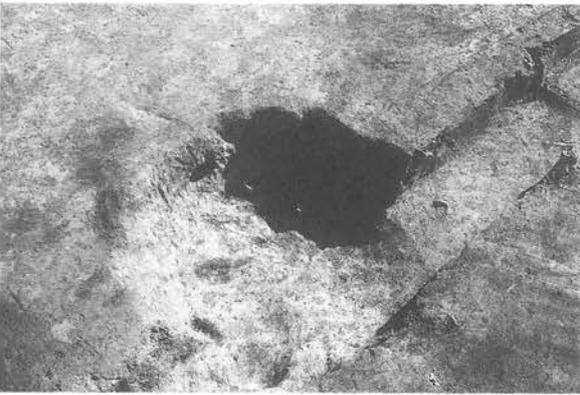
写2 第16号土坑完掘状况



写3 第17号土坑土层堆积状况



写4 第18号土坑完掘状况



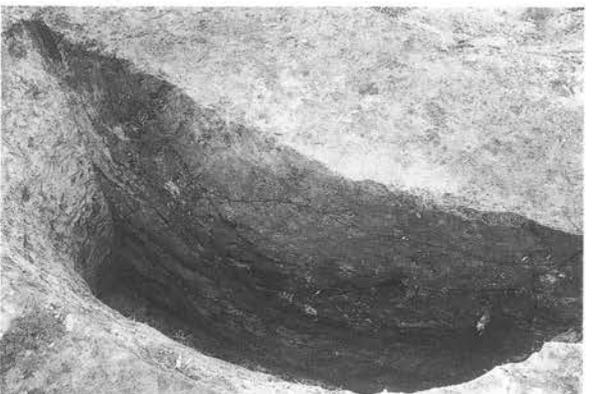
写5 第19号土坑完掘状况



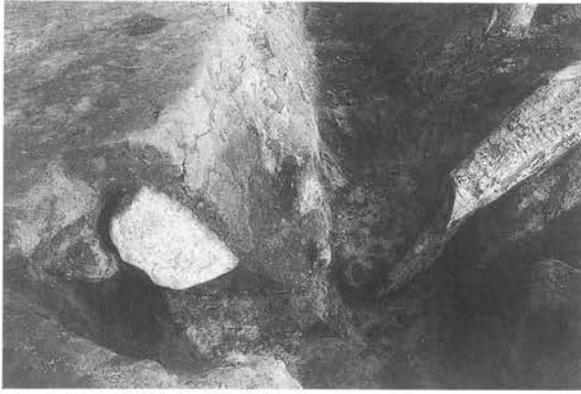
写6 第21号土坑完掘状况



写7 第22号土坑完掘状况



写8 第23号土坑土层堆积状况



写1 第24号土坑土層堆積狀況



写2 第25号土坑完掘狀況



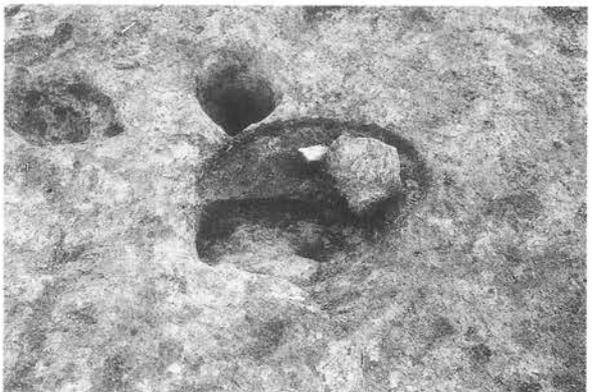
写3 第26号土坑土層堆積狀況



写4 第27号土坑完掘狀況



写5 第28号土坑完掘狀況



写6 第28号土坑土層堆積狀況



写7 第30号土坑完掘狀況



写8 第30号土坑調査狀況



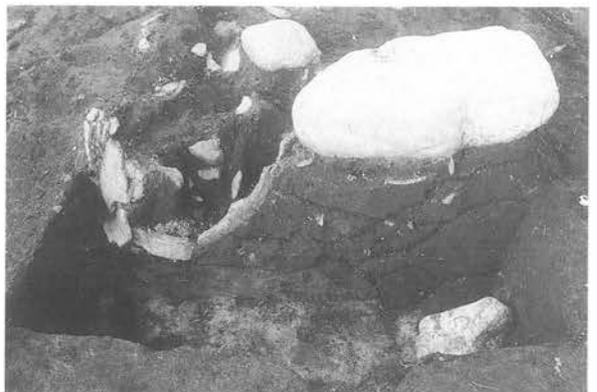
写1 第1号焼土跡検出状況



写2 第2号焼土跡土層堆積状況



写3 第3号焼土跡検出状況



写4 第3号焼土跡土層堆積状況



写5 第5号焼土跡検出状況



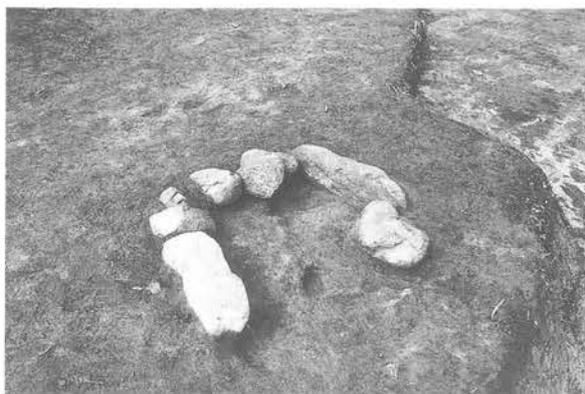
写6 第6号焼土坑土層堆積状況



写7 第7号焼土跡土層堆積状況



写8 第8号焼土跡土層堆積状況



写1 第1号炉跡完掘状況



写2 第2号炉跡完掘状況



写3 第3号炉跡完掘状況



写4 第1号埋設土器土層堆積状況



写5 第2号埋設土器完掘状況



写6 第3号埋設土器土層堆積状況



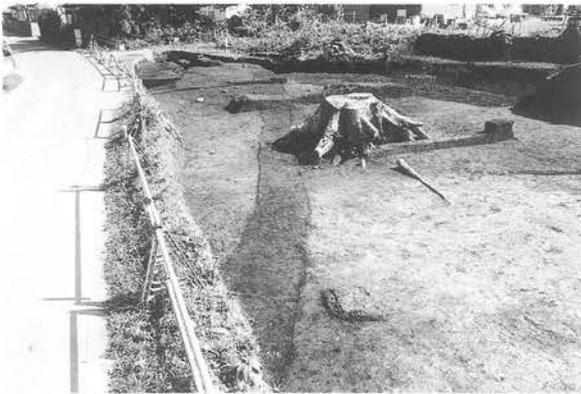
写7 第4号埋設土器土層堆積状況



写8 第5号埋設土器土層堆積状況



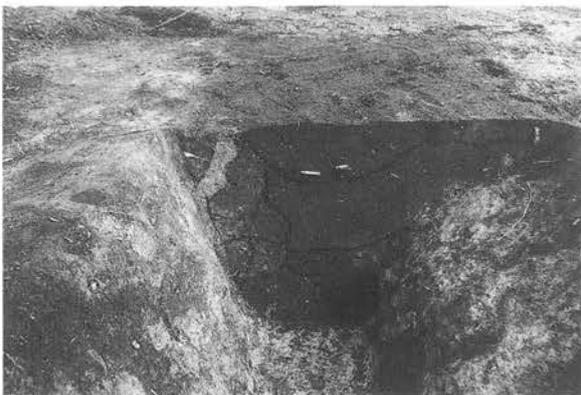
写1 第1号溝跡完掘状況



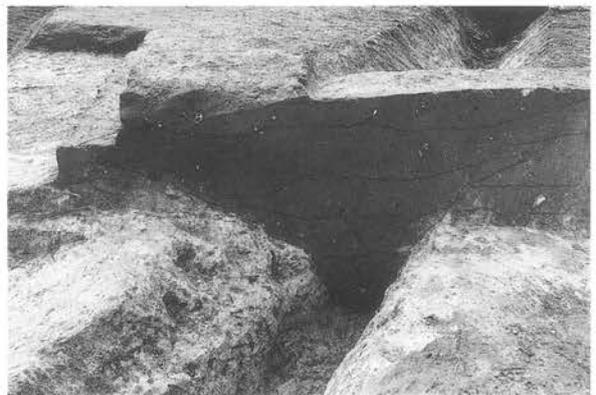
写2 第1号溝跡・遺物包含層検出状況



写3 第1号溝跡・遺物包含層検出状況



写4 第1号溝跡土層堆積状況



写5 第1号溝跡土層堆積状況



写1 土手2完掘状況



写2 土手2 (1号トレンチ) 土層堆積状況



写3 土手2 (2号トレンチ) 土層堆積状況



写4 土手2調査前現況



写5 土手2調査前現況



写1 土手3 (A区②) 完掘状況



写2 土手3 (B区) 完掘状況



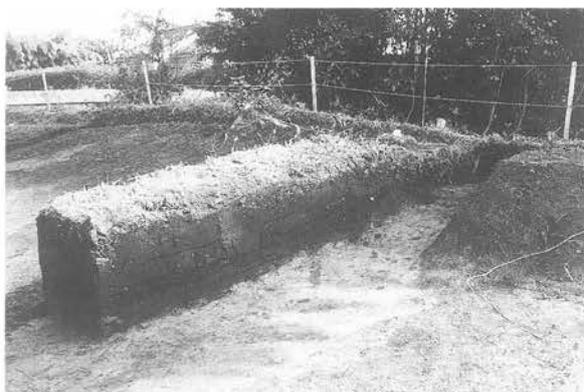
写1 土手3 (A区②) 調査前現況



写2 土手3 (B区) 調査前現況



写3 土手3 (4号トレンチ) 土層堆積状況



写4 土手3 (5号トレンチ) 土層堆積状況



写5 土手3 (6号トレンチ) 土層堆積状況



写6 土手3 (7号トレンチ) 土層堆積状況



写7 土手3 (8号トレンチ) 土層堆積状況



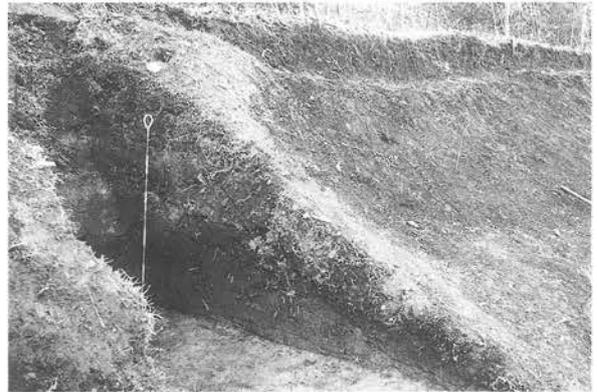
写8 土手3 (9号トレンチ) 土層堆積状況



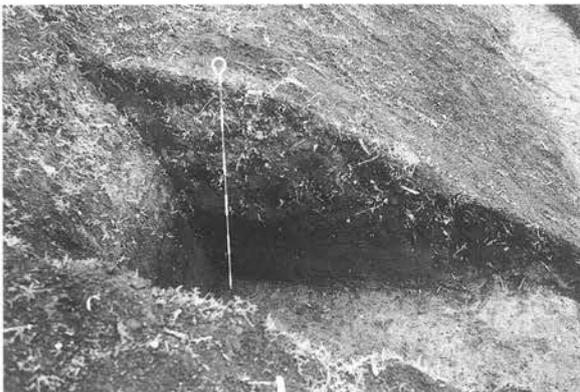
写1 土手3 (B区) 完掘状況



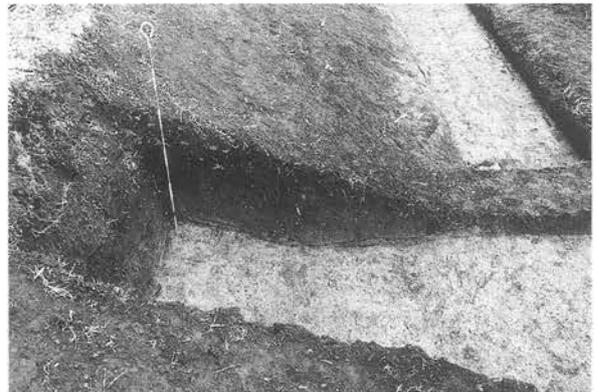
写2 土手3 (10号トレンチ) 土層堆積状況



写3 土手3 (11号トレンチ) 土層堆積状況



写4 土手3 (12号トレンチ) 土層堆積状況



写5 土手3 (13号トレンチ) 土層堆積状況



写1 第1号竪穴遺構・土手1完掘状況



写2 土手1（ベルト1）土層堆積状況



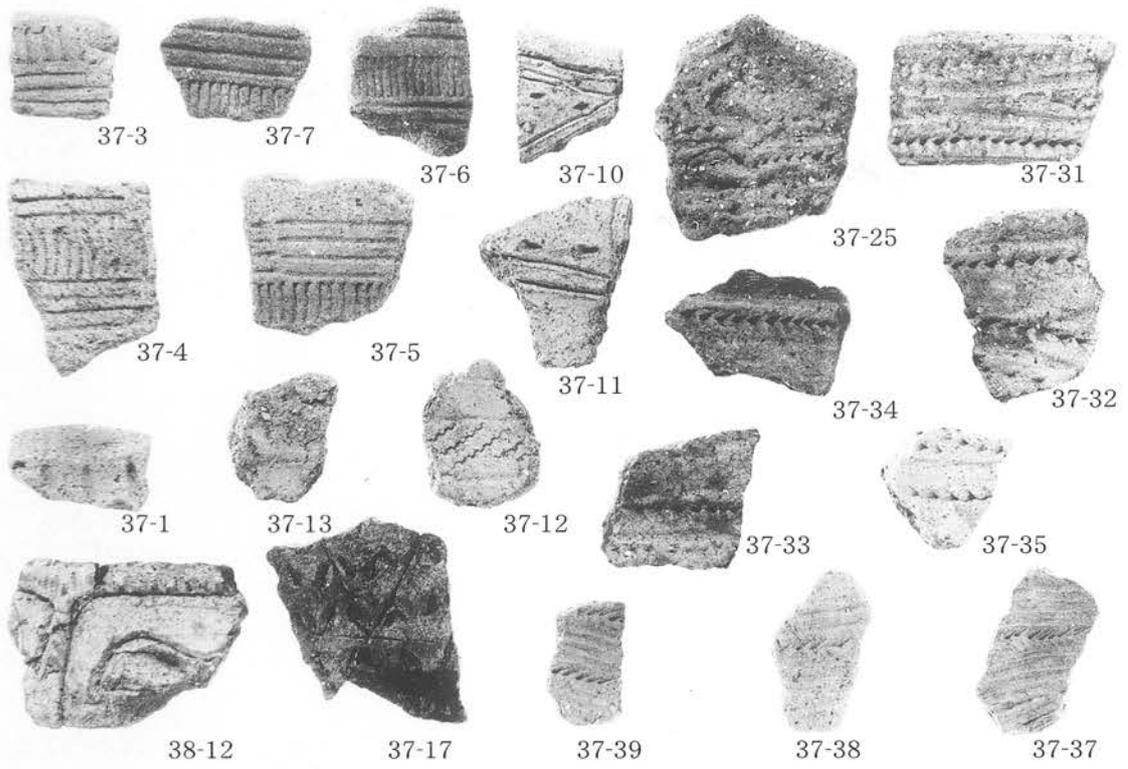
写3 土手1（ベルト2）土層堆積状況



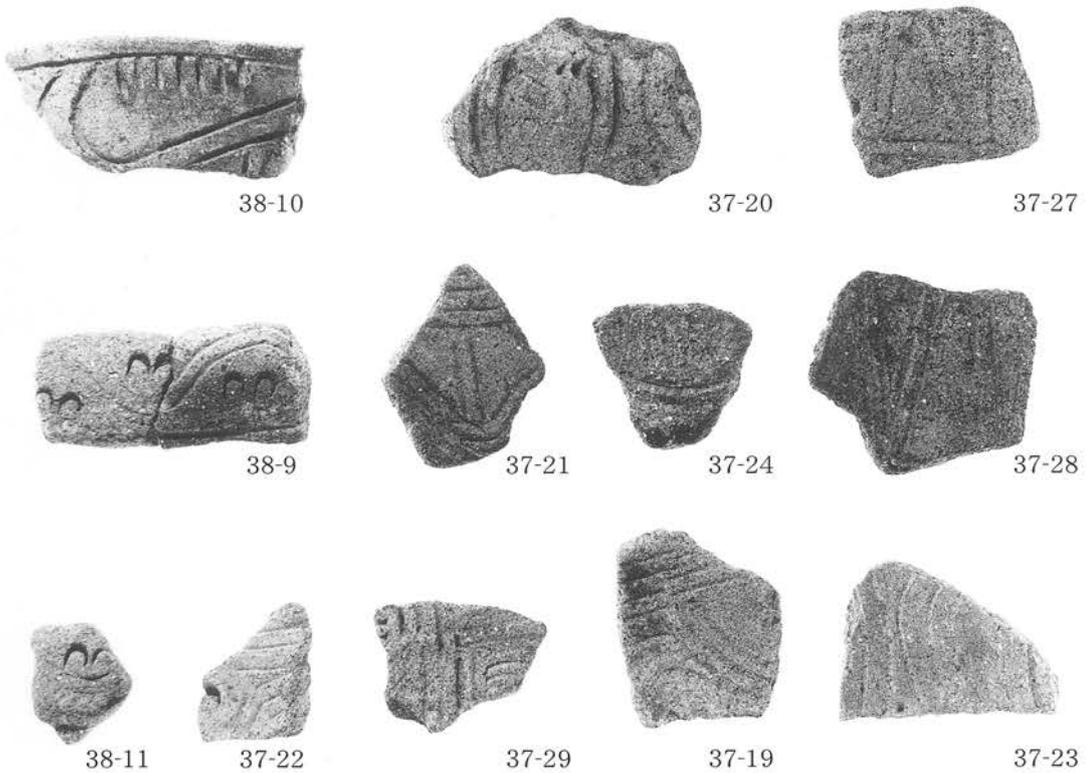
写4 第2号竪穴遺構完掘状況



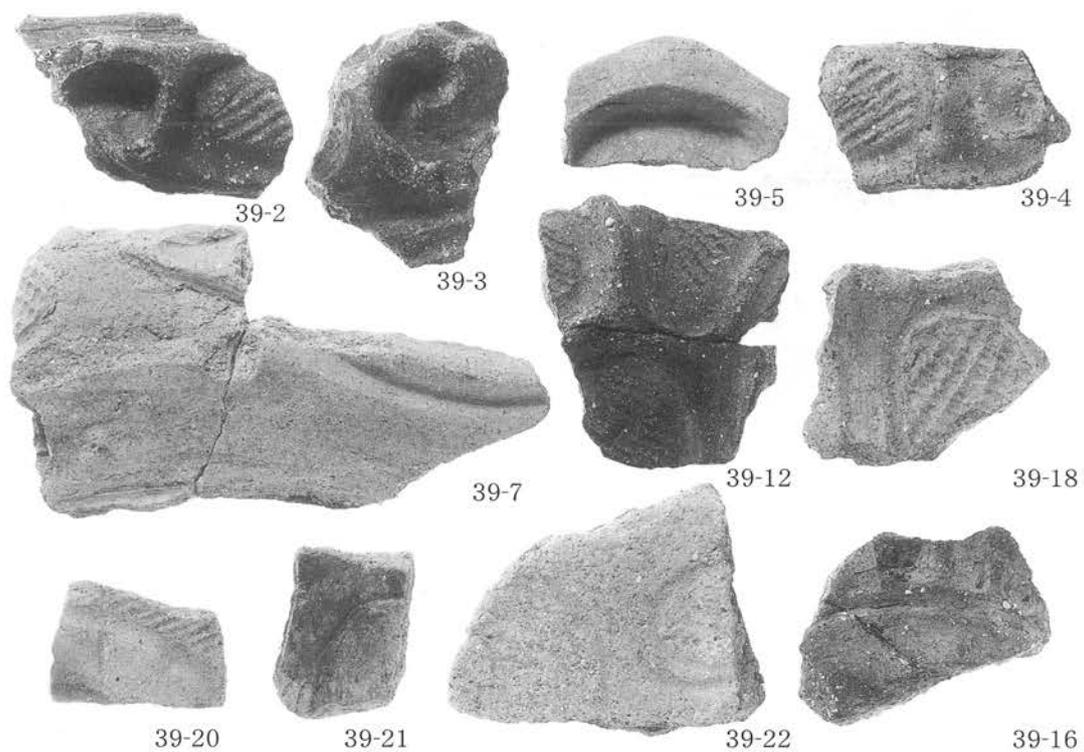
写5 第3号竪穴遺構完掘状況



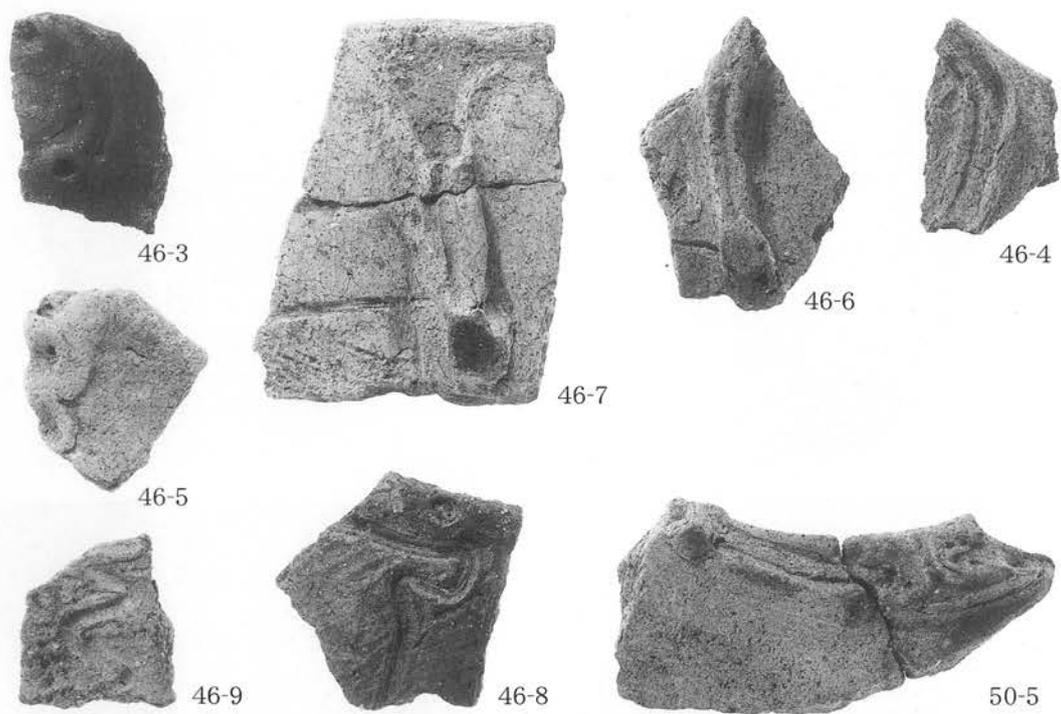
写1 縄文土器 (早期)



写2 縄文土器 (早・前期)



写1 縄文土器 (中期)



写2 縄文土器 (後期前葉)



43-1



42-1



40-3



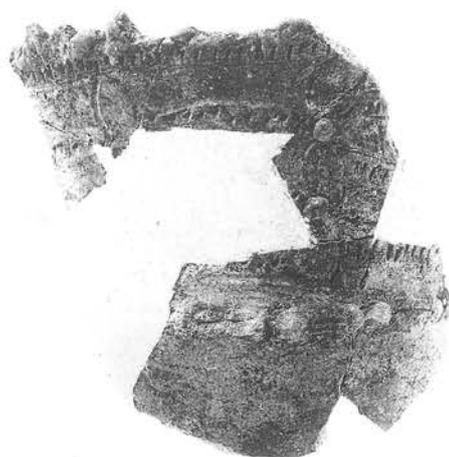
40-2



写1 縄文土器（後期後葉 深鉢形土器）



47-3



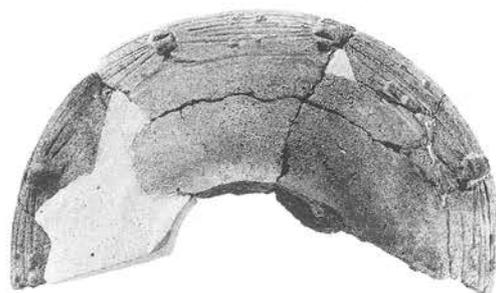
47-4



42-2



47-1



40-1



51-4



51-1

縄文土器（後期後葉）



51-22

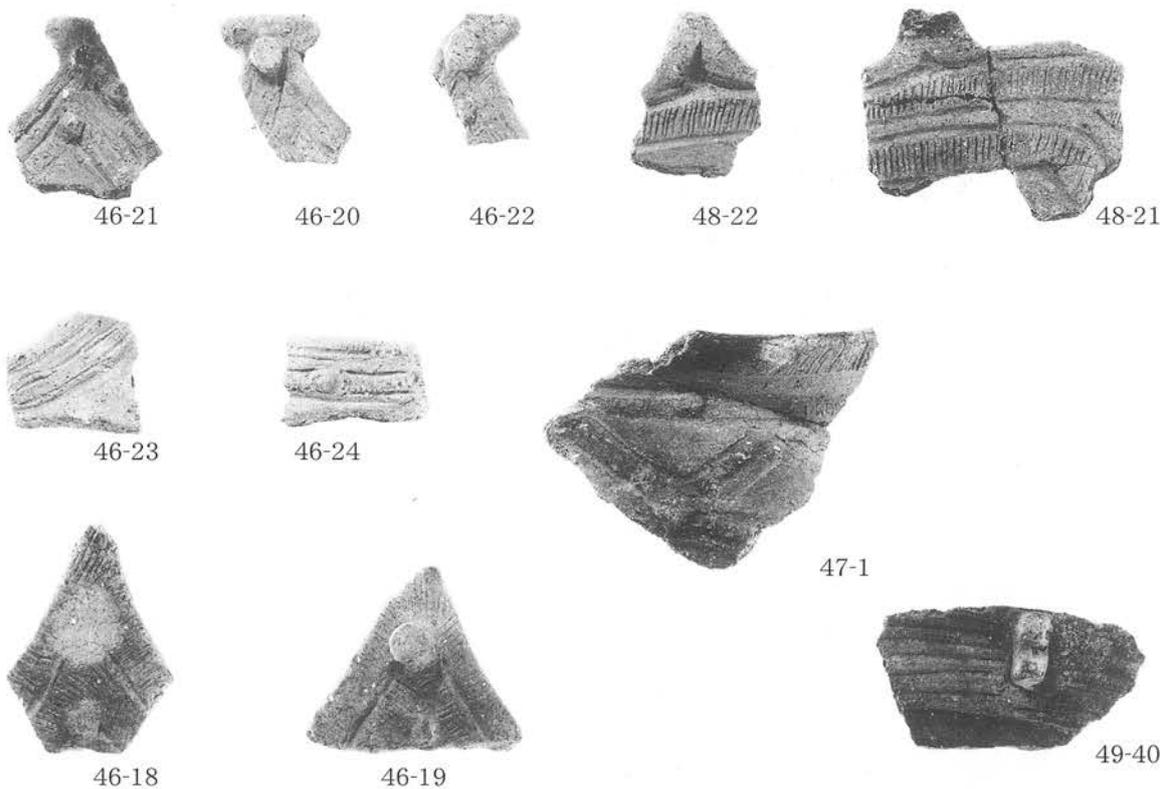


51-21

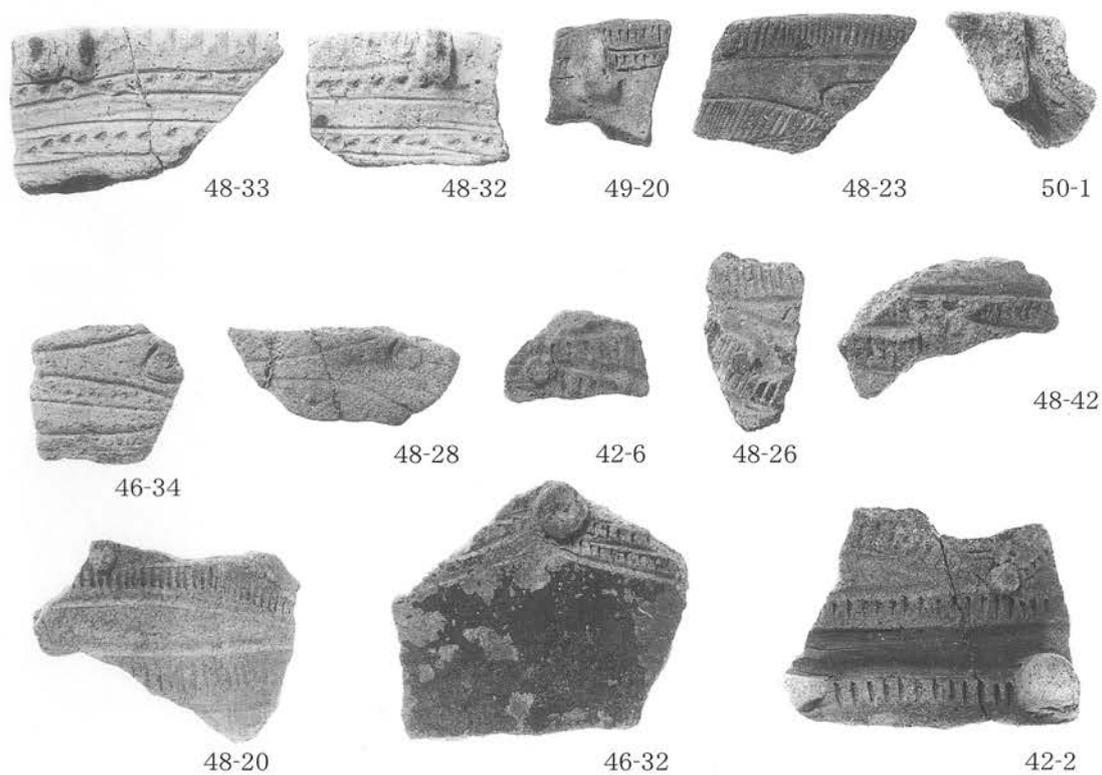


50-14

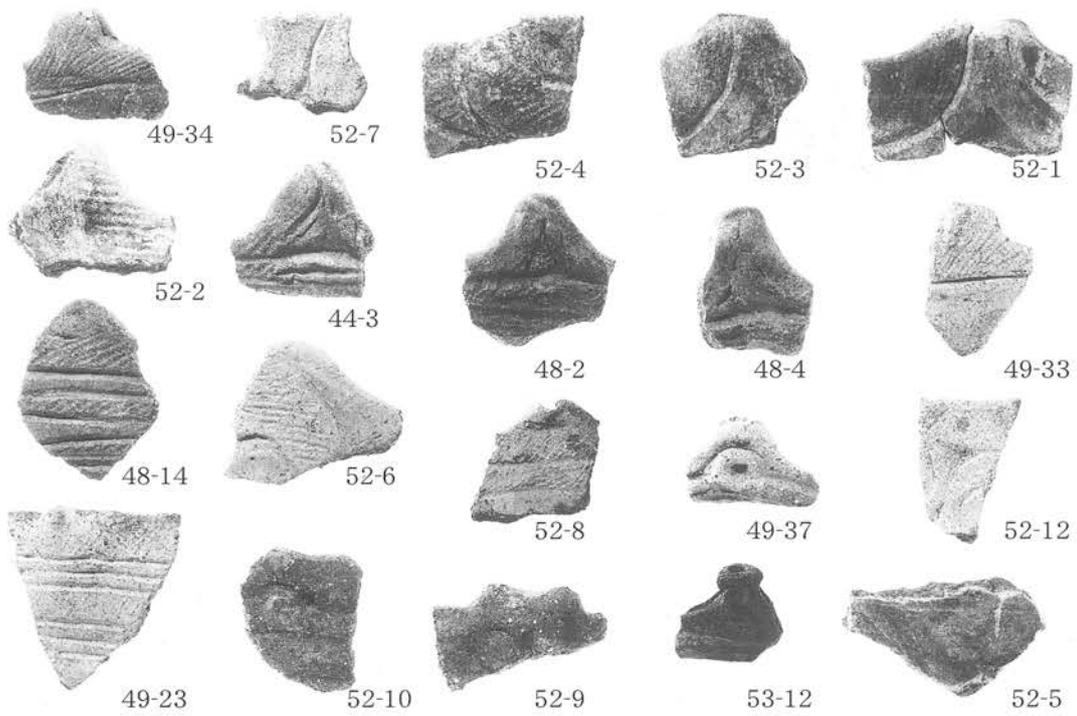
縄文土器（後期）



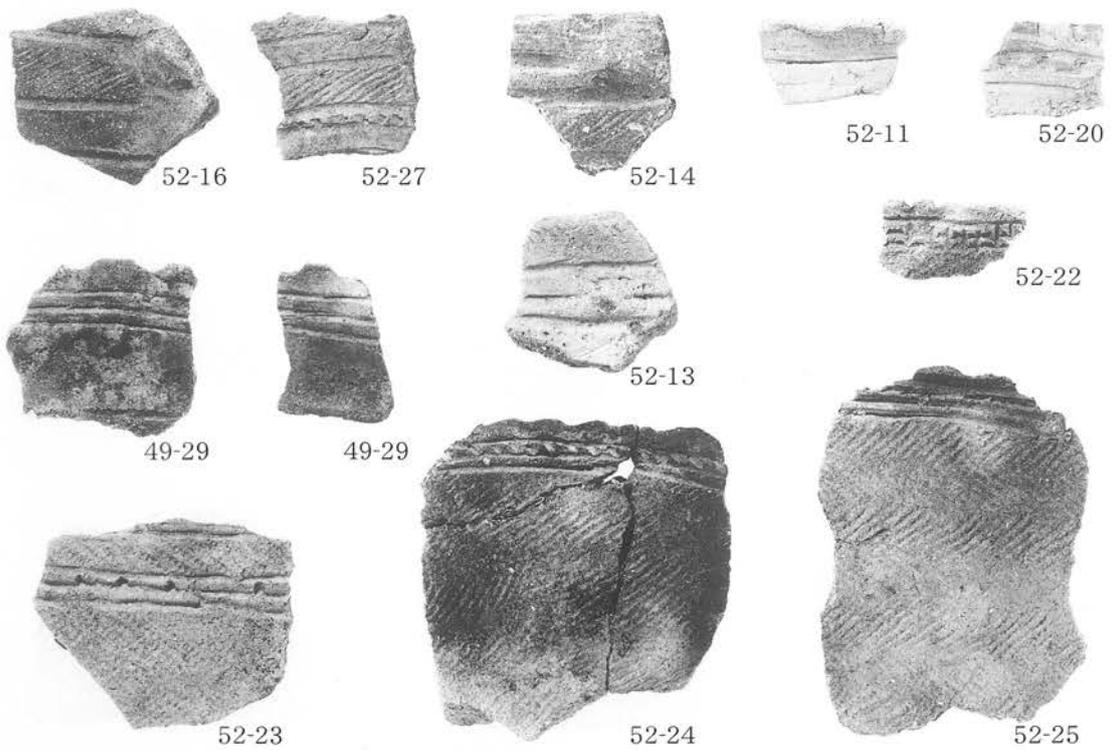
写1 縄文土器 (後期後葉)



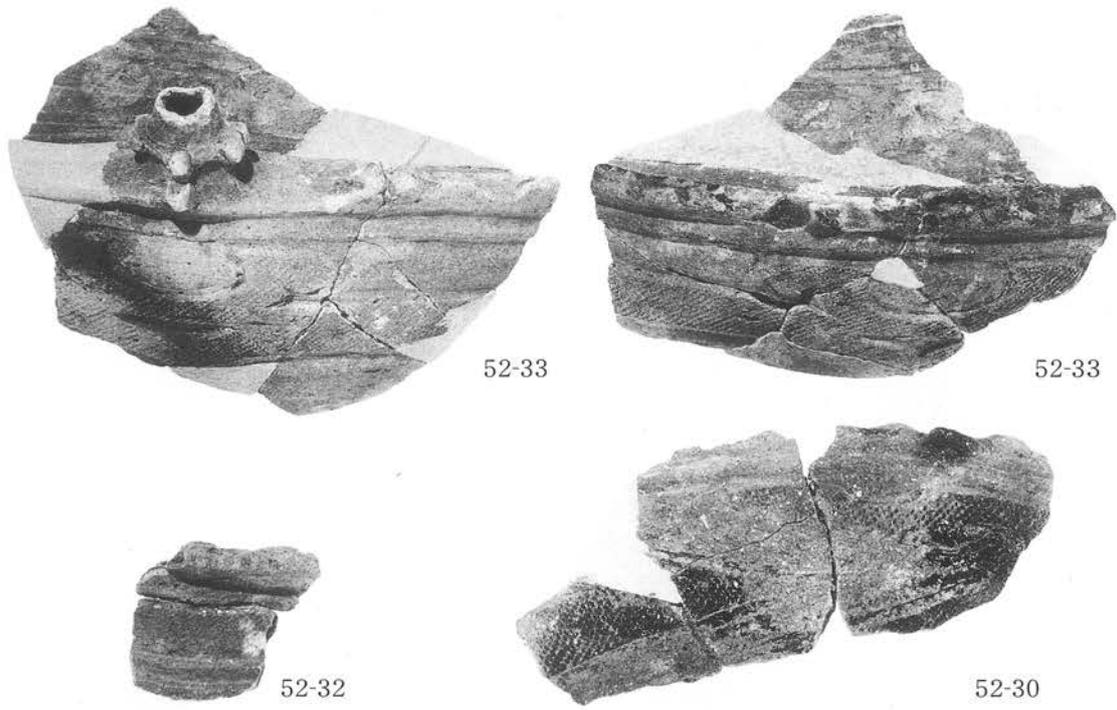
写2 縄文土器 (後期後葉)



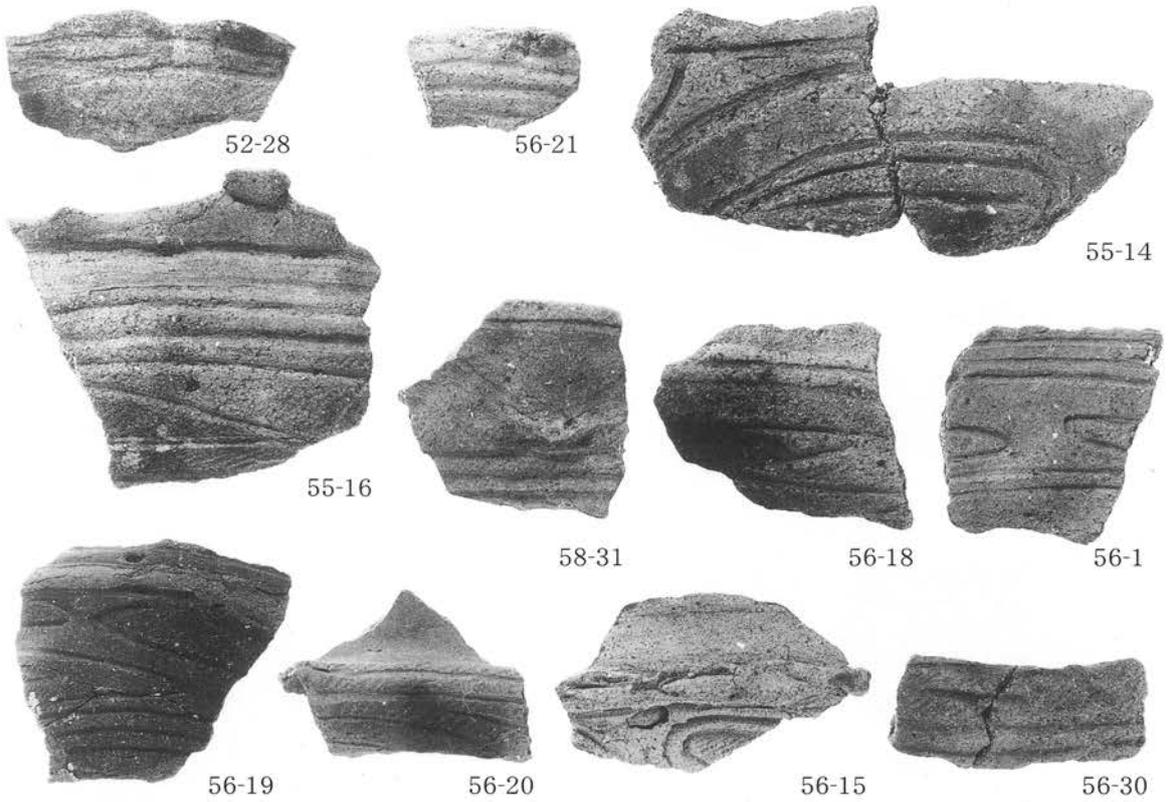
写1 縄文土器 (晩期前葉大洞B式期他)



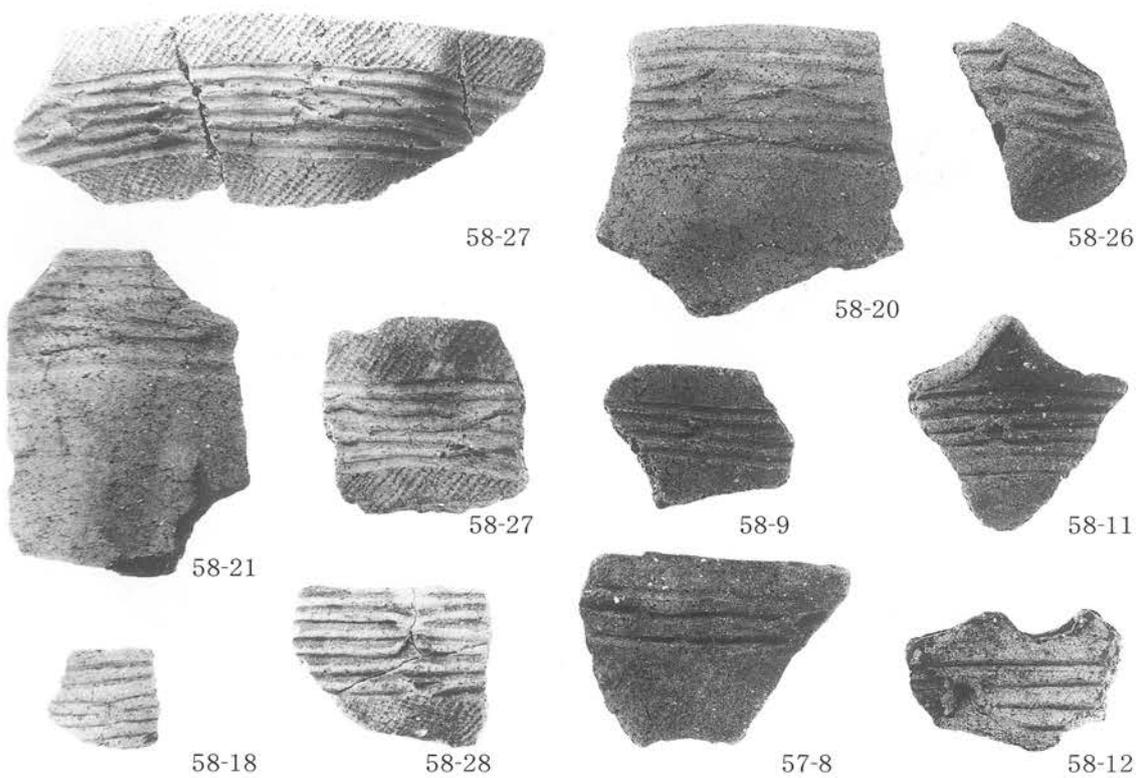
写2 縄文土器 (晩期前葉大洞BC式期)



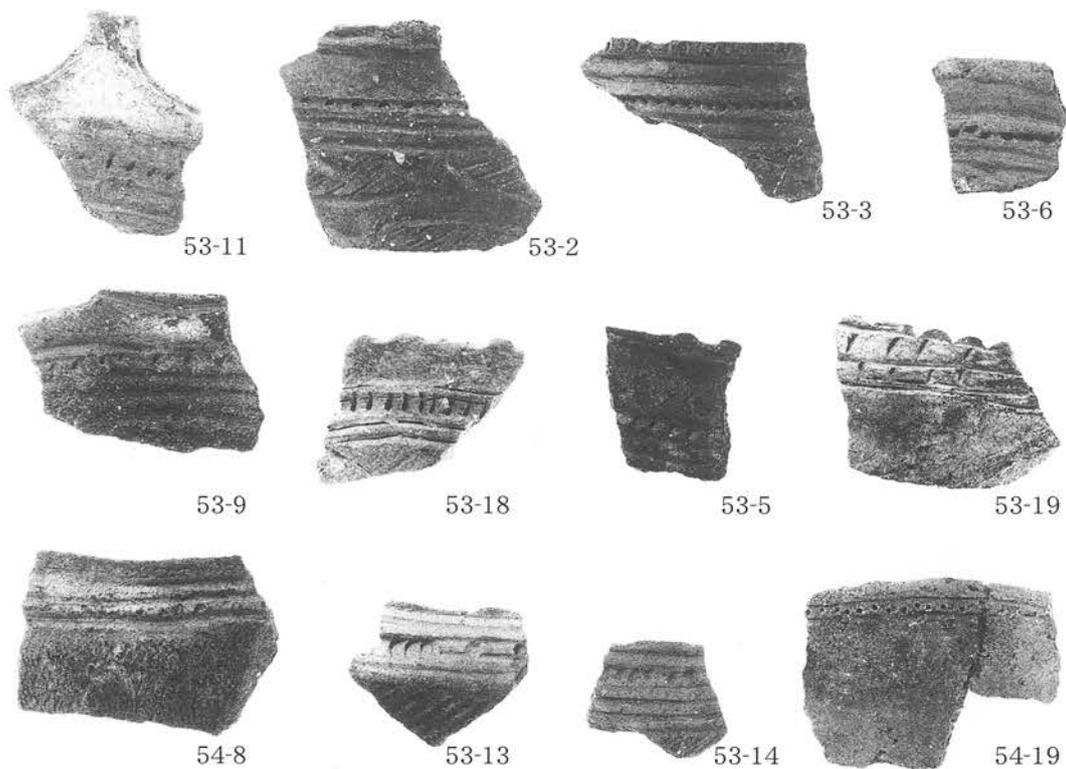
写1 縄文土器（晚期中葉大洞C₁式期）



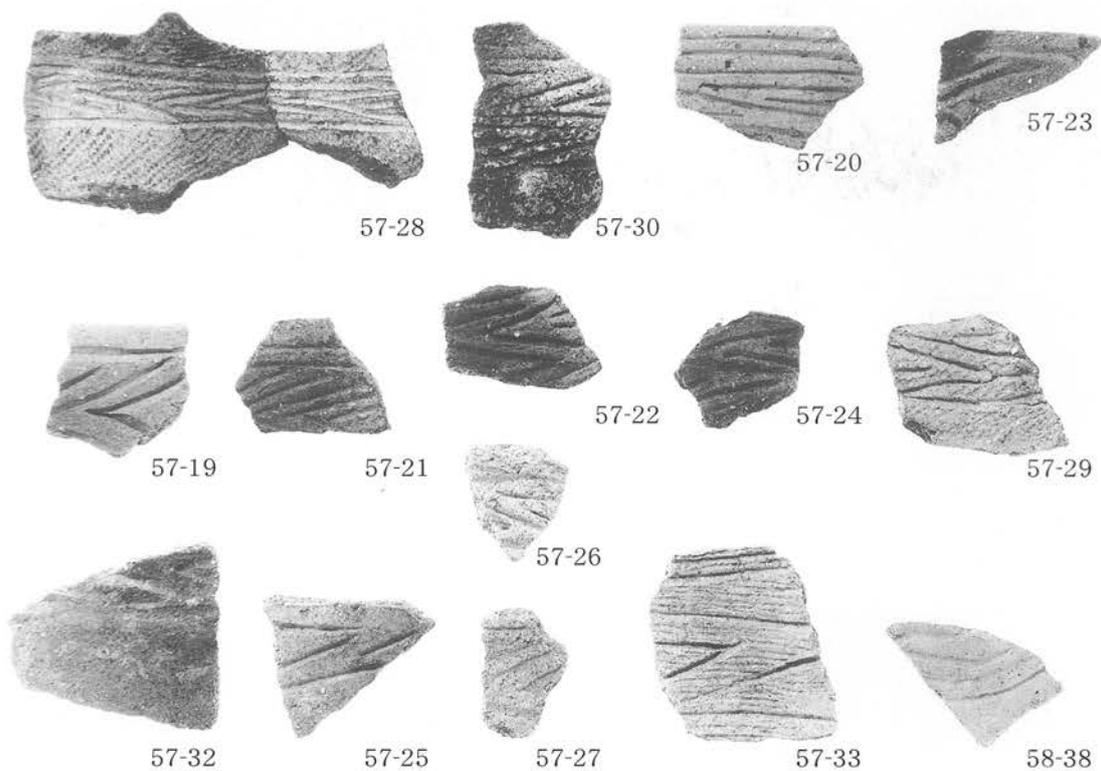
写2 縄文土器（晚期中葉大洞C₂式期）



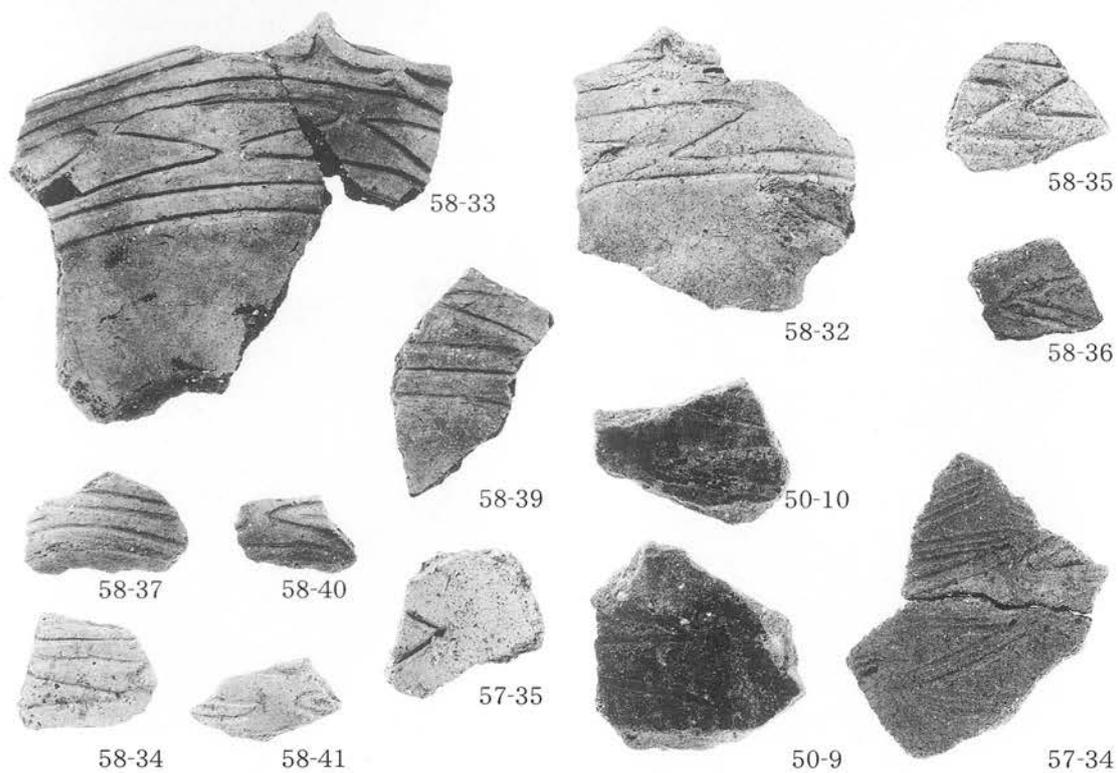
写1 縄文土器 (晩期後葉大洞A式期)



写2 縄文土器 (晩期後葉大洞C₂式期)



写1 縄文土器 (晩期後葉大洞A式期)



写2 縄文土器 (晩期後葉大洞A'式期)



44-2



44-1



53-2



59-1

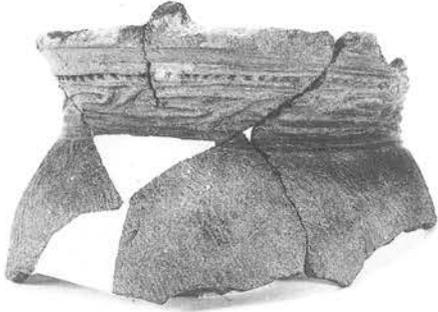


64-3



45-2

縄文土器（晩期）



53-6



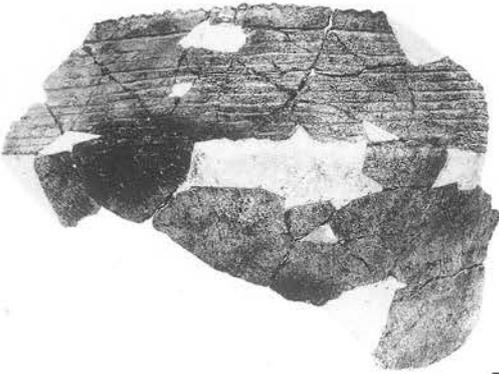
59-3



56-33



64-2



59-4



70-8



55-13

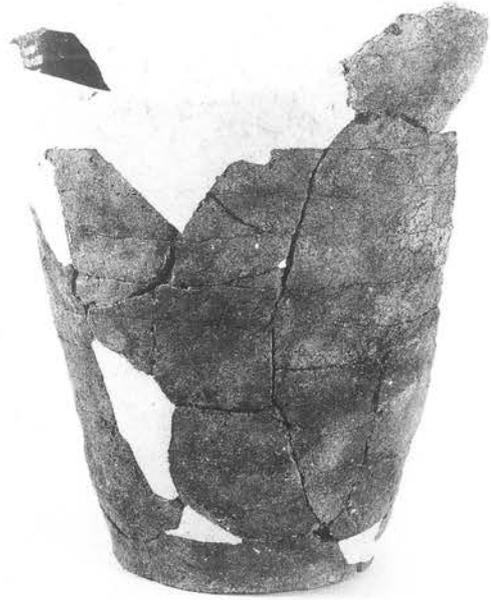


55-15

縄文土器（晩期）

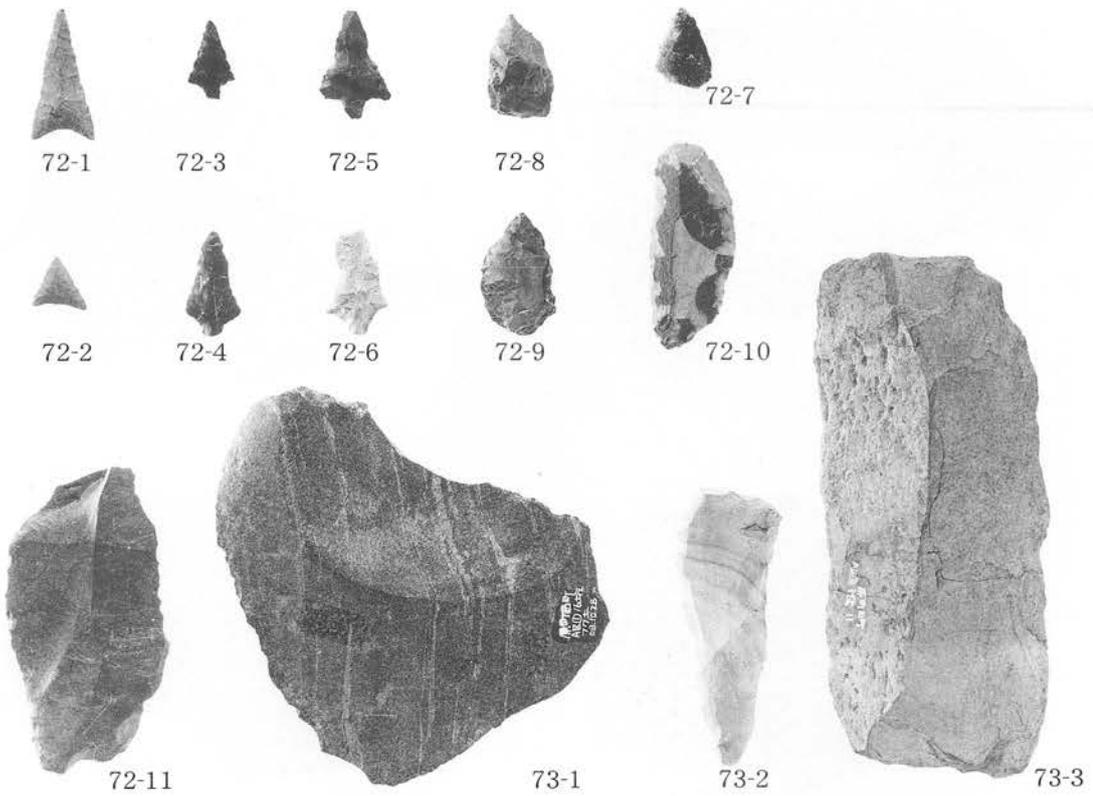


54-32

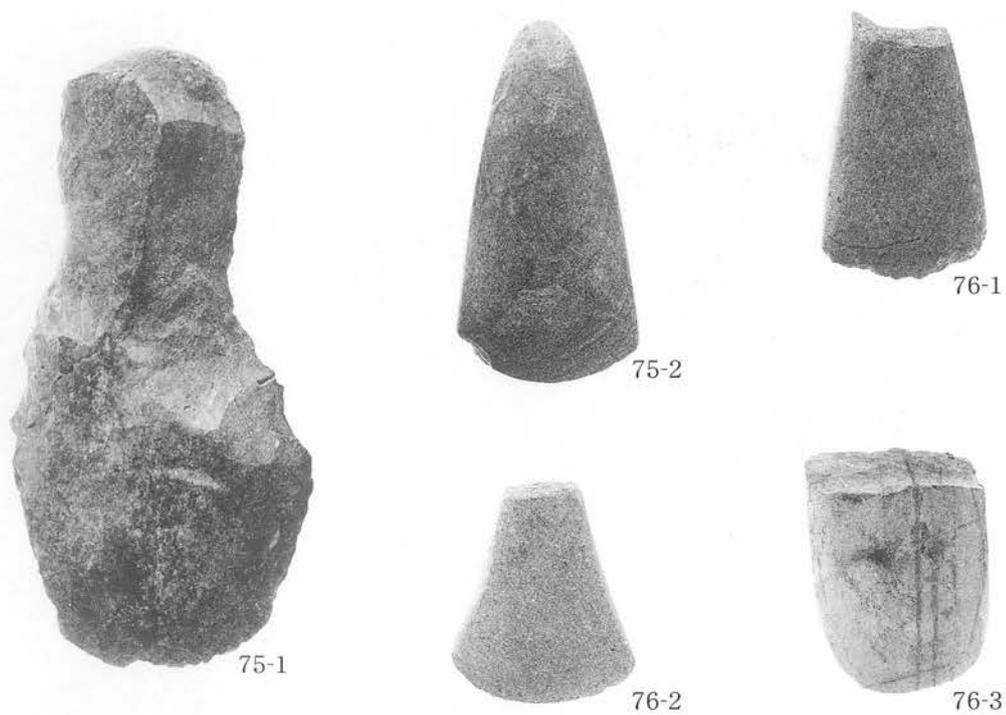


68-4

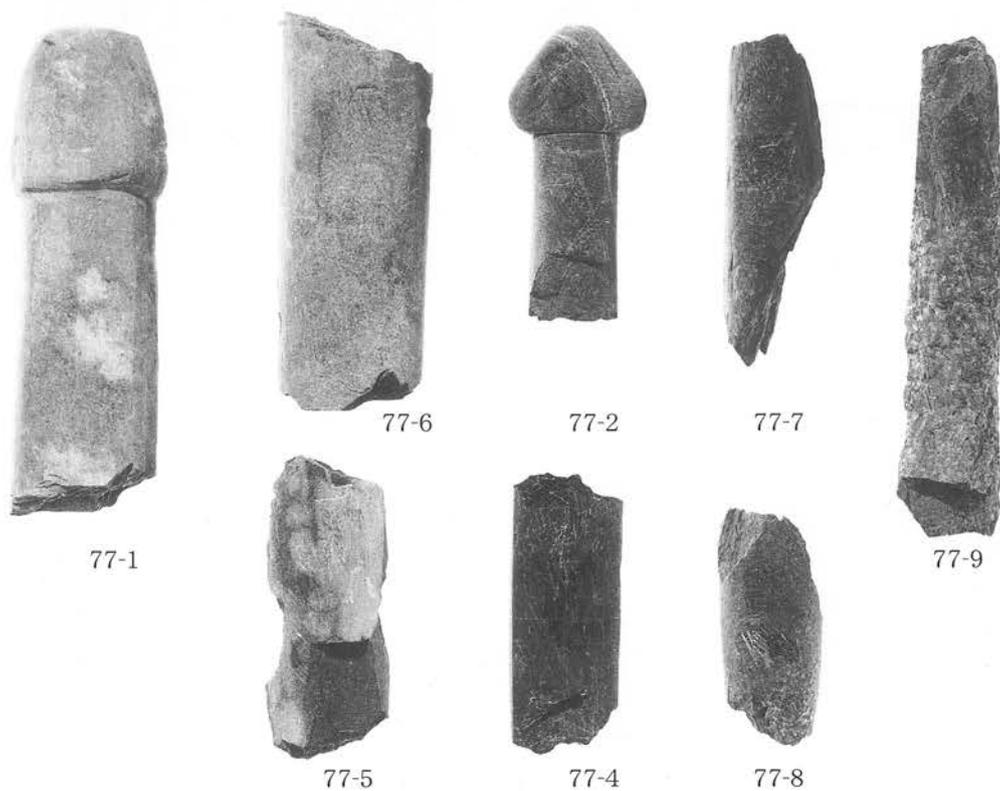
写1 縄文土器（後・晩期）



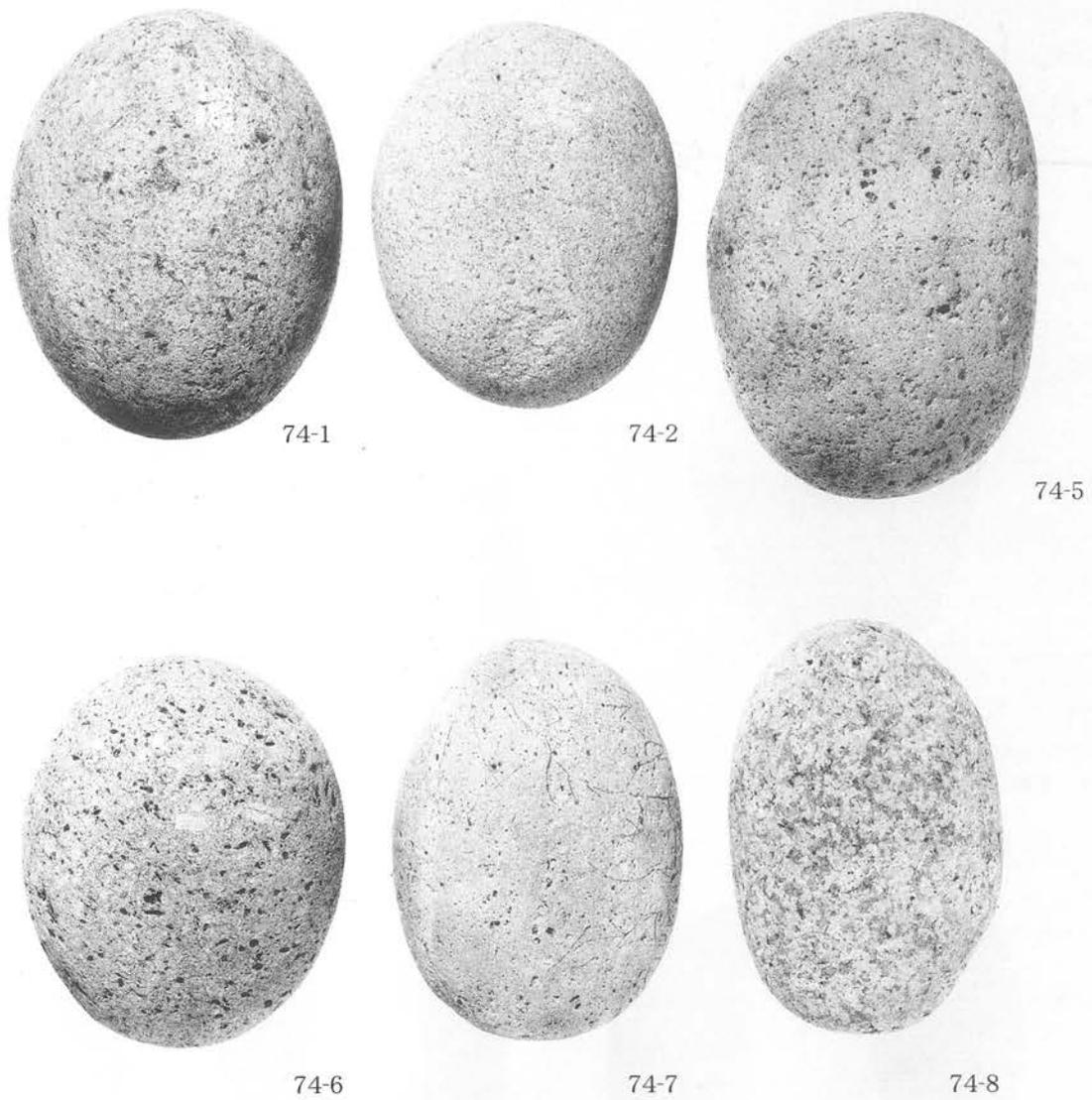
写2 石器・石製品類



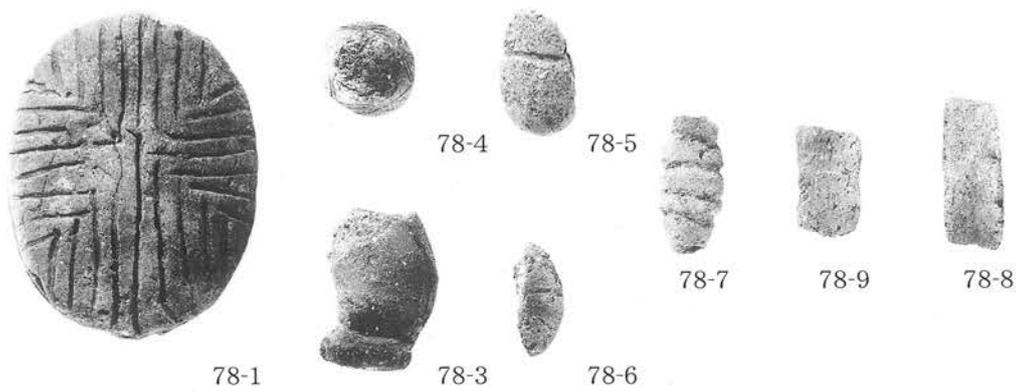
写1 石器・石製品類 (石斧)



写2 石器・石製品類 (石棒)



写1 磨石・敲石



写2 土製品



写1 C区南完掘状況



写2 E区完掘状況



写3 F区完掘状況



写4 G区完掘状況



写1 D区完掘状況



写2 D区西完掘状況



写3 D区東完掘状況



写4 C区北 南壁土層堆積状況



写5 C区南 北壁土層堆積状況 (1)



写6 C区南 北壁土層堆積状況 (2)



写7 C区南 北壁土層堆積状況 (3)



写8 C区南 南壁土層堆積状況



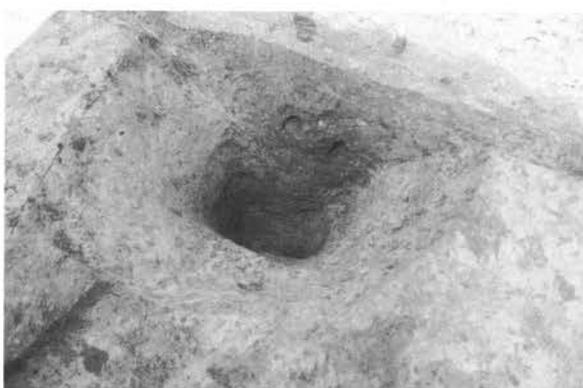
写1 第1号土坑完掘状況



写2 第4号土坑完掘状況



写3 第2号土坑土層堆積状況



写4 第2号土坑完掘状況



写5 第3号土坑土層堆積状況



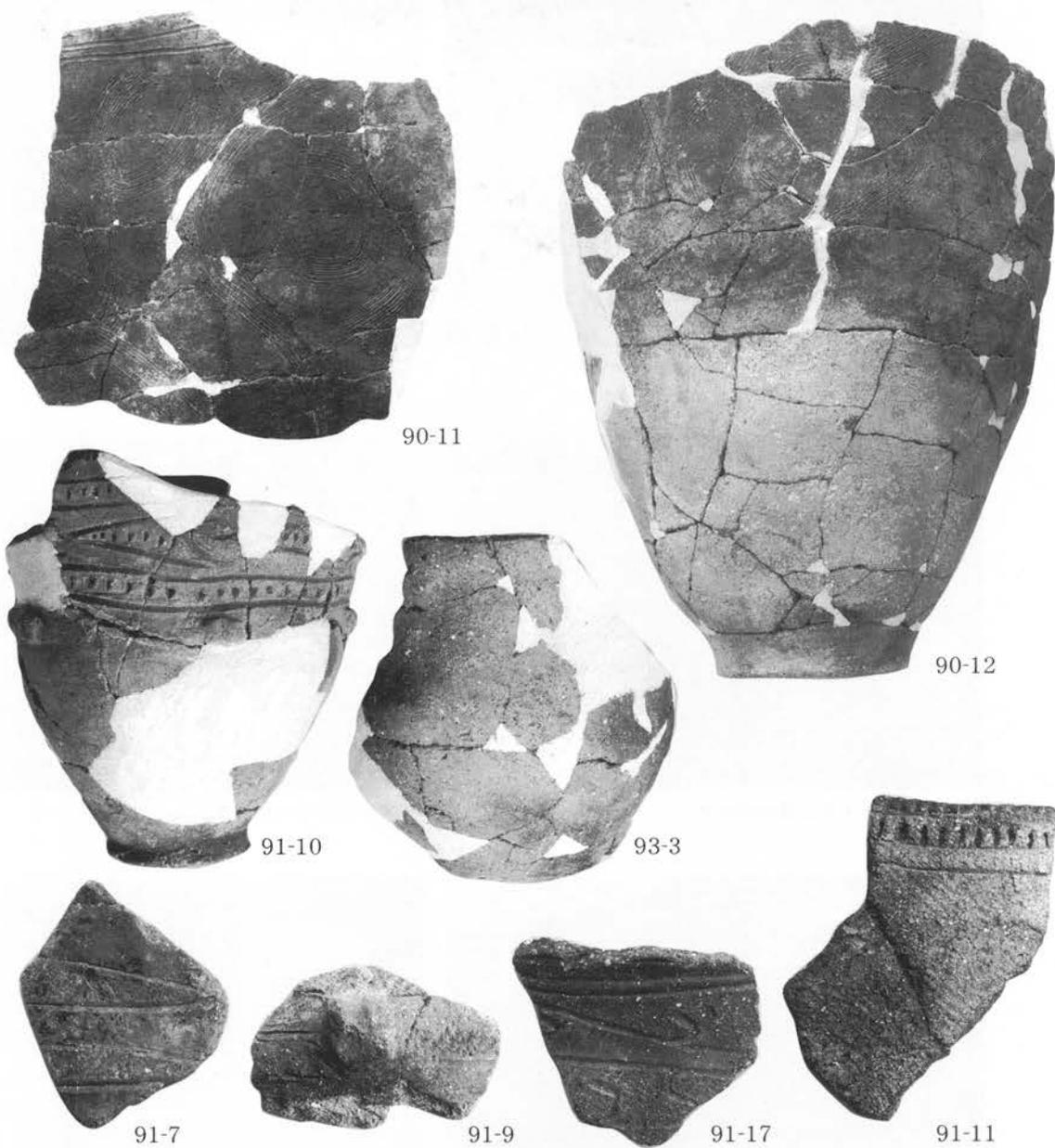
写6 第3号土坑完掘状況



写7 第1号埋設土器検出状況



写8 第1号溝跡完掘状況



写1 縄文土器 (平成21年度調査)



写2 石器・石製品 (平成21年度調査)

付編 1

原町西町遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

原町西町遺跡は、福島県南相馬市原町区西町三丁目（北緯 $37^{\circ} 38' 06''$ 、東経 $140^{\circ} 56' 45''$ ）に所在する。測定対象試料は、第3号焼成遺構出土木炭（No. 1：IAAA-91899）、第23号土坑出土木炭（No. 4：IAAA-91900）、合計2点である。

2 測定の意義

焼成遺構と落とし穴と推測される土坑の機能した時期を明らかにする。

3 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（ 80°C ）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（ 80°C ）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（ 80°C ）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、 90°C で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、 500°C で30分、 850°C で2時間加熱する。

(4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（ CO_2 ）を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（ HOxII ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1)年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。

(2)¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベー

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91899	No. 1	遺構：第3号焼成遺構 層位：掘り方覆土	木炭	AAA	-28.72 ± 0.51	1,620 ± 30	81.73 ± 0.30
IAAA-91900	No. 4	遺構：第23号土坑 層位：10層	木炭	AaA	-27.79 ± 0.47	2,220 ± 30	75.89 ± 0.30

[#3281]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91899	1,680 ± 30	81.11 ± 0.29	1,620 ± 30	397AD - 440AD (37.3%) 486AD - 532AD (30.9%)	357AD - 364AD (0.9%) 382AD - 539AD (94.5%)
IAAA-91900	2,260 ± 30	75.46 ± 0.29	2,216 ± 32	361BC - 349BC (7.5%) 316BC - 271BC (27.0%) 263BC - 208BC (33.6%)	381BC - 201BC (95.4%)

[参考値]

ス (Reimer et al 2004) を用い、OxCal v4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

^{14}C 年代は、第3号焼成遺構出土木炭No. 1が $1620 \pm 30\text{yrBP}$ 、第23号土坑出土木炭No. 4が $2220 \pm 30\text{yrBP}$ である。No. 1は古墳時代、No. 2は弥生時代中期頃の年代を示した。

炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

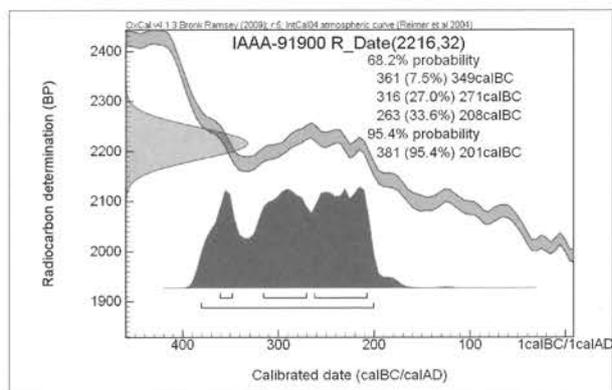
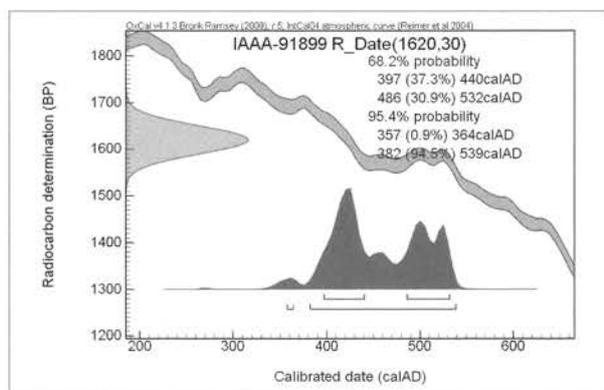
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考]暦年較正年代グラフ

原町西町遺跡出土炭化物の種類

(株) 加速器分析研究所

はじめに

南相馬市原町西町遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡、石囲炉跡、焼土跡、埋設土器、落とし穴、土坑、1666年に構築された野馬土手の一部、太平洋戦争時の原町飛行場に関連するとみられる竪穴遺構等が検出されている。縄文時代の遺物は、早期後半、中期前半、中期中頃、後期後半、晩期の資料が出土しているが、特に晩期後半の資料が多い。

今回の分析調査では、焼土跡や土坑から出土した炭化物の種類を明らかにするために、樹種同定・種実同定を実施する。

1. 試料

試料は、A区①の3焼から出土した炭化物1点(試料番号1)と、同区4坑覆土から出土した炭化物1点(試料番号2)の合計2点である。受領試料を観察したところ、試料番号1は炭化材、試料番号2は種実遺体であったため、試料番号1については樹種同定、試料番号2については種実同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種類と部位を同定する。

3. 結果

樹種同定および種実同定結果を表1に示す。試料番号1の炭化材は広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、試料番号2の種実は広葉樹のクリ?の子葉?に同定された。炭化材の解剖学的特徴や種実の形態的特徴などを記す。

表 1. 樹種同定・種実同定結果

番号	地区	遺構	層位	種類	種類
1	A区①	3 焼		炭化材	コナラ属アカガシ亜属
2	A区①	4 坑	覆土	炭化種実	クリ?(子葉?)

<炭化材>

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

<種実>

・クリ? (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.?) ブナ科クリ属

炭化物は黒色。長さは 1.6cm、幅は欠損し、残存 1cm、厚さは 0.8cm 程度のやや偏平な三角状広卵体で、一側面は偏平で反対面はわずかに丸みがある。表面は粗面で、数本の浅い縦筋が粗く波打つ。

以上の特徴からクリの子葉に最も似る。ただし、クリの子葉は硬く緻密で、表面には内果皮(渋皮)の圧痕のやや深い縦筋が粗く波打つことから、出土炭化物とはやや異っており、クリ?としている。クリ以外の可能性としては、クヌギ(*Quercus acutissima* Carruthers)やミズナラ(*Q. crispula* Blume)などの大型で球状を呈するブナ科コナラ属の子葉や、トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume : トチノキ科トチノキ属)の胚が挙げられるが、大きさや硬さ、緻密さの点で区別される。

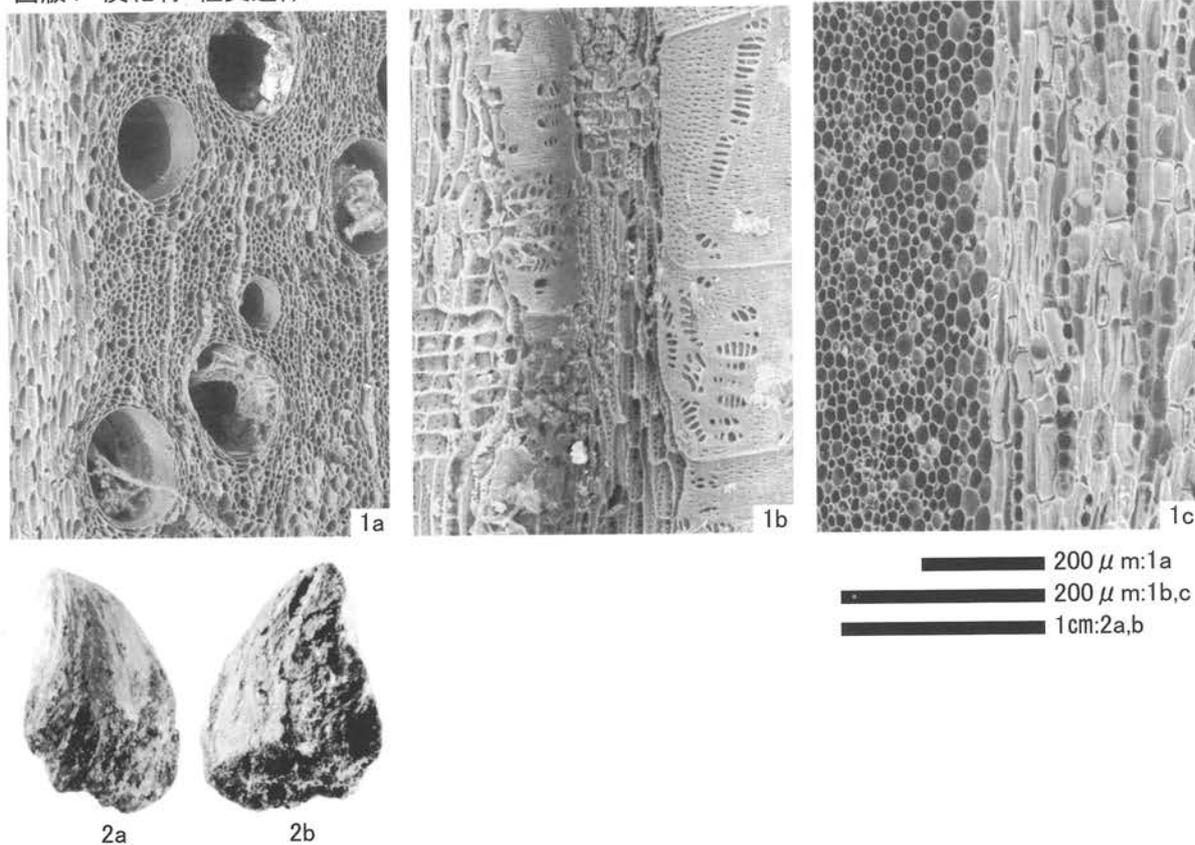
4. 考 察

A区①3 焼の炭化材は、焼土とともに出土している状況から、燃料材の一部が炭化・残存した可能性がある。この炭化材は、常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹であり、木材は重硬で強度が高い材質を有する。

本地域はアカガシ亜属の北限に近く、花粉分析ではコナラ亜属を主とし、モミ属やアカガシ亜属が点的に分布する原植生が推定されている(内山, 1987)。これらの事例を考慮すれば、本遺跡周辺にアカガシ亜属が生育し、その木材を利用したことが推定される。

一方、A区①4 坑の炭化物は、クリの子葉に最も近い。クリは、現在の本遺跡周辺域にも分布する二次林要素の落葉広葉樹で、子葉が食用可能な有用植物であり、縄文時代をはじめとする遺跡からの出土例も多い(渡辺, 1975)。

図版1 炭化材・種実遺体



200 μ m:1a
 200 μ m:1b,c
 1cm:2a,b

1.コナラ属アカガシ亜属(試料番号1) a:木口,b:柀目,c:板目
 2.クリ?子葉?(試料番号2)

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
 内山 隆, 1987, 中間温帯林域における花粉分析学的研究 その1 東北地方南東部. 日本花粉学会誌, 33, 111-117.
 Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
 渡辺 誠, 1975, 縄文時代の植物食. 雄山閣出版, 187p.
 ※) 本分析は、当社協力会社バリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

報 告 書 抄 録

ふりがな	のまどて (はらまちくにしまちちく)・はらまちにしまちいせき					
書名	野馬土手 (原町区西町地区)・原町西町遺跡					
副書名	縄文時代集落跡と近世牧跡の調査					
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第16集					
編著者名	江川逸夫・木幡成雄・末永成清・吉田生哉・川田 強					
編 集 機 関	福島県南相馬市教育委員会文化財課 〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番地 財団法人いわき市教育文化事業団 〒972-8326 福島県いわき市常磐藤原町手這50-1 いわき市考古資料館内					
発行年月日	西暦2010(平成22)年3月26日					
所 収 遺 跡	所 在 地	コ ー ド 市 町 村 遺 跡 番 号	北 緯 ----- 東 経	調 査 期 間	面 積	調 査 因
野 馬 土 手	南相馬市原町区西町3丁目	2 1 2 5 0 0 1 6 1	140° 56' 58"	2次調査 20080804~ 20081202	2次調査 4,000 m ²	河川改修
原 町 西 町 遺 跡	南相馬市原町区西町3丁目	2 1 2 5 0 0 6 3 4	37° 37' 58"	3次調査 20090701~ 20091218	3次調査 223 m ²	
所 収 遺 跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
野 馬 土 手	牧跡	近世	土手	-	近世牧に伴う土手。	
原 町 西 町 遺 跡	集落跡・軍事 関連施設	縄文 弥生 近世 近代	竪穴住居 土坑 炉跡 焼土跡 埋設土器 ピット 溝跡 沢跡 土手・竪穴遺構 遺物包含層	縄文土器 弥生土器 石器・石製品 土製品陶磁器 銭貨	縄文時代中期から晩期 までの集落跡。 原町飛行場に関連する 土手・竪穴遺構。	

印刷 2010年3月24日
発行 2010年3月26日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第16集

野馬土手（原町区西町地区）・原町西町遺跡

縄文時代集落跡と近世牧跡の調査

編集 南相馬市教育委員会 文化財課
発行 南相馬市教育委員会
〒975-0012 福島県南相馬市原町区
三島町二丁目45番地
印刷 〈有〉愛原印刷所
